神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語における情報伝達の方策--スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析--

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nomura, Mei メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1847

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

博士論文

スペイン語における情報伝達の方策

―スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析―

神戸市外国語大学大学院　外国語学研究科
文化交流専攻　2013 年度

野村明衣

0. はじめに 1

1. 日本語の終助詞 4

1.1. 日本語の終助詞 4
1.2. 終助詞「ね」、「よ」に関する諸説 5
1.2.1. 話し手と聞き手の情報の一致・不一致説 5
1.2.1.1. 情報の帰属説と相対的所有度 6
1.2.2. 談話管理説 8
1.2.3. 終助詞の性質に関する指摘と終助詞「ね」、「よ」の意味素性 9
1.3. 本論文における終助詞の位置づけ 11
1.4. 終助詞「ね」、「よ」の機能 13
1.4.1. 終助詞「ね」 13
1.4.1.1. 確認 13
1.4.1.2. 共有 14
1.4.1.3. 感動詞「ねぇ」 16
1.4.1.4. 間投詞「ね」 17
1.4.2. 終助詞「よ」 18
1.4.2.1. 聞き手めあて性 18
1.4.2.2. 情報伝達 18
1.4.2.3. 注意喚起 22
1.4.2.4. 含みを持つ用法 23
1.4.2.5. 話し手の心的態度 24

2. スペイン語の間投詞 26

2.1. スペイン語の「聞き手めあて表現」（enfocadores de alteridad） 26
2.2. 間投詞の用例数 29
2.2.1. 間投詞の各位置の例数 30
2.2.2. 間投詞を含む文の種類 33

3. ¿verdad?、¿no? 36

3.1. 問題点 36
3.2. ¿verdad?、¿no?に関する先行研究 36
3.3. ¿verdad? 37

3.3.1. 先行研究 37
3.3.2. 実例による考察 38
3.4. ¿no? 40
3.4.1. 先行研究 40
3.4.1.1. 基本的性質 40
3.4.1.2. 語用論的機能 41
3.4.1.3. 共起する文に与える影響 41
3.4.1.4. 現れる位置による機能 41
3.4.1.5. その他の先行研究 42
3.4.2. 実例による考察 42
3.4.3. 呼びかけ語を伴う¿verdad?、¿no? 44
3.4.4. 行為指示に伴う¿verdad?、¿no? 45
3.5. ¿verdad?、¿no?と「ね」 48
3.5.1. 聞き手に返答を求めない¿verdad?と¿no? 48
3.5.2. ¿verdad?、¿no?と「ね」 49

4. eh 55

4.1. 問題点 55
4.2. 先行研究 55
4.2.1. 語用論的機能 55
4.2.2. 共起する発話による機能 55
4.2.3. 現れる位置による機能 56
4.3. 実例による考察 56
4.3.1. 文頭の用例 57
4.3.2. 文末の用例 58
4.3.3. 文中の用例 64
4.4. eh と「よ」 65
4.5. eh と「よ」、¿no?と「ね」 68
4.5.1. ¿no?と¿eh? 68
4.5.2. ¿no?と「ね」、eh と「よ」 69
4.5.3. 感謝、謝罪に伴う eh、「ね」と「よ」 69
4.5.4. eh が「ね」になり得る事例 71

5. 呼びかけ語 74

5.1. 問題点 74
5.2. 呼びかけ語の位置 75
5.2.1. 先行研究 75
5.2.2. 呼びかけ語の分布、前後の語数 76
5.3. 呼びかけ語の機能 77
5.3.1. 呼びかけ語を含む文の種類 77
5.3.2. 実例による考察 78
5.3.2.1. 文頭の呼びかけ 78
5.3.2.2. 文末の呼びかけ 80
5.3.2.2.1. 語用論的機能 81
5.3.2.2.2. 語彙による機能 86
5.3.2.3. 文中の呼びかけ 88
5.3.2.4. 文間の呼びかけ 89
5.3.2.4.1. 等位接続詞、または並列的接続の間で呼びかける例 89
5.3.2.4.2. 同じ情報を繰りかえす間で呼びかける例 90
5.3.2.4.3. 注意を喚起する語と共に呼びかける例 91
5.4. 呼びかけ語の位置と語彙 94
5.4.1. 情を表す呼びかけ語の語彙 94
5.4.1.1. ポライトネスとしての呼びかけ語 94
5.4.1.2. 意味による分類 95
5.4.1.2.1. 好感を表す呼びかけ語 95
5.4.1.2.2. 嫌悪を表す呼びかけ語 98
5.4.1.2.3. 皮肉を表す呼びかけ語 99
5.4.1.2.4. captatio benevolentiae（好意獲得）の用法と語彙との関連性 103
5.4.1.3. 情を表す呼びかけ語の再分類 105
5.4.2. 情を表す呼びかけ語の位置と機能 108
5.4.2.1. 情を表す呼びかけ語の分布 108
5.4.2.2. 情を表す呼びかけ語を含む文の機能の分類 109
5.4.2.3. 実例における考察 110
5.4.2.3.1. 文頭の呼びかけ 110
5.4.2.3.2. 文末の呼びかけ 112
5.4.2.3.2.1. 文末に現れる情を表す呼びかけ語の語彙 112
5.4.2.3.2.2. 情報伝達が優先される場合 114
5.4.2.3.2.3. 人間関係が重視される場合 116

5.4.2.3.2.4. 発話態度がより強調される場合 118
5.4.2.3.3. 文中の呼びかけ 120
5.4.2.3.4. 文間の呼びかけ 120
5.5. 呼びかけ語と「ね」、「よ」 122
5.5.1. 文末の呼びかけ語と「ね」、「よ」 122
5.5.1.1. 「よ」に対応する呼びかけ語の事例 122
5.5.1.2. 「ね」に対応する呼びかけ語の事例 126
5.5.1.3. 終助詞が付加されない事例 130
5.5.2. 文頭の呼びかけ語と「ね（ぇ）」 131
5.5.3. 文中の呼びかけと「ね」 131
6. sabe(s)、entiendes、ves 134
6.1. 問題点 134
6.2. sabe(s) 134
6.2.1. 先行研究 134
6.2.2. 実例による考察 136
6.2.2.1. 文頭での用例 136
6.2.2.2. 文末での用例 140
6.2.2.2.1. 疑問形 140
6.2.2.2.1.1. 上昇音調 140
6.2.2.2.1.2. 下降音調 143
6.2.2.2.2. 肯定形 145
6.2.2.3. 文中、文間の用例 147
6.3. entiendes 149
6.3.1. 先行研究 149
6.3.2. 実例における考察 150
6.3.2.1. 文末の用例 150
6.3.2.1.1. 疑問形 150
6.3.2.1.2. 肯定形 152
6.4. sabe(s)、entiendes と「ね」、「よ」 153
6.4.1. sabe(s)と entiendes 153
6.4.2. sabe(s)と「ね（ぇ）」、「よ」 154
6.4.2.1. sabe(s)と「ね（ぇ）」 154
6.4.2.2. sabe(s)と「よ」 158

6.4.3. entiendes と「よ」 160
6.5. ves 162
6.5.1. 先行研究 162
6.5.2. 実例における考察 162
6.5.2.1. 単独の用例 162
6.5.2.2. 文末の例 164
6.5.2.3. 文間の例 165
6.5.2.4. 文頭の例 166
6.6. ves と「ね」、「よ」 168
6.6.1. ves と「ね」 168
6.6.2. ves と「よ」 170

7. oye、mira、fíjate、verás 174

7.1. 問題点 174
7.2. oye 175
7.2.1. 先行研究 175
7.2.1.1. 談話標識としての機能 175
7.2.1.2. 語用論的機能 175
7.2.1.3. 位置による機能 176
7.2.2. 実例における考察 176
7.2.2.1. 文頭での用例 177
7.2.2.2. 文末での用例 181
7.2.2.2.1. データによる例 181
7.2.2.2.2. 発話態度を表す文末の oye 182
7.3. oye と「ねぇ」、「よ」 184
7.3.1. 文頭の oye と「ねぇ」 184
7.3.2. 文末の oye と「よ」 185
7.4. mira 188
7.4.1. 先行研究 188
7.4.1.1. 談話標識としての機能 188
7.4.1.2. 語用論的機能 189
7.4.1.3. 位置による機能 189
7.4.2. 実例による考察 190
7.4.2.1. 文頭での用例 190

7.4.2.2. 文末での用例 193
7.5. mira と「ね（ぇ）」 195
7.6. fíjate 197
7.6.1. 先行研究 197
7.6.1.1. 談話標識としての機能 197
7.6.1.2. 語用論的機能 197
7.6.1.3. 位置による機能 198
7.6.2. 実例 198
7.6.2.1. 文頭の用例 198
7.6.2.2. 文中の用例 200
7.6.2.3. 文末の用例 201
7.6.2.4. 文末の fíjate と oye の差 202
7.7. fíjate と「ね（ぇ）」、「よ」 203
7.7.1. fíjate と「ね（ぇ）」 203
7.7.2. fíjate と「よ」 205
7.8. verás 206
7.8.1. 先行研究 206
7.8.1.1. 談話標識しての機能 206
7.8.1.2. 語用論的機能 207
7.8.1.3. 位置による機能 207
7.8.2. 実例 207
7.8.2.1. 文頭での用例 207
7.8.2.2. 文末での用例 209
7.9. verás と「ね」、ya verás と「よ」 211
7.9.1. verás と「ね」 211
7.9.2. ya verás と「よ」 212

8. vamos 216

8.1. 先行研究 216
8.1.1. 談話標識としての機能 216
8.1.2. 語用論的機能 217
8.1.3. 位置による機能 217
8.2. 実例 218
8.2.1. 文頭の用例 218

8.2.2. 文末の用例 218
8.3. vamos と「よ」 221

9. 文頭、文末表現の相互比較 224

9.1. 文頭　注意喚起、注視の促しの機能を持つ表現 224
9.1.1. 注意喚起 224
9.1.2. 注視の促し 227
9.2. 文末　話し手の発話態度に関わる表現 230
9.2.1. 聞き手に確認する姿勢を表明 230
9.2.2. 話し手と聞き手の近さを表明する表現 232
9.2.3. 聞き手に理解を求める表現 233
9.2.4. 発話内容に注意喚起あるいは注視を促す表現 235
9.2.5. 話し手の意見であることの強調的表明 236

10. スペイン語間投詞と日本語終助詞 239

10.1. ¿verdad?、¿no?と「ね」 239
10.2. eh と「よ」、「ね」 241
10.3. 呼びかけ語と「ね」、「よ」 244
10.4. sabe(s)、entiendes、ves と「ね」、「よ」 250
10.5. oye、mira、fíjate、verás と「ね（ぇ）」、「よ」 256
10.6. vamos と「よ」 260
10.7. スペイン語間投詞と日本語終助詞の機能と特徴 261

11. 結論 265

参考文献 269

付録 277

0. はじめに

言語とは、人間同士がコミュニケーションを図る 1 つの手段である。人間は、言語を通して自らの考えを伝えるために、適切な統語構造を組み立てる必要がある。しかし、命題内容を正しく伝達するだけでは円滑なコミュニケーションを実現することは難しい。Brown & Levinson（1978; 1987: 56-57）が、「どのような文化であれ、言語のやりとりの中で行われる伝達の本質は、明示的な遂行的行為（performative acts）で明らかにされるのと同様、その伝達がなされる仕方（manner）によって明らかになることが多い（田中 他 2011: 73）」と述べているように、情報をどのように伝えるかは非常に重要である。日本語において、発話をどのように伝達するかを表す手段の 1 つに終助詞がある。では、スペイン語ではどのような言語形式によって情報の伝え方を調整するのだろうか。本論文は、スペイン語において円滑なコミュニケーションを実現するために、話し手がどのような付加的な言語形式を用いるかを、日本語の終助詞の機能と対照することによって解明することを目的とする。

言語によるコミュニケーションでは、話し手は発話内容を伝達するために、数多くの表現の中から特定の表現を選択する（伊東、永田 2007: 282）。また聞き手は話し手から伝達された発話内容に対して、何らかの応答を行う。Goffman（1981）は、これを「相互行為」と呼ぶ。Shannon & Weaver（1948: 24）は、コミュニケーションには、「どのようにして正確に伝達するか（技術的問題）[1]」、「どのようにして伝達した記号が、話し手の伝えたい意味を正確に伝えるか（意味論的問題）[2]」、そして「どのようにして、受け取られた意味が望む仕方で相手の行動に影響を与えるか（効果の問題）[3]」という 3 つの段階の問題が存在し、これらは相互関係にある、と指摘している。これは、談話において話し手の表現方法が重要な役割を持つものであると解釈できる。従って、話し手は発話に工夫を加えて伝達し、聞き手に伝達意図を正しく理解させ、相互行為へと導く必要があるのである。

一方、Goffman（1967; 1982: 5）は、人はコミュニケーションの中で、フェイス（face 対面[4]）というものを考慮する必要がある、と述べている。フェイスはすべての人が持つものであり、自分や他人のフェイスを守るため、お互いに配慮しなければならないという。つまり、話し手が何らかの情報を伝達する場合、聞き手が正しく理解できるように表現しなければならないと同時に、聞き手への配慮が必要となる。聞き手に対する配慮の方法は、Brown & Levinson（1987）によるポライトネス理論において、ほのめかしや、フェイス侵害の軽減のために表現内容を変えるなど具体的に提案されている。しかし、実際のコミュニケーションでは、表現内容を変えることなく、一定

---

[1] How accurately can the symbols of communication be transmitted?
[2] How precisely do the transmitted symbols convey the desired meaning?
[3] How effectively does the received meaning affect conduct in the desired way?
[4] 広瀬、安江（1986）

の言語形式を付加して、フェイス侵害の軽減などを達成する場合がある。

日本語において、この役割を担うのは終助詞である。終助詞は、益岡（1991: 48）などによってモダリティ要素とみなされる。言表内容そのものには影響しないが、話し手がそれをどういう構えで差し出そうとしているかを表現する「伝達態度」を表すものである。実際に日本語では、日常会話で終助詞を用いなければ、命題のみを伝える不自然な発話になってしまう場合が多い。滝浦（2008: 124-125）の例を見てみよう。話し手が「今日は暖かい」と言った場合、聞き手は話し手がどういう意図で発話をしているか戸惑うかもしれない。しかし「今日は暖かいよ」であれば、聞き手は話し手が教えてくれようとしていると受け取ることができ、「今日は暖かいね」であれば、話し手が聞き手に共感を求めているサインであると受け取られ、続く発話も「散歩でも行こうか？」のような聞き手との共同性に関わる内容のものが予期される[5]。さらに、「今日は暖かいな」となれば、話し手の独り言として受け取られるだろう。終助詞のつかない「今日は暖かい」が聞き手にとって落ち着かないのは、「どう受け取ってほしいか」という情報の付与がされていないため、相手の発話への関わりようを決められないからであるという。このように、日本語では終助詞への依存度が高い。これは、日本語のコミュニケーションにおいて、「何を言うか」ではなく「どう言うか」の比重が高いことを意味する、と滝浦（2008）は説明している。

では、スペイン語において、終助詞のように話し手の態度を担い、「人あたり（小田 2010: 189）」を調節するのはどのような表現なのだろうか。日本語では、終助詞は「伝達態度のモダリティ（益岡 1991: 48）」とされるが、スペイン語でのモダリティは、主に感情や疑惑など発話内容に対する話し手の態度に関わるものや、動詞の法のことを意味し、終助詞のような情報伝達の仕方を表す態度に関してはあまり注目されていないように思われる。だが、注目されていないからといってスペイン語にこのような形式が存在しないわけではない。Brown & Levinson（1987: 55）が、「物事を表現する仕方（ways of putting things）」、つまり「言語使用は、社会的関係を構築するまさにそのものの一部である（田中 他 2011: 71）」と主張しているように、同じ人間が使用する言語に、一方は「人あたり」を調節する形式があり、もう一方にはないとは考えにくい。たとえ日本語と形は異なるものであっても、「人あたり」を調節する言語要素は必ずあるはずである。日本語では終助詞の研究が豊富であるため、これを利用してスペイン語における「助詞機能」、すなわち情報伝達時の話し手の態度を担う表現を明らかにすることができるのではないだろうか。例えば、Hoy hace buen

[5] 西郷（2012: 102）では、日本語母語話者を対象に「ねぇ、天気いいね。」という発話の後にどのような会話を続くかを、談話完成タスクをもとに調査している。その結果、「天気いいね。」の後には話し手と聞き手が一緒に出かける提案をする等の会話を作成する場合が多かった。

tiempo, oye.と Hoy hace buen tiempo, ¿verdad?という発話を比べてみよう。後ほど詳しく考察するが、文末の oye は、それが持つ語彙的意味から、そしてそれが命令であることから、先の「今日は暖かいよ」の場合のように、話し手が持つ情報を聞き手に対して伝達しようとしていると考えられる。これに対して、Hoy hace buen tiempo, ¿verdad?の場合、話し手は付加疑問形式を用いて、聞き手も同じように考えているかを尋ねている。従って、この発話は「今日は暖かいね」のように、話し手が聞き手に共感を求めていると言える。このように、スペイン語においても「人あたり」を調節する言語形式が存在すると予測される[6]。終助詞のような表現に対応するスペイン語の表現形式は、¿verdad?、¿no?、eh、固有名詞や親族名称、cariño や tonto のような呼びかけ語（vocativo）、sabe(s)、ves、entiendes、oye、mira、fíjate、escucha、verás、vamos のようなものが考えられる。本論文では、これらのいわゆる間投詞と、日本語における終助詞との体系的連関の一般化を目指したい。

筆者がスペイン語母語話者の授業を受講していた時、最初は発話内容の文法にばかり留意していたが、慣れてくると今度はどうすればより自然な会話表現になるのかに興味が及ぶようになった。日本語において、終助詞を用いずに命題のみを伝達すると、直接的な表現になってしまうのと同様に、スペイン語においても、聞き手に配慮しないぶっきらぼうな表現に聞こえることがあるだろう。従って、スペイン語における情報伝達時の方策を明らかにすることは、日本語母語話者がスペイン語で、円滑なコミュニケーションを実現する上で有用であり、スペイン語教育への貢献にもなるだろう。聞き手中心の言語運用を行うとされる日本語と、内容伝達中心の言語運用を行なうと考えられるスペイン語を対照することにより、両言語の情報伝達時における特徴を解明したい。

[6] 三好（2012）には、スペイン語の「和らげ表現」として、示小辞や緩叙法、省略表現などの和らげ手段が挙げられている。しかし、本論文では日本語の終助詞と同様に、一定の言語形式を付加することによって、発話を調節する手段の解明を目的としている。

1. 日本語の終助詞

1.1.　日本語の終助詞

日本語の終助詞は、文の終わりにあってその文を完結させ、希望・禁止・詠嘆・感動・強意などの意を添えるもので、書き言葉と話し言葉の両方に現れる。本論文は、発話時における話し手の情報伝達の方法を対照することを目的としているので、口語で用いられる終助詞のみを扱う。陳（1987）は、口語に頻繁に現れる終助詞に「よ」、「ね」、「さ」、「わ」、「ぞ」、「ぜ」、「か」を挙げている。この中で、「か」は主に疑問文に用いられ、「か」を用いる時、話し手は情報を所有していない、あるいはしていないものとして提示すると考えられる。本論文の話し手の態度を示す表現の解明という目的と異なるので、「か」を対象から除く。

その他の終助詞について、陳（1987: 94）は「話し手と聞き手の間の認識のギャップを埋めることに関わる表現手段」と説明している。これらの終助詞は、話し手の方が聞き手より認識の度合いが高い場合と、聞き手の方が認識の度合いが高いと話し手が判断する場合の 2 つに分類されるという。

例えば「よ」は、話し手がすでに認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝えるときに使われる。一方「ね」は、聞き手の認識に頼って、または、聞き手の前で、話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる。話し手の方が聞き手より認識の度合いが高い場合に用いられる「よ」と、聞き手の方が認識の度合いが高いと話し手が判断する場合に用いられる「ね」は、話し手と聞き手の認識のギャップの埋めあわせかたという点で対立するのだという。また「さ」、「ぞ」、「ぜ」、「わ」は、「よ」と同様に話し手の認識度が高い場合に用いられる。一方「な」は「ね」と同様に、聞き手の認識によって話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる。個別に機能を比較すると、聞き手への働きかけの度合いや、聞き手のいないひとりごとでの使用の有無などの差が見られるが、陳（1987）の言うように、「よ」と「ね」は話し手と聞き手の認識のギャップの埋め合わせ方という点で大きく異なるものであるので、本論文では「よ」、「ね」を研究対象とすることとし、次節ではこの 2 つの終助詞に関する先行研究を概観してその中心的性質を探る。

1.2.　終助詞「ね」、「よ」に関する諸説

1.2.1.　話し手と聞き手の情報の一致・不一致説

時枝（1951: 8, 9）は、終助詞を発話時における話し手の心的態度の表現形式と見て（滝浦 2008: 126）、「よ」を「聞き手に対して話し手の意志や判断を強く押しつける表現」、「ね」を「聞き手を同調者としての関係におこうとする主体的立場の表現」と規定した。これは、「よ」を用いると聞き手にとっては話し手の判断を押しつける厳しい発話に聞こえ、「ね」を用いると、話し手が聞き手を同調者におこうとするようなやわらかい発話に聞こえると解釈でき、どちらを用いるかによって聞き手への聞こえ方を調節するという、まさに本論文の目的と深く関わる規定である。また時枝（1951）の見解は、後の終助詞研究に大きな影響を与え、「ね」と「よ」に関する研究には、両者の性質を対称的に捉えるものが多く見られる。

では、両者にはなぜこのような対称的な差が生まれるのであろうか。先に見たように、陳（1987: 94, 97）は、「よ」が「話し手がすでに認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝えるとき」に使われ、「ね」が「聞き手の認識に頼って、または聞き手の前で話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる」と説明している。益岡（1991: 96）も、「話し手の知識と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合には『ね』が用いられ、両者の間にずれがあり、その意味で両者が対立的な関係にあると判断される場合には『よ』が用いられる」と述べている。次の例を見てみよう。

(1) お島って変わった名ですね。
(2) お島って変わった名ですよ。

（益岡 1991: 96）

(1)では、話し手は「お島が変わった名である」という知識を聞き手が共有していると判断しているのに対して、(2)では聞き手が「お島が変わった名である」という知識を所有しておらず、話し手の知識と聞き手の知識が対立していることを反映して話し手が「よ」が選択しているという。つまり、「ね」は話し手と聞き手の知識が矛盾しないという判断であり、益岡（1991）はこれを「一致型」の判断、さらに「よ」は両者の知識が異なるという判断として、「対立型」の判断と呼んでいる。このことから、時枝（1951）の「よ」が話し手の判断を強く押しつけるという説明は、話し手と聞き手の知識が対立していて、その落差を示して聞き手が知らない情報を伝達することによって、押しつけの印象を与えるのであり、「ね」が聞き手を同調者としようとする

のは、話し手と聞き手の知識が一致していて、聞き手も情報について知っているとして情報を伝達することによると考えられ、聞き手が知っていることを表すので、聞き手の認識に頼ると説明されるのだろう。

1.2.1.1. 情報の帰属説と相対的所有度

神尾（1990）が提唱した情報の縄張り理論では、「ね」は、「現在の発話内容に関して話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す必須の標識であり、当該の情報が相手の縄張りに帰属することを話し手が明示するために用いられる（神尾 1990: 62）」と規定されている。次の例を見てみよう。

(3) 君はさびしいらしいね。

（神尾 1990: 62）

話し手が(3)の発話をしたことにより、話し手が「聞き手がさびしい」という情報を持っていることになり、聞き手は自分の状態を表すこの情報を、当然自らの縄張り内に持っている。従って、「話し手と聞き手は同一の情報を持っているので、『ね』を用いなければならない」というのである。

また、神尾（1990）は任意要素としての「ね」の存在についても言及している。

(4) X: これ、おいくらですか？
Y: 600 円ですね。

（神尾 1990: 65）

(4)では、X が商品の値段を知らないため Y に尋ねている。従って、両者の認識は同一ではない。このような聞き手の縄張りに属さない情報に用いる「ね」は、「仲間意識または連帯感を表現して、発話に丁寧さを加える働きを持つ（神尾 1990: 65）」のだという。しかし、滝浦（2008: 130）は「このタイプの『ね』が常に協応的ではない」と指摘している。この点については次節で詳しく扱う。

また、メイナード（1993）は情報の相対的所有度という観点から「ね」と「よ」の選択基準を説明している。その基準は以下の通りである。

表１ 情報量Ｘの相対的所有度による終助詞「ね」と「よ」の使用

情報Ｘの相対的所有度	選ばれる助詞
1. 話し手が独占、聞き手は情報なし	Ｘよ
2. 聞き手が独占、話し手は情報なし	Ｘね
3. 話し手の情報量＞聞き手の情報量	Ｘよ（Ｘね）
4. 聞き手の情報量＞話し手の情報量	Ｘね
5. 話し手と聞き手の情報量が同じ位	Ｘね

（メイナード 1993: 106）

話し手が情報を独占していて、聞き手に情報がない場合は「よ」が選択される（1.）。これは陳（1987）の「話し手がすでに認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝える」という指摘とも一致している。次の 2.の情報を聞き手が独占していて、話し手には情報がない場合に「ね」を用いるのは、「ね」が「聞き手の認識に頼る（陳 1987）」という性質を持つことによるのだろう[7]。また、3.のような話し手の情報量が聞き手よりも多い場合、「よ」または「ね」が選択される。「ね」を用いる場合は、「自分の考えていることに距離を置いて表現する時」であるという（メイナード 1993: 106）。さらに、4.と 5.の場合は、先に見た神尾（1990）の情報の縄張り理論からも、「ね」が選択されることがわかる。メイナード（1993）は、「この所有度は実際にどういう関係にあるかではなくあくまで話者がそう判断するということに他ならない」と述べている。つまり、判断するのは話し手であって、話し手が聞き手に比べてより詳しい情報を持っていると判断した時「よ」を選択し、聞き手の方がより詳しい情報を持っていると考える時、情報自体に焦点をあてる「よ」を避けて「ね」を選択するのである。西川（2009: 52）は「終助詞の類は、『文』が表す情報を持つ者、つまり『情報の所有者』を『話し手』に限定したり、『話し手以外』にしたりする機能を持つ」と述べており、滝浦（2008: 132）も同様の指摘をしている。神尾（1990）の情報の縄張りに関する説明と、メイナード（1993）の情報量に応じて「ね」か「よ」を選択するという考察からも、終助詞とは聞き手がその情報を知っているか知らないか、言いかえると発話と聞き手との関係を示すものであると言えるだろう。

この説は、「ね」、「よ」の選択基準を、話し手と聞き手の認識（あるいは知識）の

[7] メイナード（1993: 106）はこの場合の例として、「今何時ですかね。」という発話を挙げている。

一致・不一致、また話し手と聞き手の情報量の相対的判断によるものである。この説には、後に見るように問題点も挙げられるが、話し手と聞き手という 2 つの視点を取り入れて「ね」、「よ」の本質を捉えているように思われ、現在の終助詞研究でも非常に有力な説と言えるだろう。

1.2.2. 談話管理説

また、終助詞研究には終助詞を「当該の発話と文脈との関わり方を示すもの」と位置づける談話管理という見解があり、田窪（1992）、金水（1993）などがこの中心である。この立場は、終助詞をこれまで見てきたような話し手と聞き手との関係に関わるものではないとみなしており、滝浦（2008: 132）も指摘するように終助詞によって聞き手との関係をどのように作るかについては、まったく無関心であるように見える。すると、本論文の目的である「人あたり」の調節表現という見方と大きく異なるので、この立場を本論文に反映することはないが、終助詞に関する先行研究として簡潔に見ていく。

田窪（1992: 24）は、「ね」が「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ」という機能を持つ、と述べている。この規定について金水（1993: 119）は、「マッチングとは、話し手が入手している仮説の集合のひとつと、当該の発話が含意する仮説の集合とから、等価な情報が引き出せるかどうかを計算すること」であると説明している。そしてリンクとは、「情報が等価であるとみなし、同一視すること（金水 1993: 120）」であるという。田窪（1992）ではこの記述に関して具体例を挙げて、次のように説明している。

(5) 甲: どうですか。この問題。
乙: いやあ、難しいですね。（下線部筆者）

（田窪 1992: 22）

(5)では、「ね」を伴うことによって問題を実際にやってみた結果、難しいという結論を出したということを意味している。つまり、難しいという「当該の発話」と問題を実際にやったという「マッチする特定の文脈」が、同一であるという判断をしたため、「ね」を伴っているということである。

また、「よ」については「情報を間接知識領域に記載せよ」という指示であるという（田窪 1992: 23）。間接知識とは、言語的に獲得された知識・情報を指す。また「これを今関与的な知識状態に付け加えたのち、適当な推論を行え」という記述も見られ、これらの定義は言いかえれば、発話内容を理解するよう求めるものと考えることがで

きるだろう。

(6) 行きますよ。（下線部筆者）

（田窪 1992: 23）

(6)の発話には、「早く支度しなさい」、「出てきて挨拶しなさい」などの情報が含まれるという。

また、記載を指示される情報は基本的には聞き手にとって新規の情報であるが、「既存の知識の再記載により、相手に推論を促し、帰結の正しさを相手の知っている情報により導かせることができる」という。

(7) そんなこと知らないはずがないでしょう。私は弁護士ですよ。（下線部筆者）

（田窪 1992: 24）

(7)のように聞き手にとっての既知情報に「よ」を加えて、情報の再記載を求めることによって、発話内容の正当性を強調し、発話内容への理解を強く求めることができると考えられる。

1.2.3. 終助詞の性質に関する指摘と終助詞「ね」、「よ」の意味素性

これまで「ね」は聞き手との認識（知識）の一致を意味すると見られてきたが、滝浦（2008）は同様の意味を表すのに「よ」が用いられる場合があると指摘している。

(8) A: お前、ほんとバカだね。
B: ああ、バカだよ。

（滝浦 2008: 130）

(8)において、B の答えである「バカだ」という発話はすでに A が言っているため、2 人の認識は一致しているはずであるのに「よ」が用いられている。それだけでなく、「よ」によって話し手の開き直りの印象が強い発話となっている。また、滝浦（2008）は「ね」は常に協調であるとは限らない、とも述べている。

(9) A: 待ち合わせって 8 じでしたっけ？
B: ええ、そうですね。

（滝浦 2008: 130）

(10)　A: なぁ、頼むよ。
　　B: いやだね。

(滝浦 2008: 130)

(9)、(10)のどちらの場合も「よ」を選択することも可能である。しかし(9)では、「ね」を用いることによって「『よ』では表すことのできない突き放したような冷淡さが見られる」という。また(10)でも同様に、「ね」によってはっきりとした拒絶の含みが感じられる。このような例は、先に見た認識の一致や、情報の帰属という観点からは説明できない。滝浦（2008: 131）はその原因として、「どの説も現実の知識状態や情報の帰属関係を反映するものとして用法を説明しようとしたことにある」と指摘している。(8)、(9)、(10)の例はすべて「よ」、「ね」、あるいは終助詞なしでも許容されるため、「終助詞の用法は、話し手と聞き手の認識の一致といった現実の反映ではなく、文脈的状況としての現実と、それを言語的に表現する話し手のみなし方との関係にある」と説明している。

そこで滝浦（2008）は、終助詞の意味素性による説明を試みている。

「よ」の意味素性は［＋話し手］である。
「ね」の意味素性は［＋聞き手］である。

(滝浦 2008: 137)

さらに次のように付け加えている。

「よ」の素性［＋話し手］の意味は“話し手の一方的言明”である。
「ね」の素性［＋聞き手］の意味は“聞き手への共有の確認・促し”である。

(滝浦 2008: 138)

これらの素性指定が、［話し手］または［聞き手］に関する１つの素性だけでなされていることが重要である、という。つまり「よ」が［＋話し手、－聞き手］であり「ね」が［＋話し手、＋聞き手］であるといった、これまでの研究と同様の説明をする素性指定は導かれない。そうしてしまうと、先に見たような例を説明できないためである。「終助詞が現実の反映ではなく、話し手のみなし方である」という見解について、伊豆原（2001: 40）も、「ね」に関して同様の言及をしている。「ね」は聞き手を話し手の提供する情報（知識・意向・気持ち・感覚など）の中に引き込み、聞き手を話し手と同じ場に立たせて、共感的に話を進めようとする機能がある。この共通認識領域・

共感領域の形成によって、コミュニケーションをスムーズに進めることに繋がるのだが、その際「話し手と聞き手の情報の共有は必要ではないのだ」という。つまり、実際に情報を共有していなくても、「ね」によって聞き手を同調者の立場に置くことができるということである。さらに、林（2000: 43）も「『よ』は話し手が有利性を持っていることを表す任意の指標である」と説明しており、これらの指摘によって「ね」が話し手も情報を所有していることを表して、話し手と聞き手の認識の一致を示す必要がないこと、そして「よ」が必ずしも聞き手が知らない情報の伝達ではないことがわかる。

滝浦（2008）は、意味素性という見解を用いて(8)、(9)、(10)の例を次のように説明している。(8)では、「よ」によって情報が話し手の管理下にあること（[＋話し手]）を表し、「言われなくても自分は知っている」というニュアンスが生じる。また(9)が冷淡に響くのは、「質問という相手からの求めにも関わらず、［＋聞き手］を示す「ね」を用いることによって、情報を自分の管理下にあるものとしてではなく、聞き手の管理下にあるべき情報として返すことになり、当然それは非難のニュアンスになる」という。さらに(10)の場合も同様に、「『ね』によって、話し手自身の考えには言及せずに、『いやだ』という情報が聞き手の管理下にもあるはずだ、という言及をすることになり、『お前も知ってるくせに』という含みを持ち、拒絶的なニュアンスが強くなる」と説明している。

このように、滝浦（2008）は認識の一致・不一致説や談話管理説では説明できなかった終助詞の用法を、実に的確に指摘しているように思われる。

1.3.　本論文における終助詞の位置づけ

ここまで見てきたように、日本語の終助詞「ね」、「よ」は様々な観点から研究がされている。先にも述べたように、認識（知識）の一致・不一致説では、話し手が聞き手を意識し、認識が一致しているか否かによって「ね」か「よ」かを選択するのに対して、談話管理説では、「ね」、「よ」を「当該の発話と文脈との関わり方を示すもの」と位置づけ、終助詞の選択には聞き手は介入しないものとしており、この 2 つの説は対立していると言えるだろう。また滝浦（2008）は、一部の用法に関してはどちらの説でも説明しきれないとし、「ね」、「よ」を話し手がどちらの管理下にある情報として提示しようとしているのかを表すものであると説明している。それぞれの説で終助詞をどのように位置づけるかについて議論が続いているが、本論文は終助詞の研究を通してスペイン語の間投詞の機能を明らかにすることを目的としているので、これらの研究のどの立場を中心としてスペイン語と対照するのかを決定し明らかにしておく必要があるだろう。

では、本論文では終助詞をどのように位置づけるべきだろうか。その手がかりとして、太田（1992）による日本語とスペイン語の「談話場」の特徴に見られる、ダイクシスの観点が挙げられる。太田（1992）は、日本語の「来る」とスペイン語の venir、また両言語の指示詞の用法を考察し、日本語は「話し手が自分自身と同じ視点から見ることのできる対象を積極的に“同化”していく談話場を形成するタイプの言語（太田 1992: 97- 98）」であり、「常に聞き手の反応をうかがい、それによって、自らの発話を調節したり、また話し手・聞き手の関係を調節（森山 1989a: 63）」し、聞き手との間に同化できる点があるかを探る「共通点模索」型であると説明している。一方、スペイン語は話し手の視点をできるだけ保持しようとする「視点保持」型であり、「互いに保持された視点から交わされた言語形式が相手に読み解かれることによって情報交換が進んでいく」タイプであるという（太田 1992: 98）。

この談話場における特徴は、本論文が問題とする話し手の態度の表明にも当てはまると考えられる。例えば、第 3 章で考察する¿verdad?と¿no?は、話し手の発話内容に対する確信の度合いに応じて、どちらを使用するかが選択される。また、第 5 章の呼びかけ語の場合も、同じ人物に呼びかける際に異なる語彙を選択することがある。これは、話し手から見て聞き手をどのような立場において情報を伝達しようとしているかを表すものである。また、日本語では感謝や謝罪をする際には、聞き手の判断が入り得る余地を残して「ね」を用いるが、スペイン語では発話の確認を求める eh や呼びかけ語を用い、日本語のように聞き手への配慮を示すことはないと考えられる。森田（2002: 7）によると、日本語の終助詞の多用は「己」対「相手」の相対意識の表れであるというが、スペイン語の間投詞は、聞き手との関係性を示すものではなく、話し手の発話態度[8]を言語表現するものであるように思われる。このようなスペイン語の間投詞の性質が、太田（1992）の言う「視点保持」型に当てはまるとすると、両言語の特徴を体系的に捉えるには日本語の終助詞を「共通点模索」型とする研究に着目することが最も適しているのではないだろうか。

では、「共通点模索」型に当てはまるのは、終助詞研究のどの説なのかを考えてみよう。太田（1992: 98）は、日本語の談話場の特徴について、「情報が聞き手に同化できるかを探りつつ、同化できない情報には違う言語形式を用いることで相手にその旨を知らせ、それによって情報のギャップを埋めていく」と説明している。これは、まさに陳（1987）や益岡（1991）による、認識（知識）の一致・不一致説による「ね」、「よ」の規定に対応する。この説では話し手が聞き手の存在を認め、聞き手を意識して表現形式を判断しているため、まさに「共通点模索」型であると言えよう。一方、

[8] p.65 参照。

談話管理説では聞き手の介入を認めない。また、滝浦（2008）による指摘は、終助詞のみの用法を考えると納得のいくものであるが、スペイン語との対照という点で(8)、(9)、(10)の用法を見ると、扱う内容に差があるように感じられる。従って、本論文では聞き手の存在を意識して「ね」、「よ」を選択する認識（知識）の一致・不一致説を中心とし、スペイン語間投詞と対照することにする。

1.4. 終助詞「ね」、「よ」の機能

終助詞「ね」、「よ」の性質を確認したところで、それぞれの具体的な用法について見ていこう。これ以降に挙げる先行研究は、終助詞の機能に話し手と聞き手両者の存在を前提としており、認識（知識）の一致・不一致説に分類されると考えられるものである。

1.4.1. 終助詞「ね」

終助詞「ね」は、話し手と聞き手の認識（知識）が一致する場合、あるいは一致させることを目的とするので、聞き手に情報を確認したり、情報を共有する場合に用いられる。

1.4.1.1. 確認

「ね」の機能として、まず確認の用法が挙げられる。

(11)　ハンバーグ定食２つにグラタン１つでございますね。

（大曽 1986: 91）

大曽（1986: 91）によると、聞き手に情報を確認する場合、上昇調の疑問文のイントネーションが使われるという。陳（1987: 97）はこの用法を「念押し」と呼び、話し手が自分の認識よりも聞き手の認識の方が確かだと考えることについて、自分の認識を聞き手の認識とおなじ水準に高めようとする時に使われると説明している。

(12)　粟津組の奥さんですね。はじめておめにかかります。

（陳 1987: 97）

陳（1987）は、これが最も多くの使用例を持つと述べている。「念おし」というのは聞き手に確かめるので、質問することになり、「ね」のかわりに「か」を使っても成り立つ。しかし「か」の場合は、話し手の認識の度合いが表現されていない点で「ね」

と異なるという。「ね」は話し手もそのことについてある程度認識しており、より確かな認識者である聞き手に問うことによって認識のギャップを埋めるのだという（陳 1987: 98）。

1.4.1.2. 共有

また、次のような用法もある。

(13)　いい夜だね。

（陳 1987: 98）

陳（1987: 98）によると、「ね」は(13)のように話し手と聞き手が一緒にいる場面の事柄について話し手が認識した時に、聞き手も同じように認識しているだろうと話し手が考えて発言する場合にも用いられる。これは、話し手は自分の発言に対する聞き手の同意が得られることを期待していると言いかえることができるだろう。

伊豆原（1993: 110）も、「ね」の機能に「聞き手との共有」を挙げ、終助詞のみでなく、間投詞、感動詞としての用法を含めた統一的説明を試みている。伊豆原（1993）による「ね」の規定は次の通りである。

「ね」の機能

A 型: 話し手が談話を展開していくとき、話し手の始めた(る)話を聞き手に持ちかけ、聞き手をその中に引き込むもの

A-1 型: 感動詞の「ね」で、単独で用いられる。話し手がこれから始めようとする話、これまで進めてきた話に聞き手を引き込もうとする。

A-2 型: 語末・句末など、文の途中で用いられる「ね」で、話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進める。

A-3 型: 文末に現れる「ね」で、「ね」は「～んです」「です・ます」に後接する。聞き手に状況を説明したり、状況を目に見えるように伝えたりするときに使われ、聞き手との間に話題への一体化・共有化が図られる。

B 型: 話し手が聞き手の発話を受け、話題・情報を共有しようとしていることを表し、聞き手への一体化を図ろうとするもの[9]

B-1 型: 語末・文末に使われる「ね」で、「ね」がなくても会話は成立するが、

[9] 伊豆原（1993: 105）はB型として、「なるほどねぇ」や「そうですね」などの例を挙げている。

「ね」が使われることによって聞き手への働きかけが明確になり聞き手の気持ちへの一体化が示される。

B-2 型: 文末に使われる「ね」で、使われないと断定的で一方的な印象は免れず、話題・情報の共有化の上に会話が成り立っていくという印象が薄くなる。

C 型: 話題や情報がすでに話し手と聞き手の間で共有されているとき、話し手が聞き手に同意を確認したり、同意や確認を求めるもの

C-1 型: 単独で用いられる「ね」[10]

C-2 型: 文末に現れる「ね」で、聞き手の積極的な受けを要求する。このとき「ね」は必須成分で、「ね」がなければ話し手側の一方的な伝達になってします。

(伊豆原 1993: 104-106)

「ね」の機能をA型、B型、C型に分け、A型の下位分類に3つ、B型に2つ、C型に2つの3類7種に機能を類別している。本論文では、話し手が聞き手に対して情報伝達する際の機能を中心に扱うため、ここでは聞き手からの発話の受けに関わるB型を省略し、A型及びC型のみを確認していく。A−1、2型は感動詞、間投詞の用法であるため、次節で確認する。

A−3 型は、文末に現れる「ね」で、聞き手に状況を説明したり、状況を目に見えるように伝えたりするときに使われ、聞き手との間に話題への一体化・共有化が図られる。

(14) レポーター: …ええ、味の方はといいますと、全然生臭くはないんですね。あっさりした塩味で、ちょっとバターの風味もします。ええ金箔はといいますと、ちょっと食べてみますね。ええ味はありませんねえ。

(伊豆原 1993: 105)

このA−3型は、「よ」に置きかえても成り立つが、「ね」を用いることによって聞き手との一体感を示すことができる。

次にC型であるが、C−1型は単独で用いられるものであり、スペイン語の間投詞においては対応する用法がないと推測されるので、省略する。C−2 型は、文末に現れる「ね」で、聞き手の積極的な受けを要求する。このとき「ね」は必須の成分で、

[10] 回答者: ええ、たとえば朝顔とかひまわりの花知ってますか。(知ってます) あれは種がなりますねえ。(うん) ねえ。(うん) (伊豆原 1993: 106)

「『ね』がなければ話し手側の一方的な伝達になってしまう」という。

(15)　相談者: ええと現在も働いております、中学出てから。
　　回答者: ああそうすると中学卒業後すぐに（はい）働きに出たわけですね。
　　相談者: はいそうです。

（伊豆原 1993: 107）

伊豆原（1993）は C－2 型に確認の用法を含めているが、話し手と聞き手が情報を共有している場合には、(13)のような同意を要求するものと同様と考えられる。

以上の分類によって、伊豆原（1993: 106）は「ね」の中心的機能を、「聞き手に話し手と同じ気持ち・情報を共有させようとする話し手の働きかけ」と結論づけている。

1.4.1.3. 感動詞「ねぇ」

感動詞・間投詞の「ね、ねぇ」を終助詞「ね」と同じ枠組みの中に捉えている研究も多く存在する（時枝 1941; 2008: 224、林 1983: 46 他）。伊豆原（1993: 104）が分類した「ね」A－1 型は感動詞の「ね」であるが、単独で用いられ、話し手がこれから始めようとする話、これまで進めてきた話に聞き手を引き込もうとするという。

(16)　A: ねえ。
　　B: うん。何。

(伊豆原 1993: 104)

益岡（1989: 54）も同様に、「ねえ」を「相手を呼びかけたり、注意を喚起したりするときに使うもの」と説明している。

また、対人的配慮を必要とする場面での使用も見られる。

(17)　A: 「ねえねえ」（下線部筆者）
　　B: 「うん。なに？」
　　A: 「駅まで車で送ってよ」
　　B: 「うん。いいよ」
　　A: 「ありがとう」
　　B: 「うん。じゃあ行こうか」

（仁田 他 2009: 299）

「ねえねえ」のように繰り返すのは、聞き手の注意を強く引きたい場合であるというが（仁田 他 2009: 158）、日本語ではこのような表現によって、相手の意向を察し合い、共同で談話を作り上げて待遇的配慮を示すのだという（仁田 他 2009: 299）。これは、「ね」が持つ聞き手との共有を表す機能によるものであろう。

単独だけでなく、文頭の「ねぇ」も感動詞に含まれる。仁田 他（2009: 158）は、「ねえ」は対話の冒頭に用いられるのが普通であると述べている。

(18)　ねぇ、T さんてウチの人と結婚するんですってネ、名古屋支社の人なんだって、相手は。

（佐治 1967: 187）

(19)　（料理している妻が夫に）
ねえ、ちょっとこのスープ、味、見てくれない？

（仁田 他 2009: 158）

この場合にも、聞き手の注意を喚起し、後続発話に引き込む機能を果たすと考えられる。

1.4.1.4. 間投詞「ね」

また、伊豆原（1993）が分類したA－2 型は、語末・句末など、文の途中で用いられるいわゆる間投詞としての「ね」で、「話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進める場合に用いられる」という（伊豆原 1993: 104）。

(20)　回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね（はい）洗剤を入れますとね（...）

（伊豆原 1993: 104）

これは、注意喚起の用法と考えられる。聞き手との共有を表す「ね」だからこそ、発話の途中で用いて聞き手とのつながりを意識する用法を持つのであろう。これらの例をもとに、伊豆原（1993）は感動詞、間投詞、終助詞のすべての「ね（ぇ）」の機能を統一的に引き込み・持ちかけ、一体化・共有化、同意・確認と記述し、さらに伊豆原（1994: 97）では、「ね、ねぇ」によって会話に相手を引き込み、引き込み続け、相手の反応を要求することで談話の進行を図る働きをしていると述べている。

このように、「ね」は話し手と聞き手の認識（知識）が一致していることを示す性質を持ち、それによって情報の共有化や、一体化を図るといった機能が生まれると言

えるだろう。

1.4.2. 終助詞「よ」

「よ」は、話し手と聞き手の認識（知識）が一致しない場合に用いられる。大曽（1986: 93）は「よ」について、話し手と聞き手の情報、判断の食い違いを前提としており、そこから強調や主張の意味が出てくると述べている。

1.4.2.1. 聞き手めあて性

白川（1992）は、「よ」がつく場合とつかない場合との対比から、「よ」の機能を考察している。

(21)　良雄「おう」
　　実「なんだよ？(と襖閉める)」
　　良雄「さがしたんだぞ、随分」
　　実「フン」
　　良雄「仕様がねえから、あの子と映画一本見て、別れたよ」
　　実「好きにやってくれよ」

（白川 1992: 38-39）

白川（1992）は、この例において「よ」を削除すると、どこかすわりの悪い文になるとし、一般的には「聞き手の知らないこと」を言う「述べ立て」の文では「よ」を付加するのが普通であると説明している。またこれらの考察をもとに、「よ」は「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」と定義している。言いかえると、「よ」を用いることによって「あなたに向けて話しているのだ」という態度を表すということである。これまで「ね」との対比が多く見られた中、「よ」がつく発話とつかない発話とを比べることによって、より「よ」の機能が明らかとなった。「よ」の聞き手めあて性によって、発話に様々な含意をもたらすことになる。

1.4.2.2. 情報伝達

話し手と聞き手の認識（知識）が一致していないことを示す「よ」が言明などの行為と共起すると、聞き手に対して情報を伝達することになる。大曽（1986: 93）は「よ」が用いられる状況として、次の 3 つを挙げている。

A: 話し手が相手は明らかに自分と違う判断を下していると知って、それに反論する場合

B: 聞き手が当然知っているはずなのに忘れているようなことを話し手が指摘し、思い出させるような場合

C: 聞き手が気づいていないこと、知らないことを話し手が知らせる価値があると判断し、伝える場合

（大曽 1986: 93）

以下はこれらの状況で用いられる発話のそれぞれの例である。

(22) A: アメリカ人は働きませんね。
B: いや、よく働きます<u>よ</u>。

（大曽 1986: 93）

(23) （授業開始時間になってもがやがやとうるさい生徒に向かって教師が）
もう 9 時です<u>よ</u>。

（大曽 1986: 93）

(24) 上着に何かついています<u>よ</u>。

（大曽 1986: 93）

大曽（1990: 45）は「よ」のイントネーションにも言及し、A の状況の場合「よ」は下降調であり、B と C の状況では上昇調になると述べている。また、井上（1997）も下降、上昇調の「よ」に関する考察をしている。

「P よ↓」は、話し手と聞き手をとりまいている状況を「P ということが真になる」という線でとらえなおすよう強制することを表す。

（井上 1997: 63）

(25) あの人、まだあんなこと言ってる<u>よ↓</u>。（下線部筆者）

（井上 1997: 63）

(26) そんな乱暴に扱ったらこわれちゃいます<u>よ↓</u>。（下線部筆者）

（井上 1997: 63）

このような場合、「こういう事柄が真になるという、そういう世界なのだ（そういう世界に我々はいるということを自覚せよ）」という意味合いの発話になるという。

また、上昇調については次のように説明している。

「P よ↑」は、「話し手と聞き手をとりまいている状況は、P ということが真になるという、そういう状況である」ということを聞き手に示して、「このような状況の中でどうするか」という問題を投げかけることを表す。

（井上 1997: 64）

(27)　あそこの餃子はおいしいですよ↑。（さあ、どうされます？）（下線部筆者）

（井上 1997: 64）

(28)　君はまだ未成年だよ↑。結婚なんてまだ早いよ。（「まだ未成年だ」という状況にあることを考慮に入れて、もう一度よく考えよ。）（下線部筆者）

（井上 1997: 64）

「よ↑」を用いた発話は、「話し手は『このような状況の中でどうするか』ということを問題にするだけであり、それにどう対処するかは聞き手の問題である」という意味合いを含むという。

さらに、小山（1997: 106）は降昇調の「よ⤴」は、話し手の強い疑念を表すと規定している[11]。

(29)　X: 総会、私も行っていい？
　　Y: 何するの？おもしろくないよ⤴。

（小山 1997: 106）

このような場合、「聞き手が気づいていないような事柄に言及して話し手と聞き手の認識の差を表し、さらに問いかけ上昇調イントネーションによって聞き手がそのギャップを認めるかどうか、あるいはなぜそのギャップに気づかないのか、といったことを尋ねている」という（小山 1997: 106-107）。

また、伊豆原（1993: 110）も「よ」を「話し手の情報伝達」と捉え、2 類 5 種に分類している。

終助詞「よ」機能

D 型: 話し手が談話を展開していくとき、話し手の判断や話し手の持ってい

[11] 降昇音調とは、「拍内でいったん軽く下降してから急激に上昇するもの（小山 1997: 99）」である。

る情報を聞き手に持ちかけ、伝えようとするもの

D-1 型: 単独で用いられる。呼びかけである。

D-2 型: 語末・句末につく「よ」で、A-2 型に対応する。

D-3 型: A-3 型に対応するもので、「よ」の前には「～んです」「～わけです」がくることが多い。

D-4 型: 文末に置かれ、「よ」の前には「～です」「～ます」がくる。C-2 型の「ね」と、知識・情報のありかという点で相補的関係をなす。

E 型: 話し手が、聞き手の(確認の)発話に対して同意もしくは不同意の意をもちかけるもの

(伊豆原 1993: 108-110)

「よ」の場合も先の「ね」と同様に、話し手が聞き手の発話を受けて用いる場合があり、本論文ではこのような場合のスペイン語表現との対照は今後の課題として、E 型は省略して D 型の用法のみを確認する。

D－1 型は、単独で用いられる呼びかけである。

(30) A: よ、元気。
B: うん、元気。

(伊豆原 1993: 108)

次に D－2 型は、語末・句末につく「よ」で、「ね」の A－2 型に対応する。

(31) それでミヤザワさんよ、あんたがもうちょいとアメ車を買ってくれたらよ、誰もショーウィンドーにレンガ(保護主義)なんか投げ込まれないように、オレが面倒みてやるからよ。

(伊豆原 1993: 108)

この用法は、「聞き手の気持ちに関わりなく一方的に話を進めていくときの持ち掛けであり、ぞんざいさ、押しの強さが感じられる（伊豆原 1993)」という。

次に D－3 型である。これは A－3 型に対応し、「よ」の前には「～んです」などが来ることが多い。

(32) 回答者: …ええところでね、私も不思議だと思ってこれちょっと調べたことがあるんです。実はね、アメンボって日本に 20 種類くらいいて、大きいのや小さ

いの、いっぱいいるんですよ。

(伊豆原 1993: 108)

「ね」が、聞き手との一体感・共有化を持とうとする話し手の働きかけの機能をもつのに対して、「よ」の機能は、聞き手に情報を持ちかけるにとどまっている、という。

次にD－4型である。これはC－2型の「ね」と、知識・情報のありかという点で相補的関係をなすものである。

(33) 相談者: …あれ{アメンボ}は水の上におっこった小さな虫を捕えて食べてんの。(はい) つまり水の上に自分がのっかってないと、えさがとれないわけよ。(はい) ねえ。もちろん陸の上も歩けますよ。

(伊豆原 1993: 110)

この場合、「よ」を「ね」に置きかえることはできない。伊豆原（1993）はその理由として、情報が話し手に属するものなので、聞き手に確認することができないのだと説明している。

1.4.2.3. 注意喚起

白川（1993: 8）は、命令に伴う「よ」に関する考察の中で、「よ」が注意喚起の機能を持つと述べている。命令というのは本来聞き手に向けられている発話であるため、それ自体聞き手めあて性が高いのだが、そこに「よ」を付加することによって、「よ」を伴わない場合との差が現れる。

(34) 行けよ。(下線部筆者)

(上野 1972: 72)

(35) 放っておいてくれよ。

(益岡 1991: 99)

(34)の例について、上野（1972: 72）は「よ」を付加しない命令文より調子が弱くなると説明している。これは、命令文をそのまま用いる場合は、聞き手が命令に従う関係であることが前提であるのに対して、「よ」を伴うと話し手が命令を下すことにかなり弱い立場であることを意味し、主張しなければ聞き入れてもらえないということであるためだ、という。この点に関しては、益岡（1991: 99）も「命令・禁止の最

も基本的な表現のあり方は、話し手が聞き手の意向に反して行為を強制するということである。この場合、『よ』が用いられれば、聞き手に行為を要求する際に、自分の意向が聞き手の意向に対立するとの話し手の想定を併せて表現することになる。このように聞き手の意向に対する判断を明示することは、単に行為を強制するだけの場合とは異なり、聞き手に対する配慮が多少はなされることになる」と述べている。

しかし白川（1993）は、(36)のような例では逆に調子を強くしているとしか考えられないと主張している。

(36)　A: おい、ちょっと、そこどけ。
[相手が、どかない]
A: どけよ。

（白川 1993: 8）

このことから白川（1993）は。命令に伴う場合の「よ」の本来的な機能は「命令を強めることにも弱めることにも中立的」であると述べている。そして、このような場合の「よ」は「その発話が確実に聞き手の耳に入るように聞き手の注意を喚起する」ものとしている。また次節で見るように、伊豆原（2001: 41）も「よ」の機能に注意喚起を挙げている。

1.4.2.4. 含みを持つ用法

伊豆原（2001: 41）は、「よ」について「外いじりしている夫が雨に気付いたとき、洗濯物を見やりながら家の中の妻に言うのは、普通『雨だよ』であって、『雨だね』ではあるまい」と指摘し、「よ」は聞き手の注意を喚起し、この場合には、「雨だから洗濯物を取り込め」という発話意図を持ち、「状況に従って判断させることを一義的に大事にしている」と述べている。これは、話し手と聞き手の認識（知識）が一致していない「よ」を用いて認識の落差を示し、聞き手に気付かせようとしていると考えられ、「よ」は時に聞き手に対して、発話内容の理解、そしてそこから導き出される判断を行うよう求めると言うことができるだろう。

中﨑（2005: 83）も、言外の意味を持つ発話に共起する場合の「よ」の存在を指摘している。

(37)　（妻の反対をよそに市長選に立候補する芳彦）
房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ。

（中﨑 2005: 82）

この発話では、「よ」を付加しなければ聞き手にとって既知の情報（聞き手が大学の先生であること）をことさら述べるので不自然であり、上昇調イントネーションを帯びるという。このような「よ」を伴った場合、発話を「字義通りの意味だけでなくある種の言外の意味を推論によって導き出し発話」、すなわちここでは「大学の先生である者が、市長選挙などに立候補すべきではない」といった解釈をしなければならないという。伊豆原（1994: 43）は、「よ」を「基本的に話し手が情報を伝えるとき、聞き手を情報をもたない人の立場に置くことに問題がない場合」に用いられると説明しており、これは「『よ』は基本的に新規の情報に付加される」と言いかえることができるのではないだろうか。しかし、共有情報にあえて「よ」を用いると「聞き手は、わかりきっていることをさらに言うことによる押し付けがましさ、主張とでも言った言外の意味を感じ取る（伊豆原 1994: 55）」のだという。既知情報（共有情報）に新規の情報であることを示す「よ」によって、発話内容を活性化し、さらに発話に言外の意味を含んでいることを示すのである。

また、松岡（2003: 58）は次のような例を挙げている。

(38)　重大な話って何なの｛φ/ よ｝？

（松岡 2003: 62）

ゼロ形式が選択された場合、話し手は単に「重大な話とは何か」を聞き手に訊ねているのに対して、「よ」が付加された場合には、「その答えを教えなさい」という促しの意味が付随する。これは単に「重大な話とは何か」の問いだけでなく、そこに話し手の中で形成された「私もその話を知る権利がある」という認識が成立していることを意味するのだという。松岡（2003: 59）は、「よ」を「聞き手がアクセスできない、話し手自身の認識形成領域で話し手が認識を形成したことを表示する」ものと捉えている。これは、「よ」が持つ話し手と聞き手の認識（知識）の不一致を示す性質によるものと考えることができるだろう。

1.4.2.5. 話し手の心的態度

さらに「よ」は「あーん、もう、また（髪が）はねてるよー。」のような独話にも付与され、中﨑（2005: 80）はこの用法について次のように説明している。

> 本稿では、このような発話を行う話し手の意図は、「残念に思っている」「遺憾に思っている」「快く思っている」という当該事態に対する話し手の心的態度

（propositional attitude）を表すことにあるのではないかと考える。またそのような発話に付加される「ヨ」は、当該事態に対する心的態度を表す「あーん」「もお」「くそっ」といった語句と同じく発話で表現された事態に対する話し手の心的態度を明示する装置として働いていると考えられる。

（中﨑 2005: 80）

つまり、「よ」を用いることによって話し手は発話内容に対する心的態度の存在を顕在化させている、というのである。「よ」のこのような用法は、伸ばす下降調のイントネーションを帯びることが多いという特徴があり、独話だけでなく対話場面にも現れるという（中﨑 2005: 80）。

(39)　（この間受けた模試試験の結果が返ってきてそのことについて話し合う生徒たち）
男子生徒 A: どうだった、統一模試。
男子生徒 B: だめだめ。ランキングにかすりもしないよー。
男子生徒 C: 俺もだよー。

（中﨑 2005: 80）

これらの発話は、発話内容の伝達のみを伝達するのではなく、「自分がランキングにかすりもしない事実を遺憾（不快）に思っている」という話し手の心的態度の存在までを含めて伝達することを目的としているという。「『よ』の存在がなければ、聞き手がそういった心的態度の存在に気づかないわけではなく、心的態度を有していることを示すために付加が義務的なわけでもないが、聞き手は『よ』の存在によって話し手の発話の意図をより確実に解釈する」と説明されている。この用法は文脈依存的であると考えられ、「よ」を語用論的観点から考察したものと言えるだろう。

このように、「よ」は聞き手に注意喚起し、基本的には、話し手と聞き手の認識（知識）が一致しない新規の情報に付加されて発話が聞き手に向けられていることをことさら示すものである。また、特定の文脈では発話に言外の情報や話し手の心的態度を含んでいることを表明する。

以上、終助詞に関する諸説を挙げて本論文の立場を位置づけ、終助詞「ね」、「よ」の機能を概観した。これらの機能をもとにスペイン語表現の機能を対照させていく。

2. スペイン語の間投詞

2.1. スペイン語の「聞き手めあて表現[12]」(enfocadores de alteridad)

前章で概観した日本語の終助詞「よ」及び「ね」と比較し得るスペイン語表現にはどのようなものが考えられるだろうか。スペイン語において、終助詞のように命題の表現形式を変えることなく話し手の態度を表明する言語形式として、口語における談話標識が挙げられる。談話標識とは、discourse marker (Schiffrin 1987) と呼ばれるもので、発話を相互に関係づけ、談話内の境界を示し、談話の流れを決めたりその一貫性の度合いを示し、談話の相互作用を円滑に運ばせるために必要な情報を提供するものである (小池 他: 280)。スペイン語では、marcadores del discurso と呼ばれ、Ortega (1985, 1986)、Briz (1998)、Martín Zorraquino y Montolío Durán (1988)、Fuentes Rodríguez (1990)、Cortés (1991)、Pons (1998a、1998b)、Martín Zorraquino y Portolés (1999)、Cortés y Camacho Adarve (2005) などを中心に研究がなされている。その中で、Martín Zorraquino y Portolés (1999) は談話標識を数種に分類し、その 1 つに enfocadores de la alteridad (他者性の焦点化[13]) というものが挙げられている。このグループの談話標識は、次のように説明されている。

> Se incluyen en este grupo los marcadores como hombre, bueno, vamos, mira, oye, etc. Se trata de un conjunto de unidades que coinciden en que apuntan, en su origen, fundamentalmente, al oyente (oye, mira, etc.) y, en alguna ocasión, a ambos interlocutores (vamos).
>
> (Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4171)

このグループに属する談話標識は、その名の通り聞き手に向けられていることを表すものであり、Martín Zorraquino y Portolés (1999) は hombre、bueno、mira、oye などは聞き手めあて、vamos は聞き手と話し手双方めあてであると述べている。またこれらの他に、動詞の 2 人称活用 (formas verbales de segunda persona como marcadores de alteridad) である ves、verás、escucha、fíjate、sabes、entiendes、確認の補足 (apéndices comprobativos) ¿no? 、¿verdad? 、¿eh?、そして por favor、perdón、permiso を挙げている。これらの表現と、日本語の終助詞を対照し、対応の可能性を考察してみよう。

---

[12] 日本語において、終助詞は「聞き手めあて表現」と呼ばれることがある (佐治 1957: 31 等)。
[13] 長谷川 (2003) による。

まず、hombre は名詞から文法化した形式であり、聞き手への親密さを表し、発話への割り込みの唐突さや聞き手への対立的な態度を和らげると説明されている。Beunhauer（1929; 1963: 30）は、hombre は本来呼びかけ語（vocativo）であり、間投詞的に用いられると説明している。Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4172）も同様に、呼びかけ語として扱っているため、個人名や名詞、形容詞などの呼びかけ語などの一部とみなすことができよう。滝浦（2008: 16）は「呼びかけるという行為は、聞き手の領域に声で触れることである」と述べており、hombre が聞き手への親密さを表すのは、呼びかけ語としての働きであると考えられる。また、hombre が文末に現れた場合、それまでの発話内容に対するまとめや緩和に作用するという（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4175）。このことも、呼びかけ語の現れる位置による機能と共通している。hombre を呼びかけ語の一部とみなすとすると、野村（2012: 67）でも述べた対人関係機能などを持つ呼びかけ語と、「ね」や「よ」との対照が可能であると言えるだろう。

次に、bueno は先行発話への同意の表明や話題転換など様々な機能を持つが、enfocadores de alteridad としての bueno は提案を意味するものであり、相手のポジティブ・フェイス（positive face[14]）を保ちながら自らの不同意や反対意見を切り出す際に用いられるという（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4177）。これは、本来同意を表す bueno を用いて聞き手に共感を表した上で話し手の主張を述べることにより、提案の意味を持つのではないだろうか。従って、終助詞「ね」「よ」の中心的性質である話し手と聞き手の認識の有無の差との関連性は見られないので、研究対象からはずす。

一方、vamos は動詞の転用表現で、本来の意味を失って談話標識となり、聞き手を自分と同じ発話領域に引き込む働きを持つという（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4178）。伊豆原（1993: 104）は、「ね」に聞き手を話し手の領域に引き込む機能を挙げており、vamos との共通性が窺える。

また、mira（mire）や oye（oiga）は、動詞の命令法の転用表現で、明らかな脱意味化が見られるという（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4180, 4183）。mira は聞き手を話し手の領域へ引き込み、oye は話し手が聞き手の領域に近づく、という説明がされている。また大倉（1994）では、oye、mira と日本語の「あのう」、「ね（ぇ）」、「よ」を対照しており、聞き手を引き込む「ね」、また話し手の判断や話し手の持っている情報を聞き手に持ちかけ、伝えようとする「よ」（伊豆原 1993: 104, 108）と

[14] positive face: the positive sonsistent self-image or 'personality' (crucially including the desire that this self-image be appreciated and approved of) claimed by interactants. (Brown & Levinson1978; 1987: 61)

の対照が可能であると考えられる。

次に、動詞の 2 人称活用が転用した談話標識について見ていこう。これには ves、verás、escucha、fíjate、sabes、entiendes などが挙げられている。Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4177-4178）は、これらの表現を身体的知覚（percepción física）に関わるもの（ver、escuchar 等）と知能的知覚（percepción intelectual）に関わるもの（fijarse、entender、saber 等）に分類している。それぞれの表現について詳しい言及は見られないが、聞き手に近づいたり親密さを表すと同時に聞き手の関心を引く（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4187）と説明している。この規定も先の伊豆原（1993）との共通性が窺える。また、Chodorowska（1997: 356）は、¿me entiendes? が、英語の you know に対応すると言及している。you know はメイナード（1993）など多くの研究で「ね」「よ」と対照されている。know の語彙的意味を考えると、¿me entiendes?ではなく、知識の所有を問う sabes に対応しそうなものだが、実際にはどうなのだろうか。英語の you know との対照は別の機会に論じることとし、本論文では sabes と entiendes 及び ves との差についてのみ扱うが、you know と「ね」が対照されていることからも、スペイン語のこれらの表現と終助詞との対照も可能であろう。

一般に付加疑問と呼ばれる¿no?、¿verdad?、¿eh?を、Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4188）は Ortega（1985）の用語を用いて、「確認の補足表現[15]（apéndices comprobativos）」と呼び、聞き手から確証を得るために使用されると説明している。これらの表現は、文法的には談話標識とは言い難いが、会話の相互作用における機能は注目すべきである、と述べられている（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4188, 4189）。終助詞との対応は、長谷川（2009: 152）や和佐（2005: 20-21）などで指摘されているが、終助詞のどの機能に、どの程度対応するのかを明らかにする必要があるだろう。

最後に、por favor、perdón 、permiso も enfocadores de alteridad に分類されている。いずれも聞き手の好意を得ようとしたり、許可を求める表現であるため、このグループに分類されているのだろう。しかし、これらは謝罪や懇願の意を表すことによって聞き手に働きかけるものであり、終助詞「ね」「よ」の基本的な性質である話し手と聞き手の情報の認識の差や、そこから派生する機能との共通性が見られないので、本論文では研究対象からはずす。

以上、enfocadores de alteridad に挙げられている表現を考察した結果、呼びかけ語（hombre を含む）、vamos、mira、oye、sabes、entiendes、ves、verás、escucha、

[15] 長谷川（2003）による。

fíjate、vamos、¿no?、¿verdad?、¿eh?を、終助詞「ね」及び「よ」と比べる対象とすることとする。

なお、これらの表現を山田 他（1995）は、間投詞（またははさみ語などを含む間投詞表現）として分類しており、RAE（2009）においても間投詞とその統語的グループに挙げられているので、本論文でも大きくは間投詞とみなし、そのように称する。

また、これらの間投詞の機能にフィラー（muletilla、función expletiva）を挙げている先行研究がある（García 2005、Beinhauer 1963、Cortés 1991 等）。フィラーとは、一般的に特別な意味を持たないためらいの音声や語句を意味し、これらの先行研究においても、発話に変化を与えない用法をフィラーとみなしている。しかし、語彙的意味を持つ表現が意味を持たないとは考えにくく、本論文では、これらは明らかに意味を持つものと結論している。唯一、語彙的意味を持たない eh には、言いよどんでいる間の使用が確認され、この用法においてのみフィラーと考えることができるだろう。

2.2. 間投詞の用例数

スペイン語の間投詞の機能を明らかにするために、スペイン映画 20 作品の脚本から収集したデータをもとに考察を行う。資料に映画の脚本を用いたのは、映画では一人芝居がなく発話場面も映し出されるので、小説や演劇における発話と比べるとより自然な会話であり、間投詞が頻繁に現れると考えられるためである。なお、時代や地域によって差があると考えられるので、比較的新しく、方言があまり現れないスペイン映画を資料に選んだ。

このデータは、まず脚本に現れている間投詞を数え、さらに実際に映像を確認して、俳優がアドリブで用いた表現も数に含めた。脚本に現れている間投詞が、映像では省略されている場合もあったが、脚本に書かれているということは脚本家がその場面において自然である、必要であると判断していると考えられるので、映像で省略されていても脚本にある表現については例数に含めている。

次の表 2 は間投詞全体の用例数である。

表 2 間投詞の用例数

表現	用例数
vocativo	2585
¿no?	180
eh	142
mira	137
oye	120
sabe(s)[16]	98
¿verdad?	84
entiendes	32
vamos	30
ves	21
verás	19
fíjate	10
escucha	3
合計	3461

この結果を見ると、最も多く用いられているのは呼びかけ語であり、全体の約 75%を占めていることがわかる。続いて¿no?や eh が多く見られ、mira、oye と続く。¿no?と共に付加疑問として扱われる¿verdad?は、¿no?の半数しか観察されなかった。また、今回扱う動詞の 2 人称の転用表現の中では、sabe(s)が最も多く、entiendes の約 3 倍の使用例が見られた。ves は entiendes よりもさらに少ない 21 例で、escucha はわずか 3 例であった[17]。

2.2.1. 間投詞の各位置の例数

次に、間投詞が現れた位置について見てみよう。位置による分類は、脚本の文字表

[16] Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4187）は、“sabes (y sus variantes)”と記述しており、疑問形の¿sabes?だけでなく、sabes や usted に対する sabe も同様の機能を果たすと指摘している。本論文で用いたデータでは、sabes のみ 3 人称単数形 sabe が現れたので、sabe(s)と表記する。

[17] escucha の使用例はわずか 3 例であり、動詞の語彙的意味を強く残していると考えられるので、本論文では対象から除く。

記[18]を基準とした。使用例が最も多かった呼びかけ語の例を用いて、この基準を説明すると、文が呼びかけ語で始まり、後にコンマが付いている用例を「文頭」、呼びかけ語が文中にあり、前後にコンマが付いている用例の中で、主節と従属節、あるいは条件節と帰結節の間の例を「文中」、等位接続や並列的接続の間の例を「文間」、呼びかけ語の前にコンマがあり、かつ後ろにピリオドなどの終止記号がついている用例を「文末」の用例とみなした。また単独で用いられ、ピリオドか感嘆符または疑問符がついている用例は「単独」の用例に分類した。各位置の例は次の通りである。

文頭

(40) Julia: Manuela, me va a llevar un buen rato leer esto.

(*Mar adentro*: 66)

文中

(41) Ramón: La persona que de verdad me ame, Rosa..., será precisamente la que me ayude a morir.

(*Mar adentro*: 126)

文間[19]

(42) Raimunda: No me ha olvidado, Emilio, pero desde que hablé contigo, mi vida ha sido como una película de Indiana Jones, ¡pero sin Harrison Ford!

(*Volver*: 167)

文末

(43) Matilde: Muchas gracias, Benigno.

(*Hable con ella*: 25)

単独

(44) Raimunda: (*Grita*). ¡Tía Paula!

(*Volver*: 24)

この基準に従って他の間投詞も位置ごとに分類した。その結果は次の通りである。

---

[18] RAE（1973: 146）による。

[19] 先行研究では、文中と文間を区別せず、文中（intermedio）としているものが多い。しかし、全てを文中に分類すると、話し手が意識的に文中に用いている例とそうでない例が見られる。主節と従属節、あるいは条件節と帰結節の間の例は、話し手が明らかに文中であることを意識しているのに対して、等位接続、あるいは並列的接続の間の例は、話し手が文中であると意識しているか定かではない。従って、本論文では文中、文間を区別して分類する。

表 3 間投詞の現れた位置

表現	文頭	文中	文間	文末	単独	合計
vocativo	528	12	546	1128	371	2585
¿no?	0	1	9	170	0	180
eh	16	1	10	86	29	142
mira	122	0	9	2	4	137
oye	101	0	5	4	10	120
sabe(s)	10	1	16	57	14	98
¿verdad?	1[20]	0	8	75	0	84
entiendes	0	0	4	23	5	32
vamos	11	1	13	5	0	30
ves	4	0	3	2	12	21
verás	9	0	0	5	5	19
fíjate	2	1	5	2	0	10
合計	804	17	628	1559	450	3458

この結果を見ると、用例数の多い呼びかけ語はすべての位置に現れているが、文末での使用例が最も多いことがわかる。次に多く見られた¿no?は、文頭では見られず、文末での使用が多い。これは同じ付加疑問形式である¿verdad?も同様である。一方、eh は文末でも用例が多いが、文頭や単独での使用も見られた。mira や oye は、文頭での用例数が圧倒的に多く、他の位置での用例は少ない。また、sabe(s)は文末で多く見られたが、文頭や文間、単独[21]での例も見られた。これに対して entiendes は、文頭では現れず、文末での使用が圧倒的に多かった。ves は単独で、vamos は文頭、文間での使用が多かった。また、verás は文頭が多く、fíjate は様々な位置に現れていた。

[20] シナリオでは¿Verdad, Alicia?のように大文字で書かれており、本論文の分類基準では文頭になるが、明らかに先行発話の文末であり、表記上の誤りであると考えられる。
[21] 本論文の分類の基準上単独に分類されるが、実際には後続発話の文頭である例がほとんどなので、今回は扱わない。

2.2.2. 間投詞を含む文[22]の種類

では、それぞれの間投詞はどのような文と共起するのだろうか。次の表 4 は、間投詞を伴う文を意味ごとに分類した結果と、位置ごとの用例数を示したものである。

[22] 本論文では、亀井 他（1995: 1068, 1169）の規定に従って、音声言語表出行動（発話行動）とその結果生じた音声を「発話」、いくつかの語から成り立ち、主語と述語を持つものを「文」と呼ぶ。発話は、話し手が発話行動を打ち切り、発話以外の行動あるいは沈黙に移ったときに、その発話は終わったと認められるという。

表 4 間投詞を伴う文の種類[23]

文の種類	位置				
	文頭	文中	文間	文末	合計
言明	*vocativo* 238 *mira* 108 *oye* 39 *sabes* 10 *ves* 3 *eh* 3 *verás* 8 *vamos* 10 *fíjate* 2	*vocativo* 8 *sabes* 1 *¿no?* 1 *eh* 1 *vamos* 1 *fíjate* 1	*vocativo* 257 *mira* 8 *oye* 4 *sabes* 16 *entiendes* 4 *ves* 3 *¿verdad?* 7 *¿no?* 8 *eh* 6 *vamos* 12 *fíjate* 4	*vocativo* 384 *mira* 2 *oye* 3 *sabes* 57 *entiendes* 23 *ves* 2 *¿verdad?* 64 *¿no?* 148 *eh* 40 *verás* 4 *vamos* 5 *fíjate* 2	*vocativo* 887 *mira* 118 *oye* 46 *sabes* 83 *entiendes* 27 *ves* 8 *¿verdad?* 71 *¿no?* 157 *eh* 50 *verás* 12 *vamos* 28 *fíjate* 9
行為指示	*vocativo* 159 *mira* 12 *oye* 21 *eh* 7 *vamos* 1	*vocativo* 3	*vocativo* 180 *mira* 1 *eh* 3 *fíjate* 1	*vocativo* 241 *¿no?* 7 *eh* 22 *verás* 1	*vocativo* 583 *mira* 13 *oye* 21 *¿no?* 7 *eh* 32 *verás* 1 *vamos* 1
行為拘束	*vocativo* 6 *mira* 1	ϕ	*vocativo* 3	*vocativo* 2	*vocativo* 11 *mira* 1
宣言	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ
感情表現[24]	*vocativo* 12 *oye* 1	ϕ	*vocativo* 19 *vamos* 1	*vocativo* 167 *oye* 1 *¿no?* 1 *eh* 7	*vocativo* 198 *oye* 2 *¿no?* 1 *eh* 7 *vamos* 1
質問	*vocativo* 94 *mira* 1 *oye* 40 *ves* 1 *¿verdad?* 1 *eh* 6	*vocativo* 1	*vocativo* 42 *oye* 1 *¿verdad?* 1 *¿no?* 1 *eh* 1	*vocativo* 230 *¿verdad?* 8 *¿no?* 13 *eh* 15	*vocativo* 367 *mira* 1 *oye* 41 *ves* 1 *¿verdad?* 10 *¿no?* 14 *eh* 22
感嘆	*vocativo* 19 *verás* 1	ϕ	*vocativo* 27	*vocativo* 49 *¿verdad?* 3 *¿no?* 1 *eh* 2	*vocativo* 95 *¿verdad?* 3 *¿no?* 1 *eh* 2 *verás* 1
返答[25]	ϕ	ϕ	*vocativo* 18	*vocativo* 55	*vocativo* 73
合計	804	17	628	1559	3008

[23] Searle（1969）による 5 つの言語行為、言明（assertive）、行為指示（directive）、行為拘束（commissive）、宣言（performative）、感情表現（expressive）と、用例から観察された質問、感嘆、返答を加えて分類した。なお、それぞれの行為の和訳は久保（1997）による。

[24] Searle（1969）は、挨拶を感情表現の行為に含めていないが、Haverkate（1993: 152）は挨拶も含まれると規定している。

[25] 聞き手の質問に対する sí や no といった返答と、承諾を「返答」の用例とみなした。聞き手の質問に対する文中の「返答」の例で、その後に何かを主張したりする例は「主張」に含めている。

本論文のデータでは、発話行為の一種である宣言に伴う例は見られなかった。映画中に、結婚式など宣言をする場面はあったが、そのような発話は間投詞を伴っていなかった。表 4 を見ると、宣言の文を除く全ての種類の発話と呼びかけ語が共起していることがわかる。特に説明や主張を含む言明、命令や勧誘などの行為指示の発話に多く伴っている。また、sabe(s)、entiendes は言明にのみ現れており、理解に関わるこれらの表現は、比較的情報量の多い発話内容を伝達する際に用いられるのではないだろうか。一方、¿no?、¿verdad?が用いられているのは言明と質問[26]及び感嘆であり、命令や勧誘などを表す行為指示や、挨拶や感謝または謝罪などを含む感情表現に伴うのは、¿no?のみであった。このことから、¿verdad?と¿no?には何らかの機能の差があると考えられる。また、¿no?と eh は共起する文の種類は同じだが、eh は行為指示に多く見られるのに対して、¿no?の場合は少なく、この 2 つは異なる機能を持っていると推測される。文頭での使用が多い mira、oye は、言明、行為指示、質問などに現れている。しかし、言明では oye と比べると mira の使用例が圧倒的に多く、質問では oye の方が多い結果となっている。そのため、mira と oye は本質が異なるものであると考えられる。

次章からはそれぞれの表現を具体的に見ていく。まずは先行研究を挙げ、本論文のデータから得られた実例を、スペイン語母語話者[27]を対象に行ったアンケートの結果を交えて考察していく。

---

[26] ¿verdad?及び¿no?が疑問符がつく文に伴う場合、「質問」に分類した。

[27] 本論文のアンケートは、スペイン語母語話者 5 名（スペイン人男性 3 名、女性 2 名）を対象に実施した。

3. ¿verdad?、¿no?

3.1. 問題点

¿verdad?、¿no?は一般に付加疑問と呼ばれ、長谷川（2011: 152）や和佐（2005: 20-21）などを含め、従来「ね」との対応が指摘されてきた。では、これらの表現はどういう点で、またどの程度「ね」と対応しているのだろうか。

イタリア語の付加疑問では、スペイン語の¿verdad?に当たるのは vero?であり、¿no?に当たるのは no?である。この vero?について古浦（1993: 29- 30）は、相手に確認を要求するのに対して、相手に注意を促しつつ、自分の言ったことを強調する機能を持つと述べている。イタリア語における付加疑問の機能分化が、スペイン語の場合と完全に一致しないにしても、「真実」という意味を持つ¿verdad?と否定を表す¿no?は、語彙的意味も異なっており、表 4 で確認したように、伴う発話が異なることから、何らかの差があると予測される。

Martín Zorraquino y Portolés (1999: 4188) は、Ortega (1985: 242) が、¿verdad?、¿no?を apéndices comprobativos（確認の補足表現）と呼んでいるのを受け、¿eh?を加えて考察しているが、¿verdad?、¿no?が語彙的意味を持つのに対して、eh[28]は具体的な意味を持たない音形なので、本論文では章を分けて考察する。

3.2. ¿verdad?、¿no?に関する先行研究

Ortega (1985: 242) の apéndices comprobativos という用語を引用して、Rodríguez Muñoz（2009: 89）は次のように説明している[29]。

> El uso de ciertos marcadores comprobativos puede estar ligado al grado de compromiso o convencimiento que tiene el enunciador en relación con la información.
>
> (Rodríguez Muñoz 2009: 89)

marcadores comprobativos（確認のための標識）の使用は、話し手の情報への確信の度合いに関わるという。ここでは¿verdad?については言及されていないが、真実か

[28] Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4188）では、¿eh?を疑問形で表記しているが、本論文のデータでは、疑問形以外に肯定形も見られたので、疑問形、肯定形どちらも含んでいることを表すために、これ以降 eh と表記する。

[29] Rodríguez Muñoz（2009）は、¿no?と疑問形式の¿eh?を comprobativos とみなしている。

どうかを問う¿verdad?、否定かどうかを問う¿no?は、どちらも話し手の確信の度合いに関わると推測され、この指摘を当てはめることができると考えられる。

また、Ortega（1985: 243）は一般に付加疑問と呼ばれる¿no?を伴う文と疑問文の違いについて次のように指摘している。

(45) a. ¿Tuviste tiempo de verla?
b. Tuviste tiempo de verla, ¿no?

(Ortega 1985: 243)

(45)a は疑問文であり、この場合話し手は質問に対する回答が sí であるか、あるいは no であるかを全く知らない状態で、聞き手は回答する義務を持つという。これに対して、(45)b は(45)a と比べて話し手の確信度が高く、質問というより主張に近くなる。このことは¿verdad?を伴う文においても同様だと考えられる。従って、¿verdad?や¿no?を用いる場合は、話し手は発話内容に対するある程度の確信を持っていると言えよう。

では、具体的にこの 2 つにはどのような差があるのかを見ていこう。

3.3. ¿verdad?

3.3.1. 先行研究

¿verdad?は、文頭、文間でも使用が見られたが、文頭の例は表記上の誤りで、文間の例は後ろに呼びかけ語を伴うものであるため、どちらも文末の機能を持っていると考えられる。この位置における呼びかけ語を伴う例については、¿no?を考察した後に詳しく言及することとし、本節では文末の用例のみを扱う。

¿verdad?について Ortega（1985: 247）は、「¿no?と置きかえ可能であり、機能は全く同じである」と説明しているが、先に述べたように、¿verdad?と¿no?には何らかの差があると考えられる。また、「¿verdad?は否定文に現れる付加疑問であり、命令とは現れない（Ortega 1985: 247）」とも述べている。この指摘は、表 4 でも確認できるように、本論文のデータにおいても同様の結果となっているが、命令と共起しない具体的な理由については言及されていない。さらに、「教養のある人や、優雅に見せたいときに用いる（Ortega 1985: 247）」というが、この指摘が 2000 年以降の映画作品から収集した本論文のデータに当てはまるかについては疑問が残る。しかし、上記のような指摘が生まれたのは、¿verdad?が持つ語彙的意味によると考えられるのではないだろうか。仮に、¿verdad?を用いる時には発話内容に対する話し手の確信の度合いが高く、¿no?を用いる時は確信度が低いとすると、¿verdad?を用いるときの方が

話し手の情報量が多く、発話内容に対する確信度が高いことになり、否定を意味する¿no?を用いるよりも教養があり、優雅に聞こえるのだろう。¿verdad?と¿no?の機能の差については詳しい先行研究がないため、実例を通して考察してみよう。

Fuentes（1990: 183）は Ortega（1985）を引用しているが、¿verdad?は聞き手がその場にとどまり話し手の発話に耳を傾けるよう注意を喚起する、会話の支えとして機能する、という少し異なる記述をしている。これは、古浦（1993: 30）が主張するイタリア語の no?についての記述と共通している。話し手の発話を強化するのは、¿verdad?が示す話し手の確信度の高さによるものだと考えられないだろうか。さらに、この表現は文字どおりの情報交換ではなく、お互いが友好的な関係にあることを確認するための表現である、交感的言語使用[30]（fático）としての機能も果たすとも述べている（Fuentes 1990: 183）。この場合には、¿verdad?は聞き手に確認を求める姿勢を見せることによって、聞き手と協調関係にあることを示すのだろう。

3.3.2. 実例による考察

では具体例を考察しよう。

(46) [A pocos metros de Julia hay un coche-ranchera aparcado con un hombre dentro joven y con aspecto bonachón. Sale del coche.]

Marc: ¡Julia, entra en el coche, que te vas a congelar!

[Julia ni siquiera se vuelve.]

Marc: Es una cabezota.

[Un coche se aproxima tocando la bocina y aparca junto a él. Es Gené. Se baja y saluda a Marc.]

Marc: ¿Eres Gené, <u>verdad</u>? (Gené asiente.) Yo soy Marc.

Gené: ¿Y Julia?

[Marc indica con la mirada a Julia, que se acerca a ellos lentamente, cojeando sobre la muleta.]

(*Mar adentro*: 16)

(46)は、Ramón の尊厳死を訴えるため、Ramón の家にやってきた弁護士 Julia と部下の Marc が、Ramón の協力者で、人権保護団体の責任者である Gené と初めて会う場面である。話し手 Marc が Gené の名前を知っていることから、事前に Gené と

[30] phatic communion (Malinowski 1954: 315)、「自由で目的のない社会的交際で使用される言葉（宇佐美 1999: 84）」

いう人物が来ると聞いていたと考えられ、「自分達以外に Ramón の家を訪ねてきたこの女性が、話に聞いていた Gené であろう」という確信があったので、¿no?ではなく¿verdad?を用いたのではないだろうか。母語話者によるアンケートでも、「¿verdad?を用いると話し手は聞き手が Gené であるという確信を持っているが、¿no?の場合は確信がないので聞き手に確かめているような印象を受ける」という回答が得られた。

次の例も見てみよう。

(47) Modesto: Dígame una cosa: si estaba todo tan claro, ¿por qué tardó tres días en hacer el informe?

[Santos mira [*sic*] Modesto con dureza.]

Santos: ¿A qué viene eso?

Modesto: Una empresa de Gibraltar llamada Kavendish le ingresó en una cuenta de Andorra treinta millones de pesetas un día antes, justo un día antes de firmarlo. Exactamente en la cuenta número 001120036...

Santos: ¡Pare!

[Santos se vuelve. Modesto deja de leer. Santos retira la sartén y apaga el fuego. Mira el papel en manos de Modesto.]

Modesto: No fue un accidente, ¿verdad? Usted falseó el informe y cobró por ello.

(*La caja 507*: 100)

(47)は、山火事で娘を失った Modesto が、火事は本当に事故だったのか、あるいは故意に起こされたものであったのかを調べ、真実を知っているであろう Santos に真実を問う場面である。事故ではなかったと裏付ける証拠を手に入れ、確信を得た Modesto は、No fue un accidente という発話に¿verdad?を用いる。これは聞き手である Santos に対して、自分が確信を持っていることを表した上で、確認を求め、真実を語るよう要求していると考えられる。この例について、母語話者に¿verdad?を¿no?に置きかえるとどのように意味が変わるかを訊ねたところ、「否定文なので¿no?は不自然である」という回答と、「否定文であっても問題ない」という回答が見られた。また、¿no?にすると話し手の発話内容に対する自信のなさが現れ、聞き手に対して同意を求めるという。一方¿verdad?の場合には、聞き手の同意が必要ないほどに話し手が確信しているという回答が得られた。もう 1 例見てみよう。

(48) Hombrecillo: ¿Quién más está al corriente de esto, Ramón?
Director: El redactor y yo, nadie más. He visto los nombres que aparecen en estos documentos. Me ha parecido adecuado restringir la información y consultar antes de dar un paso en cualquier dirección.
Hombrecillo: ¡Has hecho muy bien, Ramón! Aunque, podría ser un gran éxito para nuestro periódico, ¿verdad?

(*La caja 507*: 126)

(48)は、会社の重役が、部下に会社の成功について述べる場面であるが、この場合にも話し手 Hombrecillo は、部下の功績が会社にとって益となるという発話内容に対する確信を持っていると考えられる。母語話者のアンケートによると、¿verdad?によって聞き手を同意させようとする話し手の意図が現れるという。また、¿no?に置きかえると、話し手が発話内容への確信がなく、聞き手に直接真偽を問うような印象を受けるという。

このように、¿verdad?は話し手が発話に対する確信度が高い場合に用いられる。Fuentes（1990: 183）の話し手の発話を強化するという指摘は、この¿verdad?が示す話し手の確信度の高さによるものだと考えられる。

3.4. ¿no?

3.4.1. 先行研究

では次に¿no?について見ていこう。¿verdad?については、先行研究であまり詳しい記述が見られなかったが、¿no?については先行研究が非常に多く、語彙的意味から考えられる基本的性質、発話で用いられた場合の語用論的機能、共起する文に与える影響、そして現れる位置による機能に分けられ、具体的に区別することができる。

3.4.1.1. 基本的性質

¿no?は否定を表す副詞であり、聞き手に発話内容を否定するかどうかを疑問形式で尋ねることによって、話し手の持つ情報の不確実性（inseguridad）を表す（Ortega 1985: 243, Christl 1996: 130 等）。また、聞き手が聞き手に情報を確認（corroborar）する機能を果たすという指摘もある（García 2005: 91, Rodríguez Muñoz 2009: 88 等）。このことから、¿no?の場合は発話に対する話し手の確信が不確実である（低い）ので、聞き手に確認するものと考えられるだろう。

3.4.1.2. 語用論的機能

García（2005）は、¿no?の語用論的機能を 4 つ挙げている。まず、聞き手に発話内容が事実であるかの確認を要求するもので、この場合¿no es así?、¿no es eso cierto / verdad?に置きかえることができるという。第 2 に、聞き手に対して、話し手の発話への承認・否認を要求するもので、¿no crees?で言いかえ可能なものである。つまり、聞き手への確認という機能を持つ¿no?は、発話内容が事実かどうかを問うもの（第 1 の機能）と、発話内容に同意するかどうかを問うもの（第 2 の機能）に分けられるということである。第 3 に、聞き手に答えを求めない交感的言語使用（función fática）の機能、そして最後にフィラー（muletilla）としての機能で、話し手が次の発話を考える間の時間稼ぎとして用いられる、意味のないはさみ語である。

本論文は、スペイン語の間投詞の情報伝達時における特徴を明らかにすることを目的としているため、まずは¿no?の機能を統一的に捉えたいと考える。最初の 2 つの機能は、¿no?を用いて話し手の確信度が低い情報を提示し、聞き手に答えを求めるものである。話し手の確信の度合いが高い¿verdad?とはこの点で異なっており、どちらも語彙的意味を反映していると言えよう。交感的言語使用としての機能は、¿verdad?でも指摘されている。¿verdad?や¿no?はどちらも疑問形式であり、聞き手の回答を求める。しかし、後ほど詳しく言及するが、実際には¿verdad?も¿no?も Ortega（1985: 243）が指摘するように、主張に近いものであり、これらの表現を用いても聞き手は必ずしも答えなくてもいい場合がある。聞き手との友好関係を示すものとみなされるのはそのような場合ではないだろうか。

3.4.1.3. 共起する文に与える影響

Ortega（1985: 245）は、¿no?が共起する発話に与える影響について指摘している。命令に伴う場合には、命令を和らげ、聞き手に答えの自由を与えるという。また、依頼と共起する場合は、話し手の権威を和らげるという。また、主張に伴う場合は聞き手の答えを要求する（Ortega 1985: 244）という指摘は、¿no?が疑問形式であることによると考えられるが、実際に答えを要求するかどうかは後ほど考察する。

3.4.1.4. 現れる位置による機能

Briz（1998: 226）は、¿no?が文中で現れた場合、交感的言語使用あるいはフィラーとしての機能を果たし、話し手の発話がまだ続くことを表すと説明している。また、文末では聞き手の答えを要求し、発話の終結、発話権の交代を表明するという。¿no?

は、ほとんどが文間（先行発話の文末的要素を持つ[31]）と文末の例であったが、１例だけ文中の例が観察された[32]。

3.4.1.5. その他の先行研究

その他に、¿no?に関する興味深い先行研究を挙げる。Christl（1996: 129）は、¿no?の使用により、話し手が聞き手を発話に巻き込もうとすると述べている。否定を表す¿no?は、発話が聞き手に否定される余地を示すので、聞き手が発話に対して答えることがある。このような場合、Christl（1996）の言うように、話し手の発話に聞き手を引き込み、聞き手との一体感を作り出そうとしていると考えることができるだろう。また¿no?が感情表現と共起する（Christl 1996: 131）という指摘は、話し手が自分の感情への理解を聞き手に求め、感情を共有しようとするからだと解釈できる。

3.4.2. 実例による考察

では具体例を見ていこう。(49)は、バルで食事をしていた話し手 Santa の発話である。聞き手は友人の José である。

(49) Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿no?
[José asiente, desconcentrado.]
(*Los lunes al sol*: 51)

Santa は、José の妻が今夜勤であるかということに確信がないので、確信度の低さを示す¿no?を用いて聞き手に確認している。母語話者によるアンケートによると、この場面で話し手の確信を持っていることを表す¿verdad?を用いても、聞き手に確認しているという点で大きく意味は変わらないが、¿verdad?の場合には「話し手が聞き手が発話内容を肯定することを予測している」という。このことから、¿no?を用いた場合には話し手の確信の度合いが低いことを表して発話していると言えよう。また、¿no?を省いた場合には、聞き手が自分の妻が夜勤であることを知らないので、話し手が教えているような意味になり、この場面では不自然であるという。

次の例も見てみよう。

(50) [Le tira la mosca a la cabeza y la niña se levanta un poco histérica.
Manolito y el Orejones se ríen.]

---

[31] 第 5 章参照。
[32] p.47 参照。

Sita Asunción: Manolito y López, creo que no tenéis muchas razones para reíros, ¿no?

[Los dos se quedan cortados y el Orejones sale a leer.]

(*Manolito Gafotas*: 33)

(50)は、Manolito と、Orejones というあだ名の López が他の生徒をからかい、教師に注意される場面である。教師は「(宿題をちゃんとしてこない) Manolito と López が他の生徒を笑う理由はない」と主張する。この例について母語話者に訊ねたところ、¿no?は「生徒を非難する含意を持つ」という。これは、確信度の低い¿no?が「それとも理由があるのか」と聞くことになるからだろう。また、¿verdad?に置きかえても非難の含意を持ち、先の例と同様にあまり意味が変わらないとの回答が多かったのは、¿verdad?が「他の生徒を笑う理由はない」ことへの確信度の高さを表すからだと考えられる。つまり、情報提示の仕方は異なるが、この例では¿verdad?、¿no?のどちらを用いても Manolito と López を非難することになるのである。

また、次の例は話し手と聞き手が夫婦喧嘩をしている場面の発話である。

(51) Antonio: Te he pedido perdón, ¿no? ¿Qué más quieres que haga?
Pilar: Nada, Antonio, no quiero nada.

(*Te doy mis ojos*: 150)

(51)では、話し手 Antonio が聞き手 Pilar に、以前の喧嘩について謝罪したことを確認している。母語話者のアンケートによると、この場面において話し手は自分が謝罪したと認識しているが、¿verdad?を用いると、話し手の謝罪を認めるよう強いるニュアンスとなり、不自然であるという。しかし、¿no?を用いると聞き手にすでに謝罪したという事実を認めてもらいたいという含意が現れるという。これは、¿no?によって話し手だけでは判断できないものとして情報を提示し、謝罪したことを否定するかどうかを聞き手に問うためであると考えられる。

次の例は、間接命令の例である。

(52) [Ricardo se sienta a la mesa y Lorenzo irá colocando el pan, los platos y los cubiertos.]

Lorenzo: ¿Sabes, mamá? Paquito ha dicho que nunca les dejo venir a jugar a casa...

[Elena vuelve la mirada hacia Ricardo. Se lo piensan, los dos.]

Elena: ¿Qué hacemos? Si la gente empieza a mumurar, mal asunto...
Ricardo: Que suban, ¿no? Les das de merendar y ya está.
Elena: Sí, algo así habrá que hacer.

(*Los girasoles ciegos*: 42)

(52)は内戦後、家族にかくまわれていた自由主義者 Ricardo と妻の Elena が、息子 Lorenzo の友達が家に遊びに来たいと言っていることについて話し合う場面である。Ortega（1985: 245）は命令に¿no?を伴うと、聞き手に答えの自由を与えると指摘していた。この例は間接命令であり、典型的な命令の例と比べると、容認度が高くなる可能性がある。しかし、この例で確信度の低さを表す¿no?を伴うことによって、Ortega（1985）の言うように、Que suban.という発話に対する意見を聞き手に求めていると考えられる。さらに、聞き手に判断を求めることによって、命令の厳しさを和らげているとも考えられるだろう。母語話者に対するアンケートによると、ここでは¿no?によって「聞き手と一緒に決めている印象を受ける」という。これは Ortega（1985）の聞き手に答えの自由を与えるという指摘とも一致している。一方、¿verdad?に置きかえることができるか訊ねたところ、全員一致で不自然という回答であった。これも、Ortega（1985: 247）の、¿verdad?は命令文とは共起しないという指摘と一致している。また、表 4 を見ると本論文で用いたデータでは行為指示に¿no?を伴う例が 7 例観察されている。そのうち 2 例[33]が命令、5 例が勧誘であり、本論文のデータでは行為指示に伴う¿no?の有益な例が得られなかった。行為指示と共起する¿verdad?、¿no?については次節で詳しく言及する。

このように、¿no?は発話内容について話し手だけでは判断できない、あるいはそのようにみなして情報を提示しようとする場合に、確信度の低さを示して聞き手に情報を確認するものである。

3.4.3. 呼びかけ語を伴う¿verdad?、¿no?

¿verdad?と¿no?の差は、呼びかけ語を伴う場合にも現れる。本論文のデータでは、文間の¿verdad?の 8 例中全ての用例に、¿no?は 9 例中 4 例が呼びかけ語を伴っていた。これらの発話状況を比べたところ、¿verdad?は全ての例が、発話の聞き手とは別の人物に呼びかけ、問いかけるものであり、¿no?は 4 例中 3 例が聞き手と話していて、直接聞き手に問いかける例であった。

まずは¿verdad?の例を見てみよう。

---

[33] 命令のもう 1 例は Ossea, estate quieto, mmmm, ¿no?というものであり、母語話者によると一部の人達（gente pija）が使う特殊な話し方なので、考察から除いた。

(53) Abuela Irene: (A Paula). Aquí veníamos muchas veces de merienda, ¿verdad, Raimunda?
Raimunda: ¡Sí...!

(*Volver*: 168)

(54) Toni: (A Carmen.) Yo soy fun vuestro a muerte. No me pierdo un concierto, ¿verdad, Sara?

(*El Calentito*: 124)

(53)、(54)の話し手は発話内容を Paula、Carmen に伝達し、それぞれ傍らの Raimunda、Sara に確認している。話し手は Raimunda、Sara が同意見であることを知っているために¿verdad?を用いていると考えられる。特に(54)では、話し手はコンサートに来なかったことはないと主張しており、Carmen にファンであることを¿verdad?を用いて Sara に同意を求めることによって強調して伝達していると解釈できるだろう。

これに対して、次の例は聞き手への発話に¿no?を用いている。

(55) Rafi: No te estarás volviendo maricón, ¿no, Miguelito?
Miguelito: No. No te preocupes. Tú nunca te preocupes por mí, Rafi.

(*El camino de los ingleses*: 28)

(55)の発話場面は話し手と聞き手のみなので、話し手の発話は聞き手に向けられていることがわかる。話し手は聞き手に「お前はバカになっていないだろう」という発話に、確信度の低さを表す¿no?を用いて「それともなっているのか？」と問い、聞き手に悪態をついていると考えられる。先の¿verdad?では確認をする相手が同意見であると前提して確認を求めるのに対して、¿no?の場合は聞き手に直接尋ねる例が多かった。もちろんこの現象を一般化するには本論文のデータだけでは不十分であるが、呼びかけ語を伴う¿verdad?の８例全てが発話の聞き手とは別の人物に確認していることから、第３者に発話への肯定を求めることによって、聞き手への発話をより強めようとする用法があると指摘できるのではないだろうか。

3.4.4. 行為指示に伴う¿verdad?、¿no?

ではなぜ行為指示には¿verdad?が共起しないのに対して、¿no?は共起して聞き手の意見を求める含意を持つことができるのだろうか。この点に関して本論文のデータで

は有益なデータが得られなかったので、次の肯定命令、否定命令の例にそれぞれ¿verdad?、¿no?を付加し、スペイン語母語話者に提示して意見を求めた。

(56) * a. Levántate, ¿verdad?
b. Levéntate, ¿no?
(57) * a. No te levantes, ¿verdad?
? b. No te levantes, ¿no?

上記の 4 例中、肯定命令に¿no?を伴う(56)b の例のみが自然であり、¿verdad?を伴う(56)a 及び(57)a の例は共に不自然であるという。また否定命令に¿no?を伴う(57)b は基本的には不自然であるが、起きてはいけないとわかっているはずの聞き手への非難として発話する場合には共起可能であり、¡Que no te levantes, tío!というような含意を持つという回答が得られた。つまり、肯定命令であっても否定命令であっても¿verdad?とは共起できないが、¿no?には特殊な場合も含めて共起できるということである。しかし、この理由は¿verdad?や¿no?の話し手の発話内容に対する確信の度合いを示すという性質からは説明できない。亀井 他（1996: 1334）は、命令文について「現存していない行為や状態を（聞き手に）実現させようとする意図をもって発せられる文」と規定しており、これは話し手の一方的な表現であると解釈できる。話し手からの一方的な発話である命令と、それに対する確信度の表明は、性質上合わないためである。従って、¿verdad?と¿no?を確信の度合い以外の角度からも考察する必要があるだろう。

では、どのような性質が考えられるだろうか。改めてこれらの表現の語彙的意味に着目すると、verdad は「真実」を意味するので発話内容が真であることを前提に問い、否定の意味を持つ no は聞き手が発話内容を否定する余地を残して問うのではないだろうか。verdad の反意語は必ずしも no ではないので、この 2 つが真を前提にして問うか、あるいは否定する余地を残して問うかという異なる性質を持っていると考えることは可能であろう。そのように考えると、命令内容が真であるかどうかを聞き手に問うことはできないので、¿verdad?は肯定、否定命令共に共起できないと説明できるのではないだろうか。一方、¿no?は「そうじゃないのか？」という否定する余地を残して問うので、命令と共起できると考えられる。母語話者によると、(56)b は¿no?を伴うことによって「起きろよ」というような強調の含意を持つという。これは否定を問う¿no?が「起きろ、そうじゃないのか？（起きなきゃいけないでしょう？）」という情報を付加することによると考えられる。また、聞き手が否定する余地を残して問うので、音調などによっては Ortega（1985: 245）の言うように命令を和らげるや

などの副次的な機能を果たしたり、聞き手の意見を求めるように感じられると考えることができるだろう。(57)b も同じように考えられるが、「起きるな」という命令はすでに否定であり、それをさらに否定するのは聞き手にとっても分かりにくく、否定の繰り返しになるためにあまり用いられないのではないだろうか。実際にある母語話者は(57)b について、起きてはいけないとわかっている聞き手が起き上がろうとする場面で使用可能であり、¿no?を伴うことによって¡Que no te levantes, tío!というような非難を表すと回答している。。この含意が Que no te levantes という形式をとっていることからも、母語話者は否定命令を否定すると、命令内容をもう 1 度言うような、強調的な繰り返しと受け取っていることがわかる。この場合、否定の否定が、肯定を意味するわけではないということだろう。(56)b と(57)b がどちらも命令内容を強調することから、これらの例では命令に聞き手が否定する余地を与える¿no?を用いることによって、命令内容を遂行するよう促すことができると考えられる。従って、¿verdad?は発話内容の真を前提にするもの、¿no?は聞き手が発話内容を否定する余地を残すものであると言える。

そうすると、前節までに考察してきた¿verdad?と¿no?の確信度の差は、実は副次的な違いであり、その本質は真であるかを問うか、あるいは否定するかどうかを問うかという差であると考えることができるのではないだろうか。真実を意味する verdad を用い、それを聞き手に問うので確信度が高いと感じられ、no を用いて聞き手が発話を否定する余地を残して問うので、発話内容に対して自信がないように見えると考えられるだろう。¿verdad?と¿no?が平叙文と共起する時は確信度に関わり、命令に伴う時には真偽や否定かどうかを問うということは考えにくく、真であるか、否定するかを問う性質が確信度の高低というニュアンスを出していると考えるのが自然だろう。¿verdad?と¿no?は、表面的には確信度の度合いや命令との共起の差であるが、¿verdad?は発話内容が真であることを前提に問い、¿no?は聞き手が発話内容を否定する余地を残して問う、という成り立ちそのものが異なるものと言えるだろう。

このように考えると、¿no?が発話を和らげ、交感的言語使用としての用法を持つのも、聞き手に発話を否定する余地を示す性質によると解釈できる。聞き手が否定する余地があることを示して、聞き手を意識していることや聞き手とのつながりを表明することができるのである。次の発話は母語話者に対するアンケートで、全員が「付加してもあまり意味は変わらない」と回答した文中の例である。

(58) Borjamari: No sé, *ossea* [*sic*], a lo mejor tengo esa época hiperidealizada, ¿sabes? Pero es que pienso, ¿no?, que a lo mejor el que se casó con Piedad podría haber sido yo.

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 38)

¿no?の先行発話 Pero es que pienso は、話し手が確信度を示すほどの情報量を持っていない。この場合には、聞き手が否定するかを確認しようとする¿no?によって、聞き手の反応を伺い、受けを確認しながら発話していると考えられる。また母語話者によると、「¿no?を¿verdad?に置きかえると不自然」という回答が多かった。これは¿verdad?が本来発話内容が真であることを問うものであり、確信度の高さを表明するので、聞き手の反応を伺うには適さないためと考えられる。これに対して¿no?は、聞き手が否定する余地を残し、確信度の低さを表す性質によって聞き手とのつながりを示すことができると考えられる。

3.5. ¿verdad?、¿no?と「ね」

3.5.1. 聞き手に返答を求めない¿verdad?と¿no?

ここまで見てきたように¿verdad?は発話内容が真であることを前提として聞き手に問う場合に用いられる。一方、¿no?の場合は否定される余地を残して聞き手に確認するものである。

しかし、¿verdad?と¿no?は必ずしも聞き手に確認をするものではない。Ortega（1985: 243）は、疑問文は聞き手に回答の義務を負わせると指摘していたが、¿no?の回答義務については言及していなかった。本論文のデータでは、¿verdad?を伴う 84 例中、聞き手の返答を求めずに話し手が発話を続ける例が 41 例、¿no?の場合には 180 例中 108 例観察されている。¿verdad?と¿no?はどちらも疑問形式であるのに、使用例の約半数が聞き手の返答を求めていないというのは疑問文としては特異である。従って、Ortega（1985: 243）が指摘するように、¿verdad?及び¿no?は聞き手への質問ではなく、話し手の主張であり、話し手が発話内容に対してどのような評価をしているかを表明するものであると考えられるだろう。そのため、聞き手の返答がなくても使用されるのである。しかし、話し手の発話内容への態度の表明に、聞き手が返答することもある。それが聞き手への確認として捉えられるのであろう。つまり、話し手は聞き手の返答を期待しているのではなく、あくまで自分が発話内容に対してどの程度の確信をもっているのかを示す手段として¿verdad?や¿no?を用いるのである。

なお、¿verdad?は全 84 例中、43 例は聞き手が何らかの返答をしている例であった。この 43 例のうち、約 70%にあたる 30 例は話し手の発話に同意するものであり、残りの 30%にあたる 13 例は話し手の発話内容を否定したり、反論するものであった。また、¿no?は全 180 例中、72 例に聞き手の返答が見られた。この 72 例のうち、約 42%にあたる 30 例は話し手の発話に同意するものであり、残りの約 58%にあたる 42

例は反論などであった。このことからも、¿verdad?は話し手が真であることを前提としてる時に用いられ、¿no?の場合は反論する余地を残して用いられることがわかる。しかし、聞き手の答えを期待しているのではなく、あくまで話し手が聞き手に否定される可能性を表明しているということであろう。従って、これらは聞き手の回答を要求するものではなく、¿verdad?は発話内容が真であるかを問う話し手の姿勢を表すもの、¿no?は聞き手が発話内容を否定するか余地を残して問う姿勢を表すものと結論できよう。

3.5.2. ¿verdad?、¿no?と「ね」

一方、日本語の「ね」は、聞き手の認識に頼って、または聞き手の前で話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる（陳 1987: 97）。¿verdad?と¿no?の場合は、聞き手の発話への情報量を問題にせず、発話内容への確信度によって話し手がどちらを用いるか判断する。そのため、これらは異なるプロセスを経ていると言えるだろう。しかし、結果的に聞き手に確認する（スペイン語の場合は、聞き手が答える場合にそう解釈されるのだが）という点において共通しているので、これまでにも対応する表現として扱われてきたのだと考えられる。これはまさに、日本語は常に聞き手を意識するが、スペイン語は話し手の視点を保持する、という太田（1992）の談話場における特徴と同様であると言えるだろう。

では、具体例を通して¿verdad?、¿no?と「ね」を対照してみよう。まず、「ね」の「確認（大曽 1986: 91）」あるいは「念おし（陳 1987: 97）」の用法である。これは話し手が、自分の認識よりも聞き手の認識の方が確かだと考えることについて、自分の認識を聞き手の認識とおなじ水準に高めようとする時に使われる場合である（陳 1987: 97）。

(12)’ 粟津組の奥さんですね。はじめておめにかかります。

（陳 1987: 97）

スペイン語における聞き手への確認の例として、(49)が挙げられる。

(49)’ Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿no?

[José asiente, desconcentrado.]

（*Los lunes al sol*: 51）

(12)と(49)は、どちらも聞き手自身の、あるいは聞き手の妻に関わることを確認し

ている。聞き手の認識（知識）に頼ろうとする「ね」と、話し手の確信度の低さを表す¿no?は、どちらも確認の機能を持つ。(49)の例が¿no?を伴わないと、妻が夜勤であるのを知らない聞き手に話し手が教えているような、この場面には相応しくない発話となるのは、神尾（1990: 64）が挙げている「君の奥さん病気だそうだね。」という例で、「ね」を省いた場合の不自然さとの共通性が窺える。また、陳（1987: 97- 98）は(12)について「『か』で置きかえた場合は話し手の認識の度合いが表現されていない点で「ね」と異なる」と述べており、これは(45)の疑問文と¿no?を伴った場合と比較した場合、疑問では話し手は質問の答えを全く知らないのに対して、¿no?が付加されると話し手の確信の度合いが示されるという Ortega（1985: 243）の指摘と共通している。これらは共に確認の機能を果たすが、全く異なるプロセスを経ている。(12)では聞き手の方が情報量が多い、あるいは聞き手の縄張りに属する情報とみなして「ね」を用いているのに対して、(49)では話し手が聞き手の妻が夜勤かどうかについての確信度が低いために、否定する余地を残す¿no?を用いているのである。あくまで日本語では聞き手を意識して「ね」を用いるのに対して、スペイン語場合は話し手の発話への確信度が先行するのである。

また、「ね」には聞き手との共有を表す用法もある。

(13)' いい夜だね。

（陳 1987: 98）

「ね」は、(13)のように話し手と聞き手が一緒にいる場面の事柄について、聞き手も同じように認識しているだろうと話し手が考えて発言する場合にも用いられる。これは、話し手は自分の発言に対する聞き手の同意が得られることを期待していると言いかえることができるだろう。この「ね」は、伊豆原（1993: 106）の言う、「聞き手と情報の共有化を図るもの」であり、「ね」の特徴的な用法であろう。では、スペイン語では¿verdad?や¿no?を用いて共有を表すことができるのだろうか。母語話者に、話し手と聞き手が一緒に歩いている場面における次の 2 つの発話を提示した。

(59) Hoy hace buen tiempo, ¿verdad?

(60) Hoy hace buen tiempo, ¿no?

Hoy hace buen tiempo.という発話に¿verdad?を伴うと、話し手は聞き手が同じように考えていると前提して確認しているという。これに対して、¿no?の場合は聞き手に否定される余地を残すので、「私はそう思うけど、君はどう思う？」というような

含意を持ち、聞き手への確認の要求が現れるという。これは、¿verdad?が真を前提に問うものであり、¿no?が否定する余地を表すという差がもたらすニュアンスの違いと言うことができるだろう。日本語の場合「いい夜だね」の「ね」は、疑問形式ではない。一方、スペイン語の場合は上昇音調である疑問形式¿verdad?を用いて、聞き手に直接聞こうとする態度を示すものであるが、これらの表現はどちらも聞き手が同意することを期待しているという点で一致している。従って、(13)のような聞き手との共有化を図る場合の「ね」には、¿verdad?が対応すると言えるだろう。

このように、スペイン語の¿verdad?と¿no?は、プロセスは異なるが、確認や共有を表す点において日本語の「ね」と対応する。Christl（1996: 129）の、話し手が聞き手を発話に巻き込もうとするという指摘は、発話内容を否定する余地を残して問う¿no?が、結果的に話し手の発話に聞き手を引き込み、聞き手との一体感を作り出そうとするためであると述べた。これは、「聞き手を同調者としての立場に置こうする（時枝 1961: 8）」という「ね」の記述と一致している。「ね」は¿no?とは異なって元々聞き手を意識していることを示すが、結果的にどちらも確認や共有を示す機能を果たすため、このような類似した規定がされているのだろう。

また、文中に現れる「ね」も¿no?との共通性が窺える。

(20)' 回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね（はい）洗剤を入れますとね（…）

（伊豆原 1993: 104）

(58)' Borjamari: No sé, *ossea*, a lo mejor tengo esa época hiperidealizada, ¿sabes? Pero es que pienso, ¿no?, que a lo mejor el que se casó con Piedad podría haber sido yo.

（*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 38）

「ね」の場合は、聞き手との共有を表すという機能によって、発話の途中で用いて聞き手の受けを確認する用法を持つ。¿no?は、発話内容を否定する余地を残すことを聞き手に示す性質によって、聞き手とのつながりを示し、聞き手の受けを確認すると考えられる。従って、間投詞の「ね」と¿no?も一致すると言えるだろう。

しかし、次のような場合には、¿verdad?、¿no?と「ね」は対応しない。

(61) 早くしてくださいね。

陳（1987: 100）は、「ね」がはたらきかけの文にも用いられると指摘している。(61)

の「ね」を「よ」に置きかえて「早くしてくださいよ」とすると、聞き手が急ぐことが聞き手にとって必要なことであると話し手が考え、その必要性を聞き手にも認識させる目的で発話をしていることになる。そのため、聞き手に教えてやろうという話し手の態度が表明され、少し厳しい印象を受ける。しかし「ね」の場合は、話し手が聞き手も自分が急ぐべきことを認識していると考えており、その上で話し手の発話に同意を得られることを期待して発言しているのだという（陳 1987: 100）。しかし、益岡（1991: 100）は「『ね』は話し手と聞き手の意向が一致するとの判断を表すため、話し手の一方的な情報伝達で、聞き手の意向に反して行為を要求する命令の性質とは合わない」と指摘している。実際に、(61)を直接的な命令の形式にすると、「ね」は合わない。

(62)　*早くしろね。

では、なぜ(61)は「ね」を伴うことができるのだろうか。この理由について、滝浦（2008: 136）は「早くして（ください）ね」という形式は、話し手の意思に聞き手の意思を沿わせることを意図する「依頼」なので、「ね」を伴うことができると説明している。これに対して、命令とは「話し手の意思を一方的に実現することを意図する言語行為である（滝浦 2008: 136）」ので、聞き手を意識する含意を持つ「ね」とは共起しないのだという。従って、日本語の場合も典型的な命令には、聞き手を重視する「ね」は現れないと言えるだろう。

他方、スペイン語の場合も¿verdad?は命令文とは現れない（Ortega 1985: 247）。その点において¿verdad?と「ね」は一致していると言えるが、¿verdad?が命令と共起しないのは、その性質が発話内容が真であることを前提に問うためであり、「ね」とは理由が異なっている。しかし、¿no?は命令と共起可能であり、聞き手に否定するかどうかを問うことによって、聞き手の意見を聞こうとする姿勢を表す。では、(61)のような依頼の場合はどうだろうか。¿verdad?と¿no?は真を前提に、あるいは否定する余地を残して問い、発話内容に対する話し手の確信度を表明するものであり、これらには聞き手の存在を意識するという要素はなく、日本語の「ね」とは根本的に異なるものである。従って、(61)のような動機で依頼に伴うことはないと考えられる。では、この点について検証してみよう。スペイン語における依頼形式の１つに、次のような疑問文がある。

(63)　¿Puedes venir mañana?
(64)　¿Quieres venir mañana?

これらの発話に¿verdad?、¿no?を付加して母語話者に提示し、意見を求めた。

(65)　¿Puedes venir mañana, verdad / no?
(66)　¿Quieres venir mañana, verdad / no?

(65)、(66)共に、話し手は聞き手が明日来れることを聞き、それを確認しているような印象を受け、¿verdad?の場合には来ることを前提にして、¿no?は来ることができない可能性も含めているという。つまり、¿verdad?や¿no?が依頼に伴っても(61)のように、聞き手の同意が得られることを期待していることを示すような働きはしないのである。このことから、¿verdad?や¿no?は、「ね」の確認や共有といった機能には対応するが、性質の差の相違によって、完全には一致しないと言えるだろう。

以上の¿verdad?、¿no?と「ね」の機能との対応を、表 5 にまとめる。その機能を持つものを○、持たないものを×で表示する。

表 5　¿verdad?、¿no?と「ね」の機能

				¿verdad?	¿no?	ね
性質				真を前提にして問う姿勢を見せる	否定する余地を残して問う姿勢を見せる	話し手と聞き手の認識（知識）の一致
機能	文頭	聞き手への注意喚起				○
	文中	注意喚起（受けの確認）			○	○
	文末	発話確認	確信度の表明	○ 高い	○ 低い	×
			情報の共有	×	×	○

¿verdad?は、発話内容がの真であることを前提に問う姿勢を見せる性質を持ち、話し手が発話内容への確信度が高い場合に用いられる。¿no?は、聞き手が発話内容を否定する余地を残して問う姿勢を見せる性質を持ち、確信度の低さを表明するものである。一方、「ね」は発話内容に関する聞き手の認識（知識）が、話し手と一致していること、あるいは話し手よりも上回っていることを示すものである。これらはプロセスは異なるが、聞き手に発話内容を確認しようとする点において一致している。

また、¿no?と「ね」は、副次的機能として発話緩和を持つ。¿no?は確信度の低さを

表し、聞き手に否定される余地があることを示すことによって、「ね」は聞き手と情報を共有していることを示すことによって発話を和らげることができる。しかし、¿verdad?は確信度の高さの表明であるので、この機能を果たさない。

だが、行為指示に伴う場合など一部の用法についてはこれらの機能は対応しない。これは、¿verdad?と¿no?が話し手の判断を表明するものであり、「ね」が聞き手と情報との関係を結びつけるという、本質が異なるものであることが原因である。

さらに、¿verdad?や¿no?は文頭では使用されないので、文頭の「ね（ぇ）」が持つ注意喚起の機能は持たない。しかし、文中の¿no?は聞き手の反応を伺おうとするので、受けの確認の機能を持つ文中の「ね」に対応する。なお、本論文のデータでは文間の例も観察されたが、この位置は文末の要素を持つと考えられるので、機能に含めていない[34]。

しかし、Brown & Levinson（1987: 55）が、言語使用は、社会的関係を構築するまさにそのものの一部であると主張しているように、同じ人間が使用する言語に、一方は表現を和らげて伝達する形式があり、もう一方にはないとは考えにくい。従って、命令や依頼など行為指示の行為に伴って、「ね」のような働きをする表現が、¿verdad?や¿no?以外にあると考えられる。表 4 を見ると、行為指示には呼びかけ語が多く伴っている。従って、呼びかけ語が行為指示における「人あたり」を調節する言語形式の 1 つであることが推測される。それについては第 5 章で詳述する。

[34] 詳しくは第 5 章を参照。

4. eh

4.1. 問題点

スペイン語の間投詞には、他の品詞から転用されたものと、元々語彙的意味を持たないものがある。その中で eh は語彙的意味を持たないものに分類されるが、ah や oh など話し手の感情表出を表すものとは異なり、文頭や文末に現れ、聞き手への呼びかけ、念押し、忠告、非難など、かなり直接的に聞き手に働きかける（山田 他 1995: 133）。しかし、具体的な意味を持たない eh がなぜこのような機能を果たすのだろうか。本論文では、情報伝達時における eh の機能を統一的に捉えてみたい。

4.2. 先行研究

4.2.1. 語用論的機能

eh に関する先行研究のほとんどは、語用論的機能に関するものである。これは語彙的意味を持たない eh が、動詞から転用した¿sabes?など他の間投詞と比べて、抽象度が極めて高いことによるだろう。先行研究には、Blas Arroyo（1995）、Fuentes y Alcaide Lara（1996）、 Briz（1998）、Ramírez（2003）、Montes（2005）、García（2005）、Edeso Natalías（2009）、Rodríguez Muñoz（2009）などがあり、これらのうちの多くが挙げている機能が 5 つある。まず発話強調[35]で、García（2005: 94）はこの場合、tenerlo en cuenta で言いかえられるという。第 2 は発話緩和である。これは先に述べた発話強調と正反対のものであり、Luna（1996: 110）によると、FTA[36]（face threatening acts 面子侵害行為）に伴う場合にこの機能を果たすことがあるという。第 3 に、聞き手の同意、理解を要求する機能で、¿de acuerdo?などに対応するという（García 2005: 95）。そして第 4 が、特別な意味を持たないはさみ語（フィラー）としての用法、最後に、怒りや驚き、喜びなど様々な感情（modalización）を表す機能である。しかし、この機能は発話状況に応じて音調が反映するものであると考えられ、本論文で eh がどのような感情を表すかを明確に定義するのは難しいだろう。

4.2.2. 共起する発話による機能

Ramírez（2003）は、共起する発話ごとに、eh がどのような機能を果たすかにつ

---

[35] Rodríguez Muñoz（2009: 93）は eh について intensificador と説明し、García（2005: 100）は「話し手への方向づけの強調」（orientación hacia el emisor）と述べている。

[36] Some acts intrinsically threaten face; those 'face threatening acts' will be referred to henceforth as FTAs.（Brown & Levinson 1978: 60）

いて言及している。まず命令の場合、聞き手に対して命令を実行するよう脅したり、忘れないよう求め、言明では存在しない反論に対して発話を再解釈するよう求めるという。また質問に伴う場合、すでに答えのわかっている質問であり、聞き手に質問を再解釈するよう求める機能を果たすのだという。さらに、感謝や祝福に伴うと発話を強調（otorga énfasis）し、挨拶と共起する場合には、発話行為を和らげ、話し手の強い決心を表すという。Blas Arroyo[37]（1993: 106）も別れの挨拶に伴う場合、別れが持つネガティブな要素を和らげる機能があるとし、¿eh?によって「申し訳ないが、行かなければならないので理解して欲しい」という話し手の態度を表すと述べている。この点に関しては後ほど詳しく考察するが、共起する発話との関連から eh の機能を見ると、聞き手に対して発話への確認（再解釈）や理解を求めると要約できるのではないだろうか。

4.2.3. 現れる位置による機能

eh は、文頭では注意喚起（Luna 1996: 110）、恥じらい（Montes 1999: 1311）の機能を果たす。しかし、恥じらいとしての eh は意味を持たない言いよどみであるのに対して、注意喚起の eh は話し手が意図的に用いるものである。従って、文頭では恥じらいの機能を持っていると言うことはできない。また文間では、恥じらい（Montes 1999: 1311）、交感的言語使用（función fática）（Briz 1998: 226）の機能を持ち、文末では、先行発話の強調（García 2005: 95、Montañez Mesas 2007: 14）や、聞き手に発話内容の確認を要求する（con valor de petición de comfirmación）（Montañez Mesas 2007: 10）。さらに、単独で用いられた場合は、¿cómo?や¿qué dices?の代わりとなると説明されている（Blas Arroyo 1995: 98）。しかし単独での用法について、Montañez Mesas（2007: 8）は、他の位置で現れる場合と異なり談話標識ではないと指摘している。本論文は、情報伝達時における eh がどのように聞き手に働きかけるかの解明を目的としているので、単独の例は扱わない。

このように eh は様々な説明がなされているが、もっと統一的に説明することはできないだろうか。次節では実例を通して eh の機能を考察していく。

4.3. 実例による考察

表 4 の結果を見ると、本論文のデータ中最も多く eh を伴っていたのは言明（主張、説明）で、次に行為指示（命令）、質問と続く。Blas Arroyo（1993）などが指摘する挨拶を含む感情表現にも例が見られた。また、文頭の例では肯定形 eh が現れたが、

[37] Blas Arroyo（1993）は、疑問形¿eh?で表記している。

文末ではほぼ疑問形¿eh?であった。これは、位置による機能と何らかの関わりがあるのだろうか。文頭、文末での機能を検討した後に考察しよう。

4.3.1. 文頭の用例

では、まずは文頭の例から見ていこう。eh は具体的意味を持たない音形であるが、文頭で用いると、注意喚起の機能を持つと指摘されている（Luna 1996: 110）。これは音のする方に聞き手を向かせるためであると考えられる。次の例は、トラック運転手 Manolo と妻 Catalina が口論をする場面の発話である。

(67) Manolo: En cuanto vuelva nos vamos a la playa: tendremos pagados dos plazos del camión.
Catalina: El camión, el camión, estoy harta de oír hablar del camión, no me vuelvas a nombrar el camión, por favor.
Manolo: <u>Eh</u>, oye, pero ¿qué te crees, que me voy de vacaciones?, ¿te crees que me gusta pasarme los días comiendo en bares de carretera, solo, como un perro, echando de menos a mis hijos?
(*Manolito Gafotas*: 80)

(67)では、仕事ばかりだと責める Catalina に Manolo が反論する。この例における eh について、母語話者は「注意喚起の機能を持つ」と回答している。eh は文頭に位置し、「仕事に行くのが休暇だとでも思っているのか」と問う後続発話へ、Luna（1996: 110）の指摘するように聞き手の注意を喚起していると考えられる。またこの例では、eh の後ろに oye が現れている。後に考察する動詞 oír の命令法 2 人称単数形 oye は間投詞的に用いられ、聞き手の注意を喚起する。同じ注意喚起の 2 つの表現によって、より強く聞き手に注意を促すよう要求しているのではないだろうか。

次の例も見てみよう。

(68) [Ahora Rafa coge el balón y tira un penalti. Chuta fuerte y por el centro. Fernando se agacha para que no le dé. Gol.]
Fernando: <u>Eh</u>, Rafa, qué pasa, tío, ten cuidado, coño, qué quieres, que me lesione antes del domingo o qué...
(*El penalti más largo del mundo*: 94)

(68)では、故意にボールをぶつけようとした Rafa に対して、Fernando が文句を言

う場面である。この場面でも、eh が文頭に現れて聞き手の注意喚起をしている。(67)には oye が現れていたが、ここでは eh の後に呼びかけ語を伴っている。次章で詳しく言及するが、情報伝達前の呼びかけ語は、聞き手の注意を後続発話へ喚起する機能を果たすので（野村 2012: 53）、(67)と同様に、eh と共に聞き手の注意を喚起すると考えられる。

本論文のデータでは、文頭の eh は 16 例観察されたが、そのうち 7 例が eh の後に oye や呼びかけ語、あるいは人称代名詞 tú を伴っていた。聞き手の注意喚起という同様の機能を果たす語が共起して現れていることから、eh、oye、文頭の呼びかけ語には何らかの機能の差があると推測される。oye は動詞の命令法から転用したものであり、文字通り「聞け」を意味する。また、呼びかけ語は聞き手の名前を呼ぶ行為であり、滝浦（2008: 16）は、「誰もが自分自身だと認識するものである個人名を呼ぶことで、話し手は聞き手の領域に声で触れることになる」と述べている。つまり聞き手の名前を呼ぶというのは、話し手と聞き手がそれを通して触れあえる関係であることを表明する行為なのである。これに対して、eh は語彙的意味を持たない音形である。それを聞き手に向けるという方法をとるので、他の表現と比べるとぞんざいさが現れるのではないだろうか。(67)、(68)のどちらの例でも、話し手は聞き手に対して腹を立てており、oye や文頭の呼びかけの前にぞんざいな印象を与える eh を用いていると考えられる。

4.3.2. 文末の用例

では、文末では eh はどのように機能するのだろうか。本節では、Ramírez（2003）による記述をもとに、文末の例を文の機能ごとに見ていこう。まずは行為指示に共起する場合である。次の例は、3 人組だった音楽グループの 1 人が急に抜けてしまい、レコード会社との打ち合わせを目前にどう行動するかを問う場面の発話である。

(69) Leo: Carmen, que ha llamado Ernesto, que a las doce nos ve en la discografía...
Fredy: ¿Vais a ir sin Chus? ¿Ahora sois un dúo?
Carmen: ¡No me estreséis!, ¿eh?

(*El Calentito*: 40)

これからどうするのかを問う Leo と Fredy に対する「プレッシャーをかけるな」という命令に、話し手 Carmen は¿eh?を用いる。母語話者に対するアンケートでは、この例における¿eh?は「命令内容を強調」したり、「聞き手に受け入れるよう求める」

という。¿eh?が命令と共起した場合、聞き手に対して命令を実行するよう脅したり、忘れないよう求める（Ramírez 2003）という規定を当てはめると、¿eh?を伴うことによって命令内容をもう１度確認するよう求めていると考えられるのではないだろうか。もう１例見てみよう。

(70) [Antonio asiente, algo más tranquilo.
Saca de su cartera las entradas y se las da al niño. A Juan se le agrandan los ojos.
Antonio le mira con ternura y le da un cachete en la cabeza.]
Juan: ¿Puedo enseñárselas a Ángel?
Antonio: Venga, pero no las pierdas, ¿eh?
(*Te doy mis ojos*: 54- 55)

(70)は、父親 Antonio からもらったチケットを友達に見せたいと言う息子 Juan に対して、Antonio が失くさないように告げる場面である。この例でも¿eh?によって、先行する命令内容を確認するよう要求していると考えられる。また、ある母語話者によると、¿eh?は発話を和らげる機能を持つという。命令は、亀井（1996: 1334）の記述から本来話し手からの一方的な伝達と解釈できるが、この例では聞き手に発話内容の確認を求める要素を置き、さらにこの場面の発話状況が(69)のような話し手の苛立ちを表すものでないこと、そして話し手と聞き手が親子であることから、¿eh?は命令の和らげと感じられるのだろう。

次に言明に含まれる主張の例である。

(71) Alicia: (Mosqueada.) ¿Qué pasa, me estás siguiendo?
Benigno: No, bueno sí...
[A Alicia le extraña que lo reconozca, tal vez por eso sigue hablando con él.]
Alicia: (Huraña.) ¿Qué quieres?
Benigno: (Se saca la carterita del bolsillo.) Creo que esto es tuyo... Se te ha debido caer...
[Le devuelve la cartera.]
Alicia: (Sonríe, como premio.) Gracias.
[Mira dentro de la cartera, sin darse cuenta de que es una descortesía.]
Benigno: (Naif.) ¿Está todo?
Alicia: (Un poco avergonzada.) Sí...
Benigno: Yo no he tocado nada, ¿eh?

Alicia: Gracias.

(*Hable con ella*: 97)

(71)は、Alicia の財布を拾った Benigno が、財布の中身を確認する Alicia に対して「(中身は) 何も触っていない」と主張する場面である。母語話者に対するアンケートによると、この例における¿eh?は「触っていないことを強調している」という。さらに「Benigno の発話は、『もし何かなくなっていても、自分は何も触っていない』という意味である」と言い、¿eh?を伴うことによって、財布の中身がなくなっていないか疑っている Alicia に対して、発話内容への確認を求めて自らの潔白を主張していると考えられる。これは Ramírez (2003) が説明していた、言明に伴う場合には存在しない反論に対して発話を再解釈するよう求めるという規定と一致するだろう。次は、同じく言明の一種である説明の例である。

(72) Locutora: Nos interesa mucho esa amiga que muere justo el día que desaparece tu madre, ¡cuéntame!
Agustina: ¿El qué?
Locutora: Esa amiga que murió en el incendio, hay rumores...
Agustina: Yo no creo en los rumores.
Locutora: Yo tampoco. Me refiero a lo que le dijiste a la redactora, algo muy importante de esa mujer y de su marido, que los relaciona con la desaparición de tu madre. ¿Es verdad o no, Agustina?
Agustina: (Cambia de actitud, tímida pero contundente.) De eso... prefiero no hablar. Sólo eran suposiciones mías.
Locutora: (Exasperada.) ¡Agustina, estás aquí para hablar de tu madre y de esa señora!, ¿eh?

(*Volver*: 152- 153)

(72)は、失踪した母親を探す Agustina がテレビ番組に出演し、母親に関する情報を話すよう Locutora に要求される場面である。Locutora は、同時期に失踪した母親の友人のことを話したがらない Agustina に対して、「あなたはその女性について話すためにここにいるのよ」と告げ、Agustina が何のために番組に出演しているかを理解させようとしている。さらにこの後にも母親の友人について話すよう促す場面があり、¿eh?を伴うことによって Agustina が今置かれている立場を述べる発話への再解釈を求めていると言えるだろう。

また、¿eh?が質問と共起するとすでに答えのわかっている質問であり、聞き手に質問を再解釈するよう求めるという（Ramírez 2003）。次の例は、尊厳死を求める Ramón の兄 José が、息子 Javi が Ramón に協力をしていることを批判する場面である。

(73) José: ¿Se puede saber qué hacías tú ahí? ¿Acaso sabes de qué están hablando y qué es lo que quieren?
Javi: ¿Y qué hago? ¿Me encierro en la habitación?
José: ¡¿Te das cuenta de lo que quieren?!
[José suelta a su hijo, da un paso atrás y se cruza de brazos.]
José: A ver, ¿qué pasa si ganan los juicios, eh? ¿Qué pasa? Que a tu tío le ponen una inyección y le matan, como a un perro.
(*Mar adentro*: 101)

(73)では、José が Javi に「裁判で Ramón が勝ったらどうなるか」と問う発話に¿eh?を用いている。この場面では¿eh?の後に聞き手 Javi の返答を求めず、José 自身が「（裁判に勝ったら）薬で殺されるんだぞ」と質問に対して答えている。つまり、José は自らの質問の内容の答えを分かっているが、あえて Javi に質問することによって発話の再解釈を求め、事の重大さを理解させようとしており、これは修辞疑問であると言うことができるだろう。母語話者に対するアンケートでも、「話し手は答えを分かっていて質問しており、聞き手が同じように考えることを望んでいる」という回答が見られた。ここでも Ramírez（2003）の説明が当てはまる。もう 1 例見てみよう。

(74) [Toni (que viene puesto hasta arriba de anfetas) está con Sara, Marta y Carmen en el almacén. Marta y Carmen le miran con cara de odio.]
Toni: (A Sara.) ¿Cómo no iba a venir, eh? Y más sabiendo que ahora eres una Siux... Qué fuerte, la Sarita encima de un escenario... (A Carmen) Yo soy fan vuestro a muerte. No me pierdo un conciento, ¿verdad, Sara?
(*El Calentito*: 124)

(74)は、音楽グループ Siux の新しいメンバーとなり、ステージに立っている Sara に、元恋人 Toni が¿Cómo no iba a venir, eh?と発話をする。Sara と Toni は喧嘩別れをしたので気まずい関係にあるが、Toni はもともと Siux のファンだったので、「自分がライブに来ないなんてあり得ない」という気持ちを質問形式で表している。この場合にも¿eh?を伴うことによって、話し手はあえて質問して発話への理解を聞き手に要

求していると考えられる。この用法は、eh が持つ確認の機能を質問内容へ向けることによって、質問が含む発話意図を聞き手に理解させようとする効果をもたらすと言えるだろう。

また、感謝、謝罪、挨拶など感情表現に分類される発話に¿eh?を伴うと、発話を強調したり話し手の強い意志を表すという（Ramírez 2003）。次の(75)は、財布を拾ってくれた聞き手に対する感謝の例、(76)は依頼していたベビーシッターを急遽キャンセルした話し手の謝罪の例である。

(75) [Llegan a la mitad de la calle, Alicia se detiene.]

Alicia: Bueno, ya hemos llegado. Gracias por la cartera, ¿eh?

[Le tiende la mano, para despedirse.]

(*Hable con ella*: 98)

(76) [...y adusta, abre la puerta. Una chica joven la sonríe.]

Canguro: Hola...

Angela: Hola. No.. no voy a necesitarte...

Canguro: Pues ya he dicho que no a otro sitio.

Angela: Ya... Espera... te pago y se acabó.(...)

[Angela se aproxima a la chica y la entrega un par de billetes.]

Angela: Perdona, ¿eh? Lo siento.

Canguro: Vale, gracias.

(*Solo mía*: 58)

どちらの例も¿eh?を伴うことによって、単なる感謝や謝罪ではなく、それを確認するよう求めているのだろう。Ramírez（2003）の「強調」という説明は、このような機能を意味すると考えられる。一方、母語話者からは「(75)、(76)の例で¿eh?を伴わなければぶっきらぼうに聞こえる」という回答が得られた。これらの行為は通常 FFA[38]（face flattering acts　面子追従行為）に分類されるものであり、それを言いっぱなしで終わるのではなく、¿eh?を伴って確認を要求するので、聞き手により働きかけようとしていると感じられるのだろう。

次に、挨拶の例である。

[38] Es, pues, indispensable prever un lugar en el modelo teórico para esos actos que, de algunas maneras, son la pendiente positiva de los FTAs, actos valorizadores de la imagen del otro, que proponemos llamar actos, “agradadores” de imagen (en adelante FFAs, por el inglés face flattering acts). (Kerbrat-Orecchioni 2004: 43)

(77) Marta:¿Te vas?
Tomás: Sí. Tengo que ir un momento al puerto.
Marta: Ah, bien... hasta luego.
Tomás: Hasta luego. Adiós, ¿eh?

(*Nubes de verano*: 42)

Blas Arroyo（1993: 106）は、挨拶に伴う¿eh?について、「別れが持つネガティブな要素を和らげる」とし、¿eh?を伴うことによって「申し訳ないけど、行かなければならないので理解して欲しい」という話し手の態度を表すと述べている。しかし、(77)では話し手 Tomás が挨拶をする前に聞き手 Marta も別れの挨拶をしており、Blas Arroyo（1993）の言うような含みは感じられない。このような場合の¿eh?は、話し手が行かなければならない状況への理解ではなく、挨拶という行為そのものへの確認を求めるのではないだろうか。挨拶とは、Goffman（1982: 41）によると本来人間関係の強化と修復を図る行為であり、別れの挨拶は、この出会いが彼らの間の関係に及ぼした影響を総括し、参加者が次回に会うときに期待するものが何かを示すものであると説明している[39]。この規定に従うと、挨拶の確認を求める¿eh?を伴うことによって、それまでの聞き手とのやりとりを思い起こし、話し手と聞き手が協調関係にあると示そうとすることになるので、結果的に発話が丁寧に聞こえるのではないだろうか。つまり¿eh?の使用によって、聞き手に人間関係の強化である挨拶への確認を求めているということである。この場合にも、母語話者は「何も付加しない場合よりやわらかく感じる」と回答しており、言いっぱなしにするのではなく、確認を求める¿eh?を伴うことによって、より聞き手に働きかけるように感じられるのだろう。

では、なぜ具体的な意味を持たないはずの eh が先行発話の確認や再解釈を求める機能を果たすのだろうか。これは第 1 に eh が文末という位置に現れていること、第 2 に語彙的意味を持たない音形であること、そして第 3 に上昇音調であることによると推測される。

前章で考察した¿verdad?と¿no?はどちらも基本的に文末で用いられるものである。まず第 1 の点に関しては、これらは先行発話内容に対して、話し手が聞き手に確認しようとする姿勢を見せたり、先行発話内容に対する確信度を表明するので、前に情報が置かれる必要があるためである。このことから、「文末に現れる要素は先行発話に向かうもの」と仮定すると、文末の eh も同様に先行発話に関わるものと考えられる。

また第 2 の点に関しては、eh は語彙的意味を持たないので、文頭で用いられた場合

[39] p.129 参照。

には具体的な意味を持たない音形を聞き手に向けるという方法で注意喚起する。しかし、文末に置かれるとその音は先行発話に向かい、結果的に先行発話に注意喚起をすることになる。

さらに第 3 の点に関して、森山（1989b: 176）によると、上昇音調は疑問文の性質を持つ。疑問文は「文形式としてのレベルにおいて、すでに聞き手を強く要求する文のタイプになっていると言える。つまり、文形式から特徴づけられる意味として聞き手への反応伺いという意味が本来的に担うものである」という（森山 1989b: 186）。これは日本語に関する記述であるが、疑問文が聞き手への反応伺いという機能を持つという指摘は、スペイン語にも当てはめることができるだろう。

これらの点を踏まえて、文末で用いられる eh が全て疑問形式であることを考えると、¿eh?は聞き手に対して先行発話に注意喚起し聞き手の反応を伺うものとして機能すると解釈できる。そしてその性質によって発話内容を確認したり、再解釈するよう求めるのであろう。しかし、語彙的意味を持たないために、それが向けられる発話内容や発話状況次第でどのようにも機能する。これが、発話強調と同時に発話緩和という機能が指摘されている理由であると考えられる。従って、先行研究で挙げられていた発話強調、発話緩和という機能は、¿eh?が確認や理解を求めることによる副次的な機能であると言えるだろう。

このように、文末の¿verdad?、¿no?、¿eh?は、話し手が先行発話にどの程度確信を持っているかを表したり、先行発話への確認を要求するものである。すなわち、これらは先行発話の内容に対する話し手の態度を表すものと言うことができるだろう。本論文では、これを日本語の終助詞が表す伝達態度と区別して、話し手の「発話態度」と呼び、文末に置かれる他の表現が¿verdad?や¿eh?などと同様に話し手の発話態度を表すのかについても考察したい。

4.3.3. 文中の用例

最後に文中の例を見てみよう。

(78) [Sentado en la grada, un periodista radiofónico de una emisora local: Rafa.]

Rafa: Si el partido acaba con este resultado, y tiene toda la pinta, eh, el Estrella se proclamaría campeón por primera vez en su historia, al Deportivo le basta el empate para llevarse la Liga, pero así son las cosas...

(*El penalti más largo del mundo*: 12)

(78)は、ラジオでサッカーの実況をしている Rafa の発話である。この例では疑問符

がついておらず、母語話者によると聞き手への理解要求などの機能を果たさず、この例で eh を省いても発話の意味は全く変わらないという。これは、明らかに考える時間稼ぎとして、または言いよどみとして用いられており、フィラーの用法と考えることができるだろう。

このように、¿eh?は発話内容に語彙的意味を持たない音形を向けることによって注意喚起し、さらに上昇音調をとって聞き手に発話への確認や理解を求める機能を果たす。具体的な意味を持たないので、文脈やどのような発話に伴うか、また音調によって発話強調としても発話緩和としても機能するのである。本章の冒頭で述べた山田他（1995: 133）による呼びかけ、念押し、忠告、非難といった eh の規定は全て、eh が語彙的意味を持たず、聞き手に向けられる文頭では呼びかけとして注意喚起の機能を果たし、発話内容に向けられる文末では、発話内容への確認や理解を求めるので、念押しや忠告、非難などの含みが現れると説明できるだろう。

また、文末では疑問形¿eh?が用いられるのに対して、文頭では肯定形 eh のみが観察された。文頭は情報伝達前でなので、発話内容に対して聞き手の反応を求めることはなく、疑問形が用いられないのだろう。Edeso Natalías（2009: 242）は、発話全体を強調する場合、eh は文末に現れると述べているが、これも文末にあるからこそ、発話内容を確認し、理解するよう聞き手に求めるのだと解釈できるだろう。後ほど考察する sabe(s)や entiendes などの疑問形¿sabe(s)?や¿entiendes?も聞き手に理解を要求するものである。しかし、語彙的意味を持たない¿eh?とは異なって、これらは動詞の語彙的意味が付加され、それぞれのプロセスから理解を求めるものと考えられる。そのため、¿eh?は無標の理解要求と言うことができるだろう。

4.4. eh と「よ」

さて、このように注意喚起によって発話内容が聞き手に向けられていることを表明するものに、日本語の「よ」がある。白川（1992: 38）によると、「よ」は「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」。この機能によって、情報伝達（大曽 1986: 93）や注意喚起（白川 1993: 8、伊豆原 2001: 41）といった機能が生まれる。eh も注意喚起の機能を持つことから、eh と「よ」の機能は対応するのではないだろうか。

例えば、行為指示に伴う eh は命令内容を確認するよう求めることによって、命令を実行するよう脅したり、忘れないよう求める。

(69)' Carmen: ¡No me estreséis!, ¿eh?

(*El Calentito*: 40)

(70)' Antonio: Venga, pero no las pierdas, ¿eh?

(*Te doy mis ojos*: 54- 55)

eh は語彙的意味を持たないので、発話状況や音調によっては(70)のように和らげに感じられることもある。

同様に、「よ」には命令に付加されると調子が弱くなるという指摘と（上野 1972: 72）、逆に調子を強くするという指摘がある（白川 1993: 8）。

(34)' 行けよ。（下線部筆者）

（上野 1972: 72）

(36)' A: おい、ちょっと、そこどけ。
[相手が、どかない]
A: どけよ。

（白川 1993: 8）

白川（1993: 8）は、「よ」が命令に伴う場合の本来的な機能は、命令を強めることにも弱めることにも中立的であり、「その発話が確実に聞き手の耳に入るよう聞き手の注意を喚起する」ものと記述している。これは、eh が語彙的意味を持たず、発話状況によって発話強調にも発話緩和にもなるのと同様である。

また、質問に伴う場合には聞き手に質問の再解釈を求める。

(73)' José: A ver, ¿qué pasa si ganan los juicios, eh? ¿Qué pasa? Que a tu tío le ponen una inyección y le matan, como a un perro.

(*Mar adentro*: 101)

(73)では、話し手は質問の答えを分かっているが、あえて聞き手に質問することによって事の重大さを理解させようとしている。「よ」の場合も、単に発話内容へ注意を向けるだけでなく、発話を文字通りの意味だけでなく、言外の意味を推論によって導き出し発話を解釈をしなければならない（中﨑 2005: 83）ことが指摘されている。

(37)' 房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ。

（中﨑 2005: 82）

中﨑（2005: 83）はこのような場合の「よ」は上昇音調を帯びると指摘しており、

音調によって聞き手の反応を伺おうとする点においても、文末の¿eh?と共通している。文末における「よ」は聞き手に向けられていることを表明して注意喚起をするもの、文末の¿eh?は先行発話に具体的意味を持たない音形を向けて注意喚起するという方向性が異なるものであるが、それが発話に及ぼす機能は同様と言えるだろう。

では文頭での用例も見てみよう。伊豆原（1993: 108）は、文頭に現れる「よ」について例を挙げている。

(30)' A: よ、元気。
B: うん、元気。

(伊豆原 1993: 108)

(30)の用法について、伊豆原（1993）は詳しく言及していないが、このような「よ」は、かなり親しい間柄のみで許されるものと思われ、改まった場面での使用は困難である。これは、「よ」が持つ聞き手めあて性が情報伝達前には呼びかけとして強く現れ、配慮なしに聞き手の心理的領域に踏み込むためではないだろうか。(30)の「よ」が「ね（ぇ）」であったとすれば、「よ」の場合よりも柔らかい印象を与えるだろう。伊豆原（1993: 104）も指摘しているように、「ね」が文頭で用いられた場合、話し手がこれから始めようとする話（あるいはこれまで進めてきた話）に聞き手を引き込もうとする機能があるためである。

では、文頭の eh の例を見てみよう。

(67)' Manolo: Eh, oye, pero ¿qué te crees, que me voy de vacaciones?, ¿te crees que me gusta pasarme los días comiendo en bares de carretera, solo, como un perro, echando de menos a mis hijos?

(*Manolito Gafotas*: 80)

eh は注意喚起として文頭で用いられた場合、具体的意味を持たない音形を聞き手に向けるので、呼びかけ語など他の表現と比べてぞんざいな印象を与える。この点においても、文頭における eh と「よ」の機能は非常に類似していると言えるだろう。

4.5. eh と「よ」、¿no?と「ね」

4.5.1. ¿no?と¿eh?[40]

eh の機能が明らかになったところで、前章で考察した¿no?の機能と比べてみることにする。¿no?は、聞き手が発話内容を否定する余地を残して問う姿勢を見せることによって、発話内容に対する話し手の確信度の低さを表すものである。

(49)' Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿no?

(*Los lunes al sol*: 51)

(49)は、話し手 Santa が聞き手 Lino の妻が夜勤であるかを問う場面である。母語話者に対するアンケートによると、ここで¿no?を伴わず、発話が Tu mujer está de noche ahora.であると、「聞き手の妻について話し手が断言することになり、不自然な発話になる」という。Rodríguez Muñoz（2009: 98）は、¿no?と¿eh?が確認表現（comprobativos）として機能する場合、物事の状態や意見を確認するといった特徴を共有すると指摘している。これは、¿no?を用いて、聞き手に否定される可能性を残している態度を示すことで発話がやわらかく聞こえること、また¿eh?は話し手の発話を確認して理解するよう求めることと考えられ、聞き手に確認を求める点においては同様であるが、プロセスが異なるものと言えるだろう。また García（2005: 100）は、¿no?を聞き手方向（orientación hacia el destinatario）、¿eh?を話し手方向（orientación hacia el emisor）だと述べている[41]。しかし、¿no?を用いても聞き手の返答を求めない場合があるので、必ずしも聞き手に向けられているとは言い難い。¿verdad?や¿no?は、発話内容に対する話し手の確信度を表明するものである。同様に、¿eh?も話し手ではなく、発話内容に向かうものであり、その点では同様である。しかし、聞き手に問う姿勢を見せようとする¿no?と話し手の発話を確認するよう求める¿eh?は、プロセスが異なるので、同じ発話内容に使われると確かにニュアンスを大きく変えるものである。先ほどの(49)を¿eh?に変えるとどのように異なるのかを見てみよう。

(79) Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿eh?

母語話者に対するアンケートでは、¿no?を¿eh?に変えると「聞き手ではなく話し手

---

[40] この節で挙げた先行研究では eh は疑問形¿eh?で書かれているので、本節ではこれに従う。

[41] Maynard（1993: 208）の、「ね」を person-interaction-oriented、「よ」を object-information-oriented と記述しているが、これは話し手が聞き手あるいは情報のどちらに向いているかということを意味していると考えられ、García（2005）の見解とは異なる。

が聞き手の妻が夜勤であることを知っており、聞き手に教えている、あるいは『知らないのか？』という含みを持つ」との回答が得られ、これは¿eh?を用いて発話内容への確認を求めると言えるだろう。同じ発話でも¿no?と¿eh?とは、情報伝達上全く異なる機能を持つことがわかる。また García（2005: 96）は、感謝や約束に伴う¿eh?は、¿no?に置きかえることができないと主張している。その理由は、感謝や約束は話し手に由来するものであり、聞き手に確認することはできないのだという（García 2005: 97[42]）。これは、感謝や約束（謝罪も含まれるだろう）は話し手の気持ちを表明するものなので、聞き手に否定かどうかを問う¿no?の性質とは合わないと解釈できるだろう。

4.5.2. ¿no?と「ね」、eh と「よ」

では、¿no?、eh と日本語の終助詞との対応はどうだろうか。一般に付加疑問と呼ばれる¿no?と eh は、和佐[43]（2005: 20-21）が「ね」、「よ」との対応を指摘している。しかし、「ね」は文頭で聞き手への注意喚起（引き込み）として用いることができるのに対して、¿no?は主に文末で現れ、先行発話の内容を聞き手に確認しようとする態度の表明という機能を果たす点で異なる。これに対して、「よ」と eh はどちらも文頭、文末の両方に現れることができるのである。

4.5.3. 感謝、謝罪に伴う eh、「ね」と「よ」

García（2005: 96）は、感謝などの行為では、eh の代わりに¿no?を用いることはできず、その理由は感謝や謝罪が「話し手に由来するものであるため」だと説明している。実際に(75)の Gracias por la cartera, ¿eh?という感謝の例、(76)の Perdona, ¿eh?という謝罪の例と同様の発話状況では¿eh?を¿no?に置きかえるのは不自然であると思われる。

(80) [Llegan a la mitad de la calle, Alicia se detiene.]

Alicia: Bueno, ya hemos llegado. ? Gracias por la cartera, ¿no?

(81) [...y adusta, abre la puerta. Una chica joven la sonríe.]

Canguro: Hola...

Angela: Hola. No.. no voy a necesitarte...

---

[42] La razón de esta imposibilidad pragmática es que la condición de sinceridad de los actos compromisorios y expresivos refleja el estado psicológico de intención del emisor hacia el contenido proposicional de dicho acto (Searle 1969). Por tanto, es pragmáticamente imposible preguntar o buscar la corroboración de esa intención en el destinatario (mediante el uso de la partícula *¿no?*) ya que ese deseo de expresar un agradecimiento o comprometerse a una acción futura (promesa, juramento) sólo puede emanar del emisor. (García 2005: 96-97)

[43] 和佐（2005: 20-21）は¿verdad?も含めている。

Canguro: Pues ya he dicho que no a otro sitio.
Angela: Ya... Espera... te pago y se acabó.(...)
[Angela se aproxima a la chica y la entrega un par de billetes.]
Angela: ? Perdona, ¿no? Lo siento.

そして、ここまで考察してきたように、eh は「よ」に対応する機能を持つ。では日本語の感情、謝罪表現の場合はどうだろうか。

(82) ありがと（う）ね / よ。
(83) すみませんね / *よ。
(84) ごめんね / よ。

日本語の場合、感謝、謝罪では、「よ」よりもむしろ「ね」の方が自然である。この差を両言語の感謝、謝罪表現の形式や語源から考えてみよう。RAE（2001: 1148-1149）によると、スペイン語の感謝表現 Gracias.は dar gracias と同様の意味を持つため、Gracias. は、Te doy gracias.を含意したものと考えることができる。そうだとすると動詞は 1 人称単数形なので、Gracias.は García（2005: 96）の主張する、「話し手に由来するもの」と言えるだろう。謝罪表現 Lo siento.も 1 人称単数形の動詞から、同様に話し手に由来すると考えられる。一方、同じ謝罪表現の Perdona.は命令である。田中（1988: 290）によると、命令法とは「話し手が自己の意志を聞き手によって実現する形を述べる法」であり、これも話し手由来であると言うことができるだろう。このことから、スペイン語では感謝や謝罪表現は、García（2005）の言うように発話内容を聞き手に確認しようとする¿no?とは共起できないことがわかる。しかし、日本語の場合は聞き手を強く意識する「ね」を伴うことができる[44]。語源と発話の形式を考えてみると、感謝表現「ありがとう」は「有り難い」、謝罪表現「すみません」は「済みませぬ」（谷 2009: 76, 79）である。Te doy gracias.などの動詞が 1 人称単数形で、話し手の感情表出であるのに対して、これらは形式上は感情表出ではなく話し手の判断や解釈を述べる「述べ立て[45]」であり、そもそもの形式がスペイン語と異なっている。述べ立てであれば、話し手の一方的言明の機能を持つ「よ」を伴っても問題はなさそうだが、(82)で「よ」が選択されるのは親しい間柄のみであり、(83)で「よ」を用いると謝罪表現としては不適切である。益岡（1991: 102）は、「ね」の内在的意

44 このような場合の終助詞について、調べた限りでは詳しい言及が見当たらない。
45 述べ立てとは、話し手の視覚や聴覚などを通して捉えられた世界やある事柄についての話し手の判断・解釈を述べ伝えるといった話し手の発話・伝達的態度である。（仁田 1989: 33）

味を「話し手の意向と聞き手の意向が調和するとの判断を表」すとしており、これを感謝、謝罪表現に当てはめると、話し手の感謝あるいは謝罪に対して、聞き手も同意してくれると期待していると考えることができるだろう。つまり、話し手の感謝などの表明に対して、聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達するのである。一方、「ごめん」は「ご免下され」という許しを請う命令である（谷 2009: 78）。命令には「よ」を伴うのが一般的であるが、この場合にはむしろ「ね」を用いる方が「よ」よりも丁寧に感じられる。これは、「ごめん」が「ご免下され」を短縮したものであることと、「ね」によって聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達することに重点を置いているためだろう。日本語は感謝や謝意を表明する場合、あくまで聞き手の立場を重視して伝達するのである。

4.5.4. eh が「ね」になり得る事例

ここまで考察してきたように、eh は「よ」に対応する機能を果たす。しかし、次のような例においては、eh は「ね」と訳し得る。

(85)　（話し手と聞き手が一緒に歩いている時の発話）
Hoy hace buen tiempo, ¿eh?

(85)のように、話し手と聞き手の両方が晴天であることを確認できる場合、¿eh?は「今日はいい天気だね」のような共有を表すニュアンスを持つ。「よ」と類似した機能の eh が「ね」のニュアンスを持つのは、eh が聞き手に対して発話への確認と理解を求めることによるのだろう。同じ発話でも、窓を開けた話し手がまだベッドにいる聞き手に晴天であると教える場合には、日本語では話し手と聞き手の認識（知識）が一致していないことになるので、「今日はいい天気だよ」に対応すると考えられる。しかし、話し手も聞き手も同じように確認できる場合、話し手の聞き手に対する理解の要求は、共有の要求になる。つまり、eh そのものはどのような状況でも先行発話の確認と理解を求めるものだが、日本語では聞き手の認識（知識）への配慮によって、「ね」に対応するということである。

このように、eh は文頭で用いられる場合、具体的意味を持たない音形を聞き手に向けるので、ぞんざいな印象を与える。また文末では、先行発話に注意喚起して聞き手の理解を求める機能を果たし、原則として文頭、文末のどちらの場合にも「よ」に対応する。また¿no?は発話内容を聞き手が否定するかどうか確認しようとするもの、「ね」は発話に聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達するものであり、文末では先行発話の内容を聞き手に確認する（しようとする）機能を果たす。「ね」は文頭で

も現れるのに対して、¿no?は文頭での使用は見られない。

Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4188）らが確認の補足表現（apéndices comprobativos）と呼んだ¿verdad?、¿no?、¿eh?は、文末で聞き手に先行発話を確認しようとしたり、聞き手に確認や理解を求めようとするものであるが、¿verdad?と¿no?が「ね」に対応し、eh が「よ」に対応する機能を持つことが明らかとなった。

以上の eh と「よ」の機能をまとめたものが表 6 である。

表 6　eh と「ね」、「よ」の機能のまとめ

<table>
<tr><td colspan="5"></td><td>eh</td><td>ね</td><td>よ</td></tr>
<tr><td colspan="5">性質</td><td>語彙的意味を持たない音形</td><td>話し手と聞き手の認識（知識）の一致</td><td>話し手と聞き手の認識（知識）の不一致</td></tr>
<tr><td rowspan="9">機能</td><td>文頭</td><td colspan="3">聞き手への注意喚起</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td>文中</td><td colspan="3">注意喚起
（受けの確認）</td><td>×</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td rowspan="7">文末</td><td colspan="3">確認要求</td><td>×</td><td>○</td><td>×</td></tr>
<tr><td rowspan="3">注意喚起</td><td rowspan="3">発話への注意喚起</td><td>確認要求</td><td>○</td><td>×</td><td>×</td></tr>
<tr><td>理解要求</td><td>○</td><td>×</td><td>×</td></tr>
<tr><td>含意表明</td><td>○</td><td>×</td><td>×</td></tr>
<tr><td rowspan="3">聞き手への注意喚起</td><td>確認要求</td><td>×</td><td>×</td><td>○</td></tr>
<tr><td>理解要求</td><td>×</td><td>×</td><td>○</td></tr>
<tr><td>含意表明</td><td>×</td><td>×</td><td>○</td></tr>
</table>

文頭の eh と「よ」は、どちらも聞き手の注意喚起としてはぞんざいさを感じさせるものである。白川（1992: 38）は、文末の「よ」の聞き手めあて性について指摘しているが、これは文頭に位置する場合にも当てはまると考えられ、それがぞんざいさを感じさせるのだろう。大倉（1994）は、「よ」の文頭での用法を特殊な例として扱っているが、本論文では文頭、文末の「ね」や「よ」の機能を統一的に捉える。

表 6 の結果を比べると、eh と「よ」は確認や理解を要求し、含意を示す機能が同じである。しかし、eh は文頭の場合は聞き手に、そして文末の場合は先行発話に具体的意味を持たない音形を向けることによって注意喚起するものであり、「よ」は直接聞き手に注意喚起するという方向性が異なるものであると言えるだろう。

では、野村（2012）において位置によって異なる機能を果たすと結論づけた呼びかけ語は、終助詞とどう対応するのだろうか。表 4 を見ると、感謝や謝罪、挨拶といった感情表現の行為には、eh の他に呼びかけ語を伴う例も多く見られた。感謝や謝罪は「ね」に対応する¿no?とは共起しないが、これらの行為が呼びかけ語と共起した場合、「ありがとうね」や「ごめんね」のような聞き手に配慮する表現になるのではないだろうか。次章では、呼びかけ語の位置による機能、位置と語彙との関連性を確認し、終助詞と対照する。

5. 呼びかけ語

5.1. 問題点

スペイン語の呼びかけ語（vocativo）は、従来ポライトネスの機能を果たすといわれてきた。例えば Edeso Natalías（2005: 128）は呼びかけ語について次のように述べている。

> El vocativo es un medio para dirigir al oyente siguiendo la máxima de cortesía. El vocativo puede utilizarse como refuerzo del enunciado o como atenuador. Ambos usos los consideramos como estrategias del hablante con las que se transmite cortesía positiva cuando refuerzan FFAs; o bien cortesía negativa cuando se utilizan como atenuadores, *softeners*, de FTAs.
>
> (Edeso Natalías 2005: 128)

すなわち、FFA に分類される感謝や賞賛、へつらいの態度を表明する際に呼びかけ語を伴うと、感謝などの態度がより強調され、FTA である命令や非難などに呼びかけ語を用いると、発話のニュアンスが和らぐというのである。しかし、呼びかけ語を含む文が、FFA、FTA のどちらにも分類できない場合がある。

次の例は返答、質問に伴う呼びかけ語である。

(86) Andrés: ¿Es por la guerra?
Rosa: Sí, <u>hijo</u>... Dicen que han ganado los militares.
(*La lengua de las mariposas*: 91)

(87) Lázaro: (Bromista.) ¿Qué pasa, <u>José</u>?
(*Los lunes al sol*: 55)

返答という行為そのものが、聞き手のフェイスを傷つけたり、聞き手に対するへつらいの態度を含んでいるとは考えにくい。また質問は、非難を含むような場合には聞き手のフェイスを侵害する可能性もあるが、(87)のように、単に聞き手の状況を問うような発話においては、聞き手のフェイスへの影響を考慮していない。つまりこういった行為は、ポライトネス理論における FFA や FTA には当てはまらない場合がある。ではこのような場合、呼びかけ語は一体どのような役割を果たすのだろうか。

5.2. 呼びかけ語の位置

5.2.1. 先行研究

Alonso Cortés（1999: 4037）は、スペイン語では聞き手の個人名や性質を表す普通名詞を用いて呼びかけることによってポライトネスの態度を示し、聞き手に対する愛情、尊敬、注目や連帯感を表明するという趣旨の説明をしている。また滝浦（2008: 16）は、「誰もが自分自身だと認識するものである個人名を呼ぶことで、話し手は聞き手の領域に声で触れることになる」と述べている。これは、個人のアイデンティティを代表する名前を呼ぶことにより、話し手が聞き手の領域に近づくことができるような親密な関係にあることを表すと考えられる。従って、聞き手の名前[46]を呼ぶのは、話し手が聞き手に声で触れられる関係であることを表明する行為だと言えるだろう。

また、呼びかけ語は文の様々な位置に現れる。Gili Gaya（1943; 1951: §162）は、呼びかけ語は文頭・文中・文末に現れ、それぞれの位置で文法的な差はないが、表現には違いが現れると説明している。文頭では発話に対する聞き手の注意を喚起する機能を果たし、文中及び文末ではイントネーションが反映するニュアンスによって、表現を強めたり和らげたりするという。また RAE（1973: 407）では、口語において最も頻繁に現れる呼びかけ語は文頭に位置すると述べている。しかし、Gili Gaya（1943）の説明が、ポライトネス理論における FFA や FTA に関わる機能であるとすれば、先述の通り返答や質問に伴う呼びかけ語は当てはまらないし、文中と文末で同様の機能を果たすのかについても疑問が残る。また、果たして文頭の呼びかけ語が最も一般的なのだろうか。

また、Leech（1999: 115）は、英語の呼びかけ語の位置は文の長さに強く影響される[47]と述べ、文末の呼びかけ語の前は、文頭の呼びかけ語よりも C-unit[48]が短いとしている。これはスペイン語の呼びかけ語にも当てはまるのだろうか。

---

[46] Alonso Cortés（1999: 4044）は、親族名称や地名形容詞、年齢を表す niño などの名詞、señor のような敬称は呼びかけ語として用いられる、と説明している。また、Beinhauer（1963: 36）は simpático などの形容詞、cariño や mi vida といった名詞が好感（simpatía）を表す呼びかけ語に分類している。滝浦（2008: 78）も同様に、親族名称や地位・職業名を呼びかけに含めているので、本論文では個人名だけでなく名詞や形容詞も呼びかけ語として扱っている。

[47] The choice among grammatical positions for vocatives is strongly influences by the length of the C-unit (...) Final vocatives, that is, tend to be associated with much shorter units than initial vocatives.

[48] Leech（1999: 108）は C-unit（communication unit）については次のように定義している。
"A C-unit is a unit of spoken English grammar which has been somewhat variously defined, but is essentially the spoken analogue of a written sentence. It is a unit with optimal syntactic independence, in that it is not part of a larger syntactic unit, except by means of coordination."
しかし、本論文で用いた資料は映画の脚本であり、発話は脚本に書かれた科白であることから、今回は Leech が述べている C-unit の定義を一部変更して語数を C-unit の代わりとして調査した。

5.2.2. 呼びかけ語の分布、前後の語数

表 3（p.32）を見ると、呼びかけを含む発話の約半数が文末の事例であることがわかる。RAE（1973）において最も頻繁に現れると言及されていた文頭の呼びかけは、全体の 20%程度であった。文間は、文頭と同様に 20%程度であり、文中はわずか 0.4%（12 例のみ）で、単独では全体の 14%に満たなかった。この結果から、少なくとも本論文で用いた資料に関する限り、最も頻繁に用いられるのは文末の呼びかけ 44%であると言える。

次に、Leech（1999）の指摘する、前後の語数と呼びかけ語の位置との関連性を調べるため、本論文の資料であるスペイン語映画から、5 作品分のデータを取り、呼びかけ語が文頭に位置する用例では、その後ろの文の語数を、文中及び文間の呼びかけ語の用例では、前と後ろの文の語数を、そして文末の呼びかけ語の場合は、その前の文の語数を数えた。その結果を表 7 に示す。

表 7　呼びかけ語前後の語数

位置		前後の語数															
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15～	合計
文頭		15	19	23	14	15	10	14	12	8	3	3	4	1	0	17	158
文中	前	1	2	0	0	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	9
	後	0	0	1	1	2	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	
文間	前	77	33	12	12	5	5	5	2	2	0	0	0	0	0	0	153
	後	16	17	12	19	23	14	8	9	5	3	4	2	5	3	13	
文末		104	90	78	45	31	25	21	9	8	1	5	1	0	0	3	421

文頭の呼びかけは、3 語および 2 語からなる文が続く例が多く、15 語以上の文も見られた。文間の呼びかけは、呼びかけ語の前の文は 1 語の文が圧倒的に多く、10 語以上からなる文は得られなかった。呼びかけ語の後ろでは、5 語からなる文が多く、文頭の呼びかけ同様に 15 語以上からなる文もあった。また、文末の呼びかけ語の前の文は 1 語が最も多く、10 語以上からなる文はあまり見られなかった。文中では用例数が少ないが、呼びかけ語の前の文は 5 語からなる文が、呼びかけ語の後ろでは 10 語からなる文が多かった。このことから、Leech（1999）による観察は、今回使用したスペイン語の例にも当てはまると言える。

では、この結果をどう解釈すればいいだろうか。Shiina（2007: 19）は英語の呼びかけ語について、文頭の呼びかけは聞き手の注意を喚起する機能を持つという指摘を

した上で、 Leech（1999）の記述について、聞き手が文頭ではなく文末で特定される場合には発話が短くなると説明している。つまり、聞き手が特定されていて、文末に呼びかけ語を伴う場合、呼びかけ語の前の発話は短くなり、文頭の呼びかけ語のように、話し手が聞き手を特定した後は発話が長くなる傾向がある、ということである。また、文末の呼びかけは聞き手が明らかである場合に用いられるとも述べている。聞き手を特定する必要がない場合に呼びかけ語を用いるのは、語用論的な理由によるのだという。これに対して、文頭の呼びかけは、話し手が何らかの情報を聞き手に与える前に、聞き手の注意を引くために用いられると説明している。

Shiina（2007）の主張を念頭において改めて表 7 を見ると、文頭で聞き手を特定した後では、文末の呼びかけと比べ、比較的長い語連鎖が続いていることがわかる。これに対して、聞き手がすでに明確である場合に用いられる文末の呼びかけは、前の語連鎖が短いものが圧倒的に多い。また、文間の呼びかけ語の前の語連鎖も短い場合が多く、呼びかけ語の後ろでは、文頭の呼びかけと同様に、比較的長い語連鎖が続いている。このことから、文間の呼びかけは、文頭および文末の呼びかけの両方の機能を持っていると予測される。

では、一体なぜ聞き手を特定した後に発話が長くなり、聞き手がすでに特定されている場合は短くなる傾向があるのか。また、文末の呼びかけが用いられる語用論的理由とは何なのだろうか。各位置の呼びかけ語の具体的な機能を考察し、その理由を検討していこう。

5.3. 呼びかけ語の機能[49]

5.3.1. 呼びかけ語を含む文の種類[50]

表 4 の結果から、呼びかけ語は様々な発話に伴っていることがわかる。前節で述べたように、呼びかけ語はポライトネス理論における FFA 及び FTA のどちらにも分類

---

[49] Quirk *et al.*（1985: 773）は、英語の呼びかけ語の働きを、呼びかけられる人の注意を引き、聞こえるところにいるほかの人々からその人だけを選ぶ call と、呼びかけられる人と話し手との関係や呼びかけられる人に対する話し手の態度を表す address の 2 種に大別している。また、小田（2010: 47）は英語の呼びかけ語を、call にあたる会話運営機能と address にあたる対人関係機能に分け、それぞれを下位分類している。野村（2012）では、これに従ってスペイン語の呼びかけ語でも同様に、聞き手の注意喚起や話題転換、発話権の交代の表明といった談話を管理する機能と、話し手の聞き手に対する発話態度を表す対聞き手働きかけ機能に分類していた。しかし、これらは必ずしもどちらかのみの機能を果たすわけではないと考えられるので、本論文では分類せずに扱う。

[50] なお、Alonso Cortés（1999: 4038）は呼びかけ語を伴う発話行為として次のような場合を挙げている。1) saludar, 2) dirigirse a una audiencia u oyente colectivo, 3) ordenar, 4) preguntar, 5) hacer una petición, 6) implorar, 7) expresar un estado mental, 8) escribir una carta, 9) excusarse, 10) agradecer, 11) despedirse, 12) advertir. 本論文では文の意味を基準しており、例えば ¿Cómo estás?という文は形式上質問であるが、「挨拶」に分類している。

することができない文に伴って用いられることがあるが、最も多く現れていたのは主張や説明などの言明の例であった。次に命令や勧誘などの行為指示、質問、あいさつや感謝などの感情表現がそれに続く。返答や、約束などの行為拘束では、ほぼ呼びかけ語の例のみであった。これは、他の間投詞が動詞の転用など、語彙的意味に依存するもの（eh は除く）であるのに対して、呼びかけ語の場合は、名詞や形容詞などの語彙的意味を持つもの（名詞や形容詞）だけでなく固有名詞も現れており、呼びかけるという行為そのものが聞き手を名前で呼び合えるほど近い関係にあることの表明という、他の表現とは異なる性質を持っていることによると考えられる。

では、各位置の機能を具体例を挙げて見ていこう。

5.3.2. 実例による考察

5.3.2.1. 文頭の呼びかけ

Gili Gaya（1943）が言うように、文頭の呼びかけは聞き手の注意を後続発話へ喚起する機能を持つ。また、Haverkate（1984: 68）も聞き手が話し手の発話を聞く状態にするために、聞き手の注意を喚起する方法として呼びかけ語を用いると述べている[51]。

(88) [Raimunda está tratando de cubrir el cuerpo del cadáver con la manta.]
Paula: Mamá, la tía Sole.

（*Volver*: 57）

(88)では、話し手 Paula が聞き手 Raimunda に電話をかわろうとする場面である。聞き手は死体を毛布で包んで隠そうとしており、話し手の方を見ていない。そのような状況で話し手が聞き手の名前を呼んで注意を喚起し、話し手の方に意識を向かせようとしているのである。この用法は訪問時などにも用いられる。

(89) [Se oye el timbre varias veces, y una voz que llega del otro lado de la puerta.]
Emilio: Raimunda, soy yo.
[Raimunda contesta desde dentro.]
Raimunda: Ya voy, Emilio.

（*Volver*: 53）

[51] In order to ensure that normal input conditions obtain, speakers may use vocatives as attention-getting devices.（Haverkate1984: 68）

(89)のように、家を訪問してドアを開けてもらうために、住人の名前を呼びかけて注意を喚起するのである。このような注意喚起の用法は文頭の呼びかけ語の基本的な機能であると言えるだろう。

また、聞き手が複数いる状況で聞き手を選び出して注意喚起をする機能も持つ。

(90) [Una mujer se asoma desde una ventana de uno de los edificios de viviendas que dan al parque.]

Madre de Yihad: (Gritando.) ¡Yihad, que se te pasan las salchichas!

[Y otra mujer sale a otra ventana.]

Madre de Susanita: ¡Susana, las salchichas se te enfrían!

[Otras mujers cada una desde una ventana, llaman a los niños.
La madre de Manolito, Catalina, se asoma a la ventana con el Inbécil en brazos.]

Catalina: ¡Las salchichas, Manolito, súbete al abuelo!

(*Manolito Gafotas*: 22)

(90)のように、複数の子どもたちが遊んでいる場面では、自分の子どもの名前を呼ぶことによって聞き手となる個人を特定し、後続発話を伝達することができる。これは、当然呼びかけ語が個人名であることによると考えられる。母語話者に対するアンケートでも、「この例では名詞や形容詞の語彙を用いるのは不自然」という回答が得られた。

さらに、文頭の呼びかけ語は話し手と聞き手が面と向かって話している場合に用いられることもある。

(91) [Raimunda cambia rápidamente de tema.]

Raimunda: Tía, ¿no se siente sola en una casa tan grande?

(*Volver*: 28)

(91)は、話し手 Raimunda と聞き手 Tía があいさつや他の話を終えた後の発話である。つまり、話し手と聞き手はすでに面と向かって話をしていた。このような場合には、文頭の呼びかけは話題を転換する機能を持ち、同時に話し手の発話権を取得する機能も果たしていると考えられる。

発話権を取得する機能としての呼びかけは、舞台演劇などで広く用いられていると

いう[52]。複数の登場人物が舞台に登場した際、発話の最初に呼びかけ語を用いることによって、聞き手の役名や登場人物同士の関係を観客に知らせることができ、話し手の発話が誰に対するものであるかを明示することができるためである。

また、次のような用法も見られた。

(92) Agustina: Raimunda, quiero pedirte un favor.

(*Volver*: 123)

これは聞き手 Raimunda が、話し手 Agustina を見舞いに病室を訪れ、挨拶を終えてすぐの発話である。母語話者によるアンケートでは、「話し手がためらっているように感じられる」という回答が得られた。出典の映像でこの場面を見ると、話し手が聞き手を呼びかけた後 2〜3 秒の間があり、話し手は少し改まった態度で聞き手に依頼をする。ここで少し間があいたのは、話し手が聞き手に依頼をしようとしていることを伝えるのをためらったからであろう。一般に、依頼は相手に何らかの負荷をかけることであり[53]、話し手にとって簡単には言いにくいことである。呼びかけをすることによって、聞き手と名前を呼び合える協調関係にあることを示し、母語話者の言うように「言いにくいが重大なことを切り出そうとしているので、そのつもりで聞いて欲しい」という話し手の態度を伝え、後続発話に聞き手を引き込んでいるのである。このような場面での文頭の呼びかけは、後に続く発話内容が聞き手に及び、聞き手に関係していることを表しているのであろう。

文頭の呼びかけの中心的な機能は聞き手を特定し、聞き手の注意を後続発話に喚起することであるが、そればかりでなく、(92)のように重要な情報を伝える前置きとしての機能も持ち合わせていると考えられる。

5.3.2.2. 文末の呼びかけ

次に、最も使用例が多かった文末の呼びかけについて考察していく。文末の呼びかけは、すでに聞き手が特定されている場合に用いられるというが、一体どのような機能を果たすのだろうか。

Shiina（2007: 27）は、文末の呼びかけは話し手が発話を終結する際、また、聞き手に発話権を譲渡する際に用いられると説明している。

(93) Sole: Pues eso, que no tiene la cabeza buena, Raimunda.

---

[52] Shiina（2007: 26）

[53] Ervin-tripp（1976）は、依頼表現を行為指示に分類している。

Raimunda: ¡No me gusta que hables así de la tía, Sole!

(*Volver*: 40)

(93)は、文末の呼びかけによって 2 人の発話者が発話権を相手に移している。この後別の人物が会話に参加するので、Raimunda の Sole に対する呼びかけで 2 人のやりとりは終わっている。このように、スペイン語においても文末の呼びかけは話し手の発話の終結を表し、発話権を聞き手に渡すことを示す機能を持つと考えられる。

5.3.2.2.1. 語用論的機能

では、Shiina（2007: 19）が述べていた、文末の呼びかけの語用論的な使用理由とは一体どのようなものなのだろうか。次の命令に伴う文末の呼びかけから考察してみよう。

(94) [La tía Paula inicia la levantada,
apoyándose en los brazos del sillón, con esfuerzo.]

Raimunda: No se levante, tía.

(*Volver*: 31)

(95) [Aporrean la puerta.]

Román: ¡Fernando...abre la puerta... he oído ruidos, sé que estás ahí...!¡Abre, coño!

[(...) Román sigue aporreando la puerta.]

Román: ¿Vas a abrir la puerta de una vez...? ¡Fernando, coño, abre que tengo que hablar contigo!

[(...) Román golpea la puerta con más fuerza.]

Román: ¡O abres o tiro la puerta abajo, tío!

Fernando: ¡Estoy a punto...! ¡Ya estoy...!

(*El penalti más largo del mundo*: 76)

(94)は、話し手 Raimunda の叔母に対する発話である。母語話者に対するアンケートでは、「呼びかけ語を伴うことによって、叔母への愛情が感じられる」という回答が得られた。Edeso Natalías（2005: 128）の主張からこの発話をみると、Raimunda は愛する叔母への命令に文末の呼びかけを用いて、命令の FTA 的威力を和らげて伝達していると考えられる。この発話の出典である *Volver* では、主人公 Raimunda が小さい頃にかわいがってもらった叔母に対して 16 回の発話を行うが、FTA である命令だけでなく、質問や感嘆を含む 10 回の発話に文末に tía という呼びかけ語を用いて

いる。つまり、あえて親族名称を呼びかけることによって、愛する叔母に対する自らの愛情を表しているのであろう。名前を呼ぶ行為が、話し手が聞き手の領域に声で触れる関係の表明であることからも、このような呼びかけ語が、聞き手との人間関係を良好に保とうとする話し手の態度の表れであることがわかる。

しかし、同じ命令に用いられる文末の呼びかけでも、(95)の場合はこれと異なる。(95)では、話し手 Román は、聞き手 Fernando と自分の恋人との浮気を疑い、玄関のドアを開けるよう感情的に要求している。そのため聞き手に対して配慮しよう、命令を和らげようといった態度を表そうとはしていないと考えられる[54]。この場合むしろ聞き手に対して上の立場から威圧的に発話をしているのだろう。滝浦（2008: 16）が主張する「聞き手の領域に声で触れる」ことには、先に述べた聞き手への協調的態度とは別に、聞き手の領域を侵害するかのように触れるという面もある。そのように聞き手に触れることによって、結果的に威圧的で厳しい発話に聞こえると言える。

次の質問の例も見てみよう。

(96)　Ramón: ¿Y ahora qué hacemos, Manuela?

(*Mar adentro*: 115)

(97)　Catalina: ¿Dónde está el cristal, Manolito?

(*Manolito Gafotas*: 26)

(96)は、裁判に負けた話し手 Ramón が義姉 Manuela にこれからどうするべきかを問う発話である。Ramón の世話をし、理解者である Manuela を呼びかけていることから Manuela に対する協調的態度が窺える。一方(97)は、友達と遊んでいて眼鏡のレンズを割ってしまった Manolito に母親の Catalina が質問をしている。Catalina は平素から Manolito に手を焼いているような場面があり、顔をしかめながらこの発話をしていたことから、(97)の文末の呼びかけは(95)ほど厳しくはないが、聞き手に対する愛情ではなく、眼鏡をこわした息子に対する否定的態度であり、話し手が聞き手を非難できる立場であることの表明であると考えられる。つまり、名前を呼ぶという行為は、それを通して話し手が聞き手と触れ合える関係であることを表すのだが、それが優しく触れる関係、つまり親密さを表す場合と、あるいは聞き手に配慮をせず領域に触れる厳しさを表す場合があり、二面性を持っていると言うことができるだろう。

また小田（2010: 47）は、呼びかけ語の位置による機能については言及していないが、英語の呼びかけ語における対人関係強化機能と対人関係弱化機能を挙げており、

[54] この例における tío は親族間で用いられるものではない。詳しくは p.96 参照。

それぞれ敬意表示機能・好意表示機能と権威強め機能・侮辱表示機能と下位分類している。つまり、呼びかけ語は、聞き手が話し手にとって敬意や好意を表す関係であるのか、あるいは上下関係を強調的に示そうとしているのかなどの社会的な人間関係を明確化し、話し手が聞き手をどのような立場に置いて情報を伝達しようとしているか、という発話態度を表明するものと言えるだろう。まず、呼びかけ語の使用によって、話し手が聞き手の領域に踏み込むことを表明する。しかし、その呼びかけ語によって話し手が発話を威圧的に伝達するのか、あるいはポジティブ・ポライトネス[55]として親しみを表すのかは、発話状況や話し手と聞き手の人間関係、またイントネーションによって異なる。Gili Gaya（1943）の表現を強めたり和らげたりするという説明はこういった表現上のニュアンスの差を指しているのではないだろうか。

このように考えると、他の文の種類に伴う呼びかけ語の機能も明らかである。

(86)' Andrés: ¿Es por la guerra?
Rosa: Sí, hijo... Dicen que han ganado los militares.
(*La lengua de las mariposas*: 91)

返答は本来 FFA にも FTA にも分類されない。しかし、(86)のように呼びかけ語を用いることよって、話し手はどのように聞き手の領域に触れようとするかを表し、聞き手との関係を明確化することができる。(86)の場合には、「戦争なのか」と問う息子への親密さを表明していると考えられる。文の種類が FFA か FTA か、ということよりも、呼びかけ語がついていて、さらに話し手がどのような意図で呼びかけているか、ということが重要なのである。話し手が聞き手に協調的態度を示そうとしていて、さらに、発話が FFA であれば FFA を強めることになり、発話が FTA であれば FTA を和らげることになる。しかし、先ほど見たように、呼びかけ語が常に聞き手への協調的態度の表明であるとは限らない。

だが、挨拶に伴う文末の呼びかけは、話し手の協調的態度を表している場合が多い。

(98) Ana: Hola, Santa.
(*Los lunes al sol*: 131)

(99) Ramón: Adiós, Gené.
(*Mar adentro*: 157)

[55] Positive politeness is redress directed to the addressee's positive face, his perennial desire that his wants (or the actions/ acquisitions/ values resulting from them) should be throught of as desirable. Redress consists in partially satisfying that desire by communicating that one's own wants (or some of them) are in some respects similar to the addressee's wants.（Brown & Levinson 1987: 101）

Goffman（1982: 41）は、挨拶は本来人間関係の強化と修復を図る行為であると述べている。つまり、挨拶をする関係であるということは、通常話し手は聞き手と協調的関係を築こうとしている解釈できよう。これに従えば、挨拶をする際の呼びかけ語は、聞き手に対する好意を表していると考えられる。こういった場合は、挨拶が持つFFA的機能と呼びかけ語の機能が一致し、聞き手と人間関係を良好に保とうとする話し手の態度をより効果的に表すことができるだろう。

次に主張の例も見てみよう。

(100) José: Mira, en esta casa nadie se atreve a plantarte cara. ¡Pero ya estoy harto y te digo una cosa! ¡Te digo una cosa, Ramón... !

(*Mar adentro*: 88)

(100)のように、文末の呼びかけ語を用いた主張は、聞き手に対して威圧的な発話になると考えられる。この発話は、「お前は私の主張を受け取り、理解すべきである」というような言語外情報を含んでいると考えられる。

次の例は説明であるが、この場合も同様である。

(101) Agustina: Pregúntalo a tu madre.

[La perplejidad da paso a un asombro doloroso.]

Raimunda: ¿¡A mi madre!? Mi madre está muerta, Agustina.

(*Volver*: 123)

この例では、Agustina は Raimunda の母がすでに亡くなっていることを知っているにも関わらず、Raimunda の母に事実を確認してほしいと依頼する。Raimunda は驚き、母親はすでに亡くなっていると述べて依頼を断る。Raimunda は Agustina が Raimunda の母親の死について知っていると考えており、文末の呼びかけを用いて発話する。母語話者に対するアンケートによると、この例における文末の呼びかけは、聞き手に威圧的に働きかけるのと同時に、聞き手に対して「何を言ってるのか？私の母親が死んでいることを知っているだろう。」というような情報を含んでいるという。これは、呼びかけ語がない場合と比較すると、呼びかけ語を用いて発話内容を再確認させることによって、Raimunda の非難を含んだ発話態度が強く現れるためと考えられる。このように文末の呼びかけ語には、言語表出されない情報が含まれることがある。むしろ、そういった情報を伝える手段として用いられる時には、呼びかけ語は文

末に現れると言えるのではないだろうか。

しかし、なぜ呼びかけ語が言語外の情報を含み、発話の再確認を求めるのだろうか。これは、呼びかけ語が聞き手への近さを表明することによると考えられる。挨拶などに伴う呼びかけ語は、話し手と聞き手が名前を呼び合えるほど親しい関係であるという近さを表すが、(101)は聞き手に対して親しみを示す発話状況ではない。このような場合、聞き手の耳元で言うかのような近づき方を表すのではないだろうか。聞き手が特定されている状況であえて聞き手に近づいて発話をするのは、話し手に明確な意図がある場合だろう。それが発話内容を再確認するよう求めるものとして捉えられるのだろう。(101)は、聞き手にとって既知の情報であり、それを名前を呼ぶことによってわざわざ近づいて発話しているので、非難を含んでいるように感じられるのだろう。このことから、呼びかけ語は単に話し手と聞き手が名前を呼び合える近い関係にあることを示すだけでなく、聞き手に近づいて伝達する意志の表明としても機能し、発話内容への確認を求めるなどの話し手の発話態度の存在を顕著にすることができると言えるだろう。呼びかけて接近することによって、親密さ、威圧感や非難などを表すのである。

では、なぜ文末の呼びかけは文頭の呼びかけと異なり、話し手の態度を表明する機能を果たしたり、先の例で述べたような言語外情報を含むことができるのだろうか。その理由の 1 つとして、呼びかけ語の付加によって発話の情報価値が左右していることが考えられる。文頭の呼びかけでは、その後ろにくる命題が高い情報価値を持ち、文末の呼びかけの場合は、前にくる命題内容はすでに発話されているので旧情報であるが、呼びかけることによって情報を活性化し、情報価値を高めているのではないだろうか。

Shiina（2007）の主張を情報構造の観点から考えてみると、表 7 で見たように文頭の呼びかけの後に比較的長い発話が続く傾向があるのは、呼びかけ語の後に続く発話内容が聞き手にとっては情報価値が高く、話し手にとって最も伝えたい内容だからだと説明できる。そのような情報を聞き手が確実に受け取るために、聞き手の名前を呼んでこれから始める後続発話に注意を喚起するのであろう。これに対して、文末の呼びかけの前には短い発話が続くことが多かった。実際に、文末では先行発話が 1 語からなる文が文末全体の用例数中 24.7%、2 語の文が 21.3%、3 語の文が 18.5%であるのに対して、文頭は 1 語からなる文が 9.4%、2 語の文が 12%、3 語の文が 14.5%であった。一方、10 語以上からなる文は文末では用例数中わずか 2.3%であるのに対して、文頭では 17.7%という結果となっている。聞き手がすでに特定されている対話においては、改めて注意を喚起して聞き手を特定する必要はないが、聞き手には話し手の情報を正しく理解させなければならない。特に、命題のみを表すような短い発話は、

話し手が情報を発話した意図を聞き手が正確に理解できないことがあるだろう。だからこそ、発話にどのような意図が隠されているのか、またその情報を話し手がどのような態度で伝えようとしているかが重要になる。呼びかけ語を用いることによって発話に言語表出されない情報が含まれていることを表し、また短い発話に対する話し手の発話態度を表そうとしているのではないだろうか。このことからも、文末は発話内容に関わる位置であると言うことができるだろう。

(101)のような場合を考えると、話し手 Raimunda は呼びかけ語の先行発話を、当然聞き手 Agustina が知っている、情報価値が低いものと判断している。しかし、聞き手に呼びかけて、接近して情報を伝達しようとしていると示すことによって、先行発話を再確認させることができる。これは、呼びかけ語の付加によって先行発話の情報価値を高めていると考えることができるだろう。このように、聞き手がすでに特定されている発話の文末に呼びかけ語を用いることによって、話し手が聞き手をどのような立場に置いて発話を伝達しようとしているか、という話し手の発話態度を表明し、時に呼びかけ語に含まれる言語外情報を表すことができる。Shiina（2007: 19）が述べていた文末の呼びかけが用いられる「語用論的理由」とは、このような態度や情報を聞き手に伝達する機能に関わっていると考えられる。

5.3.2.2.2. 語彙による機能

先述の通り、呼びかけ語は話し手が先行発話をどのような態度で伝えようとしているかを表す手段として用いられる。さらに Shiina（2008: 38）は、親愛の呼びかけ語は命令と提言を発話する際に丁寧さを与えると説明している。言いかえると、親愛の呼びかけ語がつくと命令はより丁寧になるということである。

次の**エラー! 参照元が見つかりません。**は、Raimunda が大勢の人々の食事を用意することになり、その手伝いを友人に依頼する場面である。

(102) Raimunda: ¿Y dulce? ¿No habrás traído nada?
Inés: (Indecisa, temiéndose). Me he traído unos mantecados que se te deshacen en el paladar.
Raimunda: (Le recrimina). ¡Según tienes la glucosa, y el colesterol! ¡Parece mentira que traigas mantecados!
Inés: ¡Es el único vicio que tengo! ¡Me he traído tres cajas!
Raimunda: ¡Pues no deberías comerlos!
Inés: Y qué hago, ¿los regalo?
Raimunda: Me los vendes a mí, que me vienen muy bien.

Inés: Bueno. Déjame probarlos, por lo menos.
Raimunda: Cómete dos o tres, pero no te atraques.
Raimunda: ¿Me los traes a casa, cariño?
[Inés no se atreve a contradecirla. Se despiden.]

(*Volver*: 67)

この場面では、Raimunda は Inés に対してソーセージを売ってほしい、菓子も売ってほしい、そしてそれを家に持ってきて欲しいと 3 つのことを頼む。¿Me los traes a casa?という疑問文形式の発話は、動詞が 2 人称単数の形をとって命令を表している。これに cariño という呼びかけ語を用いることによって、命令が和らぎ、依頼のようなニュアンスを持つと考えられる。cariño のように愛情を表す語を用いて呼びかけることによって、聞き手に頼みごとをきいてもらおうという話し手の態度が窺える。実際に、母語話者に対するアンケートでも、「話し手が聞き手に依頼を受け入れさせようとする明らかな意図が感じられる」という。また、脚本には書かれていないが、出典の映像では Inés が頼みを承諾した後、別れ際に Raimunda が Inés に対して Gracias. Adiós, bonita.と告げる。ここでも話し手は聞き手を bonita と呼んで聞き手の気分を良くさせようとしていることがわかる。**エラー! 参照元が見つかりません。**のようにへつらいの態度をとって聞き手に影響を及ぼそうとすることを Beinhauer（1929: 127）は captatio benevolentiae[56]と呼んでいる。これは古代ギリシャ、ローマ時代から用いられていた弁論術の手法の一つで、田中（1931; 1991: 74）はこの用語を「好意を得んとする籠絡; 懐柔」と説明している。つまり、聞き手の好意を引き出そうとする意図的な弁論的戦略であり、命令など聞き手に何らかの負荷を与えるような行為を、愛情を表す呼びかけ語を用いて丁寧に伝えることによって、聞き手の好意を得ることができ、命令内容を遂行させるわけである。

このように、話し手は文末の呼びかけ語の種類によって、発話内容をどのように伝えたいかを表していると考えられる。captatio benevolentiae を実行する際には呼びかけ語の語彙が重要であろう。語彙によって話し手がどのような態度で情報を伝えようとしているかを表すためである。また、話し手が聞き手に影響を及ぼそうという意図がない場合にも、呼びかける語彙によって話し手の様々な発話態度を表すことができる。

こういった呼びかけ語の語彙の効果は、文頭及び文中でも観察されるが、特に聞き手の注意を喚起する機能を持つ文頭においての用例数は極めて少ない。一方、これま

[56] Hay otros cumplidos de índole más egoísta e interesada. Me refiero a los casos llamados de "captatio benevolentiae", o sea a adulaciones con las que se pretende influir en el interlocutor.

で考察してきたように、話し手の発話態度を効果的に表すことができる文末には様々な語彙が現れる。この傾向については、次節で論じたい。

5.3.2.3. 文中の呼びかけ

次に文中の呼びかけについて見ていく。文中とは、条件節と帰結節、あるいは主節と従属節の間で呼びかける例など、話し手が意図的に文を途中で区切っている場合である。文中の呼びかけについて、Shiina（2007: 29）は、文中の呼びかけは後に続く内容に対して聞き手の注意を喚起する機能を持ち、結果的に話し手の説得力を強めるのに役立つという。管見では、先行研究は Shiina（2007）を除いてあまり詳しい言及がない。

次の例を見てみよう。

(103) Ramón: La persona que de verdad me ame, Rosa..., será precisamente la que me ayude a morir.

(*Mar adentro*: 126)

(103)では、話し手 Ramón が意図的に発話の途中で聞き手 Rosa の名前を呼んでいる。発話の途中であえて聞き手の名前を呼ぶことによって、聞き手の注意を後続発話に向けようとしていると考えられる。また、この発話において話し手が最も強調したいのは、呼びかけ語に後続する発話であろう。文中で聞き手の注意を喚起して重要な内容を伝達することによって、後続発話における話し手の主張がより強調される。実際に、母語話者に対するアンケートでも、「聞き手に理解してもらうために途中で名前を呼んでいる」という回答が得られた。従って、文中の呼びかけは Shiina（2007）が主張するように、話し手の説得力を増す役割を果たすと言える。他の例も見てみよう。

(104) Ramón: Pues si quieres ser mi amiga, Rosa, empieza por respetar mi voluntad.

(*Mar adentro*: 37)

(105) Manolo: Yo quería, Frask, que me limpiaras un vómito que ha echado el niño.

(*Manolito Gafotas*: 95)

(104)、(105)では、それぞれ話し手は意図的に文の途中で呼びかけ語を用いている。

発話を一旦やめて聞き手の名前を呼ぶことによって、後続発話が際立ち、先ほど考察したように結果的に話し手の説得力が強まる。今回収集したデータではこの用法の例は少なかったが、Shiina（2007）の主張する文中の呼びかけ語の機能であると説明できる。

5.3.2.4. 文間の呼びかけ

文間の呼びかけは、等位接続詞及び並列的接続の間で呼びかける例、同じ情報を繰りかえす間に呼びかける例（Sí, hijo, sí.のような場合）、eh や oye など注意を喚起する語と共に呼びかける例に分類される。この位置は、呼びかけ語前後の語数を調べた結果、文頭の呼びかけおよび文末の呼びかけのどちらの機能も果たすことができると推測される。

5.3.2.4.1. 等位接続詞、または並列的接続の間で呼びかける例

文間の呼びかけで最も多く得られたのが、等位接続または並列的接続の間で呼びかける例である。

(106) Rosa: Siento haberte juzgado, Ramón, y sobre todo siento haberme entrometido de esa manera en tu vida, sin preguntar, y ... sin pensar.

(*Mar adentro*: 39)

(107) Reina: Vale, Santa, pero una cosa está clara.

(*Los lunes al sol*: 122)

(106)と(107)では、先行語句と後続語句は呼びかけ語と y や pero などの接続詞によってつながっている。また、次の例のように、単に呼びかけ語が２つの文をつないでいる並列的接続の例もあった。

(108) Manolito: Es verdad, tío, nunca se dará cuenta.

(*Manolito gafotas*: 20)

(108)では、呼びかけ語のほかに文をつなぐ語句は見られないが、コンマでつながれていることから、表記の上では、発話は呼びかけ語以後も続いていることになる。しかし、出典の映像と音声を確認すると、呼びかけ語と後続発話との間には短い休止がある。また、呼びかけ語前後の発話は内容的に関連性が見られないので、先行発話と後続発話はそれぞれ独立していると言えるだろう。そのため、これらの発話は表記上

は１つの文と見なされるが、呼びかけ語の機能としては、文中のような後続発話への注意喚起ではないと考えられる。呼びかけ語と後続発話との間に短い休止があるのに対して、先行発話と呼びかけ語との間には休止は確認されず、続けて発話していることから、このような場合の呼びかけ語は、先行発話の文末として機能しているのではないだろうか。つまり、表記上は文間とは、2 つの文の間であるが、機能としては文末の場合と同様に、先行発話の発話態度の表明であろう。これが表 7 で確認した文間の先行発話には短いものが多い理由であると考えられる。(106)は謝罪、(107)は返答、(108)は言明といった先行発話に対して、聞き手との協調関係を明示する働きを担っていると言える。

5.3.2.4.2. 同じ情報を繰りかえす間で呼びかける例

また、同じ情報を繰りかえす際に文間の呼びかけ語を用いることがある。

(109) Marco: Estoy en Jordania... ¡y he leído que Lydia ha muerto!
Rosa: Sí, hijo, sí. Lo siento mucho.

(*Hable con ella*: 173)

(109)では、呼びかけ語は同じ情報 sí が繰りかえされる発話の間に現れている。ある母語話者からは、「同じ情報を繰りかえす場合には、呼びかけ語がないと不自然」という意見も見られた。しかし、このような発話では呼びかけ語の先行発話と後続発話が同一なので、文中のように話し手の説得力を強めるために後続発話に注意を喚起する必要はないと考えられる。次の例においても同様である。

(110) Don Gregorio: Bien, Gorrión, bien...

(*Lengua de las mariposas*: 53)

出典の音声では、呼びかけ語の後に短い休止があるので、等位接続の場合のように先行発話の文末的要素とも考えられるが、呼びかけ語の前後であえて同じ情報を繰りかえすということは、話し手は発話内容そのものを強調して伝達しようとしているのではないだろうか。従って、このような場合の呼びかけ語は、文末の呼びかけのように話し手の発話態度や、協調関係にあることを表明すると共に、同一の情報を繰り返すことによって、より強調的に伝達する機能を果たすと説明できるだろう。

5.3.2.4.3. 注意を喚起する語と共に呼びかける例

また、注意を喚起する語に伴う例もあった。

(111) Rosa OFF: Mira, Ramón, tengo que hacerte una pregunta.

(*Mar adentro*: 146)

(68)' Fernando: Eh, Rafa, qué pasa, tío, ten cuidado, coño, qué quieres, que me lesione antes del domingo o qué...

(*El penalti más largo del mundo*: 94)

(111)は、話し手と聞き手が電話で会話をしている場面である。動詞 mirar の命令法 2 人称単数形 mira は間投詞的に用いられ、聞き手の注意を喚起する機能を持つ。また(68)でも、前章で聞き手の注意を喚起すると結論づけた文頭の eh の後に呼びかけ語を伴っている。本論文のデータでは、同様の機能を持つ oye も含めて、このような注意を喚起する間投詞に続く文中の呼びかけ語が 22 例見られた。出典の音声を確認すると、呼びかけ語と後続発話との間に短い間があるので、呼びかけ語は mira という先行発話の文末的要素として機能していると考えられる。しかしこのような場合、呼びかけ語の使用によって聞き手の領域に触れることを表す一方で、先行発話と共に聞き手の注意喚起として機能しているのではないだろうか。母語話者にこういった例を提示すると、ほとんどの回答者が「呼びかけ語は注意喚起として機能する」と回答した。mira や eh を用いてすでに注意喚起をしているにもかかわらず呼びかけ語を使用するのは、名前を呼ぶことによって聞き手に対する協調的態度を示すためであると考えられる。しかし、具体的な発話内容を伝達する前なので、結果的に後続発話への注意喚起として機能するのではないだろうか。

また、次のように固有名詞の後に名詞や形容詞などの呼びかけ語が現れる例も観察された。

(112) Gené: ¡Marc, cariño, haz el favor de mirar al frente!

(*Mar adentro*: 113)

先に述べたように、呼びかけ語は文頭で聞き手の注意を後続発話に向ける機能を果たす。従って、(112)における文間の呼びかけ語 cariño は、(111)と同様に、先行発話 Marc の文末要素であり、先行発話と共に注意喚起として機能していると考えられる。しかし、(112)では、聞き手に愛情を表す cariño という名詞が用いられている。話し手 Gené と聞き手 Marc は夫婦であることから、文頭では個人名を用い、そのすぐ後

に話し手と聞き手の関係を表すような語彙を用いることによって、愛情を表しながら聞き手の注意を喚起しているのであろう[57]。また、母語話者によると、「後続する命令を和らげる印象を受ける」という。文末に呼びかけ語が置かれる場合にも命令を和らげることができるが、この場合は cariño という語彙を命令の前に置き、先に聞き手への愛情を示すことによって、和らげようとするように感じられると考えられる。文間の呼びかけには、このような固有名詞の後に名詞や形容詞の呼びかけ語を用いた例も数例見られた。こういった呼びかけ語は、文間の機能を果たすと同時に、その語彙的意味も表していると言える。

このように、文中の呼びかけ語は Shiina（2007）が主張するように、後続発話に注意を向けて話し手の説得力を増す機能を果たす。また、文間の例は、先行する発話の文末的要素として機能するものが多い。この結果を考えると、主節と従属節の間などで呼びかける文中の呼びかけは後続発話の文頭、また、文間の呼びかけは先行発話の文末に位置すると見ることができるのではないだろうか。そう考えると、文中、文間は派生的なものであると言うことができるだろう。従って、呼びかけ語の中心的な機能は、文頭における注意喚起と、文末における話し手の発話態度の表明である、と結論づけられるが、これは呼びかけ語だけでなく、他の間投詞においても同様であると考えられる。

今回使用した資料体において、最も頻繁に現れたのは文末の呼びかけ語であった。文頭の呼びかけ語による聞き手の注意喚起後、発話は長くなり、聞き手が特定されていて文末に呼びかけ語を用いる場合、前の発話は短くなる傾向がある。

この実態は各位置の呼びかけ語が持つ機能と関わっていると考えられる。

第 1 に、文頭での呼びかけは、聞き手の注意を喚起する機能をもつ。この場合、聞き手にとって呼びかけ語に後続する発話の情報価値が高い。聞き手にとって重要な情報を提供するために話し手に注意を喚起するのである。

第 2 に、文末では、聞き手の領域にどのように触れるかを発話状況やイントネーションなどと共に明確化することによって、話し手の発話態度を表す。さらに、使用する語彙によって、聞き手への様々な態度を表明することができる。文末での呼びかけの先行語句が短い傾向があるのは、短い発話では、聞き手が話し手が発話する情報の意図を正しく読み取れない可能性があるので、呼びかけ語を用いて、言語表出されていない情報があることや、話し手の発話態度を表そうとするのだと考えられる。文末に呼びかけ語を付加することによって、先行語句を活性化し、情報価値を高めることができる。

---

[57] 詳しくは p.120 参照。

第３に、文中に現れる呼びかけは、文頭での呼びかけと同様に、聞き手の注意を後続発話に向けさせるので、話し手の説得力を増すことになる。また、文間では前の発話の文末的要素を果たす。これらは、文頭、文末の派生的用法であると考えることができる。

このことからスペイン語における呼びかけ語はFFAを強めFTAを和らげるだけでなく、現れる位置によって異なる機能を果たし、談話を管理する標識として、また、話し手の発話態度を言語表現する一つの手段として用いられると結論づけられる。

各位置と機能の関係をまとめると次のようになる。

表８　呼びかけ語の位置と機能のまとめ

位置	表記	機能
文頭	呼びかけ語 ＋ , ＋ 後続語句 .	聞き手への注意喚起 発話開始、発話権取得、話題転換、前置き
文中	先行語句 ＋ , ＋ 呼びかけ語 ＋ , ＋ 後続語句.	聞き手への注意喚起 説得力を強める
文間	先行語句 ＋ , ＋ 呼びかけ語 ＋ , ＋ 後続語句.	話し手の発話態度の表明 聞き手への注意喚起（oye や mira などに伴う場合）
文末	先行語句 ＋ , ＋ 呼びかけ語 .	発話権の譲渡・終結 話し手の発話態度の表明

5.4.　呼びかけ語の位置と語彙

前節では、文末において、cariño という呼びかけ語が現れている事例を考察し、語彙によって話し手の発話態度を明示することができると結論づけた。では、呼びかけ語の語彙にはどのようなものがあるのだろうか。

5.4.1.　情を表す呼びかけ語の語彙[58]

5.4.1.1. ポライトネスとしての呼びかけ語

呼びかけ語は、Edeso Natalías（2005: 132）によれば、ポライトネスを表す手段として用いられると説明される。FFA を表すために最も頻繁に用いられる呼びかけ語は、個人名、縮小辞や愛称の形式の個人名と、年齢や性別を表す名詞であるという。また Haverkate（1979: 86）は、依頼を和らげる呼びかけ語として、固有名詞と hijo、nena、cielo といった愛情を表す名詞句を挙げている。前節で考察したように、個人名でも発話状況などによって FFA を強めたり FTA を和らげる機能を果たすが、この 2 つの先行研究から、固有名詞を除く呼びかけ語の語彙によってさらに呼びかけ語が発話にもたらす効果が増すことが予想される。

[58] 本論文では、個人名を除く名詞や形容詞の呼びかけ語を「情を表す呼びかけ語」と称す。これらの呼びかけ語は、喜怒哀楽などの感情だけでなく、愛情や敬意、皮肉など様々な心の状態を表すので、「情」という語を用いる。

5.4.1.2. 意味による分類

Beinhauer（1963: 33- 47）は、呼びかけ語の語彙は主に好感（simpatía）と嫌悪（antipatía）、皮肉（ironía）の 3 つの種類に分かれると主張し、それぞれに具体例を挙げている。本節では、データから得られた例をもとに、特徴的な語彙のみを考察していく。なお、位置による分類は 5.5.で行う。

5.4.1.2.1. 好感を表す呼びかけ語

Beinhauer（1929: 26）は、好感を表す呼びかけ語としてまず hijo/a などの親族名称を例に挙げている。次の例を見てみよう。

(113) Manolo: No te preocupes, hijo, cuando yo era como tú, la tenía mucho más chica.

(*Manolito Gafotas*: 104)

(113)の話し手 Manolo は、聞き手 Manolito の父親である。スペイン語母語話者によると、スペイン語では親は自分の子どもを通常固有名詞で呼ぶといい、これに従えば(113)を No te preocupes, Manolito, (...)とすることができる。しかし、ここでは意図的に聞き手である息子を hijo と呼びかけている。この発話は命令であり、呼びかけ語を伴うことによって命令を和らげることができる。また発話内容を見ると、父親は息子に対して大人の視点から助言をしているので、hijo という語彙を用いて 2 人の親子関係を明示していると考えられる。

しかし Beinhauer（1929: 26）によると、呼びかけ語 hijo/a は(113)のように普通話し手が聞き手よりも年上である場合に用いられるが、時に話者間に年齢差がなく、さらに実際の親子関係がない場合にも用いられるという。Edeso Natalías (2005: 132) も同様に、hijo/a を用いることによって、話者間に擬似的な親子関係を作り出すことができると説明している。

次の(114)の例では、聞き手である Agustina は話し手 Sole の叔母の隣人であり、両者の間に親子関係はもちろんない。また年齢差もないが、呼びかけ語 hija mía が用いられている。

(114) Sole: Está hecha una pena, hija mía.

(*Volver*: 33)

この場面では、話し手が叔母の様態を隣人に説明している。Edeso Natalías (2005)

の主張からこの発話を見ると、本来親子関係を表す呼びかけ語を用い、話し手と聞き手との間に擬似的な上下関係を作り出すことによって、自らの驚きを擬似的に少し上の立場から優しく説明し、聞き手により良く理解してもらいたいという話し手の態度を表しているのではないだろうか。

次の例も同様である。

(115) Sole: Pensé que a ti eso no te ocurriría...
Raimunda: (Más afectada de lo que quisiera). Pues sí, hija, sí. No tengas complejo porque tu marido se fugara con una clienta...
(*Volver*: 82)

(115)では、Raimunda の姉である Sole が Raimunda の夫 Paco が家を出て行ったことについて、「あんたにはそのようなことは起こらないと思っていた」と告げる場面である。Raimunda は姉に対して自分にも起こるのだ、と主張する。Raimunda は Sole よりも年下だが、優しく Sole を説得するため、擬似的に上の立場から hija と呼びかけているのだろう。

このように、親族名称で呼びかけることによって擬似的な関係を作り出し、聞き手よりも上の立場から情報を伝達しようとする話し手の態度を表すことができる。この擬似的関係によって、固有名詞を用いる呼びかけよりも、より効果的に発話内容への態度を付加することができると考えられる。今回のデータには例がなかったが、年配の人に対する abuelo/a も、hijo/a と同様に話し手と聞き手との間に擬似的な親族関係を作り出し、話し手が聞き手に対して孫のような立場に自分を置こうとする態度を表すのではないだろうか。また、Alonso Cortés（1999: 4040）によると、同じく親族名称である tío は友人関係で用いた場合、話し手と聞き手が同じグループに属している仲間であることを表すという[59]。(95)でも見られたように、本論文のデータでも tío は 61 例観察され、日常会話において頻繁に用いられていると推測される。本来 tío は親族名称だが、脱意味化していると考えられ、擬似的な親子関係を強調する hijo/a のようには機能しないと考えられる。

また Beinhauer（1929: 34）は「どんな語でも縮小辞を伴えば、好感を表す」と説明し、さらに好感を表す呼びかけ語として amor や cariño といった名詞や、simpático や precioso などの形容詞を挙げ、「スペイン人の心からの息吹[60]」と称している。 次

[59] Jørgensen（2008）は、マドリードの若者間での tío/a の使用について考察している。tío などの使用は若者特有のものなので、普通の言語使用とは異なるぞんざいさを持つのではないかと考えられる。
[60] un soplo directo del alma popular española (Beinhauer 1929: 36)

の例を見てみよう。

(116) Conductora: Lydia, tesoro, no seas ordinaria, déjame terminar la pregunta.

(*Hable con ella*: 30)

(117) Benítez: (A Manolito.) Vamos... A bañarnos, prenda.

(*Manolito Gafotas*: 131)

tesoro は本来人ではなく「宝」を意味する名詞だが、聞き手に愛情を表す呼びかけ語としてここでは用いられている。また Beinhauer（1929: 37）は、prenda についても深い愛情を表す呼びかけ語であると述べている。(117)でも、聞き手 Manolito に対して親愛をこめて prenda と呼んでいる。さらに mi vida のように限定形容詞を伴う呼びかけ語は、mi によって愛情を表す度合いが増すと考えられる。

(118) Amparo: ¡No te preocupes, mi amor!

(*Hable con ella*: 130)

(119) Rosa: A ver, mi vida, ¿qué quieres...?

(*Mar adentro*: 64)

また、次の(120)と(121)は、今回収集したデータから得られた形容詞の呼びかけ語の例である。

(120) Voz de oyente: ...Y que sepas que te oigo siempre que puedo. Y que eres muy fresca, muy... espontánea.
Rosa: (Sonríe.) Muchas gracias. ¿Entonces no quieres que te ponga nada?
Voz de oyente: No, bonita. Tú sigue así, tan alegre. Buenas noches.

(*Hable con ella*: 116)

(121) [Ramón parece prestar atención, con la cabeza pegada a la tripa de Gené.]
Ramón: No siento nada. ¿Seguro que así hay un niño?
Gené: De siete meses, guapo.

(*Mar adentro*: 95)

bonita や guapo は愛情を表す形容詞である。(120)はラジオの会話で、視聴者である話し手が聞き手 Rosa に bonita と呼びかけている。また、(121)の話し手 Gené は

Ramón を擁護する人権団体の責任者で、胎動を聞こうとしている Ramón に対して guapo と呼びかけている。呼びかけ語の guapo は、後ほど考察するように時に皮肉として用いられるが、この場面は文脈から皮肉を言うような状況とは考えられず、話し手は聞き手との間に強調的態度を示していると解釈できるので、上の 2 つの呼びかけ語 bonita と guapo は共に好感を表していると言えるだろう。

5.4.1.2.2. 嫌悪を表す呼びかけ語

嫌悪を表す呼びかけ語には、動物名称や増大辞を伴う語、imbécil などの侮辱表現や maricón のような俗語が挙げられている。

次の例は、話し手の聞き手に対する嫌悪を表す呼びかけ語である。

(122) Catalina: Es que lo estaba viendo, ni descansar puedo cinco minutos. Pero, ¿se puede saber qué estás haciendo, <u>bestia</u>? Que no es nuestro el vídeo.

(*Manolito Gafotas*: 71)

(122)では、話し手である母親 Catalina が、聞き手である息子 Manolito の行動に腹を立てている。普段は個人名（Manolito）や hijo mío、cariño mío と呼びかけているが、この場面では怒りの表明として bestia と呼びかけている。このことから、呼びかけ語の語彙選択によって、話し手の発話態度をより明確に表すことができると言えるだろう。

しかし、時に動物名称は嫌悪を表さないことがある。次の例を見てみよう。

(123) Don Gregorio: Bien, <u>Gorrión</u>, bien...

(*La lengua de las mariposas*: 53)

この場面では、教師 Don Gregorio が生徒 Moncho に対して Gorrión と呼びかけている。Moncho が母親と共に初めて学校に来た時、母親は「この子はすずめのように気が小さくて…」と教師に説明する。それを聞いた他の生徒達は、Moncho をからかって Gorrión と呼び始める。つまり Gorrión という呼びかけ語は、もともと悪意を含んで用いられた呼びかけ語であった。しかし、教師は Moncho にそのあだ名を気に入ったと伝え、Moncho を Gorrión と呼んでいいかと尋ねる。この教師は Moncho をよく気にかけているので、彼に対して愛情を持っていることは明らかであり、Moncho

に愛情を表す意味で Gorrión と呼び続けるのである[61]。Beinhauer（1929: 38）は侮辱的な語彙でも、縮小辞を伴えば愛情を表す表現に変わると述べている[62]。(123)の例は縮小辞は伴っていないが、話し手と聞き手の人間関係から、動物名称でも愛情を表す呼びかけ語として用いられていることがわかる。このように、動物名称は必ずしも嫌悪を表すわけではなく、話者同士の人間関係によっては好感を表す場合もあると言うことができるだろう。

次の例も見てみよう。tonto のような侮辱的な語彙は通常嫌悪を表すと考えられるが、動物名称と同様に、時に好感を表すことがある。

(124) Andrés: ¡Moncho!

[Moncho se levanta y se echa en sus brazos.Andrés lo besa, lo abriga con su propio ropa:]

Andrés: Pero, ¿a dónde ibas, tonto?

(*La lengua de las mariposas*: 17)

話し手 Andrés が聞き手 Moncho に愛情を持っていることは、Andrés の行為からも明らかであり、形容詞 tonto は本来侮辱的な言葉であるが、この例では聞き手に対する好感を表している。母語話者に対するアンケートでも、この例における呼びかけ語 tonto は「Andrés の愛情を表している」という結果が得られた。Beinhauer（1929: 38-39）はこのような用法を「虚構的侮辱（insultos ficticios）」と称し、嫌悪を表す語彙でも親密な関係で用いられる場合には愛情を表す表現になる、と説明している。また、スペインでは親しい女性に対して "Adiós, fea." と挨拶をすることがあり、これも同様に聞き手である女性に対する親密さを表すという（Beinhauer 1929: 39）。しかし、嫌悪を表す呼びかけ語の語彙を、聞き手が文字通りに受け取ってしまった場合、聞き手は話し手の意図を正しく理解できないばかりでなく、話し手と聞き手の人間関係に大きく影響を及ぼし得る。そのため、この用法が成り立つのは、対談者同士が非常に親密であり、呼びかけ語の語彙が表面的な意味を表さないことを了解している場合のみであると考えられる。

5.4.1.2.3. 皮肉を表す呼びかけ語

Beinhauer（1929: 34）は、皮肉の呼びかけとして、大人に対する呼びかけ語 rico

---

[61] Gorrión は Moncho のあだ名とも解釈できるが、気の弱い Moncho をからかって呼ぶ際に用いられていたので、本論文では呼びかけ語とみなす。

[62] Miguel Mihura（1979: 86）による戯曲 *Tres sombreros de copa* には、このタイプの呼びかけ語の例がある。主人公がフィアンセに対して Adiós, bichito mío. と呼びかける。名詞 bicho は嫌悪を表す語だが、縮小辞と限定形容詞を伴うことによって愛情を表している。

を挙げている。通常 rico は子供に対する愛情の表現であるが、時に嫌悪感を持つ人に対する皮肉として用いることがあるという。

rico の例は今回得られなかったが、次の例における listo は rico と同様に皮肉の意味で用いられている。

(125) Abuelo: Catalina, que tampoco es para tanto, que al angelico le han quedado las Matemáticas, ya las aprobará. Muchos grandes hombres suspendían las Matemáticas de pequeños: Fleming, Don Santiago Ramón y Cajal...
Catalina: Deja ya el rollo de los grandes hombres.
Abuelo: Hay formas y formas de regañar, hija mía.
Catalina: ¿Cuáles, listo?

(*Manolito Gafotas*: 48)

この場面では、算数の成績が悪かった Manolito を叱る Catalina を祖父がなだめようとしている。祖父が算数が不得手であった偉人の名前を挙げると、Catalina は黙るように命令する。しかし、それでも話し続ける祖父に対して、Catalina は ¿Cuáles, listo?と尋ねる。Catalina が祖父に苛立っていることは発話状況から明らかであり、呼びかけ語 listo は、聞き手の知識を褒めているとは考えにくい。この場合、呼びかけ語は「あんたが子ども達を叱る方法を知っているのなら言ってみなさい」という言語外の情報を含み、皮肉としてこの語彙を選択していると考えられる。

また Beinhauer（1929: 33）によると、皮肉の呼びかけ語はスペイン人特有のユーモアであり、それは冗談を含み、即興で作られることがあるという[63]。

次の例では呼びかけ語が様々な言語で現れている。

(126) [Cuando vuelve a la terracita se queda de pie. Se inclina para besar a Alicia, atada al respaldo de la silla. Mientras la besuquea como a un bebé se despide en varios idiomas, con expresión a cual más tierna.]
Katerina: Alicia, my sweet potato... Adiós... goodbye my sweetness, petootsens, chouquinolette, chouquinoletina, cheribibí... Cuídate.

(*Hable con ella*: 88)

[63] Los vocativos irónicos desempeñan un papel considerable en el idioma, dado el carácter burlón peculiar de los españoles. Por lo común, son vocativos improvisados, interesantes sobre todo por el humorismo popular que dejan translucir.（Beinhauer 1963: 33）

(126)では、話し手 Katerina が聞き手 Alicia を 6 つの様々な言語で呼びかけ Alicia に愛情を表している。この例を見ると、呼びかけ語の語彙選択は話し手の自由であり、使用数にも制限がないことがわかる。話し手 Katerina は出典の映画の後半で、Alicia を chouquina と再び外国語で呼びかけていることから、聞き手をこのように呼びかけるのがこの話し手の習慣なのだろう。

さらに、次の例ではユーモアとして聞き手を擬似的な職業名で呼びかけている。

(127) Alicia: (A Manolito.) ¿Te apetecen un par de huevos fritos, <u>camionero copiloto</u>?
Manolito: No puedo tomar huevos.

(*Manolito Gafotas*: 100)

話し手 Alicia は、聞き手 Manolito が 10 歳前後の子供であり、車の免許を持っていないことを了解している。しかし、Manolito がトラックの運転手である父親の助手席に乗って仕事に同行したことから、camionero copiloto（運転助手）という語彙を選択しているのだろう。この語彙を Alicia が用いたのはこの場面のみで、その他の場面では個人名 Manolito で呼んでいるので、Alicia があたかも言葉遊びのように camionero copiloto と呼びかけていると考えられる。この場合は皮肉の意味は含まず、Alicia は Manolito に対して親愛の態度を表そうとしているのだろう。

次の例も見てみよう。

(128) [Julia coge una mano de Ramón y la aprieta emocionada.]
Julia: Hola, <u>marinero</u>.
[Ramón le devuelve una sonrisa cariñosa.]

(*Mar adentro*: 98)

聞き手 Ramón は若い頃海で仕事をしていたが、海で怪我をして全身不随となる。そのような Ramón に対する marinero という呼びかけ語は、話し手と聞き手の関係によっては皮肉にもなり得る。しかし、実際には話し手 Julia と聞き手 Ramón は恋仲であり、Julia は全身不随となった今でも Ramón が海が好きであることを知っている。そのため、擬似的な職業名 marinero という呼びかけ語は、Ramón への愛情表現として用いられていることがわかる。このことから、呼びかけ語の選択は話者間の関係と、話し手の機知に深く関係しており、即興で作られる（または言葉遊びとしての）

呼びかけ語は必ずしも Beinhauer（1929: 33）の言うような皮肉の含意を持たないと言えるだろう。

このような職業名の擬似的用法について、Alonso Cortés（1999: 4041）は jefe の例を挙げ、実際に仕事関係がない人物にも頻繁に用いられると説明している。次の例を見てみよう。

(129) ［El conductor sonríe a Ramón por el retrovisor.］
Conductor: ¿Y qué se le perdió a usted en Boiro, jefe?
Ramón: Me voy a la playa, a... cambiar de aires.
Conductor: A cambiar de aires... Eso está bien.
(Mar adentro: 159)

Ramón は運転手の上司ではないが、運転手は jefe と呼びかけている。Alonso Cortés（1999: 4041）は、客がタクシーの運転手に対して jefe と呼びかけることもあると述べているが、(129)では運転手が客である Ramón に jefe と呼びかけている。親族名称でも考察したように、呼びかけ語の使用によって話し手と聞き手との間に擬似的な関係を作りだすことができる。jefe の場合もこれと同様に、話し手は聞き手との間に社会的な階級を作り出そうとしているのである。(129)では、Ramón は運転手に賃金を支払う客であるため、運転手は Ramón との間に上下関係を作り出そうとして jefe と呼びかけているのだろう。一方、Alonso Cortés（1999: 4041）が挙げている客が運転手に jefe と呼びかける場合には、運転手に目的地までの運転を任せようとする意識を強く持ち、聞き手を「自分を目的地まで連れて行ってくれる人である」という立場において情報を伝達しようとしているのであろう。つまり jefe の使用は、聞き手をどのような立場に置くか、という話し手の意識に関わっていると考えられる。

また次のような例も見られた。

(130) Gené: Por cierto, Julia, la abogada, quiere volver a verte, esta vez por más tiempo.
Ramón: ¿Y eso? A ver si es que se enamoró de mí.
Gené: (Riéndose.) ¡Más quisieras, guapo! Además, está casada...
(Mar adentro: 40)

(130)では、Ramón の弁護士 Julia について Gené と Ramón が話をしている。Ramón は Julia が自分に恋愛感情を持っていると発言するが、Gené は「そんなわけ

ないでしょう」と発話する。母語話者によると、この呼びかけ語 guapo は Ramón に対する皮肉であるだけでなく、「うぬぼれないで」や「あんたは間違っているよ」という含意を持つという。guapo（色男）は本来聞き手を褒める呼びかけ語であるが、この場合にはうぬぼれた聞き手に対する冗談であり、さらに語彙から推測される言語外情報を含めていると考えられる。

このように、呼びかけ語の語彙選択には制限がなく、時に話し手の機知によって選択される。言葉遊びのような性質を持つので、様々な語彙が現れる可能性がある。その判断基準は、話し手がどのような態度で、また聞き手とどのような関係を作り出して情報を伝えようとしているかであり、愛情を持って伝える時には好感を表す語彙を、怒りや不快を伝えたい時には嫌悪を表す語を用いて、固有名詞で呼びかけるよりも的確に発話態度を表明することができる。従って、固有名詞を除く名詞や形容詞の呼びかけ語は、「情を表す呼びかけ語」と呼ぶことができるだろう。しかし、情を表す呼びかけ語が常に語彙的意味そのものを表すわけではなく、発話状況に応じて異なる意味を表すことがある。これらの呼びかけ語は、発話状況と話し手と聞き手の人間関係が重要であると言うことができるだろう。

5.4.1.2.4. captatio benevolentiae（好意獲得）の用法と語彙との関連性

Beinhauer（1963: 26）は、呼びかけ語が話し手の要求を聞き手に実現させるために聞き手の行為を得ようとする captatio benevolentiae の機能を果たす、と説明している。これは前節で述べたように、聞き手の好意を引き出そうとする意図的な弁論的戦略のことであるが、呼びかけ語の語彙によって聞き手の機嫌をとり、へつらいの態度を示してより効果的に聞き手に働きかけることができる。情を表す呼びかけ語は擬似的な関係を作り出す機能を持っており、聞き手に対して話し手の要求を受けやすくするような親しい関係を作り出すので、captatio benevolentiae として用いられることがある。では、情を表す呼びかけ語、特に好感を表す語彙と captatio benevolentiae とはどのように関わるのだろうか。

この機能を果たす(116)の例を、文脈と共に考察してみよう。

(116) Conductora: (Suavona y colegona.) Pero hablar es bueno, mujer. Hablar de los problemas es el primer paso para superarlos, porque el Niño...
Lydia: (Harta.) ¡Y dalé!
Conductora: Lydia, <u>tesoro</u>, no seas ordinaria, déjame terminar la pregunta. Porque el Niño de Valencia...
Lydia: ¡Le advertí en el camerino que no iba a hablar de este tema!

(*Hable con ella*: 30)

この場面では、インタビュアーがLydiaにかつての恋人について話をさせようとし、Lydia はそれを拒否する。インタビュアーはしつこく食い下がり、Lydia に対して tesoro と呼びかけて機嫌をとろうとする。この例について母語話者は、「話し手は聞き手の好意を得ようとしている」と回答しており、聞き手にへつらい、自分の利益になるように相手に働きかけようとしていると考えられる。呼びかけ語の語彙によって聞き手の機嫌をとろうとするこのような機能は、好感を表す呼びかけ語特有の用法であろう。先に見た**エラー! 参照元が見つかりません。**¿Me los traes a casa, cariño?の場合も、好感を表すものである。Beinhauer（1929: 33）は好感の意味を持つ語彙について、そのほとんどが captatio benevolentiae の一種であると述べている。しかし次の例を見ると、必ずしもそうでないことがわかる。

(131) Rosa: ¿Insinúas que Benigno es maricón?
Enfermera jefe: No lo insinúo yo, es vox popili, bonita.

(*Hable con ella*: 116)

(131)で、「Benigno が同性愛者であると言いたいのか」と問う Rosa に対して、婦長は「みんなそう言っている」と述べる。ここでは bonita という語彙が用いられているが、この発話は単なる情報伝達であり、先の例のようなへつらいの態度や下心は感じられない。この場合は、単に婦長の Rosa に対する親愛を表していると考えられる。

次の例でも同様に、好感を表す呼びかけ語は captatio benevolentiae の機能を果たしていない。

(132) [Suena el móvil de Gené.]
Gené: ¿Diga...? ¡Ramón! ¿Qué tal...? Espera, espera, que aquí no me entero de nada.
[Gené se dirige hacia la salida.
Gené sale a la calle y se coloca junto a la fachada del restaurante.]
Gené: Cuéntame, guapo.

(*Mar adentro*: 155)

(132)においても、guapo は電話の要件を話すよう促す話し手Gené の聞き手Ramón に対するへつらいの態度を含んでおらず、単に聞き手へ愛情を表し、先行する命令を

和らげていると考えられる。

このように、好感を表す呼びかけ語であっても常に captatio benevolentiae の機能を果たすわけではない。情を表す呼びかけ語は、基本的には聞き手に対する話し手の態度の表明であり、FTA を和らげたり FFA を強め、話し手と聞き手との間に語彙が表す擬似的な関係を作り出すことなのである。しかし、(116)のように明確な意図を持って話し手が使用する場合には captatio benevolentiae としての機能を果たすのだろう。

また、好感を表す語彙を用いて呼びかけても必ずしも話し手の望みが実現されるとは限らない。(116)では、話し手が聞き手と親密な関係を作り出そうとしているにも関わらず、話し手の要求は実現しない。それどころか、聞き手は tesoro という呼びかけを用いた話し手の要求に気分を害する。(116)はテレビのインタビュー番組であり、話し手と聞き手は初対面であったにもかかわらず、好感を表す呼びかけ語を用い、さらに個人的な質問に対する返答を要求したので、聞き手は不愉快に感じたのである。Hasbún Hasbún（2003: 203）は、コスタリカの市場における売り手の客に対する親愛の呼びかけ語 mi vida の使用について、商品を購入させるために聞き手にへつらい、聞き手のポジティブフェイスに働きかけようとする効果があると述べている。しかし、そのような呼びかけ語によって聞き手は気分が良くなる場合もあれば、逆に馴れ馴れしいと感じて気分を害する場合もあるという。つまり、話し手が聞き手の好意を得るために呼びかけ語の語彙によって擬似的に親愛関係を築こうとしても、実際に聞き手の好意を得られるかどうかは、発話状況や聞き手の受け取り方、また話し手同士の人間関係（親しい関係か、あるいは初対面か等）によると言えるだろう。

5.4.1.3. 情を表す呼びかけ語の再分類

ここまで見てきたように、確かに典型的に好感や嫌悪を表す語彙は見られるので、Beinhauer（1929）による分類にも納得できる。しかし、呼びかけ語は時に語彙的意味の通りの態度を表さないことがある。呼びかけ語がどのような意味を表すのかは、発話状況や話者間の人間関係によって異なるので、呼びかけ語の語彙を好感、嫌悪、皮肉といった種類を厳密に分類することはできない。

では、これらの情を表す呼びかけ語の語彙はどのように分類することができるだろうか。これらの語彙はまず名詞、形容詞といった品詞別に分類することができる。さらにそれぞれの語彙を観察したところ、名詞は人を表すもの（hijo 等）と、本来人以外の事柄を表すもの（tesoro 等）に、形容詞は見た目を表すもの（bonita 等）と、性格や性質など目には見えないものを表す語彙（listo 等）とに下位分類が可能である。

情を表す呼びかけ語の語彙を再分類した結果は次の通りである。

表 9　情を表す呼びかけ語の分類

	人を表す名詞	人以外を表す名詞
名詞	性別 mujer, hombre[64], macho 年齢 chico/a, niño/a, nene/a, chaval, chiquitín 職業 doctor, maestro 敬称 señor/a, señoría 親族名称 hijo/a, tío, hermano 話者との関係 amigo, compañero　等	動物 bestia, foca, garrapata, gorrión 物 tesoro, prenda, 抽象名詞 cariño（mío), (mi) amor, (mi) vida　等
形容詞	外見を表す形容詞 bonita, guapo, gordita, rubia	性格・性質を表す形容詞 vieja,listo, pobre, tonto/a, ruso, imbécil, cobarde, preciosa, mona

人を表す名詞では、聞き手の性別、年齢、職業、また話し手との社会的関係を表すような語彙が分類される。本来、人以外の事柄を表す名詞としては、動物名称や抽象名詞が挙げられる。形容詞の使用例数は全 589 例中わずか 33 例のみであった。

次に情を表す呼びかけ語の頻度をまとめた。1 度しか現れなかった語彙については省略する。

[64] Cuenca y Torres（2011）や Gaviño Rodríguez（2011）が考察しているように、hombre は日常会話において独立した間投詞として頻繁に用いられている。しかし、Beinhauer（1929: 30）は、「全ての生物に対して用いることのできる呼びかけ語で、自分に対して用いられた時には間投詞としての機能を果たす」と説明しているので、本論文では呼びかけ語に含めている。しかし、今後呼びかけ語として分類するかについては検討する必要がある。

表 10　情を表す呼びかけ語の頻出

hijo/a (mío/a)	70	hombre	64
tío	61	señor/a	45
mujer	38	cariño (mío)	34
chaval	31	capitán	17
(mi) amor	15	tronco	15
doctor	11	tonto	11
niño	10	señoría	10
colega	8	guapa	8
cabrón	7	corazón	6
jefe	6	bonito(a)	5
nene(a)	5	amigo (mío)	4
gorrión	4	mi vida	4
macho	4	delincuente	3
gordita	3	guarra	3
imbécil	3	majestad	3
preciosa	3	tesoro	3
bestia	2	chiquitín	2
cielo	2	compañero	2
gilipollas	2	listo	2
patrona	2	prenda	2
señorita	2	socia	2

最も頻繁に現れたのは、親子間や擬似的に用いられる hijo/a であり、次に hombre が続く。また tío も多く現れている。使用頻度が多いのは人を表す名詞であるが、guapo や tonto/a などの形容詞も頻繁に用いられている。これらの語彙は、本論文の資料である映画 20 作品から得られたものであるが、日常会話においても比較的よく用いられる語彙であると考えられる。

では、この分類と使用頻度にはどのような関係があるのだろうか。これは、次節で考察する呼びかけ語の位置と深く結びついているのである。

5.4.2. 情を表す呼びかけ語の位置と機能

5.4.2.1. 情を表す呼びかけ語の分布

まず、情を表す呼びかけ語の例数を見てみよう。情を表す呼びかけ語には、1）個人名を除く名詞及び形容詞、2）親族関係において目下から目上（甥から叔父、孫から祖父母または子どもから親など）に対する呼びかけを除く親族名称、3）親から子どもに対する hijo/a（mío/a）を分類した。母語話者によると、「親族関係では目下から目上に呼びかける場合、通常個人名ではなく親族名で呼びかける」というので対象から除いた[65]。反対に親から子どもに対しては個人名で呼びかけることが多いが、hijo/a（mío/a）と呼びかける場合には親が子どもに対して愛情を示そうとしていると考えられ、情を表す呼びかけ語に含めることにした。

次に、情を表す呼びかけ語を発話中に現れた位置ごとに分類する。その結果は次の通りである。

表 11　情を表す呼びかけ語の分布

位置	呼びかけ語全例数	情を表す呼びかけ語の例数
文頭	528	74
文中	12	4
文間	546	160
文末	1129	350
合計	2215	588

情を表す呼びかけ語は、全呼びかけ語の約 27%を占める。残りの約 73%は個人名の用例ということになる。それぞれの位置の例数を見ると、個人名を含む呼びかけ語では、文頭と文中の例数にあまり差がないのに対して、情を表す呼びかけ語では明らかな差が見られる。この結果から、情を表す呼びかけ語は固有名詞を含む呼びかけ語全体と比べると文頭では現れにくく、文中や文間、文末で現れることが分かる。この理由をそれぞれの位置における機能との関連から分析していこう。

[65] 「現在では、親族関係において目下から目上の聞き手に対して個人名で呼びかける場合もある」という母語話者の意見もあったが、今回使用したデータでは、すべて親族名称が用いられていたので、この基準を採用する。

5.4.2.2. 情を表す呼びかけ語を含む文の機能の分類

まず、情を表す呼びかけ語がどのような機能の文に伴って現れるかを見てみよう。

表 12　情を表す呼びかけ語を含む文の機能の分類

文の機能	位置				
	文頭	文中	文間	文末	合計
言明	52	4	65	118	239
行為指示	8	0	51	76	135
行為拘束	0	0	0	0	0
宣言	0	0	0	0	0
感情表現	1	0	10	45	56
質問	5	0	14	61	80
感嘆	8	0	11	18	37
返答	0	0	9	32	41
合計	74	4	160	350	588

言明および行為指示では、情を表す呼びかけ語の使用が多く見られる。前節で述べたように、呼びかけ語を用いることによって FTA の威力を和らげたり、FFA をより強めたりするポライトネスの機能を果たす[66]。Edeso Natalías（2005: 132）と Haverkate（1979: 86）が主張するように、情を表す呼びかけ語の語彙によってさらにポライトネスの態度を強調する効果があると考えられ、命令の FTA 的威力を和らげるために言明や行為指示に情を表す語彙を伴うのは自然であろう。しかし、挨拶や返答においても、個人名の場合と比べて使用頻度が高い。これは情を表す呼びかけ語の特徴と関係があるのだろうか。なお、Edeso Natalías（2005: 132）は「FFA の行為である感謝や賞賛では、年齢や性別を表す呼びかけ語が頻繁に用いられる」と説明しているが、今回はあまり例が見られなかった。

ではそれぞれの位置における情を現す呼びかけ語の機能を見ていこう。

[66] Beinhauer（1963: 109- 110）は、会話は話し手が聞き手を説得しようとする戦い（lucha）であるとし、その際に最も威力を発揮するのはポライトネスである、と述べている。

5.4.2.3. 実例における考察

5.4.2.3.1. 文頭の呼びかけ

前節でも考察したとおり、文頭の呼びかけは聞き手の注意を喚起する機能を持つが、情を表す呼びかけ語は文頭での使用例が少なかった。次の例を見てみよう。

(133) Sole: (*Murmura, a Raimunda*). Niña, nos tenemos que ir.

(*Volver*: 38)

(133)で、話し手 Sole は聞き手 Raimunda のすぐ横に座っており、違う方向を向いている Raimunda の注意を喚起するために、耳元でささやくように呼びかける。niña という呼びかけ語はその語彙的意味からも普通子供に対して用いられるものと考えられるが、Sole は成人である妹に愛情表現として niña と呼びかけている。しかしこの呼びかけ語は話し手の愛情を含んでいても、機能としては別の方向を見ている聞き手の注意喚起である。

次の例でも文頭の呼びかけは注意喚起の機能を果たしている。

(134) Luisa: Hola, Cata. Hija, me da no sé qué molestarte tanto, sobre todo cuando tú te quedas aquí sin ir a ningún sitio, pero, ya que me riegas las plantas, ¿no te importaría subirme y bajarme las persianas un par de veces al día?

(*Manolito Gafotas*: 66)

(134)では、隣人 Luisa が聞き手 Catalina に対して依頼をするため、文頭で hija と呼びかけて聞き手への愛情を表し、聞き手に許可を求める後続発話を和らげようとしている。また、前節で考察したように、聞き手にとって重要な話を切り出す前に注意喚起することによって、重要な発話の前置きとしての機能を果たしているとも考えられる。この機能は、文頭の呼びかけの基本的な機能から派生したものなので、本来はやはり注意喚起であると言えよう。このことから、呼びかけ語が情を表す語彙であっても、位置による基本的な機能は変わらないと考えられる。

では、なぜ文頭では他の位置と比べて情を表す呼びかけ語が現れにくいのだろうか。Haverkate（1979: 86）は、名詞などの呼びかけ語は文末に現れる傾向があり、これは文頭が典型的な注意喚起の位置だからであると述べている。表 11 で示した情を表す呼びかけ語の分布の結果から、この説明は特に情を表す呼びかけ語に当てはまると考えられる。(133)と(134)の例は、話者間の距離と発話状況を考えると聞き手はほぼ

特定されており、発話の冒頭に情を現す呼びかけ語を用いることができたのであろう。しかし、聞き手になり得る人物が複数いて、話し手がそのうちの 1 人に呼びかけたい場合に情を表す語彙を用いると、聞き手をはっきりと特定できない可能性がある。例えば、道路の反対側を歩いている友人に対して chico と呼びかけた場合、その周りにいる若い男性や子ども全員が振り返る可能性があり、聞き手の特定は困難だろう。

この傾向を確かめるため、母語話者に聞き手となり得る人物が複数いる(90)を提示し、固有名詞を cariño や hija などに置きかえることができるかを訊ねた。

(90)' [Una mujer se asoma desde una ventana de uno de los edificios de viviendas que dan al parque.]

Madre de Yihad: (Gritando.) ¡Yihad, que se te pasan las salchichas!

[Y otra mujer sale a otra ventana.]

Madre de Susanita: ¡Susana, las salchichas se te enfrían!

[Otras mujers cada una desde una ventana, llaman a los niños.
La madre de Manolito, Catalina, se asoma a la ventana con el Inbécil en brazos.]

Catalina: ¡Las salchichas, Manolito, súbete al abuelo!

(*Manolito Gafotas*: 22)

その結果、この場面で「cariño や hija を用いると不自然である」という回答と、「hijo などの語彙で呼びかけることはできるが、聞き手を特定するのは難しい」という回答が得られた。このことから、やはり情を表す呼びかけ語は注意喚起として機能しにくいことがわかる。

また今回のデータでは、情を表す文頭の呼びかけ語のほとんどが hija や señor、chico といった人を表す語彙であったが、これらの語彙でさえ場合によっては聞き手をはっきりと特定することができないのであれば、人以外を表す tesoro のような聞き手に対する何らかの評価を含む語は、注意喚起としての機能を余計に果たしにくいのだろう。ましてや見た目を表す guapa や bonita、listo のように性格や特徴を表す形容詞では、なおさら聞き手を特定しにくい。guapa や bonita といった見た目を表す形容詞は、時に誘い文句（piropo）として用いられることがあるというが、聞き手の性格や性質を知っていないと選択しにくい listo や ruso といった形容詞は、見知らぬ人を呼びかける際にはあまり用いられないと考えられる。実際に、そういった語は文中や文末に多く現れている。

このように、文頭の呼びかけは他の位置と比べて機能がより限定的なので、呼びかけ語の語彙も明確に聞き手を特定できるものに限られるのだろう。むしろ情を表す呼

びかけ語は、前章において話し手の発話態度がはっきり現れると結論づけた文末にこそ積極的に現れているのではないだろうか。

では文末に現れる語彙について見ていこう。

5.4.2.3.2. 文末の呼びかけ

5.4.2.3.2.1. 文末に現れる情を表す呼びかけ語の語彙

文末に現れる呼びかけ語の傾向を分析するため、以下にそれぞれの位置に現れる呼びかけ語の語彙の分類を示す。

表 13　それぞれの位置に現れる呼びかけ語の語彙

発話の機能	位置			
	文頭	文中	文間	文末
言明	hijo/hija (mío/mía), hombre, señoría, niña, chico, delincuentes, mujer, tío, cariño, capitán, imbécil, (mi) amor	chaval, mi amor	hijo/hija (mío/mía), hombre, señoría, chico, tío, hijoputa, amigo (mío), socia, delincuente, (mi) amor, mujer, coño, cabrón, jefe, chaval, señor/a, patrona, capitán, niño/a, colega, guapo	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, tío, señora, señoría, chico/a, (mi) vida, amor (mío), gorrión, niño, tronco, chaval, cariño, colega, doctor, majestad, cabrón, mamón, nena, tesoro, mi guardia, bocazas, rubio, guapo, bonita, tonto
行為指示	chico, mujer, hombre, hijo/a (mío), guarra, señorita, chaval	señoría, amigo (mío)	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, hermano, niño, señor/a, nena, tío, cariño, tesoro, majestad, cielo, corazón, mona, prenda, cabrón, ladrón, delicuentes, (mi) amor, colega, chaval, cielo, tonto	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, cariño, chaval, nena, señor, señoría, doctor, macho, niña, guarra, bestia, chico, chouquina, nena, corazón, imbécil, maricón, granuja, gilipollas. (mi) amor, prenda, foca, tronco, garrapata, guapo, ruso, precioso
行為拘束	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ
宣言	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ
感情表現	hombre, cariño	ϕ	nene, my sweetness, petootsens, chouquinalatte, chouquinoletina, nena, capitán, hijo/a, corazón, tronco, chaval, tío, hombre, gordito, chiquitín, (mi) amor	hijo/hija (mío/mía), señora, amiga, compañero, gorrión, marinero, my sweet poteto, cheribibí, bonito, doctor, jefe, guapo, madame, chico, precioso, corazón, amor, socia, cariño, gordita, hombre, capitán, majestad
質問	hombre, capitán, hijo/a	ϕ	mujer, niño, (mi) vida, tío, hijo/a (mío), guapo, doña, chaval, concejal, tronco	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, doctor, niño, chaval, chiquitín, jefe, doctor, capitán, imbécil, señor, chocho, tronco, tío, gordito, colega, cabrón, gilipollas, hijo de puta, bestia, gorrión, cariño, camionero copiloto, listo, tonto
感嘆	hijo/a (mío), chico, hombre, tío, cabrón, jefe	ϕ	hijo, hermano, tío, hombre, colega	hijo/hija (mío/mía), tío, viejo, mujer, tesoro, macho, (mi) amor, hombre, tronco, chaval
返答	ϕ	ϕ	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, chiquitín, gordito, (mi) amor, tío	hijo/hija (mío/mía), señor, señoría, hombre, mujer, chico, (mi) amor, vieja, bonita, pobre, tonta, punkita

この結果から、文末では他の位置と比べて様々な語彙が現れていることが明らかである。これは、文末では話し手の発話態度が他の位置と比べて顕著に現れるので、そこへ語彙的意味を持つ呼びかけ語を用いると、さらに効果的に聞き手をどのような立場に置こうとするか、という発話態度を表明できるためだろう。

例えば、señor という呼びかけ語は聞き手に対する敬意を表すが、主に文末に現れ

る。

(135) Don Gregorio: Llámelo por favor.
Rosa: Sí, señor.

(*La lengua de las mariposas*: 18)

Beinhauer (1929: 164) によると、返答に続く señor という呼びかけ語はすでに固定化された表現であり、Sí, señor.や No, señor.のように、返答に続けて発話されるという。他に señoría、doctor や profesor といった敬称も敬意を表すために用いられる。このような話し手の発話態度を表す語彙は、文末で最も効果が現れるのである。文頭で señor と呼びかけた場合、聞き手に対する敬意は伝わるだろうが、その位置ではやはり聞き手の注意喚起の機能が強く、聞き手も後続発話に注意を傾けるので、話し手の敬意の表明は文末に比べて弱まるだろう。一方、情報を伝えた後の文末では、呼びかけ語の語彙は文頭と比べてより際立つ。実際に camionero copiloto や jefe のように特別な意味をもつ即興で作られる呼びかけは文末に現れている。また前節で考察した(130)では文末の guapo は「うぬぼれるな」という言語外の情報を含むが、母語話者によると、文頭に guapo を置くとそのようなニュアンスは感じられないという。これは、guapo が先行する発話内容に対して「うぬぼれるな」という言語外情報を付加するからだと考えられる。従って、文末に置かれる呼びかけ語は先行する発話内容に関わっていると言えるだろう。

さらに、表 13 の結果から文末の呼びかけのもう 1 つの特徴が窺える。即興でつくられ、話し手の機知によって選択される呼びかけ語は、比較的情報量が多い言明（主張や説明）ではあまり用いられず、質問や挨拶、返答といった短い発話に現れている。具体的に例を見ていこう。

5.4.2.3.2.2. 情報伝達が優先される場合

次の例は、主張を表す例である。

(136) Regina: ¡Yo puedo dar copas por la noche, niña!

(*Volver*: 87)

(137) Raimunda: ¿No estabas muerta?
Abuela: He vuelto para pedir perdón.
[Raimunda la mira blanda, sorprendida e inquisitiva.(¿Perdón?) ¿A mí?]
Abuela: (Ruega que la crea.) Yo no sabía nada, hija mía. Ni me lo podía

imaginar.

(*Volver*: 159)

(136)では、話し手 Regina が聞き手が経営する食堂でドリンクを担当したいと主張し、聞き手に niña と呼びかけている。また(137)では、ベッドの下に隠れていた Abuela を見つけた Raimunda に対して hija mía と呼びかけ、Raimunda が Abuela の夫である Raimunda の父から虐待を受けていたことについて、「私は何も知らなかった」と主張している。この 2 つの例では、聞き手に愛情を含むと考えられる語彙が用いられているが、話し手の発話態度を表す文末の語彙だけでなく、伝達した主張内容そのものが聞き手に理解されることも重要だろう。主張や説明といった言明の行為は、伝達することを目的とするものであり、その意味で緊張感の高いコミュニケーション場面であると言うことができる。このような場合に話し手の機知によって選択し、言葉遊びの性質を持つ語彙で呼びかけると、話し手の主張を正確に伝える妨げとなるのではないだろうか。そういった語彙は、cariño や hijo など頻繁に用いられる語彙と比べて発話状況や人間関係に応じて特別な意味を含む。そのため、発話内容の情報伝達を目的とする主張に用いると、主張内容と呼びかけ語の語彙がそれぞれに情報を強く持ち、結果的に情報伝達そのものに影響を及ぼす可能性がある。特に、(137)のような話し手が聞き手にすがろうとする場面で特徴的な語彙を用いて呼びかけると、話し手が不真面目に発話をしていると聞き手が受け取り、聞き手の怒りをひき起こすかもしれない。このような理由によって、情報伝達が重要となる場合には選択する語彙の自由度が低いと考えられる。

同様に、説明の例においても特徴的な語彙は現れていない。

(138) Otra vecina: Yo al único que pienso votar es a Cristo Rey.
Rosa: (Con gracia.) ¡Los reyes no se presentan a las elecciones, <u>mujer</u>!
Y Cristo menos, que bastante tiene con lo suyo.

(*La lengua de las mariposas*: 28)

(125)' Abuelo: Hay formas y formas de regañar, <u>hija mía</u>.

(*Manolito Gafotas*: 48)

(138)では、話し手は聞き手の発話内容に関して説明し、また(122)では子供を叱る聞き手をなだめようとしている。このような場合、先の主張と同様に、発話内容そのものを伝達することがより優先され、話し手は無意識のうちに特別な意味を持たない呼びかけ語の語彙を選択しているのではないだろうか。(125)のような聞き手をなだめ

ようとする場面で、ユーモアで選択される語彙を用いると、主張の例と同様に、聞き手の怒りをひき起こす可能性があり、発話内容の伝達の妨げとなるだろう。

また、次の例では説明に呼びかけ語 tonto が伴っている。

(139) Manolito(OFF): Mi hermano es un niño bastante cinéfilo.
[El Imbécil la suelta y vuelve a coger una de las de dibujos.]
El Imbécil: Ésta.
[Manolito intenta convencerlo con una que le apetece a él,
alguna de Indiana Jones, por ejemplo.]
Manolito: Ésta es muy bonita, tonto...
El Imbécil: (Aferrándose a los dibujos.) No, ésta.
(*Manolito Gafotas*: 70)

呼びかけ語 tonto は、発話場面に応じて好感や嫌悪、皮肉など様々な態度を表す。この場面における Manolito の発話は、ある映画についての説明であり、Manolito は的外れな映画ばかりを選ぶ弟を tonto と呼びかけ、お気に入りの映画を勧める。そのため、この場面においては tonto は特殊な意味を持たず、否定的な意味を表す。しかし、(124)は発話状況から tonto を用いて聞き手への愛情を表していると考えられる。

(124)' Andrés: Pero, ¿a dónde ibas, tonto?
(*La lengua de las mariposas*: 17)

これらの例における差は、侮辱を表そうとしているのか、あるいは愛情を示そうとしている発話状況かどうかということだろう。呼びかけ語の語彙選択は発話状況によるので、主張や説明では必ずしも特徴的な語彙は現れない、と断定することはできない。しかし、話し手の真剣な態度を表し、発話内容の情報伝達を妨げないために、より一般的な語彙を選ぶ傾向があるとは言えるのではないだろうか。

5.4.2.3.2.3. 人間関係が重視される場合

一方、挨拶や返答のように、聞き手との人間関係が重視される発話では、様々な語彙が現れている。

(126)' Katerina: Alicia, my sweet potato... Adiós... goodbye my sweetness, petootsens, chouquinolette, chouquinoletina, cheribibí... Cuídate.

(*Hable con ella*: 88)

(128)' Julia: Hola, marinero.

(*Mar adentro*: 98)

(126)では、様々な言語で呼びかけ語が挨拶に続いて用いられている。Goffman（1982: 41）によると、挨拶は人間関係を強め補う行為である。呼びかけ語の語彙選択によって、話し手がどのような態度で、また聞き手とどのような関係を築こうとしてそのときの会話を始め、また終わろうとしているかを表すことができると考えられる。(135)では、話し手にとっての親愛の語彙で愛情を表し、(128)では、話し手 Julia は聞き手に対して冗談を言い合える関係であるという親しみを表して挨拶をしている。語彙選択そのものが 1 つのコミュニケーションであると言うことができるだろう。

本論文のデータには例が見られなかったが、Beinhauer（1929: 39）が指摘した話し手が聞き手に対して fea という呼びかけ語を用いて挨拶をする例では、本来侮辱を表す fea という語を親愛表現として用いる関係である、という前提を持って聞き手と話そうとしていると考えられる。

同様に返答においても人間関係が重要である。

(135)' Don Gregorio: Llámelo por favor.
Rosa: Sí, señor.

(*La lengua de las mariposas*: 18)

(140) Regina: Con tu escote y mis mojitos nos podemos hacer de oro, Mundita.
¡Vale, vieja!

(*Volver*: 108)

本論文では、質問に対する sí や no という返答だけでなく、vale や bueno といった承諾も、「返答」に分類している。こういった短い返答は主張や説明と比べると情報量は少ないが、聞き手の質問や依頼に答える行為なので、話し手は返答をする際に聞き手との人間関係を表そうとすることが考えられる。そうでなければ、聞き手は話し手が快諾しているのか、そうではないのかを判断することができないからである。(135)では、Don Gregorio が Rosa よりも社会的に上の立場であるので、señor という呼びかけ語は聞き手の命令に対して敬意を払って応えようとする表明である。敬称を伴う返答が固定化された表現となっているのは、こういった社会的関係の表明が頻繁に行われるからだろう。(140)では、話し手 Regina と聞き手 Raimunda は友人関係

であり、親しみを表すために vieja と呼びかけている[67]。情報量の少ない発話をする際には伝達方法が非常に重要であり、呼びかけ語はまさに発話内容をどういう態度で伝えようとしているかを表すものである。だからこそ、話し手同士の人間関係に応じて、様々な語彙が選択されるのだろう。

5.4.2.3.2.4. 発話態度がより強調される場合

また、命令や質問でも様々な語彙が現れている。

(141) Susana: Calla, foca.

(*Manolito Gafotas*: 43)

(142) Santa: No me toques los huevos, ruso.

(*Los lunes al sol*: 123)

(143) Elena: Toma, cariño.

(*Los girasoles ciegos*: 21)

亀井 他（1996: 1334）は、命令を「現存していない行為や状態を（聞き手に）実現させようとする意図をもって発せられる文」と規定している。従って、命令を下す話し手と聞き手がどういう関係であるかを、呼びかけ語の語彙によって表していると考えられる。嫌悪を表す語彙を用いる場合は、話し手が聞き手を遠ざけようとしており、好感を表す語彙を用いる場合には、協調関係にあることを示す、といった話し手の発話態度を付加し、命令を適切に調整することができるのである。(141)では、話し手 Susana が教師に告げ口をした祖母に対して foca（アザラシ）と呼びかけ、嫌悪感を露わにしている。ここで話し手が個人名で呼ぶか、または呼びかけ語を用いない場合、命令は foca を伴って命令するよりも、発話の厳しさが少し和らぐだろう。foca を伴うことによって、foca の語彙的意味が付与されると共に、「私は聞き手を foca と呼ぶことができる立場から命令する」という表明となり、非常に厳しい嫌悪感を表す。同様に(142)の話し手 Santa は、普段個人名で呼んでいるロシア人の友人が、自分の揚げ足を取るような発話をした際に、「話をさえぎるな」という意味を込めて自分と相手を明確に区別する ruso という語彙を用いている。一方、(143)では cariño という好感の語彙を用いて命令の FTA 的威力を和らげると同時に、話し手の聞き手である娘に対する愛情を表明している。呼びかけ語の語彙選択によって命令を調節するので、様々な語彙が選択されるのだろう。

---

[67] この場面の話し手 Regina はキューバの出身であり、スペインで用いられる呼びかけ語の語彙とは異なる可能性がある。

このように、命令の文でも挨拶や返答と同様に言葉遊びの性質を持つ語彙が用いられているが、命令の場合は選択理由が少し異なると考えられる。挨拶や返答は、それ自体が人間関係に大きく関わる行為なので、語彙によって話し手と聞き手の関係を話し手がどう捉えているかを表明することが重要である。これに対して命令は、どのように伝達するのかに重点が置かれる。命令を和らげたいならば好感を表す語彙を用い、精神的に聞き手を遠ざけ、より厳しい態度で伝達したい時には嫌悪を表す語彙を用いて命令を調節するのである。

質問においても、同様の理由によって特徴的な語彙が現れている。

(144) Manolo: ¿Qué os da tu madre que cada día estáis más gordos, garrapatas?
(*Manolito Gafotas*: 55)

この例では、話し手 Manolo が息子達を garrapatas （ダニ）と呼んでいるが、話し手と聞き手は親子であり、これは長期の仕事から帰ってきた父親の久々に会った子どもたちに対する発話なので、通常嫌悪を表す動物名称 garrapatas は語彙的意味そのものを表さず、親愛表現として用いられていることがわかる。

次の例も見てみよう。

(127)' Alicia: (A Manolito.) ¿Te apetecen un par de huevos fritos, camionero copiloto?
(*Manolito Gafotas*: 100)

(129)' Conductor: ¿Y qué se le perdió a usted en Boiro, jefe?
(*Mar adentro*: 159)

(127)や(129)では、話し手と聞き手が協調関係にあることを表明する発話態度を、呼びかけ語によって表していると考えられる。聞き手に質問をする場合にも、話し手の発話態度は重要である。質問とは、聞き手に何らかの返答を要求する行為であるが、(125) の¿Cuáles, listo?という発話が話し手の苛立ちを含むように、発話状況によっては聞き手に対する非難を含んだ詰問になる可能性がある。そうならないために、どのような立場から質問しているかを呼びかけ語の語彙によって示すのである。

これらの傾向を一般化するには、本論文のデータだけでは不十分であり、例外も存在する可能性があるが、発話の情報量と語彙選択との関連性が窺える。今後さらに分析を続けていく必要があるだろう。

5.4.2.3.3. 文中の呼びかけ

では、情を表す語が文中や文間で現れる割合が増えたのには、どのような理由があるのかを考えていこう。文中の呼びかけは、条件節と帰結節の間、あるいは主節と従属節の間で現れ、後続発話に対する聞き手の注意喚起の機能を果たすものである。具体例を見てみよう。

(145) Don Gregorio: La Naturaleza, amigos míos, es el más sorprendente espectáculo que puede ver el hombre...

(*La lengua de las mariposas*: 46)

(146) Julia: Y antes, si tú quieres, Ramón, mi amor, me gustaría ayudarte...

(*Mar adentro*: 111)

(145)は、教師が生徒たちに自然について説明をしている場面であるが、主語と動詞の間に呼びかけ語が現れている。1 つの文をあえて区切って呼びかけており、個人名の場合と同様に、後続発話に聞き手の注意を喚起している。また、(146)は全身不随の聞き手の自殺を手助けしようという非常に重要な内容の提案である。この場面においては、個人名の後に聞き手への愛情を表す語彙を用いている。個人名で呼びかけた後に、あえて mi amor という語彙でもう 1 度呼びかけることによって、「愛しているから手伝いたい」という態度を示しているのではないだろうか。母語話者によると「この例では聞き手を 2 度呼びかけることによって重要な後続発話が際立つ」と言い、後続発話への注意喚起として機能していると考えることができるだろう。たとえ情を表す語彙であっても、1 つの文を途中で区切って文中で呼びかけていることから、聞き手の注意を後続発話に喚起する機能を果たすと考えられる。

5.4.2.3.4. 文間の呼びかけ

等位接続や並列的接続の間で現れる文間の場合には、主に先行発話の文末的要素を持つ。話し手の情を表す語彙を用いることによって、文末と同様に個人名では表すことのできない情報を付加することができるだろう。

次の例は、Raimunda が「(死体を隠した) 冷蔵庫を土に埋めるのを手伝ってほしい」と友人 Regina に申し出て、Regina はそれを受ける代わりに客が支払うドリンクの代金の全てを渡すよう条件を出した後の発話である。

(147) Raimunda: De acuerdo, socia, pero de esto ni una palabra.
Regina: ¡Qué remedio! ¡Ahora soy tu cómplice!

(*Volver*: 136)

Raimunda は Regina の条件を受け入れ、socia（仲間）と呼びかけて他言しないようにと告げる。呼びかけ語の後ろの発話は接続詞 pero を伴っているので、この呼びかけ語は先行発話の文末的要素である。母語話者によると、ここで socia という語彙を選択することによって、「Regina が Raimunda を手伝うことを確認させ、他言させないために共犯者という関係を作り出そうとしている」という。また、「この場合に個人名で呼びかけると、Raimunda のそのような意図を明確に表明できない」という。呼びかけ語の語彙が発話に与える影響は強いが、情を表す文間の呼びかけの基本的な機能は、個人名を用いた例の機能と同様に、先行発話 De acuerdo の文末的要素である。

また、文間でも個人名の場合と同様に、注意喚起の機能を持つ oye などの後に情を表す呼びかけ語が用いられている例が見られ、このうち 8 例は個人名に伴う例であった。

(116)' Conductora: Lydia, <u>tesoro</u>, no seas ordinaria, déjame terminar la pregunta.

(*Hable con ella*: 30)

(148) Ramón: José, <u>hermano</u>, escúchame un momento por favor.

(*Mar adentro*: 88)

(149) Gené: ¡Marc, <u>cariño</u>, haz el favor de mirar al frente!

(*Mar adentro*: 113)

上記の(116)、(148)、(149)の 3 例では、文頭で個人名を呼びかけ、その後に情を表す語彙を用いている。これらの例では、1 度呼びかけているので、聞き手はすでに明らかであり、情を表す語を用いて改めて注意喚起をする必要はない。それでも名詞や形容詞を用いて呼びかけるのは、話し手が聞き手との関係を表明するためであり、そうすることによって発話内容への態度を付与しているのである。(116)、(148)、(149)の 3 例は命令なので、情を表す語彙を伴うことによって、話し手は命令の FTA 的威力を和らげようとしていると考えられる。そのような機能を果たしていても、注意喚起という位置による基本的な機能には影響せず、上記の全ての例がこれまで考察してきた文間の呼びかけとしての機能を果たしている。この用法は、情を表す文間の呼びかけ特有のものであると言えるだろう。

また、情を表す語彙は聞き手を特定できない可能性があるので、文頭で注意喚起と

してはあまり用いられないが、文頭の個人名やoyeのような注意喚起の機能を持つ語の後では、すでに聞き手が特定されているので問題なく使用可能であり、個人名やoyeと共に注意喚起の機能を果たすと考えられる。また、先行発話の文末要素の場合は、発話態度の表明という文末と同様の機能を果たすので、状況に応じて様々な語彙を選択することができるのだろう。これが情を現す文間の呼びかけの割合が増えている理由と考えられる。

このように、情を表す語は語彙的意味、あるいは発話状況に応じて表す特別な意味によって、話し手の発話態度を効果的に表す。しかし、それぞれの位置による機能には影響しない。例えば、へつらいの態度を表すcaptatio benevolentiaeを、好感の意味を持つ語彙を用いて文中あるいは文末で表したい場合、どちらの位置でも聞き手に働きかけようとする態度を示すことができるが、位置による機能の上に態度が付加される。文中では後続発話の注意喚起として、また文末では、話し手の発話態度がより際立つと考えられる。従って、位置による機能が優先的であり、その機能の上に語彙が話し手の発話態度を付加すると言うことができるだろう。文頭は注意喚起の位置なので、情を表す呼びかけ語が現れにくい傾向がある。しかし、話し手の発話態度を効果的に表明できる文末では様々な語彙が現れて、個人名を用いるよりも、話し手の発話態度をより明確に言語表現することができるのである。

5.5. 呼びかけ語と「ね」、「よ」

では、スペイン語の呼びかけ語と日本語の「ね」、「よ」は対応するのだろうか。まず、文末の事例から考察していく。

5.5.1. 文末の呼びかけ語と「ね」、「よ」

呼びかけ語は、話し手が聞き手に接近することを表明するものであり、様々な発話に伴う。どのような場合に「ね」、あるいは「よ」に対応するのかを考察するために、本論文のデータの中から無作為に100例を選び、「ね」、「よ」のどちらに対応するかを調査した。うち51例が「よ」、20例が「ね」に対応し、29例はどちらにも対応しなかった。「よ」に対応するのは言明、行為指示、返答などの発話であり、「ね」は感情表現の行為のうち、感謝や謝罪、挨拶の一部の例であった。また、どちらにも対応しないのは質問の例であった。これらの事例を個別に見てみよう。

5.5.1.1. 「よ」に対応する呼びかけ語の事例

次のような言明の例では、「よ」に対応することが多いと考えられる。

(93)' Sole: Pues eso, que no tiene la cabeza buena, Raimunda.
Raimunda: ¡No me gusta que hables así de la tía, Sole!

(*Volver*: 40)

(150) Manuela: Ya pasaron las tres horas, Ramón.

(*Mar adentro*: 23)

(151) Benigno: Mi problema no es el cáncer, Marco.

(*Hable con ella*: 185)

言明は、話し手の持つ情報を聞き手に伝達する行為である。これに伴う場合の呼びかけ語は、聞き手との近さを表明する。一方、日本語で言明に伴うのは、話し手と聞き手の知識（認識）が一致していない場合に用いられる「よ」であることが多い（白川 1992: 39）。これらの発話を翻訳する場合、何も付加しないとぶっきらぼうな印象を受けるが、「よ」を用いて、(93)では「あまり頭が良くないんだよ」、「おばさんのことそんな風に言うのは嫌だよ」、(150)は「3 時間経ったよ」、(151)でも「問題はガンじゃないんだよ」と訳すとすわりがいいと考えられる[68]。また、スペイン語で呼びかけ語のつく例を日本語で考えた場合、呼びかけ語をそのまま名前で訳すこともできるが、日本語では文末で聞き手の名前を呼ぶことはあまりない。そのような場合に終助詞を用いて訳すことによって、聞き手への近さを表明する呼びかけ語が持つニュアンスを日本語でも表すことができるのではないだろうか。

また、返答の場合も「よ」と対応する。

(86)' Andrés: ¿Es por la guerra?
Rosa: Sí, hijo... Dicen que han ganado los militares.

(*La lengua de las mariposas*: 91)

(86)では、聞き手の質問に対して話し手が返答している。返答は、聞き手が知らない情報を断定する行為なので、言明の場合と同様に(86)は「そう（だ）よ」と、話し手と聞き手の認識（知識）が一致していない場合に用いられる「よ」で訳すことができる[69]。

行為指示にも「よ」を伴う場合がある。

---

[68] 文末において、呼びかけ語と終助詞の機能が一致していれば当然翻訳の際に問題なく訳せるはずである。本来なら呼びかけ語がどのように訳されているかを確認すべきだが、映画の字幕というものは、付加的な形式を排除して命題のみを表すものである。従って、終助詞は省かれていることが多い。

[69] 本論文で「返答」に分類した承諾は終助詞を伴わない。

(152) Ramón: ¿Pero qué dices, Rosa...? La habrás pillado en un mal momento... No, pero ella siente que invadiste un poco tu terreno, tú también tienes que comprenderla... Y bueno, yo últimamente ando un poco liado. Sólo te pido que avises antes de vebir. Una llamada de teléfono y ya está. (*Pausa.*) Pero no llores, Rosa... Claro que quiero verte... De verdad, que sólo es eso...

(*Mar adentro*: 109)

(152)は、「泣くな」とゼロ形式で発話することもできるが、「よ」を用いて「泣くなよ」とすることもできる。(152)のような聞き手を慰める場合は、呼びかけ語を伴うことで聞き手に寄り添おうとする話し手の態度が窺えるので、「よ」を伴った方がより適切だろう。

しかし、次の例では呼びかけ語を伴うことによって命令が強まっている。

(153) Paco: Buscaré trabajo yo, pero de momento déjame ver el partido tranquilo...

Raimunda: Vete despidiendo del fútbol. Se acabó canal plus... ¡Somos una familia pobre y viviremos como una familia pobre! (*A Paula, le grita*). ¡Deja el teléfono, Paula!

(*Volver*: 45)

(153)は、夫に腹を立てている話し手 Raimunda が長電話をしている娘 Paula に電話を切るよう命令する場面である。聞き手への接近を表す呼びかけ語は、話し手と聞き手が声で触れ合える近い関係であることも表明するのだが、これには二面性があり、聞き手との親密さを表す場合と、聞き手に配慮をせず領域に触れる厳しさを表す場合とがある。命令に伴う場合も発話状況によっては和らげにも強めにもなり、この場面では、聞き手の名前を呼ぶことによって命令を和らげようとしているのではなく、聞き手に威圧的に働きかけていると考えられる。このような場合にも、日本語では「電話を切りなさい」よりも、「電話を切りなさいよ」のように「よ」を用いて威圧的な意味を付加することができるだろう。

命令に伴う「よ」について、上野（1972: 72）と白川（1993: 8）は次のような例を挙げている。

(34)’ 行けよ。（下線部筆者）

（上野 1972: 72）

(36)’ A: おい、ちょっと、そこどけ。
[相手が、どかない]
A: どけよ。

（白川 1993: 8）

(34)の例について、上野（1972: 72）は「『よ』を付加しない命令文より調子が弱くなる」と説明しているのに対して、白川（1993: 8）は(36)のような例では「逆に調子を強くしているとしか考えられない」とし、このような場合の「よ」は「その発話が確実に聞き手の耳に入るように聞き手の注意を喚起する」ものであると述べている。それが和らげ、あるいは強めと感じられるかは発話状況などによるのであろう。

このように、「よ」は注意喚起という機能によって命令を和らげたり強めたりすることができる。これは発話状況によって判断されるものであり、日本語においては和らげと強めを区別する助詞はなく、どちらも「よ」が用いられるのである。もし命令を和らげていることを明確に表すなら、「行け」という命令を「行って」と依頼の形式にしたり、「来い」を「おいで」のように語彙自体を変えて表現する必要がある。

一方、スペイン語では固有名詞によって命令が厳しく聞こえるのを避けたければ、呼びかけ語の語彙を変えて調節することができる。

(154) a. Ven, Rosa.
b. Ven, cariño.

(154)a の固有名詞 Rosa を(154)b のように cariño に変えることによって、発話内容を変えることなく聞き手への愛情をより明確に示して命令が和らげることができる。また Ven, mujer.のように、話し手と聞き手の間に距離を置くような語彙を用いると、さらに発話の聞こえ方が変わるだろう。このように、呼びかけ語の語彙によって「人あたり」を調節するので、スペイン語では呼びかけ語の語彙が発達したのではないかと考えられる。

また、呼びかけ語を付加することによって現れる含意が「よ」に対応する場合もある。

(101)’ Raimunda: ¿¡A mi madre!? Mi madre está muerta, Agustina.

（*Volver*: 123）

先に見たように、この例における文末の呼びかけは、聞き手に接近して発話することによって威圧的に働きかけるのと同時に、聞き手に対して「何を言ってるのか？私の母親が死んでいることを知っているだろう。」と再確認させており、呼びかけ語を伴わない場合、単なる新情報の提示になってしまう可能性がある。

日本語の「よ」はこれと同様に、言外の情報を含んでいることを示す機能を持つ。

(37)'（妻の反対をよそに市長選に立候補する芳彦）

芳彦: 市長選に立候補するよ。

房子: あなた……（絶句）（中略）本気でいってるの？

芳彦: むろん本気だ。

房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ。

（中﨑 2005: 82）

この発話では、「よ」を付加しなければ聞き手にとって既知の情報（聞き手が大学の先生であること）をことさら述べるので不自然であり、発話を「字義通りの意味だけでなくある種の言外の意味を推論によって導き出し発話」の解釈、すなわちここでは「大学の先生である者が、市長選挙などに立候補するべきではない」という解釈をしなければならないという（中﨑 2005: 82）。これらの例ではどちらも、呼びかけ語や「よ」の存在によって発話に言外の意味を含んでいることを示すという点で一致している。

5.5.1.2. 「ね」に対応する呼びかけ語の事例

しかし、「よ」を伴うことが多い言明でも「ね」の方が自然な場合もある。次の例は、失踪した母親を探すためにテレビの情報番組に出演している Agustina に対する、Locutora の発話である。

(155) [La locutora se acerca al set donde está sentada Agustina y se sienta frente a ella, como para darle a la entrevista un tono más íntimo.]

Locutora: (Al público). Me gustaría explicar que Agustina está aquí también para comunicarnos que le han diagnosticado (mal pronunciado) una enfermedad mortal. ¿No es así? Agustina tiene cáncer. (A Agustina). Tienes cáncer, Agustina. No estés nerviosa, que está entre amigos. A ver, (al público) un aplauso para Agustina.

[El público obedece y aplaude con entusiasmo.
Agustina mira inquisitiva las gradas de los espectadores, y la invade una sensación de insoportable extrañeza.]

(*Volver*: 153)

Locutora は、Agustina が癌であることを観客に伝え、その後に Agustina 本人に確認している。母語話者に対するアンケートでは、「この例における呼びかけは、自らの病を知っている Agustina に癌であることを確認する」機能があるという[70]。確かにこの発話は聞き手を慰める場面ではなく事実を述べているので、親密さを表す呼びかけ語とは考えにくい。また、この発話は本論文の規定では言明に分類されるため、呼びかけ語は「よ」に対応し得る。しかし、呼びかけ語の先行発話は聞き手にとっては旧情報であり、自らが癌であることを知っている聞き手に対して「癌ですよ」と言うのは不自然であり、出典の映像で日本語の字幕を確認すると「癌ですね」と「ね」が用いられていた。日本語では縄張り理論でも指摘されているように、終助詞は聞き手と情報との関係を示すものであり、話し手と聞き手の情報が同一である場合には「ね」が用いられる（神尾 1990: 62）。そのため、この発話は言明であっても「ね」に対応するのである。また、筆者の日本語の直感では「癌ですよね」でも問題はないように感じられる。本論文では「ね」と「よ」のみを対象としているので、今回は詳しく言及しないが、このような聞き手にとって旧情報となる発話内容に伴う呼びかけ語と終助詞との対応は、今後も考察する必要があるだろう。

また、次の例においても「ね」の方が自然である。

(129)' [El conductor sonríe a Ramón por el retrovisor.]

Conductor: ¿Y qué se le perdió a usted en Boiro, jefe?
Ramón: Me voy a la playa, a... cambiar de aires.
Conductor: A cambiar de aires... Eso está bien, hombre...

(*Mar adentro*: 159)

(129)は、Boiro へ転地するという聞き手に対する発話である。この発話は先の(155)

[70] もしこの呼びかけ語が文頭で用いられると、「医師が Agustina に癌の宣告をしている」ような発話となり、この場面においては不自然であるとの回答も得られた。文末に置くからこそ、自分が癌であることをわかっている Agustina に対する確認になるのだろう。しかし、この呼びかけ語を省くことができるかについては、意見が 2 つに分かれ、呼びかけ語を伴わなくても同様の機能を果たすかについては明確な回答が得られなかった。¿verdad?や¿no?ではなく、呼びかけ語を用いて聞き手に確認している点で、非常に興味深い事例である。

のように旧情報ではなく、話し手の判断を伝達する言明であり、呼びかけ語は聞き手への親密さを表していると考えられる[71]。しかし、この例では「それはいいですよ」とするよりも「それはいいですね」と「ね」を用いるほうが自然であろう。これも日本語では聞き手により関わる情報を述べる場合に「ね」を付加する必要があるためである（神尾 1990: 62）。つまり、スペイン語では呼びかけ語は、言明だけでなくどのような発話に伴っても聞き手への接近を表明するだが、日本語では、それが「よ」に対応する場合と「ね」に対応する場合があるということである。

しかし、感情表現に分類される感謝や謝罪が呼びかけ語を伴うと「ね」にのみ対応すると考えられる。表 4 を見ると、感謝や謝罪の例では呼びかけ語や疑問形式の¿eh?を伴うことが多かった。ゼロ形式の場合や eh を伴う場合と比べて、呼びかけ語を伴うと聞き手への接近が表明されるので、より「ね」に近いニュアンスを持つのではないだろうか。

(156) Gracias por la cartera, Benigno.
(157) Perdona, canguro[72]. Lo siento.

これらの例を、¿eh?を伴う場合と合わせてスペイン語母語話者に提示したところ、「呼びかけ語を伴うと、¿eh?と比べて聞き手への親近感や誠実さが感じられる」という回答が得られた。これは呼びかけ語が持つ話し手の聞き手への接近を明示する機能によって、聞き手に本当に感謝している、あるいは申し訳なく思っている態度が現れるためだろう。また、前章で考察したように日本語では感情表現の行為には「ありがとうね」、「ごめんね」のように、聞き手が判断し得る余地を残して伝達するために「ね」を伴うのが普通である。この聞き手を意識して伝達する機能と、スペイン語において話し手が聞き手に接近することを明示する機能が一致すると考えられる[73]。

また、挨拶の例では「ね」を付加するのが自然な場合と、ゼロ形式の方が自然な場合があった。

(158) Monitora Jefe: Hasta mañana, Ángela.

(*Solo mía*: 33)

---

[71] hombre は呼びかけ語だけでなく、間投詞としての用法も持つが、この発話では明らかに聞き手に向けられているので、呼びかけ語としての機能を果たしていると考えられる。
[72] (157)の聞き手はベビーシッターなので、聞き手の名前を知らないと仮定して canguro とした。
[73] 同じく謝罪を表す Lo siento, cariño. (*Solo mía*: 34)も「ごめんね」に対応すると考えられるが、Te pido perdón, Rosa. (*Mar adentro*: 94)は「謝るよ」になる可能性もある。

(158)は、「また明日ね」のように「ね」を用いるのが自然だろう。しかし、次の2つの例では「よ」も「ね」も用いず、ゼロ形式になる。

(98)' Ana: Hola, Santa.

(*Los lunes al sol*: 131)

(99)' Ramón: Adiós, Gené.

(*Mar adentro*: 157)

日本語の挨拶は「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」、「さようなら」などすべて終助詞を伴わない。「また明日ね」や「じゃあね」などには終助詞を伴うが、これは「また明日会おうね」や「じゃあまた会おうね」といった発話の省略した形であり、「おはよう」や「さようなら」といった典型的な挨拶とは異なるものと考えられる。従って、本来の挨拶表現に伴う呼びかけ語は終助詞は対応しないと言えるだろう。

また、スペイン語では呼びかけ語だけでなく¿eh?も挨拶に伴うことがある。しかし、¿eh?が現れるのは(77)のような別れの挨拶のみであった。この現象について母語話者に意見を求めたところ、Hola.や Buenos días.などの挨拶に¿eh?を伴うのは不自然であるということだった[74]。一方、呼びかけ語は別れの挨拶だけでなく、出会いの挨拶にも伴うことができる。Goffman（1982: 41）は、挨拶について次のように述べている。

> Greetings provide a way of showing that a relationship is still what it was at the termination of the previous coparticipation, and, typically, that this relationship involves sufficient suppression of hostility for the participants temporarily to drop their guards and talk. Farewell sum up the effect of the encounter upon the relationship and show what the participants may expect of one another when they next meet.
>
> (Goffman 1982: 41)
>
> （出会いのあいさつは、前回の出会いが終わったときに存在した関係が現在もなお続いていることを、そしてその関係には参加者が一時的に警戒心を捨てて話し合うことができるほど十分に対立関係を押さえこんでいることを示す、一つの方法である。別れのあいさつは、この出会いが彼らのあいだの関係に及ぼした影響を総括し、参加者が次回に会う時に期待するものが何かを示すもの

[74] 出会いの挨拶に¿eh?を伴う可能性があるとすれば、話し手が聞き手に挨拶したにも関わらず聞き手が挨拶を返さず、もう1度聞き手に挨拶をするような場合であるという。

である。）

（広瀬 他 1986: 37）

この記述に従えば、挨拶というのは人間関係に関わる行為である。しかし、話し手と聞き手の協調関係を表明する出会いの挨拶と異なって、別れの挨拶は話し手と聞き手がその場で発話した内容から及ぼした影響を総括し、次回会う時にも協調関係にあることを示すものと考えられる。呼びかけ語は、聞き手への接近によって、名前を呼ぶことができる近さを表明するので、出会い、別れのどちらの挨拶にも伴うことができる。しかし、¿eh?は発話内容の確認を求めるものである。そのため、協調関係を示すだけの出会いの挨拶には伴わず、その場の発話から及ぼした影響を総括する別れの挨拶と共起するのではないだろうか。

5.5.1.3. 終助詞が付加されない事例

「よ」、「ね」のどちらにも対応しないのは質問の例であった。

(96)' Ramón: ¿Y ahora qué hacemos, Manuela?

(*Mar adentro*: 115)

(97)' Catalina: ¿Dónde está el cristal, Manolito?

(*Manolito Gafotas*: 26)

益岡（1991: 97）は、「疑問型の対話文では終助詞があまり用いられない」と指摘している。これは、話し手が聞き手に情報を要求する質問では、「聞き手の知識が話し手の知識を上回っていると想定される」ので、「聞き手の知識との異同をことさら問題にする必要は、原則としてない」のだという。しかし、スペイン語では聞き手への近さを表明する呼びかけ語は情報の所有に関わらず、質問にも伴うことができる。

また、「よ」や「ね」を伴う発話でも呼びかけ語が敬称である場合、終助詞は現れない。

(135)' Don Gregorio: Llámelo por favor.
Rosa: Sí, señor.

(*La lengua de las mariposas*: 18)

(159) García: Perdóneme, capitán.

(*El laberinto del fauno*: 15)

日本語では、聞き手に対して敬意を表す言語表現である敬語が発達している。(135)の場合は「かしこまりました」、また(159)では「申し訳ありませんでした」と終助詞を用いなくても表現そのものを変化させて聞き手との社会的関係を示すことができる。だからこそ日本語では呼びかけ語を使用する必要がないのだろう。

5.5.2. 文頭の呼びかけ語と「ね（ぇ）」

呼びかけ語は、文頭の「ねぇ」に対応する。どちらも聞き手を呼びかけて注意を喚起し、後続発話に引き込む機能を持つ。

(92)' Agustina: Raimunda, quiero pedirte un favor.

(*Volver*: 123)

(19)' ねえ、ちょっとこのスープ、味、見てくれない？

（仁田他 2009: 158）

呼びかけ語を日本語に翻訳する際、文頭であればそのまま固有名詞を用いることも可能だが、(92)のように話し手と聞き手がすでに発話をしていて、聞き手が明確な場合、日本語では固有名詞ではなく「ねぇ」を用いるのが自然だろう。しかし、固有名詞の呼びかけ語は聞き手が複数いる場合にも個人を用いることができるのに対して、「ねぇ」には個人を特定できる要素がないので、聞き手が特定されている場合にしか用いられないと考えられる。また、(92)で話し手が切り出しにくい発話の前置きとして聞き手を呼びかけるのは、仁田 他（2009: 299）が(17)で指摘する、対人的な配慮を示す機能と共通している。呼びかけ語は聞き手との近さを表すことによって、「ね」の場合は聞き手との共有を表すことによって注意を喚起し、後続発話に耳を傾けるよう促すのである。

5.5.3. 文中の呼びかけと「ね」

呼びかけ語が１つの文を主節や従属節などの区切れで置かれ、後続発話に注意喚起する用法は、文の途中に現れて話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進める場合に用いられる間投詞の「ね」に対応する。

(103)' Ramón: La persona que de verdad me ame, Rosa..., será precisamente la que me ayude a morir.

(*Mar adentro*: 126)

(20)' 回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね（は

い）洗剤を入れますとね（…）

（伊豆原 1993: 104）

また、「よ」にも同じ用法がある。

(31)’ それでミヤザワさんよ、あんたがもうちょいとアメ車を買ってくれたらよ、誰もショーウィンドーにレンガ(保護主義)なんか投げ込まれないように、オレが面倒みてやるからよ。

（伊豆原 1993: 108）

しかしこの用法は、「聞き手の気持ちに関わりなく一方的に話を進めていくときの持ちかけであり、ぞんざいさ、押しの強さが感じられる（伊豆原 1993: 108）」と言い、呼びかけ語が表すような聞き手への近さを表す機能とは異なる。しかし、tío や colega など一部の若者が仲間内で用いるようなぞんざいさ（あるいはぞんざいであるからこその仲間意識や親密さ）を表す呼びかけ語には対応する可能性があるだろう。

このように、スペイン語の呼びかけ語と日本語の終助詞は、それを付加することによって聞き手への発話の聞こえ方を調節し、どのような態度で話し手が伝達しようとするかを表すものである。しかし必ずしも一対一の対応をするのではなく、同じ言明に伴う呼びかけ語でも「よ」になる場合と「ね」に相当する場合があり、また時に終助詞には対応しないこともある。これは、呼びかけ語が話し手が聞き手へ接近することを表明する行為であるのに対して、終助詞は話し手と聞き手との認識（知識）の一致（陳 1987、益岡 1991）、相対的な情報量（メイナード 1993）、発話と聞き手との関係を明示する（滝浦 2008）という、本質の差によるものと言えるだろう。

呼びかけ語と「ね」、「よ」との機能の対応は次のようにまとめられる。

表 14　呼びかけ語と「ね」、「よ」機能のまとめ

			呼びかけ語	ね	よ
性質			名前に相当する形式を呼ぶ	話し手と聞き手の認識（知識）の一致	話し手と聞き手の認識（知識）の不一致
機能	文頭	聞き手への注意喚起	○	○	○
		個人と特定	○	×	×
	文中	注意喚起（受けの確認）	○	○	○
	文末	近さの表明	○	×	×
		確認の要求	○	○	×
		和らげ	×	○	×
		聞き手への注意喚起	×	×	○

呼びかけ語は、聞き手の名前を呼ぶことができる親密さや上下関係を示すことによって、発話緩和や発話強調という副次的機能を果たす。一方、「ね」は話し手と聞き手の認識（知識）が一致していることを表明することによって発話を和らげ、「よ」は話し手と聞き手の認識に食い違いがあることを示し、聞き手に注意喚起することによって発話を強調する。これらの本質は異なるが、発話に与える副次的機能は一致する。

また、呼びかけ語は様々な発話に共起するが、名前という性質上、語彙によって調整する場合を除いて、それが和らげであるのか強めであるのかは、発話状況によってのみ判断される曖昧なものである。しかし、次章で扱う sabe(s) 、entiendes、 ves は言明に伴って、話し手の聞き手に対する発話態度を異なるプロセスで表明する。

6. sabe(s) [75]、entiendes、ves

6.1. 問題点

sabe(s)、entiendes、ves は、動詞 saber、entender、ver の 2 人称単数形（あるいは3人称単数形）であるが、間投詞的用法を持つ。Ortega（1986）は、これらを apéndices justificativos（正当化の補足表現）と呼んでいる。表 4 を見ると、言明にのみ伴っていることが確認でき、Martín Zorraquino y Portolés[76]（1999: 4187）は、これらの表現を聞き手に近づいたり親密さを表すものとし、話し手は、聞き手が情報や命令や忠告の理由を知らないとみなしていることを和らげ、注意喚起し、正当化して伝達すると説明している。これらの表現が、親密さの表明や、聞き手の情報の所有の有無に関わるとすれば、情報伝達時における話し手の発話態度を担うものと考えられるので、それぞれの表現の機能を解明し、正しく使用する必要があるだろう。

これらの使用数を表 3 で比べると、sabe(s)が最も多く、entiendes の約 3 倍であった。ves は entiendes よりもさらに少ない 21 例であった。sabe(s)は、文末での使用数が多いが、文頭や文間、単独[77]での例も見られた。これに対して entiendes は、文頭には現れず、文末の使用数が圧倒的に多い。ves は文頭、文間、文末で数例見られ、単独での使用が多くなっている。

sabe(s)、entiendes、ves は聞き手に知っているか、理解しているか、見たかどうかを尋ねたり断定するものであり、これが本質と考えられる。また、ves は単独での用法もあるので、sabe(s)、entiendes を終助詞と対照した後に扱う。

6.2. sabe(s)

6.2.1. 先行研究

sabe(s)に関する先行研究には、Ortega（1986）、Martín Zorraquino y Portolés（1999）、Briz（1998）や Fuentes（1990）が挙げられる。しかし、これらの考察では sabe(s)の機能に関する明確な規定は見られないので、実例を通して中心的機能を明らかにしていく。Ortega（1986）では、基本的な機能に関する記述は見られないが、共起する文の種類を挙げ、sabe(s)を伴った場合に発話にどのような効果をもたらすのか説明している。まず、言明に伴う場合には「語用論的強調（énfasis pragmático）」

---

[75] 本論文で用いたデータでは、sabes のみ 3 人称単数形 sabe が観察されたので、sabe(s)と表記する。

[76] Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4187）は、“sabes (y sus variantes)”と記述しており、疑問形の ¿sabes?だけでなく、sabes や usted に対する sabe も同様の機能を果たすと指摘している。

[77] 本論文の分類の基準上単独に分類されるが、実際には後続発話の文頭である例がほとんどなので、今回は扱わない。

であり、話し手の発話に対する意図を明示し、発話を正当化するものとして、次の例を挙げている。

(160) a. (...) Ha venido mucha gente al funeral.
b. (...) Ha venido mucha gente al funeral ¿sabes?（下線部筆者）
(Ortega 1986: 274)

(160)は、聞き手に「葬式にたくさんの人が来ていた」と説明をする例であるが、(160)のように¿sabes?を伴うと、話し手は発話内容について知らない聞き手に「その情報が聞き手にとって重要である」と判断して伝達する、という含意を持つという。形式上は疑問であるが、聞き手に発話内容を知って欲しい、という話し手の態度を表していると考えられる。

また、命令や依頼に伴う場合については、次のように述べている。

(161) ¡No cojas más cerezas más! ¿sabes?（下線部筆者）
(Ortega 1986: 279)

(161)の発話は、話し手が聞き手に対して¡No cojas más cerezas!と１度命令したにも関わらず、それに従わなかった聞き手に、再び命令する場合である。¿sabes?を伴うことによって、¡No cojas más cerezas!という命令は、すでに１度伝達された旧情報であることを表し、「聞き手は命令される理由がわかっているはずだ」という話し手の態度を示して命令内容をより強調するのだという。情報を知っているはずの聞き手にあえて疑問形の¿sabes?を用いることによって、命令内容を実行しなかった聞き手に対する非難を含んでいると考えられる。

さらに、命令や依頼という行為は、発話内容を聞き手が実際に行うことを目的としているとも指摘し、¿sabes?の使用によって「悪く取らないでほしい」、「なぜ命令（依頼）をしているかわかっているはずだ」という情報を含み、発話内容が聞き手の目にかなうよう、聞き手をそそのかそうとする、と説明している（Ortega1986: 282）。この指摘から、命令や依頼に伴う sabe(s)は、発話内容が聞き手に受けれられるものとして提示することによって発話を和らげ、聞き手に対して発話内容の実行をより強く求めると推測される。Ortega（1986）の命令に伴う¿sabes?の機能の指摘は、一見(161)に関する説明と矛盾しているように感じられる。しかし、１度目の命令に従わなかった聞き手への非難を表すか、あるいは命令内容が聞き手の目にかなうよう提示するかは、発話状況や音調によるものであり、聞き手に受け入れられるものとして伝達する、

という点では共通していると言えるだろう。

本論文で用いたデータでは命令・依頼を含む行為指示に伴う例は観察されなかったが、この sabe(s)の機能は、聞き手に対する主張や説明など言明の例にも当てはまるのではないだろうか。実際に(160)の例は、聞き手は葬式についての情報を知らず、話し手が伝達しているものであるが、話し手が聞き手にとってその情報を知ることが重要であり、聞き手は発話内容を受け入れ、理解してくれるだろうと判断していると解釈できる。また、Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4187）は、sabe(s)によって「聞き手との間に親密な雰囲気を作り、聞き手に近づく」と述べており、Fuentes（1990: 188）も話し手と聞き手の繋がりを作り出すと説明している。これらの説明も、聞き手に知ってほしい、または受け入れられるものとして伝達することによる効果であると考えられる。

さらに Fuentes（1990: 189）によると、sabe(s)が疑問形の場合、発話は新規情報であり、肯定形の場合には、既知情報であるという[78]。しかし(160)の例では、発話内容は聞き手にとって新規情報であるが、疑問形式が用いられている。この点に関しても、実例を通して検討しよう。

なお、Ortega（1986: 289）は sabe(s)について、文頭、文末に現れると述べているが、本論文のデータでは表 3 にも記したように文間でも現れている。次節では、位置による機能についても考察する。

6.2.2. 実例による考察

本論文のデータ中に現れた sabe(s)は、疑問形の¿sabe(s)?だけではなく、肯定形で ya lo sabes のように ya や目的語を伴うものも観察されており、Fuentes（1990）の指摘を十分に検証できるものと考えられる。

6.2.2.1. 文頭での用例

まず文頭の例である。これまで eh や呼びかけ語を通して考察してきたように、情報伝達前の文頭では、聞き手の興味を後続発話へ引きつけるように注意喚起する機能を果たす。

（162） [Luli tiene el teléfono cogido. Mira al vacío. Se oye la voz de Miguelito, débil, en el auricular. “Soy Miguelito.” Luli tarda en responder.]

Luli: ¿Qué quieres?

---

[78] El comportamiento de la forma interrogativa y afirmativa refleja la diferencia en la estructura del texto: lo nuevo y lo conocido. (Fuentes 1990: 188)

Miguelito: Verte. Quiero verte, Luli. Decirte la verdad. Lo que pasó. Lo que siento, Luli. Quiero verte, un día, una vez.
Luli: ¿Cuándo?
Miguelito: Cuando tú quieras.
[Silencio.]
Miguelito: Dime que sí, Luli. No puedes dejar que esto acabe así, Luli. ¿Sabes?, eres mi bailarina.

(*El camino de los ingleses*: 123)

(162)は、聞き手である Luli と喧嘩別れをした話し手 Miguelito が、「もう 1 度会って話をしたい」と告げる場面である。Miguelito の申し出に対してすぐに返答しない Luli に、Miguelito は「このまま自分達の関係を終わらせるべきではない」と述べる。その後、Luli への愛を表す eres mi bailarina という発話の文頭に¿Sabes?を用いている。この場面において、eres mi bailarina という発話は、Luli の返答を変え得る非常に重要なものであり、文頭で¿Sabes?を用いて聞き手の注意を後続発話へ喚起していると考えられる。この発話を母語話者に提示して意見を求めたところ、¿Sabes?を用いることによって聞き手の興味を引き、「今から大事なことを言うよ」という含意を持つという回答が得られた。単に聞き手の注意を発話に向けるのではなく、情報を知っているかを問う¿Sabes?という形式を取ることによって、後続発話に聞き手を引き込もうとしていることを聞き手に示すことができるのだろう。

もう 1 例見てみよう。

(163) Babirusa: ¿Tú sabes en qué trabaja mi madre en Londres?
Miguelito: En el metro, ¿no?
Babirusa: ¿En qué metro?
[Miguelito no entiende, se quedan mirándose hasta que el Babirusa coge un muevo trozo de revista y lo tira al fuego.]
Babirusa: ¿Sabes?, cuando llegué a Londres pensé cosas muy raras. Me gustó. Hasta el tío que se iba a casar mi madre me gustó. Y pensé cosas. Pensé que yo me podía ir a vivir allí, dentro de un año o de dos.

(*El camino de los ingleses*: 94)

(163)では、ロンドンに住む母親に会いに行った話し手 Babirusa が、ロンドンに行って思ったことを聞き手 Miguelito に説明する。この場面の後、Babirusa が自分の母

親が自分の考えていた職業とは全く異なる仕事をしていたことを話す。真実を知ってショックを受けた Babirusa は、今まで大事にしていた雑誌を燃やす。過去の自分を否定し、自暴自棄になっていく Babirusa の転機とも言える出来事を語る場面である。¿Sabes?の先行発話は母親の職業に関するものであるが、¿Sabes?の後続発話は、Miguelito にとっては先行発話とは関係のないように感じられる内容である。先の例と同様に、¿Sabes?を用いることによって、一見先行発話とは関係のないと思われる発話に聞き手の注意を引きつけ、この後の真実を語る発話へと聞き手を引き込んでいるのだろう。

上の 2 つの例はどちらも聞き手にとっては新情報であり、話し手は明らかに聞き手がその情報を知らないとわかっているにも関わらず、¿Sabes?という疑問形を用いている。そうすることによって聞き手の注意を後続発話に喚起し、聞き手を後続発話に引き込んで、情報を共有しようとするのであろう。しかし、どちらの例においても情報の伝達前なので、文末のように後続発話の内容への関与はなく、注意深く聞くよう求める機能のみを持つと考えられる。知っているかを問う内容を示す必要があるので、単独では用いられず、後続発話を伴うのだろう。

また、文頭に現れた sabe(s)は、全体で 10 例観察されたが、そのうちの 6 例が疑問形であり、この機能を果たすと推測される。残りの 4 例は、次の例のように ya などを伴うものである。

(164) Ana: ¿Te encuentras bien?

Fernando: Jodío niño: emborráchala, emcorráchala, como si fuera tan fácil...

Ana: ¡Pero a quién quieres emborrachar tú!

Fernando: Coño, pues a Cecilia.

Ana: ¿Y para qué?

Fernando: Pues... para equilibrar un poco de cosas, porque como a mi ella me gusta mucho...

Ana: ¿Y quién te ha dado ese consejo, uno de tus amigotes?

Fernando: No, un niño de nueve años.

Ana: Y luego cuando te has sentado conmigo y has seguido bebiendo sin parar, eso también te lo ha dicho un niño o se te ha ocurrido a ti solito...

Fernando: Eso ha sido por la ley de la inercia... <u>Ya sabes</u>, cuando un cuerpo en estado normal empieza a beber no puede dejarlo hasta que

se coge un pedo de campeonato... sobre todo si ese cuerpo es mío...

(*El penalti más largo del mundo*: 126)

(164)では、話し手 Fernando が姉 Ana に「酒を飲み始めると止められない」と言い訳をする場面である。この場合、Ya sabes を伴って後続発話が聞き手の既知情報である、あるいは既知情報とみなしていることを表すのではないだろうか。Fuentes（1990）も「肯定形が既知情報を表す」と指摘しており、すでに聞き手が知っていると断定し、「知っていると思うけど」と示して後続発話を導いていると考えられる。

もう１例見てみよう。

(165) Fernando: Joder, Ana, que te van a ver los vecinos.
Ana: Y qué, no estoy en pelotas.
Fernando: Porque eres mi hermana, que si no te echaba un polvo ahora mismo que te ibas a cagar.
Ana: No digas burradas.
(...)
Fernando: Pero... o sea, no es que a mí me importe, pero la verdad, tía, tú te mereces algo mejor.
Ana: ¿Cómo mejor?
Fernando: <u>Ya sabes</u>, joder, el tío... es mozo de almacén. ¿Tú quieres ser la mujer de un mozo de almacén?
Ana: ¡Pero tú también eres mozo de almacén!

(*El penalti más largo del mundo*: 62)

(165)では、話し手 Fernando が姉 Ana に自分の上司と食事に行くよう話す場面である。乗り気でない姉に対して、Fernando は上司について説明するが、Ana はこの上司と知り合いであり、彼の職業についても当然知っているので Ya sabes を用いて後続発話が聞き手の既知情報であることを表している。また、この発話では Ya sabes の後続発話は先行する Ana の質問に対する回答となっている。Fernando はどのように答えるか困っているが、質問に回答しようとしている、言いかえると聞き手に対して話題を維持する意向を表していると考えられる。実際に、(162)の例を Ya sabes に変えると話し手の情報提示の仕方に変化が見られる。

(162)' Miguelito: Dime que sí, Luli. No puedes dejar que esto acabe así, Luli.

Ya sabes, eres mi bailarina.

母語話者によると、(162)は「注意喚起の機能を持つ¿Sabes?を用いることによって、後続発話を重要な情報として提示している」と回答している。一方、(162)'のようにYa sabes に変えると、既知情報として提示することになり、¿Sabes?の時とは異なって、先行する「(喧嘩別れした自分たちの関係を) こんな風に終わったままではいけない」という発話に続けて「聞き手を説得しようとしている」という。これは、まさにya sabe(s)の聞き手との共有情報を表す機能によるものであり、先行発話の話題を維持していることを表明するので、先行発話に続けて説得しているように感じられるのだろう。このことからもya sabe(s)が注意喚起の機能を持たないことがわかる。

このように、疑問形の¿Sabes?は、知っているかを聞くことによって注意喚起や後続発話への引き込みの機能を果たすが、肯定形の場合は後続発話が共有情報であることを強く表し、話題維持を表明するものである。

6.2.2.2. 文末での用例

次に文末の例を見ていこう。前節では文頭での疑問形、肯定形では異なる機能を果たすことがわかった。従って、ここからは文末における疑問形と肯定形を節を分けて考察する。

6.2.2.2.1. 疑問形

疑問形の¿sabe(s)?は、出典の音声を確認したところ、疑問形には上昇音調と下降音調のものがあり、音声を確認できた22例中上昇音調が15例、下降音調が7例であった[79]。

6.2.2.2.1.1. 上昇音調

疑問形で上昇音調の¿sabe(s)?↑は、聞き手へ働きかけようとする度合いが下降音調に比べて強いと考えられる。次の例は、Ramón の尊厳死への訴えを手伝う Marc と Gené の会話である。

(166) Marc: Debí preverlo en su momento. No sé cómo se nos pudo pasar...
Gené: ¡Yo sí sé cómo se nos pudo pasar! Ramón no tiene dinero para pagarse una batalla legal como ésta. ¡Depende de nosotros! ¿Qué

[79] 文末のsabe(s)は、脚本に書かれていても実際の作品では省略されている例が多かった。

quieren? ¿Que nos traslademos a Galicia y volvamos a empezar? ¡Ni que la justicia fuera tan rápida en este país! Y ahora soy yo la que va a ayudar a Ramón, ¿sabes? ↑

[Gené resopla con rabia y esconde su cara entre las manos.]

(*Mar adentro*: 85)

Gené は、今後の行動について悩む Marc に「Ramón を救うのは私なのよ」という発話に上昇音調の¿sabes?↑を用いている。森山（1989b: 176）によると、上昇音調は疑問文の性質を持つ。疑問文は「文形式としてのレベルにおいて、すでに聞き手を強く要求する文のタイプになっていると言える。つまり、文形式から特徴づけられる意味として聞き手への反応伺いという意味を本来的に担うものである」という（森山 1989b: 186）。この記述を¿sabes?に当てはめると、(166)の場合は Ramón を助けたいという Gené の気持ちを Marc が受け入れて理解できるかを聞いていることになる。母語話者によるアンケートでも、この場面の¿sabes?↑は「聞き手に理解を求める¿eh?や¿entiendes?との置きかえが可能」であり、「¿sabes?↑がないと発話を強調する含意がなくなる」という回答が得られた。理解したかを聞くことによって、結果的に理解を求めることになり、強調しているように感じられるのだろう。

また、次の例では¿sabes?↑が文末に置かれているが、その後も話し手の発話が続いている。

(167) Dieguito: Papá, ¿qué es mejor diesel o gasolina?

Bilbao: Cada una sirve para una cosa distinta, ¿sabes? Como Casillas y Ronaldo.

(*El penalti más largo del mundo*: 37)

子供の「ディーゼルエンジンとガソリンがどう違うか」という問いに対して、父親が「それぞれが違うものに役立つんだよ」と答える発話に上昇音調の¿sabes?↑を伴っている。ここでも上昇音調で発話することにより、父親の発話内容への理解を求めると考えられる。本論文のデータにおける上昇音調の¿sabe(s)?↑のうち半数が、この例のように文末に用いられていてもその後に話し手の発話が続いている、発話途中の文末の例であった。上昇音調というのは聞き手に強く理解を要求するが、このように話し手が発話を続ける中の発話途中の文末で用いると、聞き手に発話内容の受けを求めるような機能を果たすのではないだろうか。実際に母語話者も、「この場面では¿sabe(s)?がなくてもあまり意味が変わらない」が、「その使用によって、話し手が聞

き手に教えてあげているというニュアンスが現れる」と回答している。これは、¿sabe(s)?が聞き手の反応を伺う上昇音調であるので、結果的に聞き手に受けを求めることによると考えられる。さらに、この場面での¿sabe(s)?を¿entiendes?に置きかえると「聞き手に対して失礼な感じがする」とも回答している。後にくわしく考察するが、¿entiendes?は発話内容が受け入れがたいものであっても理解するよう求めるものである。(167)のように話し手が発話を続けようとする発話途中の文末で用いると、とにかく理解するよう聞き手に求め、さらに次の発話を続けることによって、一方的な印象を与えるのではないだろうか。これに対して、¿sabe(s)?は聞き手が受け入れると期待していることを表明するので、¿entiendes?を用いる場合のような失礼さは表さないのだろう。このような発話途中で¿sabe(s)?は、先の(166)のように聞き手に理解したかどうかを直接的に問うものではなく、発話内容を聞き手に受け取るように促していると考えられる。

では次の例ではどうだろうか。

(168) Cardona: Sé algunas cosas de tí, ¿<u>sabes</u>?↑ Tus paseos con los libros, lo que sueñas. No te ofrendas. Sé que te gustaría entrar en La Estrella Pontificia, aprender a bailar de verdad. Yo no pido nada. Pero necesito que sepas que si tú quieres no tendrías ningún problema en ir a esa academia de baile, a la universidad, a donde quieras. Sin hacer ni decir nada a cambio. Nada habrá variado. No verás dinero, nadie sabrá nada.

(*El camino de los ingleses*: 80-81)

聞き手 Luli に好意をよせる Cardona は、Luli の帰りを待ち伏せてバレエ学校への資金援助をすると申し出る。「Luli の状況を知っている」と伝える発話の文末に上昇音調の¿sabes?↑を用いている。Cardona の姿を見た Luli は足早に去ろうとし、Cardona が Luli を追いかけながら発話をする。母語話者に対するアンケートでも、この場面の¿sabes?は「話し手が聞き手のことを知っていると強調している」という。これも、発話途中の文末で¿sabe(s)?を用いて受けを確認することによると考えられる。また、¿eh? を用いると「聞き手を脅している」、¿entiendes?に置きかえると「聞き手を侮辱している印象を受ける」という回答も見られた。sabe(s)が聞き手に発話内容を受け入れるよう求め、さらに発話途中の文末という位置では聞き手が理解したかを直接的に問うのではなく、発話内容の受けを求める。これに対して、eh や¿entiendes?は発話内容の確認を求めたり、聞き手が理解しがたくても理解するよう求めるという

異なる機能を果たすことがわかる。

このように、上昇音調の¿sabe(s)?↑は発話末と発話途中の文末とで観察された。上昇音調は聞き手の反応を伺うものなので、発話末では聞き手に理解したかどうかを直接的に尋ねるが、話し手の発話が続いている場面の発話途中の文末では、先行発話の受けを求めると考えられる。

6.2.2.2.1.2. 下降音調

一方、下降音調は上昇音調と比べると断定的な含意を持つと考えられる。森山（1989b: 193）は、下降音調について「これらの形式は、聞き手に対して反応を要求するというのではなく、むしろ聞き手に情報を提供するという通常のいわゆる情報伝達の意味である」と述べている。また、松岡（2008: 1）も下降調は「当該発話を断定的に示す（聞き手に対して『閉じて』しまう）」と説明している[80]。これらの指摘もまた、スペイン語に当てはめることができるのではないだろうか。実例を通して考察してみよう。

(169) [Ramón es conducido en su silla por Rosa. Avanzan lentamente por una avenida rodeada de árboles. Ramón hace un gesto de incredulidad ante lo que supuestamente acaba de oír, y no puede evitar una sonrisa. Rosa lo percibe.]

Rosa: Ya sabía que te reirías. Eso es lo que hacen todos los hombres. Reírse de mí. Tú no ibas a ser menos.

Ramón: Rosa, Rosa... Perdóname... Es sólo que ... en este último año me están pasando cosas... Me siento un poco abrumado, ¿<u>sabes</u>?↓

(*Mar adentro*: 124)

(169)は、尊厳死を求める話し手 Ramón が裁判を終えた後、付き添っていた聞き手 Rosa と散歩をしている場面である。Ramón は尊厳死を認めないという判決にあきれて笑うのだが、Rosa は自分のことを笑ったと勘違いする。そのような Rosa に対して、Ramón は¿sabes?↓を用いて「最近いろんなことがあって参っているんだ」と述べる。母語話者へのアンケートでは、ここでは¿sabes?↓の使用によって「聞き手の同情を引こうとする印象を受ける」という回答が得られた。話し手は Ramón が疲れきっているという情報が聞き手に受け入れられる、または聞き手にとって発話内容が既知情報であると断定して、笑ってしまったことへの理解を求める機能を果たすのではないだ

[80] 松岡（2008: 1）は、疑問文における終助詞「よ」のイントネーションについて考察している。

ろうか。下降音調で「聞き手は受け入れてくれている、受け入れてくれるはずだ」という話し手の期待をこめた態度を表すので、結果的に聞き手の同情を引こうとするように感じられるのだろう。

次の(170)は、本来2、3日かかる重要な調書を今すぐ見たいと申し出る話し手の発話に下降音調の¿sabe?↓が用いられている。

(170) Funcionaria: Dígame.
Modesto: Buenos días. Quiero consultar el *dossier* de una parcela.
Funcionaria: Tiene que solicitarlo por escrito.
[Funcionaria saca la solicitud.]
Funcionaria: Ponga el número del *dossier* y sus datos aquí... ¿Sabe el número del *dossier*?
Modesto: No, nnno.
Funcionaria: ¿Y el nombre de la parcela?
Modesto: Las Zarzuelas. Es una finca... Oiga, cuánto tardan en autorizar...
[Funcionaria se retira un par de pasos para teclear algo en su ordenador.]
Funcionaria: Normalmente, un día o dos.
Modesto: Ya, bueno, yo es que necesito, necesitaría verlo ahora, hoy mismo. Es un imprevisto, muy urgente, ¿<u>sabe</u>?↓
Funcionaria: (Mirando la pantalla.) Ya, pero el procedimiento incluye la solicitud.

(*La caja 507*: 82)

先の(169)の場合と同様に、この発話も¿sabe?↓を伴うことにより、緊急の用件であるということを、聞き手に知ってもらい、理解してもらおうとする話し手の態度が窺える。母語話者によると、下降音調の¿sabe?↓によって「聞き手に対して自分の立場になって考えて欲しい」という話し手の気持ちと、「『聞き手が発話内容を受け入れてくれるはずだ』という期待を表す」という。先に見た上昇音調の¿sabe(s)?↑は、話し手の発話が続く場合の発話途中の文末にも用いられたが、下降音調の¿sabe(s)?↓は発話権が聞き手に移る前の発話末の使用が圧倒的に多かった。この現象は、まさに聞き手に対して閉じており、断定的に伝達していると言えるだろう。

この下降音調が持つ含意によって、時に聞き手に対する皮肉や非難を表す場合もある。次の例は、Ramón に菓子を作って持ってきた Rosa に Manuela が余計なことをしないよう告げる場面である。

(171) [Rosa está sacando un paquete de una bolsa.
Manuela, desde la puerta de calle, la mira muy contrariada.]

Rosa: Pero si es que le traigo unas filloas, ¿ves?, que sé que le gustan. Las hice yo misma...

Manuela: Mira, ya te dije que no hace falta que le cocines nada, ni que lo afeites, ni que lo laves, ya cuido yo de Ramón, ¿me entiendes?

Pausa.

Rosa: Bueno, pues entonces que me lo diga él.

Manuela: Ya me lo dijo él a mí.

[Rosa la mira con incredulidad.]

Y ahora mismo está ocupado, ¿sabes?↓

(*Mar adentro*: 108)

Ramón の世話は Manuela の役割だが、聞き手 Rosa は Manuela に何の断りもなく世話をしてしまい、Manuela は平素から Rosa に対して腹を立てていた。この場面でも、本の執筆作業に忙しい Ramón に会うための口実として菓子を作ってきた Rosa に、Manuela は余計なことをしないようもう 1 度忠告する。しかし Rosa はさらに食い下がって、「(余計なことをするなと) Ramón 自身の口から聞きたい」と述べる。Manuela は「Ramón もそう言っている」と説明するが、不信そうな表情をする Rosa に対して、Y ahora mismo está ocupado, ¿sabes?↓と述べる。この例における下降音調の¿sabes?↓は「Ramón が忙しくて今は会えない」ということが Rosa に受け入れられるはずだという態度を含んでいると考えられる。さらに母語話者に対するアンケートでは、「『会えないとわかっているのに、わざわざ理由をつけて来るな』という皮肉の含意を持つ」という回答が得られた。これは下降音調の¿sabe(s)?↓が、Ramón が忙しいことを知っているはずの Rosa に対してあえて断定的に伝達し、Rosa に反論の余地を与えないためだろう。

このように、下降音調の¿sabe(s)?↓は、聞き手に反応を要求せず、断定的に伝達して理解を求めるものである。「わかっているはずだ」という態度を示すことによって、同情を引いたり、非難を表すことがある。

6.2.2.2.2. 肯定形

では、次に lo や ya を伴う肯定形の sabe(s)について見てみよう。肯定形は当然下降音調であり、機能も下降音調の¿sabe(s)?↓と同様と考えられる。

次の例では、話し手 Ramón から Julia への手紙を Ramón を演じる俳優が読み上げ、手紙の内容が映像で写される場面である。

(172) Voz de Ramón: De momento, mi sobrino Javi empezó a ayudarme pasándolos a su ordenador.

[Iniciamos una lenta panorámica alrededor de la habitación de Ramón. En ese movimiento se fundirán distintas escenas en momentos diferentes del día y con diversos personajes.]

Voz de Ramón: Por lo demás, aquí la vida sigue como siempre, ya sabes. Manuela estuvo todo el mes pendiente de arroparme para que el otoño no me pille desprevenido...

(*Mar adentro*: 77- 78)

文頭の Ya sabes について考察したように、ya を伴うと聞き手の情報への理解を断定する。肯定形は当然下降音調であり、機能も下降音調の¿sabe(s)?↓と同様と考えられる。しかし ya や lo などを伴うことによって、より断定的な印象を与えるのではないだろうか[81]。(172)の手紙の受け取り手である Julia は、Ramón の家に数日泊まったことがあり、Ramón の家族がどのような生活をしているか知っている。そのため、ya sabes は目の前にいない聞き手が情報を理解していることを表し、この例においては聞き手への親密さを示していると考えられる。

しかし、先の(171)と同様に時に聞き手に受け入れられると強く断定することにより、厳しいニュアンスを含むことがある。

(173) Ángela: Tu trabajo es lo único que te interesa. Lo demás te importa un rábano...

Joaquín: Mira, no digas tonterías, ¿vale?

Ángela: Ni siquiera la niña. Claro, como no fue un niño...

Joaquín: Oye, déjalo.

Ángela: Admite por lo menos que la querrías más si fuera un niño...

Joaquín: Pero tú deliras...

Ángela: Es verdad, y lo sabes. Nunca eres cariñoso con ella, ni la compras nada, ni hablas a nadie de ella...

---

81 下降音調の¿sabe(s)?↓は音声も機能も肯定形と一致するが、ある母語話者からは「疑問符を伴わず、ya や lo もつかない sabe(s)という形式は不自然」という意見が得られた。「たとえ下降音調であっても¿sabe(s)?のように疑問符が必要である」という。

(*Solo mía*: 56)

(173)は夫婦喧嘩の場面であり、話し手 Ángela は聞き手 Joaquín を「いつも仕事ばかりで子どもの面倒を見ない」と非難する。母語話者によると、「y や lo を伴うことによって、より厳しい印象を受ける」という。これは、「(話し手の聞き手に対する発話内容が) 事実である」ことを聞き手が理解している、と話し手が考えていることを表明して、強く非難していることによると考えられる。また、この例では単なる sabes だけではなく、y と lo を伴って y lo sabes という形式を取っている。このような場合、もはや間投詞と呼べるのかについては疑問が残るが、y や lo によって情報への理解を断定しているので、疑問形¿sabe(s)?と並べて扱うことにする。

このように、文末では先行発話が聞き手に受け入れられると話し手が期待して情報への理解を求めたり、理解されるものと断定することによって、時に皮肉や非難を、また聞き手に対する親密さを表す。文頭では、聞き手を後続発話に引き込む機能を果たすのに対して、文末では、どのような態度で情報を提示しようとしているかを表す機能を持つと考えられる。文末の sabe(s)がどのような態度を含むかは、発話状況や話し手と聞き手の関係、音調による。しかしどの場合にも、聞き手が理解してくれるものとして提示するという共通点があるため、これが sabe(s)の中心的機能であると言えるだろう。

また、Fuentes (1990: 189) の「疑問形は新規情報、肯定形は既知情報」という指摘は、基本的には当てはまるが、疑問形でも下降音調の場合は聞き手にとって既知情報として断定的に発話する。従って、これらは話し手が情報をどのように伝達しようとしてるかによってされるものであると言うことができるだろう。

6.2.2.3. 文中、文間の用例

次に文中、文間の例である。

(174) [En el centro de terapías despacho terapeuta]

Terapeuta: ¿Entonces qué cosas echas de menos?

[Antonio se queda callado, buscando palabras sin encontrarlas.]

Terapeuta: Venga, dime una.

Antonio: Pues ella... ella misma...

Terapeuta: Mira, Antonio, imagínatela, y trata de describir algún detalle, algo en particular que te gusta.

Antonio: El ruido...

Terapeuta: ¿Qué ruido?

Antonio: Su ruido, el suyo... No sé... O sea, Pilar... Pilar se mueve rápido, ¿entiendes?, haciendo muy poquito ruido... pero la sientes, ¿entiendes? No sé qué es, las pulseras que le suena, la ropa, los pies, ligeritos... No sé... es un ruido suyo, ¿sabes?, que me gusta.

(*Te doy mis ojos*: 76)

(174)は、家庭内暴力が原因で妻と別居中の話し手 Antonio が、聞き手であるカウンセラーに、妻について説明する場面である。話し手は「妻が出す音が好きだ」という気持ちをカウンセラーに理解してもらおうと、¿entiendes?や¿sabes?を何度も用いて説明する。この例では、¿sabes?を用いる前の発話が妻が出す音についての詳しい説明であったのに対して、¿sabes?を伴う発話は「うまく説明できないが、とにかく彼女の音が好きなんだ」とこれまでの発話を要約するものであり、聞き手に「自分の気持ちを知ってほしい、わかってほしい」と考えて¿sabes?を用いていると考えられる。実際に母語話者によるアンケートでも、「同情（compasión）を引こうとする印象がある」という回答が得られた。また、この発話は¿sabes?の前が先行詞、後ろは関係節となっており、形の上では１つの文をあえて途中で区切って用いる文中のように思われる。しかし、話し手が最初から関係節を用いて発話をしようとしていたかは不明であり、文中の位置に意識して¿sabes?を挿入したとは明言できない。従って、この例は文中と判断するよりも、それぞれ独立した発話の間に現れる文間とみなすべきだろう。この例における¿sabes?は、先行する発話への理解を求めており、先行発話 es un ruido suyo の文末的要素として機能していると考えられる。

(175) Rafi: Miguelito, ¿cómo estás?

Miguelito: Bien. ¿Eres ya genial?

Rafi: No, todavía no. ¿Te quieres tomar algo con nosotros?

Miguelito: No, tengo prisa.

Rafi: Bueno. Voy a venir con un permiso de verdad dentro de poco. Un mes entero. Entonces nos podemos ver a gusto tú y yo, ¿no? Me han dicho que estás cambiado.

Miguelito: No. ¿Y tú? ¿Te has hecho ya un hombre?

Rafi: Yo creo que sí. Ya lo iremos viendo.

Miguelito: Sí, ya lo iremos viendo. Bueno, ya sabes, tengo un poco de prisa.

(*El camino de los ingleses*: 92)

(175)は、話し手 Miguelito が街で悪友 Rafi に会う場面である。恋人と約束していた Miguelito は急いでいることを伝えるが、それを邪魔しようとする Rafi はわざと話を続ける。そして最後に Miguelito が再度急いでいることを告げる発話に ya sabes を用いる。この時点ではすでに急いでいることを伝えており、Miguelito が急いでいることは当然聞き手に受け入れられるべきことである。この例の ya sabes は本論文の分類基準によると文間になるが、後続する主張が聞き手に理解されるものだと先に断言して、「急いでいるから（もう行かなければならない）」という発話を和らげる機能を果たすのではないだろうか。前節で考察したように、文間では先行発話の文末要素としての機能を持つが、bueno は話題転換の談話標識であり、ya sabes が影響を与えるほどの情報量は持たない。従って、分類上文間ではあるが文中のように後続発話に働きかけていると考えられる。

ここまで考察してきたように、sabe(s)は話し手が聞き手に知ってほしい情報を伝達する際に用いられる。話し手は、聞き手に理解してもらえるものと期待し、下降音調や ya や lo を用いて断定する。また疑問形でも下降音調で発話することによって皮肉や非難の含意を持つ場合もある。聞き手にとって新規情報であるから疑問形、既知情報であるから肯定形、ということではなく、話し手が情報をどのようにみなして伝達するか、ということが疑問形の上昇音調と下降音調、または肯定形の選択に関わるのである。また sabe(s)は間投詞的に用いられるが、動詞 saber の持つ「(情報を知識として）知っている」という本来の意味を残しており、聞き手に知ってほしいということを強調して、話し手自身の発話を正当化するのである。

6.3. entiendes

6.3.1. 先行研究

では、「理解する」の意味をもつ entiendes の場合はどうだろうか。Ortega（1986: 284）は、entiendes は発話を強調したい時に用いられ、「今述べたことは聞き手にとって受け入れがたいことかもしれないが、理由があって述べているから理解して欲しい」という態度を表すと説明し、さらに文頭では現れないと指摘している。これは動詞の語彙的意味が「(何かを）理解する」であり、その対象を先に示す必要があるので、対象が示されていない文頭で注意喚起としては機能しにくいと考えられる。一方 Chodorowska（1997: 369）は、me を伴う¿me entiendes?のポライトネスとしての機能に注目し、「主張などの発話を和らげる機能を持つ」と述べている。さらに「文中と比べて、文末ではより発話の力を和らげる（Chodorowska 1997: 367)」と説明す

る。この指摘は、これまでに述べてきた「文末に現れる要素は、先行発話に向かうものであり、話し手の発話態度を効果的に表す」という本論文の主張と一致している。また Fuentes（1990: 192）は、entiendes は「難しい考えを明らかにしようとする」機能を持つという。これは動詞 entender が持つ「理解する」という意味によるものだろう。

6.3.2. 実例における考察

本論文のデータでも、Ortega（1986）の指摘通り entiendes の文頭での使用は見られず、文間、文末、単独で観察された。単独では¿Me entiendes?、¿Entiendes?という例も見られたが、これは先に述べた entiendes の性質上、先行発話の文末が表記上単独の形式で表されていると考えられる。また文間の例は、entiendes の後に呼びかけ語を伴う例であった。この場合の entiendes は文末の場合と同様の機能を果たし、さらに後に呼びかけ語を伴うことによって聞き手への親密さなどを表すと推測されるので、ここでは省略する。文末では、疑問形だけでなく lo や ya me entiendes といった形式も観察された。

6.3.2.1. 文末の用例

6.3.2.1.1. 疑問形

では、文末の疑問形式から見ていこう。

(176) Rosa: ¿Entonces vas a hacerlo?
Ramón: No es tan fácil. Pero, si de verdad lo estuviera planeando, ten por seguro que tú serías la última en enterarte. Ya comprendí que la gente que más dice quererme es la que menos ayuda me va a prestar.
Rosa: ¡Es que justamente pensé mucho sobre eso!... Sobre lo que me dijiste en Coruña... Ramón..., es que me di cuenta. Me di cuenta, ¿entiendes? Yo estoy bien segura de lo que siento, Ramón. Yo te amo...
(*Mar adentro*: 147)

(176)は、話し手 Rosa が聞き手 Ramón に自殺の手伝いをしようと申し出る場面である。以前にも Rosa は Ramón を愛していると伝えるが、Ramón に「本当に自分のことを愛しているなら自殺をする手助けをして欲しい」と告げられていた。Ramón を「愛する」ということについて考え直した Rosa は、me di cuenta と 2 回繰り返した後¿entiendes?を用いる。これは「私は Ramón の望みを叶えてあげたいと思うほど

に、Ramón を愛していることに気づいた」という、この映画においては非常に意味深い発話であり、¿entiendes?は重要な発話に対する理解を聞き手に求めていると考えられる。Rosa のそのような気持ちは、Ramón にとっては受け入れがたいかもしれないが、理解してほしい、という態度を示しているのだろう。母語話者のアンケートにおいても、この場面では¿sabes?よりも¿entiendes?を用いた方が「本当の意味で発話内容を理解してほしい」という話し手の態度が感じられるという回答が得られている。

しかし、「受け入れがたいかもしれないが、理解してほしい」という態度は、時に「とにかく理解しろ」というような威圧的なニュアンスを含むことがある。次の例を見てみよう。

(177) Daniel: Tú misma no dejas que te crea. Dicen que no ha pasado nada y sí ha pasado.

Ana: ¿El qué? ¿Qué ha pasado?

Daniel: Pasara lo que pasara entre tú y Robert, pasó algo muy importante, muy importante... ¡No tuviste en cuenta, para nada, mis sentimientos! Te dio igual cómo iba a sentirme yo. Por primera vez, te ha dado igual dar una explicación. ¡Te ha dado igual cuándo y cómo decías las cosas! Te has callado. ¿Entiendes? ¡Te has callado como hija de puta! Por primera vez, ¿entiendes?

(*Nubes de verano*: 147)

(177)は、恋人の浮気を疑う話し手 Daniel が聞き手 Ana を非難する場面である。最初の¿Entiendes?は本論文の分類上単独であるが、動詞 entender は理解する対象を示さなくては不自然と考えられるので、先行発話 Te has callado.の文末とみなす。Te has callado.に¿Entiendes?を用い、更にすぐ後の発話では感嘆符を伴ってもう 1 度同じ発話内容を繰りかえしている。また、2 度目の¿entiendes?も同様に先行する Por primera vez を強調している。母語話者はこの例について、¿Entiendes?を用いて先行発話への理解を聞き手に求めることによって、「発話内容をより強調し、強い怒りを表している」と回答している。(176)の¿entiendes?が話し手自身の気持ちへの理解を求めるのに対して、(177)の場合は聞き手に関する言及への理解を求めている。聞き手自身への理解を聞き手に求めることによって、聞き手が気づいていないことを非難する。さらに、受け入れがたくても理解するよう求める¿entiendes?を伴うことで、より厳しい発話になると推測される。次の例は、lo を伴う例である。

(178) Ana: Me voy.
Khaled: Yo también voy.
Ana: No, digo que me voy para siempre... que dejo el bar.
Khaled: ¿Dejas bar para siempre?
Ana: Santos me ha pedido que me case con él. Y yo le he dicho que sí.
Khaled: No sabía nada.
Ana: ¡Claro que no sabías, cómo coño vas a saberlo!
Khaled: ¿Entonces tú te vas...?
Ana: Sí, Santos quiere que deje de trabajar aquí. Me voy a casar con él, ¿lo entiendes? Tenemos planes...

(*El penalti más largo del mundo*: 145)

(178)は、話し手 Ana がいつまでも結婚に関して具体的な話をしてこない聞き手 Khaled に嫌気がさし、他の男性と結婚すると告げる場面である。Ana は期待していた回答をしなかった聞き手に腹を立て、再び「他の男性と結婚する」という発話に¿lo entiendes?を用いている。lo は「他の男性と結婚する」ことを指しており、質問の形をとってはいるが、聞き手が発話を理解しているのかを確認することによって、聞き手を非難していると解釈できるだろう。lo を伴うことによって、より発話への理解を強く求める話し手の態度が表れ、結果的に発話内容がより強調されると考えられる。また、entiendes には sabe(s)のような音調による機能の差はあまり観察されなかったが、この例は一旦下降して再び上昇する音調であった。小山（1997: 106）は、日本語の終助詞が降昇調の場合、「話し手の強い疑念を表す」と述べている。この規定は、この場面に当てはめることができるだろう。lo entiendes は「理解しているのか？」という聞き手への非難であるが、音調によってさらなる含意を付加していることがわかる。

6.3.2.1.2. 肯定形

では、me entiendes が発話を和らげる（Chodorowska 1997）のは、どのような理由によるのだろうか。次の例から考察してみよう。

(179) [Román le agarra y le pone una mano sobre la mesa.
Fernando se resiste como puede.]

Fernando: ¡Un momento! Primero: mis manos son muy importantes para mí, y no hablo sólo del fútbol, hablo de todos los aspectos de mi vida, ya me

entiendes...

(*El penalti más largo del mundo*: 81)

(179)は、me entiendes に ya を伴っている。聞き手 Román が怒って話し手 Fernando の腕をテーブルに押さえつけ、指の骨を折ろうとしている場面である。Fernando は、数日後にサッカーチームのゴールキーパーとして、再試合でのペナルティキックを控えているので、「サッカーのためだけではなく色々な場面で手が重要だから」と説明して Román をなだめようとする。日常生活で手の指が重要であることは、聞き手にとっても容易に想像がつくことであり、話し手は「言わなくても常識でわかるだろう」という気持ちと、「自分の立場を理解して指を折るのをやめてくれ」という気持ちを込めて、ya me entiendes と述べていると考えられる。母語話者も「この例では、聞き手の同情を引こうとしている」と回答しており、聞き手は発話内容を受け入れがたくても理解してくれると断定して情報を提示することによって、聞き手の好意を得て、聞き手を説得しようとしていると考えられる。またこの場合、me の存在が重要なのである。基本的に entiendes は聞き手に発話内容の理解を求める機能を果たすが、me を伴うことによって発話内容ではなく、発話内容を伝達する話し手への理解を求めることになり、話し手と聞き手との間に一体感を作り出そうとする。それによって、結果的に発話が和らぐのだろう。

このように、entiendes は疑問形では聞き手にとって受け入れがたいかもしれない発話内容の理解を求め、肯定形で ya や me を伴うと聞き手が理解してくれる、あるいはしてくれていると断定したり、話し手自身への理解を求めることによって、聞き手との間に一体感を作り出そうとする機能を果たす。聞き手に発話内容への理解を求め、話し手自身の発話を正当化するのである。また、理解を求める内容がなければ entiendes を用いるのは不自然と考えられ、情報伝達前に聞き手の注意を喚起する文頭では現れない。一方、文末は先行発話への理解を求める話し手の発話態度の表現手段として用いられるのである。

6.4. sabe(s)、entiendes と「ね」、「よ」

6.4.1. sabe(s)と entiendes

これまで見てきたように、sabe(s)は話し手が聞き手に知ってほしい、また聞き手が受け入れてくれるという期待を示して情報を伝達し、聞き手の理解を求める。そのため、聞き手の気持ちへの理解を求める場合に用いられることがある。これに対して entiendes は、たとえ聞き手が受け入れがたくても、話し手は理由があって伝達しているという態度を示して聞き手の理解を求めるので、時に威圧的に聞こえることもあ

る。つまり、これらの表現はどちらも聞き手に理解を求める機能を持つが、理解を求めるプロセスが異なるのである。また、表 4 によればどちらも言明にのみ伴っているので、これらの表現がどちらも情報伝達を目的とする場合に話し手の発話態度を表すものであると言えるだろう。

6.4.2. sabe(s)と「ね（ぇ）」、「よ」

6.4.2.1. sabe(s)と「ね（ぇ）」

sabe(s)は entiendes と異なって、文末だけでなく文頭にも現れる。文頭における疑問形の sabe(s)は、聞き手の注意を発話に喚起する機能を果たす。

(162)' Miguelito: Dime que sí, Luli. No puedes dejar que esto acabe así, Luli. ¿Sabes?, eres mi bailarina.

(*El camino de los ingleses*: 123)

(180) [Ninguno dice nada durante unos momentos.]

Modesto: ¿Sabes[82]? Estoy pensando en volver a comprar un coche. Un buen coche.

[Ángela se sorprende pero no dice nada.]

(*La caja 507*: 151)

疑問形の場合、聞き手の注意を喚起すると同時に、知っているかを問う具体的な内容となる後続発話に聞き手を引き込む。また、sabe(s)の場合は新規の情報を導いて先行発話の話題を転換することができる。

日本語の「ねぇ」も同様に、聞き手の注意を喚起して後続発話に引き込み、(18)のように新規の情報を導くことができる。

(18)' ねぇ、T さんてウチの人と結婚するんですってネ、名古屋支社の人なんだって、相手は。

（佐治 1967: 187）

どちらの例も sabe(s)、「ねぇ」がなければ情報を突然伝達することになり、不自然な発話となるだろう。

一方 ya などを伴う肯定形の sabe(s)は、後続発話が聞き手の既知情報であることを

[82] この例における¿Sabes?は本論文の分類では単独となるが、明らかに後続発話を導いていると考えられる。

示して理解を求めたり、話題維持を表明するものであり、注意喚起の機能は持たない。

(164)' Fernando: Ya sabes, cuando un cuerpo en estado normal empieza a beber no puede dejarlo hasta que se coge un pedo de campeonato... sobre todo si ese cuerpo es mío...

(*El penalti más largo del mundo*: 126)

(165)' Fernando: Ya sabes, joder, el tío... es mozo de almacén. ¿Tú quieres ser la mujer de un mozo de almacén?

Ana: ¡Pero tú también eres mozo de almacén!

(*El penalti más largo del mundo*: 62)

このような場合、聞き手との共有を表すことによって後続発話に引き込む「ねぇ」と対応する。しかし、ya sabe(s)は肯定形なので、引き込みというよりもむしろ断定的な印象を与えると考えられる。そのため、同じく話題維持の機能を持つ「あのね」との共通性もあるのではないだろうか。

「あのね」に関する先行研究はあまり見られないので、ここで例を挙げて考察してみる。「あのね」は指示詞「あの」に終助詞「ね」がついたものである。「ね」を除いて「あの」にすると異なる機能を持つので、情報の共有を示す「ねぇ」の一種と捉えることができるだろう。

次の例を見てみよう。

(181) 「中島くん、行かないで。」私は言った。
「あのね、それはパリとかのことではなくて、パリは行ってもいいの。ただ、この世にい続けようとしてほしい。」
「行きたくないけど、どこにも。」

(『みずうみ』：111)

(182) 「あなた『資本論』って読んだことある？」と緑が訊いた。
「あるよ。もちろん全部は読んでないけど。他の大抵の人と同じように」
「理解できた？」
「理解できるところもあったし、できないところもあった。『資本論』を正確に読むにはそうするための思考システムの習得が必要なんだよ。もちろん総体としてのマルクシズムはだいたいは理解できていると思うけれど」
「その手の本をあまり読んだことのない大学の新入生が『資本論』読んですっと理解できると思う？」

「まず無理じゃないかな、そりゃ」と僕は言った。
「あのね、私、大学に入ったときフォークの関係のクラブに入ったの。唄を唄いたかったから。それがひどいインチキな奴らの揃ってるところでね、今思い出してもゾッとするわよ。そこに入るとね、まずマルクスを読ませられるの。(…)」

(『ノルウェイの森(下)』:65-66)

これらの例において、「あのね」は先行発話に対する返答や、関連する発話を導いており、話題維持の機能を持つことがわかる[83]。特に(182)では、「『資本論』を読んだか」という問いに聞き手が回答した後、一見その内容とは関係なさそうな話題が挿入される。しかし、実際にはその発話内容は『資本論』に関係するものであり、話題を維持していることを表明するために、「あのね」を用いて後続発話を導いていると考えられる。

しかし、文頭の「ねぇ」を「あのね」に置きかえると不自然な場合がある。

(19)' (料理している妻が夫に)
ねえ、ちょっとこのスープ、味、見てくれない?

(仁田 他 2009: 158)

(183) (料理している妻が夫に)
? あのね、ちょっとこのスープ、味、見てくれない?

(19)の「ねぇ」は注意喚起の機能を持つので、談話の最初[84]に用いることができる

---

[83] 「あのね」は、先行発話の内容に関わらない発話を導く場合もある。
開始部 A: もしもし。
B: もしもし。
A: おー。
B: A?
A: はい。(…)
用件部 B: あのね? (下線部筆者)
A: うーん。
B: 今、Tと飲んでるかもー。(…)
終結部 A: じゃあねえ。
B: うん。(…)

(ザトラウスキー 1991: 91-96)

このことから(181)、(182)のように具体的なテーマの維持がなくても、聞き手を特定した後の用件部では使用されることがわかる。

[84] 亀井 他 (1995: 897) は、談話を「いくつかの文が連続し、まとまりのある内容を持った言語表現」と規定しているので、本論文では意味的なまとまりを持つ発話の連続を「談話」と呼ぶ。

が、「あのね」を談話の最初に置くことはできない。このことから、「あのね」には注意喚起の機能がないことがわかる。ザトラウスキー（1991: 81）は、1 回の電話の会話を「開始部」、「主要部」、「終了部」の 3 部に分類している[85]。また水谷（1980: 2）は、電話以外の会話においても 3 つの区分（「話の場づくりの要素」、「話題づくりの要素」、「内容」）があると述べており[86]、これらの記述をもとに、大倉（1994: 123-125）は談話においても「開始部」、「用件部」、「終結部」という 3 区分を認めている[87]。「ねぇ」は注意喚起の機能を持ち、開始部で用いることができるのに対して、注意喚起の機能を持たない「あのね」は開始部には現れず、聞き手が特定され具体的な内容を持ちかける用件部で使用されると考えられる。

また次の例では、「あのね」の有無によって異なるニュアンスを持つことがわかる。

(184) a. 明日は早く起きなきゃいけないんだよ。
b. あの<u>ね</u>、明日は早く起きなきゃいけないんだよ。

(184)a は、聞き手にとって新規の情報である場合にも自然であるが、(184)b は聞き手にとって既知情報であるにも関わらず理解していないような言動をする場合や、「早く起きなければならない」ことに関連する発話の後に用いられ、(184)a と比べると断定的な印象を受ける。

スペイン語の ya sabe(s)も同様に注意喚起の機能を持たず、談話の最初には用いられないが、用件部の最初に用いられる[88]。実際に、(164)、(165)はどちらも用件部の発話であり、聞き手が知っていると断定して発話を導いている。また、本論文のデータで観察された他の肯定形の例も、全て用件部で現れている。このことから、用件部で

---

85 「開始部」は呼び出しに対する応答やあいさつ、「主要部」は具体的な話題、「終了部」は電話の終了を表す挨拶を指す。

86 「話の場づくりの要素」は「あのう」などの話しかけ、「話題づくりの要素」はこれから話そうとする内容によって、聞き手に一種の準備を促す目的で用いられる「すみませんが」や「わるいけど」などの表現、「内容」は具体的な話の内容を指す。

87 大倉（1994）は、この区分をもとにスペイン語の oye、mira と日本語の「あのう」、「ねぇ」、「よ」を対照している。本論文では大倉（1994）の用語に従う。

88 大倉（1994: 125）はスペイン語でも「開始部」、「用件部」、「終結部」からなっているという。

開始部　A: Oiga, por favor.
B: （カメラのファインダーから顔を挙げて A を見る）
用件部　A: ¿Para ir a la Sagrada familia(*sic.*)?
B:（早口でまくしたてる）
A: ¡Otra vez, por favor!
B: Mira, la segunda calle a la izquierda.
終結部　A: Gracias.

（大倉 1994: 125）

話題維持を表明する sabe(s)と「あのね」は対応すると言えるだろう。

6.4.2.2. sabe(s)と「よ」

では、文末の sabe(s)はどの終助詞に対応するのだろうか。文末の sabe(s)は言明に伴い、聞き手が受け入れてくれるという話し手の期待を表すものである。これは、話し手と聞き手の認識（知識）が一致していない情報を伝達する際に用いられ、その落差を示すことによって発話内容への理解を求める「よ」に対応するのではないだろうか。sabe(s)は疑問形と肯定形で用いられ、疑問形では話し手が発話内容への理解を求めるのに対して、肯定形では聞き手の理解が得られると話し手が断定して伝達する。「よ」も同様に、上昇あるいは下降音調であるかによって異なる機能を果たすことがある。上昇調の「よ」について、大曽（1990: 45）は「聞き手が知らないこと、気がついていないこと、あるいは忘れているようなことを、状況から知らせる価値があると話し手が判断し伝えるもの」であると述べている。

(185) (授業の始まるのを待っている学生に)
今日は休講だそうよ↑。
（大曽 1990: 45）

(186) （客を迎える準備をしている夫婦）
妻：山田さん、たくさんお飲みになるかしら。
夫：いや、あんまり飲まないと思うよ↑。
（大曽 1990: 45）

この規定は、(160)の例で¿sabes?を伴うと話し手は発話内容について知らない聞き手に「その情報が聞き手にとって重要である」と判断して伝達するという Ortega（1986: 274）の指摘と一致している。また、先に見た上昇音調¿sabe(s)?↑の例においても、話し手が聞き手が知らない（(167)、(168)）、または忘れているようなこと（(166)）を伝達する必要があると判断していると考えられ、どれも上昇音調の「よ」で訳すことが可能だろう。

(166)' Gené: Y ahora soy yo la que va a ayudar a Ramón, ¿sabes?↑
[Gené resopla con rabia y esconde su cara entre las manos.]
(*Mar adentro*: 85)

(167)' Bilbao: Cada una sirve para una cosa distinta, ¿sabes?↑ Como Casillas y Ronaldo.

(*El penalti más largo del mundo*: 37)

(168)' Cardona: Sé algunas cosas de tí, ¿sabes?↑

(*El camino de los ingleses*: 80-81)

また、井上（1997: 64）は、「P よ↑」は、「話し手と聞き手をとりまいている状況は、P ということが真になるという、そういう状況である」ということを聞き手に示して、「このような状況の中でどうするか」という問題を投げかけ、「それにどう対処するかは聞き手の問題である」という意味合いを含む、と述べている。この聞き手への投げかけは上昇音調が疑問文としての性質を持つことに由来するのだが、特に(166)は発話末なので、聞き手にどう対応するかを直接的に問う話し手の態度が窺える。

次に、下降音調の¿sabe(s)?↓と肯定形 sabe(s)は下降調の「よ」に対応する。下降音調の「よ」は、「話し手が聞き手は明らかに自分と違う判断を下していると知って、それに反駁する形で自分の判断を主張する。または聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する（大曽 1990: 45）」ものである。

(22)' A: アメリカ人は働きませんね。
B: いや、よく働きます<u>よ</u>。

（大曽 1986: 93）

sabe(s)は疑問形でも肯定形でも、話し手が聞き手が受け入れることを期待して、あるいは受け入れることを前提として用いられるが、下降音調の場合は、聞き手が理解することを断定するものであり、そこに聞き手の反応を伺おうとする態度は含まれないと考えられ、これも話し手の主張と捉えることができるだろう。従って、後者の「聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する」という規定に対応すると言える。

(169)' Ramón: Me siento un poco abrumado, ¿sabes?↓

(*Mar adentro*: 124)

(170)' Modesto: Es un imprevisto, muy urgente, ¿sabe?↓

(*La caja 507*: 82)

(171)' Manuela: Y ahora mismo está ocupado, ¿sabes?↓

(*Mar adentro*: 108)

(172)' Voz de Ramón: Por lo demás, aquí la vida sigue como siempre, ya sabes.

(*Mar adentro*: 77- 78)

(173)' Ángela: Es verdad, y lo sabes. Nunca eres cariñoso con ella, ni la compras nada, ni hablas a nadie de ella...

(*Solo mía*: 56)

(169)、(170)、(171)の例は疑問形ではあるが、話し手がそれぞれ聞き手が発話内容を受け入れてくれる、あるいは当然受け入れるべきだと判断して下降音調の¿sabe(s)?を用いて断定的に発話をしている。話し手が聞き手に反応を求める余地を示していない点において、下降音調「よ」の話し手の意見を一方的に主張する機能と共通していると言えるだろう。また、(172)、(173)も聞き手の理解を得られることを断定し、話し手の判断を一方的に主張している。(172)は断定とは言っても、話者間の人間関係や発話状況から考えて聞き手への親密さを表している。しかしどちらも下降音調の「よ」で訳すことが可能である。

このように、文頭の sabe(s)は聞き手を後続発話に引き込んだり、話題維持を示す点において「ねぇ」に、文末の sabe(s)は聞き手に情報を伝達する必要がある、あるいは話し手の主張を表す点において「よ」に対応すると考えられる。

6.4.3. entiendes と「よ」

entiendes も、発話内容に対して聞き手の理解を求める「よ」に対応する。伊豆原（1993）が言うように、「よ」は聞き手の知らない情報を伝達するものであるが、時にそこに含まれる言外の意味を理解するよう求めるので、entiendes にも対応すると考えられる。entiendes は、sabe(s)と異なって先行発話が聞き手にとって受け入れがたくても理解を要求するので、「話し手が聞き手は明らかに自分と違う判断を下していると知って、それに反駁する形で自分の判断を主張する。または聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する（大曽 1990: 45）」という下降音調の「よ」に対応する。

(176)' Rosa: ¡Es que justamente pensé mucho sobre eso!... Sobre lo que me dijiste en Coruña... Ramón..., es que me di cuenta. Me di cuenta, ¿entiendes? Yo estoy bien segura de lo que siento, Ramón. Yo te amo...

(*Mar adentro*: 147)

(177)' Daniel: Te has callado. ¿Entiendes? ¡Te has callado como hija de puta! Por primera vez, ¿entiendes?

(*Nubes de verano*: 147)

(176)、(177)は、どちらも聞き手がそのように考えていなくても、どちらも話し手の判断を主張する下降音調の「よ」を用いて「気づいたのよ」や「君は黙っていたよ」、「最初からだよ」と訳すことによって、一方的な印象を与えることができるだろう。

また、肯定形の場合も同様である。

(179)' Fernando: ¡Un momento! Primero: mis manos son muy importantes para mí, y no hablo sólo del fútbol, hablo de todos los aspectos de mi vida, ya me entiendes...

(*El penalti más largo del mundo*: 81)

(179)では、「手の指が重要であることをわかるだろう」という気持ちと、「自分の立場を理解して指を折るのをやめてくれ」という気持ちを込めて肯定形を用い、聞き手を説得しようとしている。従って、聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する下降音調の「よ」に対応する。

しかし、(178)は降昇音調の「よ⤴」になる可能性がある。

(178)' Ana: Me voy a casar con él, ¿lo entiendes? Tenemos planes...

(*El penalti más largo del mundo*: 145)

(29)' X: 総会、私も行っていい？

Y: 何するの？おもしろくないよ⤴。

(小山 1997: 106)

この例における¿entiendes?は、聞き手に「他の男性と結婚する」と lo を用いて再度告げる場面である。出典の音調を確認すると、一旦上昇して下降し、再び上昇する音調をとっており、「本当にわかっているのか？」というような含意を示して聞き手が発話を理解しているかを確認し、聞き手への非難を表している。小山（1997: 106）は降昇調の「よ⤴」について、「聞き手が気づいていないような事柄に言及して話し手と聞き手の認識の差を表し、さらに問いかけ上昇調イントネーションによって聞き手がそのギャップを認めるかどうか、あるいはなぜそのギャップに気づかないのか、といったことを尋ねている」と述べており、これは非難の含意を持つと解釈できる。まさに(178)の発話状況と同様であると言えるだろう。

このように、sabe(s)と entiendes は聞き手に対する理解の求め方が異なるが、どちらも情報を伝達し、発話内容への理解を求めたり、話し手の主張を表す点において

「よ」に対応する。

6.5. ves

6.5.1. 先行研究

では ves について見ていこう。Ortega（1986: 285）は、ves は先に考察した sabe(s) や entiendes と似ているが、大きく異なる点があると指摘し、（ves は）話し手が前もって述べたことが実際にそうだと確認できた場合に、話し手の発話を正当化すると説明している。Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4187）においても同様の説明がされており、「ves は先行発話と先行発話を証明する状況の一致を聞き手に確認する機能を持つ」と要約できる。また Ortega（1986: 289）は、ves は文頭、文末に現れると説明している。しかし、本論文のデータでは文頭、文間、文末、単独の位置に現れている。

6.5.2. 実例における考察

ves は、sabe(s)や entiendes と同様に、疑問形だけでなく、ya や lo を伴う肯定形でも現れている。Ortega（1986）の定義を実例に当てはめると、単独の例では、先行発話と先行発話が事実だと証明できた状況との一致を確認する機能を果たすので、距離のある先行発話や、先行発話を証明する発話状況の「文末」として機能していると考えられる。

6.5.2.1. 単独の用例

では、まず例数の多かった単独の例を見ていこう。

（187） Ramón: ¿A qué viniste?

[Rosa parece pensárlo y no encuentra respuesta.]

Ramón: Vaya, me lo estás poniendo difícil. Bueno, ¿a qué te dedicas?

Rosa: Trabajo en una conservera. (...)

Rosa: Te vi en la tele el otro día.

Ramón: ¿<u>Ves</u>? Ya nos vamos acercando.

Rosa: ¿A qué?

Ramón: A la razón por la que viniste.

(*Mar adentro*: 35)

(187)は、話し手 Ramón に聞き手 Rosa が初めて会いに来た場面である。Ramón

はRosaになぜ自分に会いに来たのか尋ねるが、Rosaは答えられず黙ってしまう。そこでRamónはRosaの仕事について尋ね、しばらく2人の会話が続いた後、Rosaは「(Ramónが以前出演した尊厳死を訴える)テレビ番組を見た」と述べる。この発話を聞いたRamónは¿Ves?を用いて、「ようやく話の核心に近づいた」と述べる。母語話者はこの場面における¿Ves?について、「『やっぱり』や『ほら』のような意味を持つ」と回答しており、「なぜ自分に会いに来たのか」という質問への答えをようやく伝えたRosaに対して、質問と答えが一致を確認していると考えられる。

次に、(188)では妊娠中である話し手Genéが、胎動を感じてもらおうと腹部に聞き手Ramónの耳を当てている場面である。

(188) [Ramón parece prestar atención, con la cabeza pegada a la tripa de Gené].

Ramón: No siento nada. ¿Seguro que ahí hay un niño?

Gené: De siete meses, guapo.

Ramón: Pues no se mueve.

Gené: ¡El que no se mueve eres tú!

Ramón: Ahora, ahora, ahora...

Gené: ¿Ves? Se alegra de verte.

(*Mar adentro*: 96)

「本当に中に子どもがいるのか?」と尋ねるRamónに、Genéは「7ヵ月だ」と答える。なかなか胎動を感じられないRamónは「(胎児が)動かない」と主張するが、突然Ramónにもはっきり分かるほど胎児が動き始め、そのすぐ後にGenéは¿Ves?と発話する。母語話者によると、この場面における¿Ves?は「発話と赤ちゃんが動いたことが一致したと確認できたことを表す」もので、本当にお腹に子どもがいるという発話と、実際に感じられた胎動が一致したことを確認する機能を果たすと考えられる。実際にお腹の中にいる胎児は目には見えないので、胎児そのものを見たかを問うのではなく、発話と状況が一致したことを、¿Ves?を用いて確認するのである。

また、次はloを伴っている例である。

(189) [Con extrema lentitud, el ascensor se pone en marcha hacia arriba.
El espanto llega de nuevo a los ojos de Martín.]

Martín: Está subiendo...

[Mira a Héctor.]

Martín: No baja, sube...

[Y, de pronto, una voz amortiguada se cuela en la cabina
a través de una rejilla en el techo.]

Voz: Todo está bajo control... Subirán hasta el último piso lentamente...

[Martín grita a la rejilla:]

Martín: ¡Oiga!

[Pero ninguna voz responde.]

Héctor: ¿Lo ves? No pasa nada.

(*Héctor*: 123)

(189)は、話し手 Héctor と聞き手 Martín が乗っていたエレベーターが突然止まった後、再び動き出す場面である。エレベーターが制御されているという音声が流れたにも関わらず、焦って救助を求めようとする Martín に対して、Héctor は¿Lo ves? No pasa nada.と告げる。この¿Lo ves?は、流れてきた音声と発話時の状況が一致していることを表している。また母語話者によると、「lo を伴うことによって No pasa nada.の理由が『全てコントロールされている』という Voz の内容であることを強調しているような印象を受ける」という。このことからも、単独の ves は距離のある先行発話や、先行発話を証明する発話状況の「文末」として機能していると言えるだろう。

6.5.2.2. 文末の例

では、先行発話に関わる文末の位置に現れる疑問形¿ves?は、単独の例と同様の機能を果たすのだろうか。次の例は、退屈そうにパーティーに参加している聞き手 Ángela に話しかけた話し手 Andrea が、離れた所にいるパーティーの主催者について話す場面である。

(190) Andrea: Míralos... cada año se ríen más fuerte...

[Un grupo de yuppies próximo a ellas, ríe ante una gracia de un superior.
Uno de ellos se destaca exageradamente.]

Andrea: Uy, ése... Ése se convierte en jefe dentro de nada. (Ángela ríe.) Acuérdate... el año que viene contará los chistes y los demás le reirán las gracias, ¿ves? Así funciona, ¿verdad? Me llamo Andrea (Se dan la mano.) y aquel que sostiene el vaso es mi marido, ¿o es el vaso el que le sostiene a él?

(*Solo mía*: 30)

「パーティーの主催者が来年も冗談を言い、周りの人は笑うだろう」という発話の文末に¿ves?を用いている。母語話者は、この例について「話し手の発話を強調している」と回答している。この¿ves?がすぐ前の発話と、それを証明する状況との一致を表すとすると、聞き手である Ángela が実際にその状況を確認できるのは１年後であるが、ここでは１年後の状況と現在の発話の一致を表すことによって、より話し手の発話の信頼性を強めていると考えられ、母語話者の言うように強調として機能するのだろう。このことから、単独以外の疑問形¿ves?は先行発話と先行発話を証明する状況との一致を求めることによって発話に信憑性を与え、聞き手に対して発話が理解できるものであることを示すと言えるだろう。

6.5.2.3. 文間の例

次に文間の例である。

(191) [En la televisión del bar, un partido de fútbol de primera división.
En el bar, Bilbao, Rafa, Khaled con Abdullah y Fernando beben cerveza mientras ven el partido. (...) Ana se aleja hacia la barra, donde también está Cecilia.]

Ana: Anda, Khaled, dame un porrito para ver si me relajo...
Khaled: No tengo. He dejado. Khaled ahorra.
Rafa: ¿Y eso por qué, desde cuándo?
Khaled: Cosas mías. Estoy en ahorro.
[Román se acerca al grupo y se sienta con ellos.]
Román: Tú por mucho que ahorres no te da ni para una *mobylete*, macho... (*Señala la televisión.*) mira Beckham [*sic*], ése sí que ahorra, ¿ves?, ahorra unos millones de euros al año... Eso es ahorrar y lo demás tonterías.
(*El penalti más largo del mundo*: 139)

(191)は、貯金をしているという Khaled に対して、話し手 Román がサッカー選手を指し、「彼のように大金を貯金するのが本当の貯金だ」と主張する場面である。この場面では話し手たちはテレビでサッカーの試合を見ているので、¿ves?がサッカー選手が実際に見えるかを尋ねているとも解釈できるが、これは人ごみの中でサッカー選手を見ているのではなくバルのテレビで観戦している状況であり、わざわざ見えるかどうかを確認しているとは考えにくい。また、テレビに映るサッカー選手が貯金をしていることがサッカーの試合の中継番組で確認できるということもないだろう。従っ

て、ここではテレビに映るサッカー選手の映像によって、話し手の発話内容が理解できるものであることを示していると考えられる。実際にこの発話を母語話者に提示したところ、「¿ves?がなければ（サッカー選手が貯金をしているという）同じ情報をただ繰り返しているだけで、聞き手と共有しようとしているように感じられない」という回答や、「サッカー選手が貯金していることを強調している、映像を見て確認するよう求めている」という意見が得られた。このことから、単独以外の位置における疑問形¿ves?は、視覚を通して発話を確認するよう促すことによって、発話の理解を求める機能を果たすと言うことができるだろう。

6.5.2.4. 文頭の例

では、肯定形の ves はどのような機能を果たすのだろうか。単独の例が疑問形¿Ves?が多かったのに対して、文頭では肯定形のみが現れている。

(192) [Después de ducharse y cambiarse, Fernando sale del vestuario. Observa que junto al quiosko del campo, hablando animadamente están Santos y Ana. Fernando se dirige a ellos. Al verle, Santos y Ana, un poco cortados, dejan de reírse.]

Fernando: Hola, hermanita... ¿qué haces por aquí?

Ana: Acaba de llegar. He venido a llevarme algunas cajas del quiosko, como ya he terminado la temporada...

Fernando: Y qué, aquí de cháchara, ¿no?

Santos: (*Haciéndose el simpático.*) Ya ves, tu hermana y yo vamos a fundar un club. A lo mejor a ti también te interesa, Fernando.

(*El penalti más largo del mundo*: 97)

(192)は、Fernando の姉 Ana と上司 Santos が、「雑談をしていたのか」と問う Fernando に対して、話し手 Santos は文頭で Ya ves を用い、話していた内容を説明する。これまで見てきたように、ya や lo を伴うと聞き手との共有情報を表すのだが、この例においても同様に、後続発話が聞き手との共有情報として提示する。またこの前に Fernando が「ここで雑談していたのか」という発話の話題維持としても機能していると考えられる。では、先ほど考察した疑問形のように、先行発話との一致の確認を求める機能は持っているのだろうか。この例では Fernando が話をしている 2 人を見たことと、後に続く発話が一致することを示していると考えられるだろう。母語話者に対するアンケートでは、ya ves によって「後続発話が聞き手にとって新規の情報ではないことを表して、重要性を和らげようとしている」という回答が得られた。

重要性を和らげるのは、「後続発話を言った後に一致するから」という意味を含んでyaを用い、聞き手との共有情報であることを断定していることによるのではないだろうか。また、ya vesはya sabesと同様に注意喚起の機能を持たず、用件部で用いられ話題維持を示す。しかしこの例では、ya sabesに置きかえると「Fernandoに以前に話していると含意を持つ」という回答が得られ、同じ機能を持つya vesとya sabesも、それぞれの動詞の語彙的意味を反映して、異なるニュアンスを持つと言えるだろう。

また次の例では、FernandoがRománの恋人Ceciliaを家に招いて食事をしていると、突然家にRománが訪ねてくる。Ceciliaが家にいることがRománに知られるのを恐れたFernandoは、嫌がるCeciliaに冷蔵庫の中に隠れるよう頼む。

(193) Cecilia: ¿Dónde quieres que me esconda?
Fernando: Tengo el sitio perfecto... Métete aquí...
[Fernando abre la puerta de la nevera.]
Cecilia: ¿Pero cómo me voy a meter ahí dentro, tú estás gilipollas?
[Fernando saca las escasas cuatro cosas que hay en la nevera, una lata de pimientos, un bote de mostaza y las cervezas.]
Fernando: No es una nevera cualquiera, es una nevera no *frost*, y está casi nueva...
Cecilia: Pero no ves que puedo morir de congelación...
Fernando: No digas tonterías, si van a ser dos segundillos, mientras me deshago de Román...
[Román golpea la puerta con más fuerza.]
Román (OUT): ¡O abres o tiro la puerta abajo, tío...!
Fernando: ¡Estoy a punto...! ¡Ya estoy...! (*Bajando la voz.*) <u>Ya lo ves</u>, o te metes aquí o nos parte la cabeza tu novio...
Cecilia: No me lo puedo creer...
[Ferando saca también las rejillas y Cecilia empieza a meterse en la nevera.]
(*El penalti más largo del mundo*: 78)

Fernandoは、ドアを開けるよう要求するRománをあしらいながら、冷蔵庫に隠れるようCeciliaを説得する。この場合も、Ya lo vesによって「冷蔵庫に隠れるしかない」と話していた先行発話の話題維持を表明していると考えられる。ある母語話者は、この例について「ya lo vesを伴うことによって、忠告のニュアンスが強まる」

と回答している。これは、話題維持を示した後に、再度冷蔵庫に隠れるしか解決策がないことを強調する発話を続けることによると考えられる。また ves は、それが持つ語彙的意味によって一致を表すので、「現在の状況を乗りきるには、後続発話で述べる解決策しかないという、発話内容と状況との一致を聞き手も理解しているはずだ」という含意を持つのではないだろうか。ves が単独や文末では肯定形、疑問形の両方が現れるのに対して、文頭で疑問形の例が見られないのは、理解する対象が示されていない文頭という位置では、単独の場合のように先行発話との一致を問うことはできないことが理由だろう。

このように、ves は視覚を通して確認できたかを尋ねたり、確認できると断定することによって発話に信頼性を与える機能を持つ。疑問形の場合は、聞き手に対して、先行発話とそれを証明する状況とが一致していることを確認するよう要求し、肯定形は先行（あるいは後続）発話とその証明の状況を、聞き手もすでに確認している、あるいは今に確認するだろうと話し手が判断していることを表す。ves は２つの情報の一致の確認を聞き手に求める機能を持つが、それぞれの情報が ves と距離がある場合もあり、sabe(s)や entiendes のように、明確に位置による機能を当てはめるのは難しい。しかし、単独の例を先行発話の「文末」とみなすと、やはり文末では話し手の発話態度（この場合は情報の一致の理解を求める）が強く明示されると言えるだろう。

また、ves は知覚に関わる sabe(s)や entiendes とは異なり視覚表現であるが、聞き手の理解を求める。これは後に見る他の視覚表現 mira、verás、fíjate にも共通する機能である。

6.6. ves と「ね」、「よ」

6.6.1. ves と「ね」

では ves と終助詞との対応を考えてみよう。

(188)' Gené: ¿Ves? Se alegra de verte.

(*Mar adentro*: 96)

(189)' Héctor: ¿Lo ves? No pasa nada.

(*Héctor*: 123)

この単独の例は、離れた先行発話とそれを証明する発話状況の一致を求めるものであり、話し手は聞き手が一致を確認できると考えて ves を用いている。これは話し手と聞き手の認識（知識）が一致する場合に用いられる「ね」の確認の用法（大曽 1986、陳 1987）に対応する。実際に、(188)、(189)はどちらも「ね？」や「ほらね？」のよ

うに訳すことができるだろう。ves が単独であるのと同様に、「ね」も単独で一致を確認するために用いることができると考えられる。また、次の例を見ると、「ね」が日本語においても離れた先行発話の文末として機能することがわかる。

(194) 「もしもし。」
とおずおず言う馨の声が軽やかに響いた。
「ああ。」
智明は寝ぼけた声で言った。
「寝てたの？起こしちゃった？ごめんなさいね。」
「いや、もう起きてたよ。なに。」
「あのね、今日、すごく気持ちがいい陽気なのよ、外が。番外編で、夜の散歩っていうのをやっているの。実は××町にいるのね、今。」
けっこう遠い町名だった。そして彼女には不思議な強引さがあった。
「出てこれない？本当に、今、散歩するしかないような、いい夜なのよ。よかったら二人でお茶でも飲みましょう。それで、歩いて帰りましょう。疲れたらバスに乗りましょう。」
おち合ってすぐに入った酒の店で、たった一杯飲んだカンパリソーダで、彼女はその酒と同じくらい赤くなってしまった。(…)
「ね、どこまでも歩けそうでしょ、今夜って。」
(『サンクチュアリ』：170-172)

(194)で確認を求める「ね」は、「本当に、今、散歩するしかないような、いい夜なのよ。」という時間的に距離のある発話内容と発話状況、この場合は「いい夜」であることの一致の確認を求めている。伊豆原（1993）も述べているように、「ね」は文末だけでなく他の位置においても聞き手との共有に関わるので、このように先行発話と距離があっても確認として用いることができるのだろう。従って、単独の ves と「ね」は、どちらも確認の機能を持つ点において対応していると言える。

では、文頭の例はどうだろうか。

(192)' Santos: (*Haciéndose el simpático.*) Ya ves, tu hermana y yo vamos a fundar un club. A lo mejor a ti también te interesa, Fernando.
(*El penalti más largo del mundo*: 97)

(193)' Fernando: ¡Estoy a punto...! ¡Ya estoy...! (*Bajando la voz.*) Ya lo ves, o te metes aquí o nos parte la cabeza tu novio...

(*El penalti más largo del mundo*: 78)

文頭では肯定形のみで現れて、後続する発話が発話状況に一致することを聞き手に示すものである。注意喚起をせず、話題維持として機能する点においては ya sabes と同様であり、「あのね」に対応すると考えられる。

(181)' 「あのね、それはパリとかのことではなくて、パリは行ってもいいの。ただ、この世にい続けようとしてほしい。」

(『みずうみ』：111)

しかし、ves の動詞の語彙的意味によって、視覚的にも後続発話の内容が確認できるものとして情報を導く。この機能は「あのね」にはないと考えられる。

6.6.2. ves と「よ」

しかし、ves は「よ」に対応する場合もある。

(190)' Andrea: Acuérdate... el año que viene contará los chistes y los demás le reirán las gracias, ¿ves?

(*Solo mía*: 30)

先に見たように、この発話は 1 年後の状況と現在の発話の一致を表すことによって、より話し手の発話の信頼性を強めている。文末は、先行発話の内容に対する話し手の判断を表す位置であり、この例における¿ves?は発話内容が視覚的に確認でき、聞き手が理解できるものと示していると解釈できるだろう。そのように考えると、たとえ一致を表す¿ves?であっても、話し手と聞き手の認識（知識）の不一致を表すことによって、発話への理解を求める「よ」に対応するのではないだろうか。

もう 1 例見てみよう。

(191)' Román: Tú por mucho que ahorres no te da ni para una *mobylete*, macho... (*Señala la televisión.*) mira Beckham, ése sí que ahorra, ¿ves?, ahorra unos millones de euros al año... Eso es ahorrar y lo demás tonterías.

(*El penalti más largo del mundo*: 139)

(191)は、話し手がテレビに映るサッカー選手を指して「彼のように大金を貯金するのが本当の貯金だ」と主張する場面である。テレビに映るサッカー選手の映像によって、話し手の発話内容が理解できるものであることを示している。従って、この場合にも「よ」に対応すると考えられる。

このように、ves は一致したことを確認する場合、また文頭で用いられる肯定形のようにこれから一致することを示す場合には「ね」と共通しているが、文末や文間の例では発話への理解を求める機能を果たし、この機能を持つ「よ」に対応すると言えるだろう。

スペイン語の sabe(s)、entiendes、ves は、発話内容への理解を求めるものであるが、sabe(s)は聞き手が発話内容を当然受け入れると期待して理解を求め、entiendes は理解しがたくても理解するよう求め、ves は発話内容と状況の一致を確認したり、発話を証明する状況を示すことによって発話内容への理解を求めるといった、異なる視点から働きかける。これらはそれぞれ動詞本来の語彙的意味が機能の差を生み出していると言えるだろう。sabe(s)、entiendes、ves のいずれの場合も、ya や lo、me を伴うと聞き手が理解することを断定するという点では同様である（下降音調の¿sabe(s)?も含む）。従って、疑問形の場合は聞き手にとって新情報、肯定形では既知情報という現実の反映ではなく、話し手が情報を新情報として、あるいは共有情報として提示しようとしているかどうかによって、疑問形か肯定形かを判断するのである。

現れる位置による機能については、これまでの定義とほぼ一致する。文頭では後続発話への引き込み（注意喚起）、文末では先行発話に対する話し手の態度を反映する。しかし、これまで見てきた¿verdad?や¿eh?とは異なって、sabes、entiendes、ves は肯定形で用いられ、文頭で話題維持の表明や、文末で聞き手の理解を断定する。

なお、今回は文中、文間に関しては明確にその機能を示す例があまり得られず、本論文における位置による機能の定義が当てはまるかについて詳しく考察することができなかった。この点に関しては今後さらに考察する必要があるだろう。

以上の sabe(s)、entiendes の機能は表 15、ves の機能は表 16 のようにまとめられる。

表 15　sabe(s)、entiendes と「ね」、「よ」のまとめ

				sabe(s)	entiendes	ね	よ
性質				知っているかを問題にする	理解したかを問題にする	話し手と聞き手の認識（知識）の一致	話し手と聞き手の認識（知識）の不一致
機能	文頭	聞き手への注意喚起		○ 疑問形		○	○
		話題維持		○ 肯定形		○	×
	文中	注意喚起 （受けの確認）		○		○	○
	文末	理解の要求	聞く　受け入れられるか	○ ¿sabes?↑	×	×	○ 「よ」↑
			断定　受け入れられると	○ ¿sabes?↓ 肯定形	×	×	○ 「よ」↓
			理解するか聞く　理解しがたくても	×	○ 疑問形	×	○ 「よ」↓
			理解すると断定　理解しがたくても	×	○ 肯定形	×	○ 「よ」↓
		非難		○	○	×	○

文頭や文中で sabe(s)は「ね」に対応する。文末では、sabe(s)と entiendes のどちらも「よ」に対応するが、sabe(s)と entiendes は理解を求めるプロセスが異なり、さらに疑問形と肯定形では理解の求め方に差が見られる。

また、ves の機能は以下の通りである。

表 16　ves と「ね」、「よ」のまとめ

<table>
<tr><td colspan="4"></td><td>ves</td><td>ね</td><td>よ</td></tr>
<tr><td colspan="4">性質</td><td>視覚的に理解したかを問題にする</td><td>話し手と聞き手の認識（知識）の一致</td><td>話し手と聞き手の認識（知識）の不一致</td></tr>
<tr><td rowspan="5">機能</td><td>単独</td><td colspan="2">発話内容と状況の一致確認要求</td><td>○</td><td>○</td><td>×</td></tr>
<tr><td rowspan="2">文頭</td><td colspan="2">聞き手への注意喚起</td><td>×</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td colspan="2">話題維持</td><td>○
肯定形</td><td>○</td><td>×</td></tr>
<tr><td>文中</td><td colspan="2">注意喚起
（受けの確認）</td><td>×</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td>文末</td><td>理解の要求</td><td>発話が理解できるものであることを示す</td><td>○
疑問形</td><td>×</td><td>○</td></tr>
</table>

ves は、文頭や単独で「ね」に対応する。単独の¿ves?は、離れた先行発話の文末と考えることができる。しかし、文末に現れると発話内容の理解に関わるので、「よ」と共通した機能を持つ。sabe(s)や entiendes のどちらとも異なるプロセスを経て聞き手に理解を求めるのである。

sabe(s)、entiendes、ves は動詞の 2 人称単数の形式ではあるが、話し手が聞き手にどのように理解してほしいかを表明するものである。特に、話し手の発話態度が現れる文末という位置では、sabe(s)、entiendes、ves という語彙を積極的に使い分け、異なる理解の求め方を示すのである。

7. oye、mira、fíjate、verás

oye、mira は、動詞 oír、mirar の命令法から転用した表現で、Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4180, 4184）によると、これらには明らかに脱意味化が見られるという。Pons（1998a: 214）は、oye や mira を含む呼びかけ表現（apelativos）の使用によって、話し手は発話を継続する意図を表すと説明している[89]。話し手がどのようにして情報を伝達するかを解明する上で、oye と mira の機能を明らかにする必要があるだろう。大倉（1994）は、間投詞 oye、mira と、終助詞「ね」、「よ」を対照しており、本論文の目的である終助詞との対照を考察する上で、大いに援用できるものであると考えられる。

また、命令法 fíjate と未来形 verás は、mira と類似する機能を持つという（Pons 1988b: 224、Fuentes 1990: 178）。これらの表現については、oye と mira の機能を論じた後に考察する。

7.1. 問題点

Pons（1998a: 214）は、oye と mira は、過度に使用されることにより脱意味化していると主張する。その結果、本来の「聞け」、「見ろ」という身体的な行為を要求するのではなく、聞き手の注意を喚起する機能を持つようになったとし、どちらも escúchame で言いかえ可能である（Pons 1998a: 216）という。しかし、Fuentes（1990: 178）は、oye から mira への言いかえは可能だが、mira から oye へは不可能であると指摘している。また、Pons（1998b: 224）は、mira は fíjate でも置きかえることができると述べており、これらの記述から oye と mira の機能に何らかの差があり、oye の方が mira より意味が広いことが予想される。さらに Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4186）は、oye と mira が同時に現れることも指摘している。完全に一致した機能を持つ２つの表現が同時に現れる必要性はないので、oye と mira は、Fuentes（1990）の言うように根本的には異なるものであると考えられる。

また fíjate や verás については、mira との共通点に関する指摘はあるが、差異に関しては詳しく言及はあまりされていない。これらが mira とどう異なり、どのように使い分けられるのかを明らかにする必要があると考えられる。

---

[89] Mediante estos usos, el hablante expresaría su voluntad de proseguir el mensaje.（Pons 1998a: 214）

7.2. oye

7.2.1. 先行研究

本節では、oye に関する先行研究を、談話を管理する談話標識としての機能と、情報伝達をする上で聞き手へどのように働きかけるかという語用論的機能、さらに位置による機能という 3 つの観点から見ていく。

7.2.1.1. 談話標識としての機能

oye は、聞き手の注意を喚起することによって、発話権を交代して話し手が会話を開始し（Fuentes 1990: 177、Pons 1988a: 216）、話題転換や新しい発話の導入（Briz 1998: 228、大倉 1994: 133）を表明する。また mira と異なる点として、oye は「聞き手に後続発話をよく聞くよう促す（llamar la atención）」が、mira が持つ ten en cuenta（「留意しろ」）のような含意はないと指摘されている（Fuentes 1990: 177）。さらに Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4183-4184）は、oye は命令法でも疑問形で用いられ[90]、mira より脱意味化の程度が低く、主張、命令、質問、懇願といった様々な発話に伴うと説明している。これはおそらく mira が視覚的に「見ろ」を意味するにも関わらず理解に導く機能を果たすのに対して、oye の場合は「聞け」という語彙的意味通りの機能を持っていることが理由であると考えられる。

7.2.1.2. 語用論的機能

oye は、聞き手を発話に導き、聞き手とのコンタクトを作り出す（función fática）（Pons 1998a: 215）。「聞き手に対して自分が持つ情報を提供し、（…）話者の情報の世界に聞き手を取り込もうと」し、その情報をもとに、話し手が持つ意見や感情を聞き手に推論してもらおうとするのだという（大倉 1994: 136）。また Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4184）は、話し手が聞き手の領域に近づくと説明している。

後ほど考察する mira は、先行発話に関わる証明や説明の前に置かれ、聞き手を理解に導くのに対して、oye の場合は大倉（1994）が「話し手の情報の世界に聞き手を取り込もうとする」と指摘しているように、聞き手に注意喚起して後続発話に耳を傾けさせて情報を伝達するものである。つまり、oye はそれが持つ「聞け」という語彙的意味を残している無標の注意喚起表現と言うことができるだろう。表 4 を見ると、oye は言明や命令、質問といった行為に多く伴っている。言明とは、話し手が持つ情

---

[90] A: ¿Oye? ¿Oye?
B: Sí. Le escucho, le escucho... Diga, diga... Hable...
（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4184）

報を聞き手に伝達する行為であり、命令もまた話し手からの一方的な伝達である。質問では、情報（質問の答え）を持つのは聞き手であるが、話し手からの質問を聞き手に伝達するためにoyeを用いて注意喚起していると説明できる。Martín Zorraquino y Portolés（1999）の「話し手が聞き手の領域に近づく」という規定は、伝達のプロセスとして、話し手の持つ情報を聞き手に伝達することを意味していると考えられ、これがoyeの中心的機能と言えるだろう。またMartín Zorraquino y Portolés（1999: 4185）によると、oyeは聞き手に対する話し手の意見の不一致や反論、諭し、怒りを表すこともあるという。これらの発話も、話し手の感情や意見などを聞き手へ情報を伝達するというものと解釈できる。

7.2.1.3. 位置による機能

次に、位置による機能に関する従来の記述を見てみよう。表3によれば、oyeは文頭での使用がほとんどであり、この位置では注意喚起、発話権取得、話題転換（Fuentes 1990: 177、Pons 1998a: 216）などの機能を果たす。文中では、発話の一部へ注意喚起、強調（valor intensificador、reforzar）（Fuentes 1990: 179、Briz 1998: 228）と説明されている。これは先に見た呼びかけ語の例のように、oye の後続発話に対する注意を喚起し、結果的に発話の説得力が増すものと考えられる。また文末では、前方照応としての注意喚起（Fuentes 1990: 180）、発話の再確認（Briz 1998: 228）、驚き、強調（enfatizar）、聞き手への親しみ（complicidad）といった発話態度を表すという（Fuentes 1990: 180、Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4183）。さらに、toma nota（「覚えておけ」）や date cuenta（「気づけ」）という含意を持つという指摘も見られた（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4186）。前節でoyeにはmiraが持つten en cuentaという含意はない（Fuentes 1990: 177）ことを確認したが、文末ではtoma notaのような含意を持つと説明されるのは一体どういう理由によるのだろうか。

さらに、命令法ではなく直説法現在の oyes で現れた場合には、非難を表すという（Briz 1998: 228）。これは山田 他（1995: 498）が指摘しているように、直説法現在の2人称単数形を用いた命令は、強い語調を持つという性質によるのだろう。

7.2.2. 実例における考察

本節では、文頭と文末のoyeを中心に考察する。データ中、文間のoyeは5例観察されたが、そのほとんどが eh など他の注意喚起する語を伴うものであった。呼びかけ語や eh の場合にも、注意喚起の機能を持つ他の表現と共起する例があり、これらの差異については第9章で詳しく言及する。

7.2.2.1. 文頭での用例

ではまず文頭の例から見ていこう。次の例は、Alicia という患者を担当する看護師 Benigno に会いに来た話し手 Marco が、先に見舞いに来ていた Katerina について尋ねる場面である。

(195) [En la puerta que da al pasillo aparece Marco.]

Benigno: Hola. (A Marco.) Entre y cierre, por favor.

[Marco cierra la puerta, cruza la habitación y aparece en la terracita, se une a la pareja. Se saludan. Benigno deja la revista donde estaba antes y le ofrece la silla que él ocupaba cuando los acompañaba Katerina.]

Benigno: Alicia, mira quién ha venido. (A Marco.) Estamos tomando un poquito el aire, y mirando revistas...

[Marco se contagia de la naturalidad de Benigno. No le cuesta esfuerzo.]

Marco: Oye, ¿quién es la mujer que acaba de salir?

Benigno: Katerina. La profesora de Alicia.

(*Hable con ella*: 90)

日光浴をしていたと説明する Benigno に対して、Marco は文頭に oye を用いて、見舞いに来ていた女性（Katerina）が誰かを尋ねる。ここでの oye は、病室のバルコニーにいる Marco の注意を喚起し、先行発話の話題を転換する機能があると考えられる。母語話者のアンケートによると「この文脈で oye がなくても状況的には不自然ではない」というが、突然話題が変わることに対する聞き手への配慮として oye を用いて注意喚起しているのだろう。また「oye でないと新規の情報を導かないので、この場面では mira に置きかえることはできない」という意見もあった。これは言いかえると、mira が新規の情報を導入する機能を持たないということである[91]。

もう少し例を見てみよう。

(196) [Suena el teléfono. Ramón vuelve la cabeza y agarra con los dientes un palito que hay un junto al aparato, sobre la cabecera de la cama.
Con él pulsa el botón del manos libres. Quien le llama es Gené,
desde una planta de oficinas prácticamente vacía.
La vemos a través de una puerta de cristal con la siguiente inscripción: DMD.

[91] mira の機能に関しては、9.3.を参照。

Derecho a morir dignamente.(...)]

Ramón: ¿Diga?

Gené: Hola.

Ramón: ¡Gené! ¿Qué tal?

Gené: Bien... Bueno, todavía en la oficina, chico. Das más trabajo que un hijo tonto. ¡Es broma! Oye, lo del reportaje ha sido espectacular. No paramos de recibir llamadas de apoyo. Ramón, esto nos viene de miedo el juicio.

Ramón: Si tú lo dices.

(*Mar adentro*: 40)

(196)は、尊厳死の認定を求める Ramón と、Ramón を擁護する人権団体の責任者 Gené が電話で会話をする場面である。Ramón に関する仕事が山積みだと冗談を言う Gené だが、突然 oye を用いて Ramón が出演したインタビュー番組について話し始める。この例においても oye は聞き手に話題転換を表明し、聞き手の注意を喚起する機能を持つと考えられる。母語話者によると、この場面でも先の例と同様に「oye でないと不自然」であり、「mira への置きかえは不可能」だという。大倉（1994: 133）は、oye が「直前の発話と後続発話を分離する合図を聞き手に送る談話標識として機能する」と述べており、この例における母語話者の意見とも一致している。一方で、mira には新規の情報を導入する機能がないことがわかる。

また、次の例は Nata に個人的な質問をする Santa に、Nata の父でありバルの店主である Rico が注意をする場面である。

(197) Rico: ¿Tú no tenías que estudiar hoy?

Nata: Ya me lo sé todo.

Santa: (*A Nata.*) ¿Con quién has quedado?

Nata: (*Borde*) ¿Y a ti qué te importa?

Santa: ¿Con el chaval ese que tiene pinta de yonqui?

Rico: ¿Qué chaval?

Nata: No tiene pinta de yonqui.

Santa: Bueno.

Nata: ¿Qué pasa?, que te molesta.

Santa: Molestarme no. Pero como a tu padre parece que le da igual todo.

Rico: Oye, Santa, tú déjame a mí que con mi hija ya me entiendo yo, ¿eh?

(*Los lunes al sol*: 42)

Rico は、Santa に「放っておいてくれ」と命令するが、発話状況と文末に¿eh?を伴って発話内容の確認を求めていることから、Rico の苛立ちが感じられる。母語話者に対するアンケートによると、「oye を伴わなければ Rico の苛立ちや怒りはあまり感じられない」という。これは、命令の前に oye を置くことにより、聞き手が発話内容を確実に聞くように注意喚起をしていることによるのであろう。すなわち、oye そのものが苛立ちや怒りを表すのではなく、苛立ちを含む後続発話への命令に注意を向けるので、結果的に話し手の苛立ちが目立つということである。また、この例では oye の後に呼びかけ語 Santa が現れている。文頭で注意喚起の機能を果たすのは、呼びかけ語、sabe(s)、eh や oye などが挙げられるが、このうちの 2 つの表現が同時に現れていることから、それぞれの表現に何らかの差があると予測される。この点に関しては、第 9 章で詳しく扱う。さらに、この例では「oye を mira に置きかえることができる」という意見があった。しかし「mira の場合、oye と比べて非難の含意が強くなる」という。これは、mira が発話の根拠を話し手が持っていることを表明し、発話内容の理解へ聞き手を導く機能を持つことによると考えられる。

次に、Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4185）が指摘していた、聞き手に対する話し手の意見の不一致や反論を導く例を見てみよう。

(198) [Tumbados en la cama, Carmen masajea los pies de Alfredo.]

Alfredo: Estoy agotado... Yo no sé qué se ha creído ese Magnus. Siempre le tengo que repetir las cosas mil veces.

Carmen: Bastante hace el pobre. El diálogo se lo ha memorizado de carrerrilla.

Alfredo: Es un jeta, que te lo digo yo.

Carmen: <u>Oye</u>, mucho criticar a Magnus pero a mí que me parta un rayo. Ni caso.

（*Torremolinos 73*: 105）

妻 Carmen を主演にした映画を制作中の Alfredo が、Carmen の相手役の俳優 Magnus に嫉妬して悪口を言う。Carmen は、Alfredo に対して oye を用いて「（Alfredo は）Magnus を批判しているが、私には関係ない」と反論する。2 人で話している場面であえて注意喚起の機能を持つ oye を使用することにより、聞き手に後続発話をよく聞くよう促し、聞き手の批判は話し手には関係ないという主張を断定的に伝達していると考えられる。

このように oye は、文頭では話し手の情報を聞き手に伝達するために注意を喚起する。mira とは異なって、新規の情報を導入したり話題転換をする機能を持つ。

また、oye と mira が同時に現れる例も見られた。

(199) Gorilo: Sube, que te llevo.
Fany: ¿A caballito?
Gorilo: Que subas, joder.
[Fany obedece.
Rodea con las piernas la cintura del chico y se agarra con los brazos a su cuello.
Gorilo se pone en marcha.]
Gorilo: Pagaría porque ahora mismo te viera tu novio.
[Fany apoya la cabeza en la espalda de Gorilo.]
Fany: Anda, calla.
[Héctor sigue con la mirada el descenso de la pareja. Suena un móvil.
Sin bajar de la espalda de Gorilo, Fany lo saca del bolsillo del abrigo.
Mira la pantalla. Toma aire y descuelga.]
Fany: Hola, Ángel...
Gorilo: ¿Lo ves? Si cuando yo digo que tengo poderes...
[Fany le tapa la boca. Gorilo detiene la marcha.]
Fany: He salido a dar una vuelta...
[Gorilo hace ruido con la boca que la chica trata de tapar.]
Fany: Estoy con Héctor... y no sé, hace ruido... es que está un poco pedo...
[Gorilo aumenta los sonidos guturales.]
Fany: Oye, mira, te llamo luego, ¿vale?
(*Héctor*: 112- 113)

話し手 Gorilo が体調の悪い Fany を背に負い、帰宅しようと歩いていると、Fany の恋人 Ángel から電話がかかってくる。嫉妬深い恋人に状況を悟られまいとする Fany は、「後で電話する」という発話の冒頭に oye と mira を用いている。oye は話し手が聞き手に近づき、mira が聞き手を話し手の領域に引き込むという規定を当てはめると、話し手はまず聞き手に近づいて情報を伝達しようとし、その後に話し手の領域に引き込んで、理解を求めると考えられる。

このような機能は、日本語の終助詞「よね」が持つものである。「昨日すごく楽しかったよね。」という発話は、「昨日すごく楽しかった」という命題を「よ」を用いて聞き手に伝達し、さらに聞き手の同意を得られることを期待して「ね」を付加する。この場合「ねよ」という形式はあり得ない。聞き手の共有を求めた後に伝達するとい

う順序は成り立たないためである。一方、スペイン語母語話者によるアンケートでは「mira, oye という順は非文ではないが、oye, mira の順がより一般的だ」という回答が得られた。oye, mira が文頭で現れるのに対し、「よね」は文末のみという差はあるが、これらも聞き手への近づき方において共通性が窺える。この点に関しては、稿を改めて詳しく考察してみたい。

7.2.2.2. 文末での用例

7.2.2.2.1. データによる例

次に文末の用例を見ていく。本論文のデータでは文末の oye が 4 例観察されたが、うち 3 例が¿me oyes?という形式であった[92]。

(200) Antonio: Te he pedido perdón, ¿no? ¿Qué más quieres que haga?
Pilar: Nada, Antonio, no quiero nada.
Antonio: Que me arrastre, que me ponga de rodillas.
Pilar: Me da igual lo que hagas o lo que digas.... No me importa...
Antonio: Ya te he dicho que lo siento, cani, que no va a volver pasar...
Pilar: Ya no te creo, Antonio. No te creo ni te quiero.
Antonio: No digas eso, canija.
Pilar: Si quieres me callo pero es la verdad, no te quiero, ni te voy a querer nunca más.
Antonio: ¿Y qué vas a hacer, dejarme?
[Pilar no contesta.]
Antonio: Si me dejas me quito la vida, Pilar.
[Pilar le da la espalda, cansada, dejando sus cosas sobre una silla.]
Pilar: Haz lo que quieras Antonio[*sic*], me da lo mismo.
Antonio: Si te vas me mato, ¿<u>me oyes</u>?
[Pilar no contesta.]

(*Te doy mis ojos*: 150- 153)

(200)は、家庭内暴力が治らない夫 Antonio が妻 Pilar に対して「自分を置いて出ていくなら自殺する」と主張する場面である。「どうでもいい」と述べる Pilar に、Antonio

[92] 残りの 1 例は、ウェイターに対する Perdona, <u>oye</u>. (*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 31)という例であった。これは分類上文末であるが、話し手が明確に文末と意識していたか定かでないので、今回は扱わない。

は¿me oyes?を文末に用いて、もう 1 度「自殺する」と主張する。この場面で¿me oyes?を oye に置きかえるとどのような印象を受けるか母語話者に訊ねたところ、「¿me oyes?の方が oye よりも厳しい印象である」という回答が得られた。これは、直説法現在の 2 人称単数形 oyes で現れた場合には、非難を表すこと（Briz 1998: 228）、そして聞き手の反応を求める疑問形式であることによると考えられる。

今回のデータでは、Fuentes（1990: 180）や Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4183）が主張する発話態度に関わる文末の oye の有益なデータが得られなかった。しかし、文末に置かれることによって toma nota や date cuenta のような含意が現れるのであれば、文末の特異性を主張する 1 つの証拠となるだろう。そこで、文末に oye を用いる例を作り、その例文を通して機能を特定していこうと考える。

7.2.2.2.2. 発話態度を表す文末の oye

文末 oye の例は、第 1 に感嘆を表す(201)、(202)のような場合、第 2 に行為指示に伴う(203)、(204)、(205)のような場合、第 3 に主張や説明を含む(206)、(207)、(208)の言明の場合、そして第 4 に質問に伴う(209)の場合に分類される。これらの例を母語話者に提示し、oye を伴わない場合と比べてどのように発話の意味が変化するかを調査した。その結果を文の機能ごとに考察する。

まずは感嘆の例である。

(201) ¡Cómo ha cambiado Madrid, <u>oye</u>!
(202) ¡Qué pena de ver esto así, <u>oye</u>!

これらの例では oye を伴うことによって、(201)では Madrid が変わったことに対する話し手の驚きが、(202)では残念であるという気持ちが強く現れるという。さらに、(201)の例に関して、oye を文頭に置きかえると、後続する「Madrid が変わった」という発話内容は聞き手にとって新情報であるのに対して、文末に位置すると「話し手と聞き手がどちらも同じように感じている、共有情報のように感じられる」という回答も得られた。これまでも他の表現について考察してきたように、文頭では聞き手の注意を喚起するが、発話内容そのものには関わらない。一方、文末では先行する発話内容に関わって、その情報をどのように伝達しようとしているかを表す。oye にもこの規定を当てはめることができ、これらの例は話し手の発話内容への驚きや遺憾さを表していると考えることができるだろう。

次に行為指示の例を見てみよう。

(203) Deja de molestar, oye.
(204) No te metas en mis cosas, oye.
(205) ¡Déjame en paz, oye!

これらの例においても、oye を伴うことによって「1 度命令したにも関わらずなかなか聞き入れようとしない聞き手への命令のように感じられ、話し手の苛立ちや怒りの感情を含む」という。

また、次の(206)は言明の例であるが、行為指示の例と同じ回答が得られた。

(206) A: ¡Lánzate a la piscina!
B: No quiero.
A: ¡Vamos, que te lances ya!
B: ¡Que está muy fría, oye!

この例では、話し手 B はプールに飛び込むように促す命令を 1 度拒否しているにも関わらず、執拗に要求する聞き手 A に対して、文末の oye を用いて飛び込みたくない理由を述べており、話し手の苛立ちが窺える。

一方、次のような言明の例もあった。

(207) A: Yo creo que tal persona va a venir mañana.
B: Pues yo creo que no va a venir, oye.
(208) Anda, pues no sé, oye.

(207)は、聞き手 A の発話内容に対する反論の例であるが、このような場合、「話し手 B は問題の人物が翌日に来ないことをあらかじめ聞いており oye を伴うことで聞き手に発話を強調する」という。また(208)は、話し手が知らなかった話題に対する驚きを表す発話である。

最後に、(209)は質問の例である。

(209) ¿Me estás escuchando?, oye.

この発話は、話を聞いていない聞き手に対するものである。形式上は疑問文であるが、文意は話を聞いていない聞き手に対する非難を含んで「『ちゃんと話を聞け』いう命令の意味を持つ」という。つまり、修辞疑問になるということである。

このように、文末の oye は話し手の驚きや苛立ち、遺憾さなどの発話態度を表すことが確認できた。文頭の位置で考察したように、oye はそれが持つ語彙的意味から聞き手に発話への注意喚起を求めることを中心的機能として持つ。しかし、先行する発話内容に対する話し手の態度を表す文末の位置に現れると、Fuentes（1990: 180）や Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4183）の指摘や、母語話者の回答からもわかるように、話し手の発話態度を表すのである。

7.3. oye と「ねぇ」、「よ」

7.3.1. 文頭の oye と「ねぇ」

文頭の oye は、聞き手の注意を喚起し、新規の情報を導くことができる。

(195)' Marco: Oye, ¿quién es la mujer que acaba de salir?

(*Hable con ella*: 90)

大倉（1994: 138）は、oye と「ねぇ」が開始部や用件部で切り出しや話題転換としての機能を果たす点で一致していることを指摘している[93]。本論文で考察してきた例においても、oye、「ねぇ」は共に注意喚起や新規の情報を導く点において一致していると考えられる。

(18)' ねぇ、T さんてウチの人と結婚するんですってネ、名古屋支社の人なんだって、相手は。

（佐治 1967: 187）

また、oye には次の例のように話し手の苛立ちを含む発話を導く例も見られた。

(197)' Rico: Oye, Santa, tú déjame a mí que con mi hija ya me entiendo yo, ¿eh?

(*Los lunes al sol*: 42)

oye は常に好感を表す「ねぇ」に対応するわけではなく、このような場合、「おい」のようなぞんざいさを表す注意喚起表現にも対応すると考えられる。そのような表現は「ねぇ」と比べて聞き手に厳しい印象を与えるが、機能としては「ねぇ」と同様であると言えるだろう。

---

[93] p.195 参照。

7.3.2. 文末の oye と「よ」

大倉（1994: 136）は、情報伝達を中心的機能として持つ oye と「よ」がどちらも情報中心であるという点で一致していると述べている。この「よ」の機能を文末の oye に当てはめることによって、より明確な規定をすることができるのではないだろうか。

中﨑（2005: 79,80）は「よ」について、「残念に思っている」「遺憾に思っている」「快く思っている」という当該事態に対する話し手の心的態度（propositional attitude）を表すと述べている。「よ」を用いることによって、話し手は発話内容に対する心的態度の存在を顕在化させている、というのである。

(39)'（この間受けた模試試験の結果が返ってきてそのことについて話し合う生徒たち）

男子生徒 A: どうだった、統一模試。

男子生徒 B: だめだめ。ランキングにかすりもしないよー。

男子生徒 C: 俺もだよー。

（中﨑 2005: 80）

これらの発話は、発話内容のみを伝達するのではなく、「自分がランキングにかすりもしない事実を遺憾（不快）に思っている」という話し手の心的態度の存在までを含めて伝達することを目的としているという。「よ」の使用は義務的ではないが、「よ」の存在によってより明確に話し手の心的態度を含んでいることを表すのである。

さらに、「よ」は言外の意味を持つ発話に共起する場合がある（中﨑 2005: 83）。

(37)'（妻の反対をよそに市長選に立候補する芳彦）

房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ。

（中﨑 2005: 82）

この発話では、「よ」を付加しなければ不自然であり、上昇イントネーションを帯びるという。このような「よ」を伴った場合、発話を「字義通りの意味だけでなくある種の言外の意味を推論によって導き出し発話を解釈しなければならない」という。つまり、この例では「大学の先生である者が、市長選挙などに立候補するべきではない」という解釈をしなければならないということである。このように、「よ」の存在によって、発話に言外の意味を含んでいることを示す。

また、松岡（2003: 58）は次のような例を挙げている。

(38)’ 重大な話って何なの｛φ/ よ｝？

（松岡 2003: 62）

ゼロ形式が選択された場合、話し手は単に「重大な話とは何か」を聞き手に訊ねているのに対して、「よ」が付加された場合には、「その答えを教えなさい」という促しの意味が付随するという。

これらの「よ」に関する記述を oye の機能と比べてみよう。

(202)’ ¡Qué pena de ver esto así, oye!

ここでの oye は、残念だという話し手の気持ちを表すものであった。(201)も話し手の驚きを表明するものであり、これは「残念に思っている」「遺憾に思っている」「快く思っている」という発話に対する話し手の心的態度を示す「よ」と共通している。

次の例も見てみよう。

(203)’ Deja de molestar, oye.

(208)’ Anda, pues no sé, oye.

これらの例も先の場合と同様に、話し手の苛立ちや驚きなどを表す点において「よ」との共通性が窺える。翻訳する場合にも「放っておいてよ」「知らなかったよ」のように「よ」を用いるのが自然だろう。

では、次の疑問の例はどうだろうか。

(209)’ ¿Me estás escuchando?, oye.

この発話は、話を聞いていない聞き手に対する非難を含んで「話をちゃんと聞け」という、修辞疑問としての用例であった。これは(38)の「重大な話って何なのよ？」という発話が「その答えを教えなさい」という含みを持つ例と同様であり、「聞いてるのかよ」と「よ」を用いて訳すことができる。さらに、次の例においても「よ」の機能と共通する点がある。

(207)’ A: Yo creo que tal persona va a venir mañana.

B: Pues yo creo que no va a venir, oye.

「問題の人物が翌日に来ないことをBがあらかじめ聞いている場合にoyeを伴う」という母語話者の指摘は、「来ないと思うよ」という主張に含まれる感情を示すことによって、強調的意味での説得をしていると考えられる。

では、oyeと「よ」はなぜここまで共通しているのだろうか。それは、どちらも注意喚起という機能を持っていることによるのではないだろうか。oyeは、動詞oírの語彙的意味から、そしてそれが命令であることから、聞き手に情報を聞くよう求めるものである。従って、文頭で現れた場合にはそれが聞き手に向けられていることを示すので、聞き手の注意喚起として機能する。しかし、文末は発話内容を伝達した後なので、文末のoyeは聞き手に対してではなく発話内容に対して注意喚起すると考えられる。このことが様々な意味をもたらしていると考えられる。

例えば次の発話を見ると、同じ注意喚起でも文頭と文末で全く異なって機能しているのがわかる。

(210) Raimunda: Oye, ¿estás herida?

(*Volver*: 54)

この例は、仕事から帰ったRaimundaの怪我をしている娘に対する発話である。oyeが文頭に位置する場合は聞き手への注意喚起であり、発話内容そのものには関わらないので、この発話は当然聞き手に対する質問と解釈できる。

では、このoyeを文末に置くとどうだろうか。

(211) ¿Estás herida?, oye.

母語話者はoyeが文末に置かれると、「娘が怪我していることに対する話し手の驚きや、『一体何があったのか？』という気持ちが現れる」と回答している。つまり先の(209)の場合と同様に、文末にoyeが置かれると話し手の発話態度が現れる。これを先行する発話内容への注意喚起という点から見ると、あえて伝達後にoyeを置くことによって、先行する質問に注意喚起し、発話を再確認するよう求めるほどに話し手が驚いていることを表すと考えられるのではないだろうか。日本語において、「よ」がつくことで心的態度が顕在化されるのと同様に、スペイン語でも文末のoyeの使用によって話し手が注意喚起するほどに驚いている、残念に思っているなどの発話態度が明示される。そのように考えるとFuentes（1990: 180）の「前方照応としての注意喚起」によって発話を再確認し（Briz 1998: 228）、toma notaやdate cuentaという含意を持つ（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4186）という指摘も頷ける。

では、この視点からもう1度母語話者の作例を見てみよう。(202)では、話し手の感嘆の内容に対して注意を喚起し、「残念だ」という気持ちを表現している。また、(203)のような何度注意してもやめようとしない聞き手への命令の場合、今言った命令を確認するよう注意喚起して、話し手が苛立っていることを表していると考えられる。(207)でも、話し手Bは問題の人物が翌日に来ないことを確認するよう注意喚起して、聞き手を説得しようとしていると考えられる。

しかし、「よ」とoyeには異なる点もある。中﨑（2005: 80）は「よ」が「と思う」テスト[94]でも確認できるように、聞き手のいない独話でも用いられると指摘しているのに対して、oye の場合は独話では現れないと考えられる[95]。これは母語話者によるアンケートでも明らかになっており、その理由はoyeが2人称túに対する命令法であることによると推測される。

7.4. mira

7.4.1. 先行研究

では、次にmiraについて見ていこう。本節でもoyeの時と同様に、談話標識としての機能、語用論的機能、位置による機能に分けて考察していく。

7.4.1.1. 談話標識としての機能

miraは、oyeと同様に注意喚起や発話権交代の機能を持つ（Fuentes 1990: 177、Pons 1998a: 216）。Fuentes（1990: 176）は、miraの使用によって、後続発話の内容が重要で強調する必要があることを表し、considera や tomarlo en cuenta の含意を持つと説明している。Pons（1998b: 187）は、oyeが話し手の発話の行為そのもの（enunciación）に注意喚起するのに対して、mira は発話内容（lo que se dice、enunciado）に聞き手の注意を向けると述べている。また Fuentes（1990: 178）も同様に、oyeはllamar la atención であるのに対して、miraの場合はprestar la atención であると説明している[96]。さらに Pons（1998a: 224）によると、miraはescúchameだけでなくfíjateでも言いかえが可能であり[97]、これらの記述から、miraはoyeとは

---

[94] 仁田（1991）において当該の発話が聞き手不在で使用されるかを思考動詞との共起関係を用いてテストする方法のことを指す。例: 「何するんだよー、と思った」

[95] oye を独話でも使用するという母語話者の意見も一部あったが、これは自らを聞き手と想定していると考えられる。

[96] miraがprestar la atención としての機能の場合、oyeには言いかえられないという（Fuentes 1990: 178）。なお、Fuentes（1990）の言うllamar la atención と prestar la atención については後述する（pp.190-191）。

[97] Pons（1998a: 224、1998b: 187）はこれを función fática interna 呼び、oyeが持つ función fática と区別している。

明らかに異なる機能を持つと推測される。また大倉（1992: 5）は、「判断、主張、意向、依頼などを表現意図として持つ発話が続き、情報入手のための質問は現れない」と説明し、さらに「直前の発話は問いかけ、依頼、命令・支持のような相手への働きかけのあるものと、話し手の判断（断定・推量など）を表し相手への直接的な働きかけのないものとがある（大倉 1992: 6)」と述べている。mira の特徴は、先行発話に関わるという点であり、情報伝達を中心とする oye とは異なって、「情報を提供することによって、相手の判断の修正を求める（大倉 1994: 136)」という。

7.4.1.2. 語用論的機能

Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4180）は、mira の使用によって聞き手を話し手の領域に引き込み、話し手の視点を示すと説明している。表 4 を見ると、mira は言明に多く現れ、大倉（1992: 5）の指摘通り質問にはほとんど現れない。mira の場合は、話し手が持つ情報を伝達するだけでなく、聞き手に前提発話の修正を求めて発話の理解へ導く。だからこそ、聞き手が情報を持つ質問とは共起せず、同じように理解を促す fíjate でも言いかえ可能と説明されるのであろう。このことから、聞き手を引き込むという規定は、話し手の持つ情報を理解させるために、聞き手を自分の方へ引きこむことを意味していると解釈できる。また、話し手の発話への態度を反映し（Pons 1998b: 189)、丁寧さ、親切、慎み、苛立ち、怒り、提案といった感情を表す（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4182）というが、これは mira の後続発話が聞き手に説明や反論をする話し手の態度や感情を含むのであって、mira そのものが親切や苛立ちを表すとは考えにくい。mira を用いるのは、情報を伝達する際に、聞き手を話し手の発話内容に引き込むというプロセスを選択していることの表明なのである。

7.4.1.3. 位置による機能

mira は、文頭では注意喚起、発話権取得、前提修正発話の前置きの機能を持ち（Fuentes 1990: 178、Pons 1998a: 222、大倉 1992: 4)、文中では、先の oye と同様に発話の一部へ注意を向け、発話を強調するという (Fuentes 1990: 179)。大倉 (1992: 4）は、mira は発話の冒頭・途中には現れるが終結部分[98]には現れないと述べているが、Pons（1998b: 189）は文末の mira が強調や話し手の発話態度を表すと説明している。また、Fuentes（1990: 180）によると文末に現れた場合、後に発話が続いている印象を与えるという。文末での機能に関して様々な記述が見られるので、実例を通

[98] 大倉（1992）による位置の分類方法は本論文の基準とは異なるが、挙げられている例を見ると、終結部分と本論文の文末とは同様の位置と判断される。

して考察する。

7.4.2. 実例による考察

7.4.2.1. 文頭での用例

では具体例を見ていこう。次の例は、話し手 Raimunda が聞き手 Regina に頼みがあると伝え、聞き手が依頼内容を尋ねる場面である。

(212) [En el rellano de casa de Regina. Raimunda llama al timbre. Abre Regina, mantienen la conversación en la puerta. Regina lleva un conjunto superceñido, se está preparando para irse a trabajar.]

Raimunda: Necesito que esta noche me hagas un favor...

Regina: ¿No puedes esperar a mañana?

Raimunda: No. Te pagaré, como cualquier cliente.

Regina: No, mi amor. Yo a ti te hago un descuento. No sabía que te iban las chi(l)las[99]...

Raimunda: Es que no me van.

Regina: Pues si no es para hacer un "pan con pan" (hace un gesto con las manos, uniendo las dos palmas) ¿qué cosa me estás pidiendo?

Raimunda: Mira, en el camino te explico. De momento, tenemos que meter el mueble-frigo en la furgoneta.

(*Volver*: 132- 133)

依頼内容は犯罪に関わることであり、玄関先では伝えられないので、聞き手に「道中で説明する」と伝える導入として mira が用いられている。直接聞き手の質問には答えていないが、質問内容に関連する発話を導いている。母語話者に対するアンケートでは、「この mira を oye に置きかえると、頼みごとをする場面としては厳しい印象であり、不自然」という回答が得られ、oye が情報伝達のために注意喚起するのに対して、mira は発話の理解へ導こうとする機能を持つことがわかる。

このことから、oye と mira の「注意喚起」は区別して用いる必要があると考えられる。oye は、大倉（1994: 138）の指摘するように談話の開始部に使用可能であり、先行発話と後続発話を切り離して新規の情報を導入し、話題を転換することができる。これに対して mira は、開始部ではなく用件部に現れて話題維持を表明する（大倉

[99] Pronunciación cubana de la palabra chirla, con doble ele. En esta ocasión refiere a los genitales femeninos (uso vulgar, pero simpático) (Almodóvar 2006: 133)

1994: 138)。oye とは異なって先行する発話の話題を維持し、それに関する発話内容に聞き手の注意を向けようとするものであり、聞き手との会話の中で特に注目すべき発話であることを示す。oye と mira はどちらも聞き手の注意を向けるものであるが、oye は情報伝達を目的とし、mira は理解に導こうとするという明らかな差が見られる。これはまさに Fuentes (1990: 178) が oye を llamar la atención、mira を prestar la atención と呼ぶ違いそのものであろう。従って、本論文では oye が持つ機能を「注意喚起」、mira の持つ機能を「注視の促し」と呼び、区別して扱う。

では次に、命令に伴う例を見てみよう。

(213) Terapeuta: ¿Entonces qué cosas echas de menos?

[Antonio se queda callado, buscando palabras sin encontrarlas.]

Terapeuta: Venga, dime una.

Antonio: Pues ella, ella misma...

Terapeuta: Mira, Antonio, imagínatela y trata de describir algún detalle, algo en particular que te guste.

[Antonio hace un esfuerzo.]

Antonio: (Después de una pausa.) El ruido...

(*Te doy mis ojos*: 75- 76)

(213)では、自らの家庭内暴力に悩む Antonio がカウンセラーと話をしている場面である。Antonio は「妻が傍にいても、何か物足りなさを感じる」と相談し、カウンセラーは「何が物足りなく感じるのか」と問う。曖昧な返答しかできない Antonio に対して、カウンセラーは文頭に mira を用い、特に好きだと感じることは何か考えて表現するよう要求する。母語話者によると、「この場面では、mira を用いることによって発話権の確保を明示すると共に、話し手の望む方向へ会話を誘導しようとする印象を受ける」という。これはまさに聞き手を話し手の領域に引き込むという Martín Zorraquino y Portolés (1999: 4180) の指摘と一致している。これも先の例と同様に、情報伝達だけでなく発話への理解を求める mira によって、話し手であるカウンセラーが具体的な説明を求める立場にいることを示し、Antonio の本音を聞き出そうとしているのであろう。また、この場合にも「oye との置きかえはできない」という回答が多かった。oye を用いると「後続発話は聞き手にとって新規の内容であるような印象を受け、この場面には合わない」のだという。

次の例も見てみよう。

(214) Joaquín: ¿No sabes que todo funciona mal en el trabajo?
Ángela: Pero si te acaban de ascender...
Joaquín: ¿Y sabes tú la responsabilidad que eso implica? Tú que me entero de todo.
Ángela: Si me trataras de otra manera, te darías cuenta de que me entero de todo.
Joaquín: No me hagas reír...
Ángela: Que[*sic*] poco confías en mí, desde luego...
Joaquín: La confianza, niña, hay que ganársela.
Ángela: Tu trabajo es lo único que te interesa. Lo demás te importa un rábano...
Joaquín: Mira, no digas tonterías, ¿vale?
Ángela: Ni siquiera la niña. Claro, como no fue un niño...
(*Solo mía*: 55)

(214)は、仕事ばかりで家庭を顧みない夫 Joaquín を責める妻 Ángela に対して、Joaquín が「馬鹿なことを言うな」と述べる発話に文頭の mira を伴っている。母語話者によると、この場面では「mira を省くとより厳しい命令になる」という。これはおそらく mira が発話の根拠を話し手が持っていることを表し、発話の理解に導く機能を持つこと、そして文末で¿vale?を伴って命令内容に対する理解を聞き手に確認しようとしていることが理由だろう。だから、mira を除くと一方的な命令のように聞こえるのだと推測される。しかし、この例における mira は、母語話者全員が「oye に置きかえ可能である」と回答している。命令という行為は、話し手の意図を聞き手に実現させようとするものであり、話し手が持つ情報を伝達する際に用いる oye の機能と合うのだろう。実際に、表 4 では行為指示に伴うのは mira よりも oye が多く見られている。しかし mira も命令と共起しているので、話し手が自分の発話の根拠を持っていることを表す場合には mira が選択されると考えられる。

また、大倉（1992: 5）が指摘するように、質問にもほとんど mira は現れない。唯一得られたのは次のような質問の文頭に mira が置かれている修辞的な例である。

(215) Pocholo: Borjamari, ¿quién es más canalla: Rafael de La Unión o Coyote Dax?
Borjamari: Coyote Dax es canalla, pero Rafael de La Unión es supercanalla.

Pocholo: ¿Y entre Rafael de La Unión y Jorge el de Gran Hermano, quién es más supercanalla?

Borjamari: Mira, Pocholo, ¿sabes quién es más hipercanalla que todos los que están diciendo?

Pocholo: ¿Quién?

Borjamari: ¡Nosotros!

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 21- 22)

(215)では、Pocholo が映画の主人公の名前を挙げ、「どちらがろくでなしか」という質問をしている。さらに質問を続ける Pocholo に対して、話し手 Borjamari ははっきり返答せず、文頭に mira を用いて「誰が一番ろくでなしか知っているか？」と逆に Pocholo に問う。母語話者によると、この mira は「話し手の望む方向へ会話を誘導し、Pocholo の質問へ回答する発話を導いている」という。この場合にも、話し手は発話の根拠、言いかえると自らの質問への回答を持っていて、それを理解させるためにあえて質問しているのだろう。また、mira を oye に置きかえることができるかについては、意見が 2 つに分かれた。回答者 5 人中 3 人は、「置きかえても意味は変わらない」と述べているのに対して、2 名は「oye を用いると、先行する発話内容とつながっていない感じがする」という。oye は、話し手が持つ情報を聞き手に伝達する機能を持つので、話し手の質問内容を伝達する場合にも問題なく共起可能であるが、このことからも mira は話題維持を表明した上で注視を促して理解に導こうするものであり、oye は注意喚起によって話題を転換することがわかる。

このように、mira は先行発話に関わる発話内容の根拠を持っていることを表明し、発話内容の理解へ導くために聞き手の注視を促す機能を持つ。mira は前章で考察した ves と同様に視覚表現であるが、どちらも聞き手に理解を求める機能を果たすのである。

7.4.2.2. 文末での用例

大倉（1992: 4）も指摘していたように、mira は文末では現れにくく、母語話者は提示した全ての例において「文末への置きかえは不可能である」と回答している。本論文の資料では次のような文末の例が観察されているが、これも厳密には文末とは言い難いようである。

(216) Julia: ¿Qué hay entre esa chica y tú, Ramón?

Ramón: ¡Pero Julia! ¿Y por qué habría de darte explicaciones, vamos a

ver?

Julia: ¿Qué pinto yo aquí, entonces? ¿O es que entre nosotros no está ocurriendo nada? ¿Que me besaras ayer no significó nada?

Ramón: Lo de ayer no tenía que haber pasado.

Julia: Te quiero.

[Ramón es incapaz de contestar a eso.]

Julia: (Muy emocionada.) No sabía cómo decirlo y mira. Lo acabo de hacer. Te quiero, Ramón. Estoy enamorada de ti.

Ramón: No sigas, Julia. No sigas, por favor.

(*Mar adentro*: 111)

(216)は、話し手 Julia が自らの思いを聞き手 Ramón に伝える場面である。「どのように言えばいいのかわからない」と述べる発話の文末に mira を用いている。この例を母語話者に提示したところ、「mira は文末に位置してはいるが、次の Lo acabo de hacer.という発話の文頭のように感じられる」、または「文末ではなく 2 つの文をつないでいるように感じる」という回答がほとんどであった。また、もし文末とみなすとすると「実際に何らかの行為を『見て』という意味になる」という意見もあった。これらの指摘は、Fuentes（1990: 180）の「文末では後に発話が続いている印象を与える」という指摘と一致している。Pons（1998b: 189）は、文末の mira が強調や話し手の発話態度を表すと述べていたが、母語話者は mira を No sabía cómo decirlo.の文頭に置きかえ可能と全員一致で回答しているのに対して、文末では強調などの含意を持たないばかりか、この位置の mira は不自然であるという。このことから、mira は基本的に情報の前に現れるものであると言うことができ、(216)のように表記上文末に現れている場合には、後続発話が続いている印象を与えるのだと考えられる。

では、なぜ文末の mira は間投詞として機能しないのだろうか。これまで見てきた¿verdad?や¿no?、sabe(s)や entiendes は、すべて語彙的意味を残し、先行発話内容に対する話し手の確信度を示したり、理解を求める場合に語彙を使い分けていた。つまり、文末の位置では表現の語彙的意味が積極的に現れると考えることができるだろう。しかし、「見ろ」を意味する mira は、Martín Zorraquino y Portóles（1999: 4184）が指摘するように脱意味化の度合いが高く、文頭で談話標識として用いられる場合には、聞き手を理解に導こうとする機能を持つが、語彙的意味が積極的に現れる文末では本来の「見ろ」の意味となり、文頭でのような理解を求める機能を果たさないのではないだろうか。そう考えると、母語話者の「(216)の mira を文末とみなすと、実際に何らかの行為を見てと言っている感じがする」という指摘も納得できるだろう。

7.5. mira と「ね（ぇ）」

先に見たように、文末の mira は間投詞としての機能を果たさない。しかし、文頭の mira は大倉（1994）が次の表 17 で指摘するように、「ね（ぇ）」との共通性が窺える。

表 17　oye、mira、「あのう」「ねぇ」「よ」の会話管理機能一覧表

	機能		oye	mira	あのう	ねぇ	よ
会話構造管理	開始部	切り出し	○	×	○	○	△
	用件部	切り出し	○	×	○	○	×
		話題転換	○	×	○	○	×
		話題維持	×	○	○	○	×
対聞き手働きかけ	発話権確保維持		○	○	○	○	×
	待機		×	×	○	×	×
	引き込み		○	○	×	○	×
	取り込み		○	×	×	×	○
	理解／説得		×	○	×	×	×

（大倉 1994: 138）

表 17 を見ると、mira と「ね（ぇ）」は話題維持を示し、発話権確保、引き込みという点において一致している。また本論文では、mira を聞き手が発話内容に注目するよう促し、理解へ導こうとする「注視の促し」と規定した。では、「ね（ぇ）」はこの機能を持つのだろうか。注視の促しは、話題維持を前提とするので文頭の sabe(s) との対応で考察した「あのね」を中心に考えてみよう。

(217) 「あなたは人生に対して恐怖を感じるということはないんですか？」と僕は訊いてみた。
「あのね、俺はそれほど馬鹿じゃないよ」と長澤さんは言った。「もちろん人生に対して恐怖を感じることはある。そんなの当り前じゃないか。ただ俺はそういうのを前提条件としては認めない。（…）」
（『ノルウェイの森（下）』:113）

(217)は、「あのね」の先行発話である質問に返答せず、反論する発話を導いている。このような場合、「あのね」を伴わなくても発話は成り立つが、「あのね」を用いることによって後続する発話内容へ注視を促し、聞き手の発話の前提を修正しようとする後続発話を導いていると考えられる。

また、(217)は「ねぇ」に置きかえることも可能である。

(218)　「ねぇ、俺はそれほど馬鹿じゃないよ」と長澤さんは言った。

「ねぇ」を用いても、話し手が聞き手の発話に反論し、修正しようとする発話の変化は感じられない。

しかし、(181)、(182)の「あのね」は「ねぇ」で置きかえることはできない。

(219)　？「ねぇ、それはパリとかのことではなくて、パリは行ってもいいの。ただ、この世にい続けようとしてほしい。」

(220)　？「ねぇ、私、大学に入ったときフォークの関係のクラブに入ったの。唄を唄いたかったから。それがひどいインチキな奴らの揃ってるところでね、今思い出してもゾッとするわよ。そこに入るとね、まずマルクスを読ませられるの。(…)」

(181)、(182)では先行発話に関連する説明を加えており、(217)は先行発話に反論するものである。このことから、用件部での「ねぇ」は聞き手に反論したり、聞き手が理解していないと判断される情報を伝達するような場合に、注視の促しとしてのみ用いられると考えられる。「ねぇ」と「あのね」の機能は、次のようにまとめられる。

表 18　「ねぇ」と「あのね」のまとめ

談話上の位置	機能	ねぇ	あのね
開始部	注意喚起	○	×
用件部	話題維持	×	○
	注視の促し	○	○

従って、mira は「ねぇ」あるいは「あのね」に対応すると考えられる。

(212)'　Raimunda: Mira, en el camino te explico. De momento, tenemos que

meter el mueble-frigo en la furgoneta.

(*Volver*: 132- 133)

(213)' Terapeuta: Mira, Antonio, imagínatela y trata de describir algún detalle, algo en particular que te guste.

(*Te doy mis ojos*: 75- 76)

(212)、(213)における mira は、先行発話の話題維持を表明した上で聞き手の注視を促して情報を伝達し、共に発話の理解へ導こうとする機能を果たす。(217)の「あのね」、「ねぇ」も同様に注視を促していると考えられる。しかし、「ねぇ」や「あのね」には聞き手を理解に導こうとする含意を感じられない。これらは、伊豆原（1993: 104）が述べているように、これから始めようとする話に聞き手を引き込もうとするものであるが、「ね」そのものが聞き手との共有を表すこと、そして文脈や後続発話内容によって、聞き手に理解を求めようとする含意が感じられるのだろう。従って、文頭の mira と「ね（ぇ）」は、聞き手の注視を促す点で対応すると言える。

7.6. fíjate

では次に fíjate の機能について見ていこう。

7.6.1. 先行研究

7.6.1.1. 談話標識としての機能

fíjate に関する先行研究は、管見では Fuentes（1990）を除いてあまり詳しい言及が見られない。しかし、mira が fíjate でも置きかえることができ (Pons 1998a: 224)、聞き手の注視を促す（prestar la atención）機能を果たす（Fuentes 1990: 173）と指摘されているとおり、fíjate も前節で規定した「注視の促し」として機能し、発話内容に注意を向けて理解へ導こうとすると考えられる。

7.6.1.2. 語用論的機能

fíjate は、発話を強調し、話し手の発話内容に対する驚きを表すという（Fuentes 1990: 173[100]）。oye や mira が、文頭では反論や親しみ、慎みなどを表明する機能を果たすと指摘されているのは、それが含まれる発話内容に注意喚起や注視を促すことによるのだが、これらとは異なって、fíjate の場合は、それが持つ語彙的意味によっ

[100] Al mismo tiempo expresan una intensificación, un comentario del hablante, que se admira, considera excesivo, sorprensivo lo que va a comunicar. Equivale a: "lo que va a decir o ha dicho el hablante es sorprendente, digno de admiración para él, y apela, pues, al oyente para que perciba."

て fíjate 自身が驚きを含むのではないだろうか。RAE（2001: 1512,1056）は、mirar を“Dirigir la vista a un objeto.”と、fijar を“Hincar, clavar, asegurar un cuerpo en otro.”と規定しており、fijar は mirar より明らかに強い表現であることがわかる。それほどまでに強く注視を促すのは、話し手が自らの驚きに聞き手を導こうとするためであろう。この場合の「驚き」とは、突然声をかけられるなどの驚きではなく、話し手が予測していたことと異なる結果となったことを指すと考えられる。

7.6.1.3. 位置による機能

fíjate は、文頭では後方照応的（catafórico）に、文末では前方照応的（anafórico）に機能するという（Fuentes 1990: 174）。文頭に位置する場合は、mira の言いかえとなる注視の促しの機能を持つと考えられるが、mira は文末で前方照応の機能を果たさない。また Fuentes（1990: 174）は文末の fíjate について、今言ったことは驚くようなことであり、聞き手にも同じように感じてもらうために注意を喚起している（“lo que acabo de decir es sorprendente. Apelo a tí[*sic*] para que lo valores del mismo modo”.）という含意を持つと説明している。これは言いかえると、話し手は聞き手が発話内容を理解して、話し手と同じように考えることを期待しているということではないだろうか。mira との共通性が指摘されていることからも、fíjate はやはり注視の促しとして、聞き手を理解に導くものと考えられるだろう。

7.6.2. 実例

fíjate は文頭、文中、文間、文末での使用例が観察された。しかし文間の例は、fíjate の機能を考察するのに有益なデータではなかったので、ここでは文頭、文中、文末の事例を見ていく。

7.6.2.1. 文頭の用例

次の例は、作家志望だった Sara が音楽グループの歌手を始めたことについて Marta が発話する場面である。

(221) Carmen: (*Un poco vacilona*) Es que además de cantar a mí me toca ser la mánager, ya sabes, la infraestructura del grupo... Montar las giras, desplazamientos, la prensa...
Marta: Pues ya verás qué bien con Sara... Nos conocemos desde los doce. Íbamos juntas a las Mercedarias... Qué risa verla ahora cantando... <u>Fíjate</u>, lo que siempre ha querido ser es escritora...

(*El Calentito*: 71)

母語話者によると、この例における fíjate は先行発話と後続発話を内容的につなぐものであり、「fíjate を伴わなければ後続発話の重要性が失われる」という。また、「話し手の驚きを表している」という回答も見られた。しかし、12 歳の時から Sara を知っている Marta が、今更 Sara が作家志望だったことに驚くとは考えにくい。従って、この発話には「Sara が目の前で歌っていることに話し手 Marta が驚いている」という言語外の情報が含まれていると考えることができるだろう。つまり、fíjate を用いることによって、後続発話が驚きに値することを示しているということである。fíjate はそれ自身が持つ語彙的意味の強さによって驚きのニュアンスを持つので、言い差しの発話でも驚きを表すことができるのだろう。

また、この例では mira への置きかえが可能であるという意見と、「mira にすると、escritora の後にも発話が続かなければ不自然」という意見が得られた。mira は脱意味化の度合いが高く、本来発話内容への驚きの含意がないので、escritora の後に「こんな風になるなんて」というような後続発話が必要なのだろう。実際に、後者の指摘をした母語話者に対して具体的にどのような発話が続くかを訊ねたところ、「Mira, lo que siempre ha querido ser es escritora y ahora resulta que tenía otra faceta artística, fíjate.のような発話が考えられる」という回答が得られた。このことから、発話への驚きを伝達するためには mira よりも語彙的意味の強い fíjate が適していると言えるだろう。

また(221)における fíjate は、ある母語話者によると「Date cuenta de que...という含意を持つ」といい、この回答から単なる驚きのみを表すとは考えにくい。この場合、発話内容に対して「考えてもみてよ、あの子は作家志望だったのに（今は歌手をしているなんて…）」のような含意を持ち、目の前で Sara が歌っているという状況において、Sara が作家志望だったという逆説的な内容を伝達しようとしていると考えられる。これも、fíjate の語彙的意味の強さによるものだあろう。また、この例では聞き手の情報への理解を問題にしない oye への置きかえは不可能との回答が多かった。oye にはこのような含意はなく、情報伝達が中心であるので、この発話場面とは合わないのだろう。

母語話者に実施したアンケートでは、他にも「fíjate は自分の意見を強く出したい時に用いる」という意見も見られ、fíjate が mira と比べてより強く注視を喚起することがわかる。Pons (1998a: 224) は mira と fíjate が交換可能であると述べていたが、実際に(212)～(215)までの mira の例を母語話者に提示したところ、すべて「fíjate への置きかえは不自然」であり、(212)の例の mira を fíjate に入れかえてみたものが次

の(222)であるが、このように質問に返答する場合には特に fíjate は不自然であるという。

(222) Raimunda: Necesito que esta noche me hagas un favor...
Regina: ¿No puedes esperar a mañana?
Raimunda: No. Te pagaré, como cualquier cliente.
Regina: No, mi amor. Yo a ti te hago un descuento. No sabía que te iban las chi(l)las...
Raimunda: Es que no me van.
Regina: Pues si no es para hacer un "pan con pan" (hace un gesto con las manos, uniendo las dos palmas) ¿qué cosa me estás pidiendo?
Raimunda: ? Fíjate, en el camino te explico. De momento, tenemos que meter el mueble-frigo en la furgoneta.

fíjate は語彙的意味によって、後続する発話内容が驚きのニュアンスを含むことを伝達するので、聞き手に注視を促すことになり、母語話者の言うように自分の意見を強く出すような含意を持つのだろう。ここに mira と fíjate の差が現れている。fíjate はそれ自身が持つ驚きや感嘆の含意によって、結果的に注視の促しとして機能する。これに対して、mira は注視の促しとしては無標の表現である。fíjate は表 4 で確認できるように、驚きを述べる感嘆文とも共起するが、mira の場合は注視の促しという機能によって感嘆文へ聞き手を向けることができるのである。このことから、mira と fíjate は同じ注視の促しではあるが、プロセスが異なるものと言うことができるだろう。

7.6.2.2. 文中の用例

次の文中の例は、Paloma が父親との会話を聞き手に説明している場面である。

(223) Paloma: Entonces le dije: jo, papá, me tienes que dejar el rojo porque este viaje es superimportante para mí, tú puedes usar el azul, ¿sabes?, le dije... Entonces mi padre, que le gustan los coches antiguos porque en el fondo es superhippy, ¿sabes? Porque el azul, fíjate, es un modelo de hace dos años...
(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 78)

文中に現れる間投詞は、呼びかけ語の項でも考察したように、後続発話への注意喚起の機能を果たす。この例では、「(青色というのは) 2 年前に流行っていたのよ」という後続発話に対する驚きを強調的に伝達するために文中に置かれているのだろう。実際に、母語話者も「この位置に fíjate がなければ、青色が 2 年前に流行っていたことへの強調がなく不自然」と回答している。だが、fíjate が持つ語彙的意味から、注意喚起ではなく注視の促しとして、聞き手を理解に導こうとする機能を果たすと考えられる。

7.6.2.3. 文末の用例

文末の事例は、音楽グループを脱退しようとしている Chus と同じグループである Carmen や Leo との会話である。

(224) Ester: Oye, que nosotras pasamos del momento psico-drama, que para eso solo somos unas contratadas, ¿no?
Chus: Y esa es otra... No sé por qué ellas no están en el grupo.
Carmen: Porque el grupo somos Leo, tú y yo. No quiero más gente opinando.
Chus: Pues te lo voy a poner más difícil. Menos opiniones... Me voy. Dejo el grupo.
Carmen: Pues ahí tienes la puerta.
Leo: ¿Pero cómo te vas a ir? Mañana tenemos la entrevista con la discográfica.
Carmen: Déjala... Chus es especialista en abandonar a los demás cuando más la necesitan.
Leo: Tías, de verdad, no podemos seguir así... (*Conciliadora*) Si no os gustan mis coreografías pues... pues las cambio, ¡coño!
Chus: Esto no va contigo, Leo. A ti te tengo hasta cariño, <u>fíjate</u>...
Leo: Claro que sí... Todas nos tenemos cariño y...
Chus: Todas no. Suerte mañana... Compraré vuestro disco.
(*El Calentito*: 28)

Chus の脱退を止めようとする Leo に対して、Chus が「(グループへの不満はあるが) Leo のことは好きでさえある」と伝える発話の文末に fíjate を伴っている。母語話者はこの fíjate について、「aunque no lo parezca という含意を持ち、聞き手への愛

情を強調する」と述べている。この発話は、グループへの不満を述べている場面において、Chus が Leo のことを「好きでさえある」という逆説的な文脈から、感嘆的な意味にとることができる。この場合、文末の位置に現れているので、発話内容に対してもう 1 度注視を促すことになり、そこに fíjate の持つ驚きのニュアンスが加わって母語話者の言うような「そうは見えないかもしれないけど」というような意味を含むと解釈できるだろう。fíjate の語彙的意味による驚きの含意が、強調のように感じられるのだと考えられる。また母語話者によると、この例における fíjate は「oye に置きかえることもできるが、oye にすると少し非難めいた含意を持つ」という。このことから、文末の oye と fíjate は同じ位置に置かれても異なる機能持つことがわかる。

では、なぜ fíjate と同様の注視の促しの機能を持つ mira は文末に置くことができないのに、fíjate は可能なのだろうか。この理由として、fíjate の脱意味化の程度が関わっていると考えられる。mira は文頭では脱意味化の度合いが高く、聞き手を理解に導こうとする機能を果たすが、語彙的意味が積極的に現れる文末では、本来の「見る」の意味が現れるので、文頭と同じように機能しない。一方、oye は Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4184）が主張するように脱意味化の度合いが低く、動詞の語彙的意味を残した無標の注意喚起表現である。そのため、文末でも前方照応としての注意喚起として機能することができると前節で考察した。fíjate もこれと同様に脱意味化の度合いが低いとすると、「気づく」や「注意する」（高垣 他: 908）を意味する fijarse (en)[101]の命令法 fíjate は、文頭では動詞の語彙的意味を保ったまま、後続発話が驚きに値することを示して注視を促し、聞き手を理解に導くことができ、文末でも同様に注視の促しとして機能すると考えることができるだろう。文末に現れる要素は先行発話の内容に関わるので、fíjate を用いることによって先行する発話内容へ理解を促そうとするのである。これまで fíjate の談話標識としての機能に関して詳しい言及がなかったのは、fíjate が動詞の語彙的意味からあまり離れておらず、語用論的な機能に注目されていないからではないだろうか。

このように fíjate は、語彙的意味の強さによって発話内容が驚きに値することを示し、そこから注視の促しの機能を果たすものと言える。

7.6.2.4. 文末の fíjate と oye の差

(224)の例で母語話者が回答しているように、文末では情報を伝えることを目的とする oye、理解に導こうとする fíjate は異なる発話態度を示すと考えられる。では、こ

---

[101] 本論文のデータでは、fíjate に en を伴った例も観察された。
Ramón: Fíjate en esto: tú estás ahí sentada, a menos de dos metros.
（*Mar adentro*: 22）

れらにはどのような差があるのだろうか。文末の oye についての作例を fíjate に置きかえ、母語話者に提示して意見を求めた。

(225) ¡Cómo ha cambiado Madrid, fíjate!
(226) ¡Qué pena de ver esto así, fíjate!
(227) ? Deja de molestar, fíjate.
(228) ? ¡Déjame en paz, fíjate!
(229) ? ¿Me estás escuchando?, fíjate.

母語話者によると、(225)と(226)は置きかえ可能であるが、(227)、(228)、(229)は不自然であるという。fíjate は驚きの含意を持つので、感嘆文との共起は自然であり、(201)、(202)の oye の場合と同様に話し手の驚きや遺憾さを表すことができる。しかし(203)、(205)、(209)の命令や修辞疑問文において、話し手の怒りや苛立ちを表す oye とは異なり、fíjate は怒りや苛立ちの表明は担わないことがわかる。これは、fíjate が注視の促しの機能を持つことによると考えられる。前節でも考察したように、oye は文末で先行発話伝達後に「今言ったことをちゃんと聞け」と聞き手に示すほどに残念に思っている、遺憾に思っているといった心的態度を示す。fíjate も同様に先行発話に対して注視の促しの機能を果たすが、語彙的意味から驚きの含意を聞き手に理解されることを目的とする。これが命令の性質とは合わないのだろう。命令は、聞き手に遂行されることで完成する行為である。理解されることを目的としないのは、命令が sabe(s)や entiendes、ves と共起しないことからもわかる。そこに情報の伝達を目的とする oye を伴うと発話内容への注意喚起となり、あえてもう 1 度発話内容へ注意喚起することによって話し手の苛立ちなどを示すことができるが、fíjate は聞き手が発話内容を理解して、話し手と同じように考えることを目的とするので、発話内容の理解ではなく遂行を求める命令には共起しにくいのだろう。

7.7. fíjate と「ね（ぇ）」、「よ」

7.7.1. fíjate と「ね（ぇ）」

では、日本語の終助詞との対応を考えてみよう。文頭の fíjate は聞き手に注視を促す機能を持つので、「あのね」に対応すると考えられる。

(221)' Marta: Fíjate, lo que siempre ha querido ser es escritora...

（*El Calentito*: 71）

この例における fíjate は、それが持つ語彙的意味によって発話内容への驚きを伝えようとするものである。「あのね」にも同様の例が観察された[102]。

(230) 上がっていると言えば円上がりすぎワロタ
＄1＝77 円だよ！？
€1＝98 円だよ！？
￡1＝118 円ってふざけすぎやろがぁぁぁぁぁ
あのね、ちょっと前まではね、￡1＝200 円だったのよ。
非っっっ常に計算しやすかったのよ。
「お年玉一万円」って言われて「あー￡50 かー」って思ってたのよ。
なんだよ 118 って・・・・・
(http://blogs.yahoo.co.jp/gotei_13_tai/8131608.html)

(230)は円高について驚く場面である。「ちょっと前まで 1 ポンド 200 円だった」という発話には、文脈から 1 ポンド 118 円である現状への驚きが含意されていると考えられる。「あのね」そのものは驚きの含意を持たないが、「1 ポンド 118 円だったのに（今は 200 円だなんて…）」という逆説的な発話を導くために、注視の促しの機能として選択されていると考えられる。このような場合、「あのねぇ」と伸ばすことによって、より感嘆的な含意を示すことができるだろう。従って、fíjate は「あのね」と後続発話が驚きに値することを示すことができる点において対応すると言えるだろう。

しかし、この場合「ねぇ」は不自然である。

(231) ？ねぇ、ちょっと前まではね、￡1＝200 円だったのよ。

これは先に述べたように、「ねぇ」の注視の促しとしての機能が、反論を導く場合など、「あのね」と比べて限定的であることによると考えられる。

次に文中の fíjate である。

(223)' Paloma: Porque el azul, fíjate, es un modelo de hace dos años...
(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 78)

[102] 文学作品では「あのね」が驚きの発話を導く定例が得られなかったので、ウェブ上の例を検索した。

文中の fíjate は、後続発話に対して聞き手の注視を促す機能を持つ。同様に、間投詞の「ね」も聞き手の注意を喚起する。

(20)' 回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね（はい）洗剤を入れますとね（…）

（伊豆原 1993: 104）

文中の「ね」は、注意喚起への機能を持ち、聞き手の受けを確認する。日本語ではこの位置に間投詞として「よ」を用いることは非常に少ない。また、「だって青はね、」と「ね」で翻訳することが可能であり、聞き手の受けを確認する機能によって後続発話を目立たせることができる。従って、文中の場合にも fíjate は「ね」に対応すると言えるだろう。

7.7.2. fíjate と「よ」

fíjate は発話内容が驚きに値することを表明し、注視を促す機能を持つ。

(224)' Chus: Esto no va contigo, Leo. A ti te tengo hasta cariño, fíjate...

（*El Calentito*: 28）

この例では、音楽グループへの不満を述べる場面において、聞き手のことは「好きでさえある」という逆説的な文脈で、fíjate は感嘆的に用いられて注視を促している。日本語の「よ」は、話し手と聞き手の認識（知識）の不一致を示すことによって、聞き手の注意を喚起するものであるが、同様の文脈での使用が見られた。

(232) 終わっちゃいましたね。。
ほんと舞い上がってたな～。
地震に気づかないくらい。
約 250 人
こんな大勢の人の前に立つ日が来るなんて、
鈴のような声でしゃべる子供だったのにびっくりだよ。

（http://yaplog.jp/roku-nao/monthly/201104/）

(232)は、音楽会に出席した感想を述べるものである。鈴のような声で話していた子供が、大勢の人の前で演奏する姿に驚いたことを感嘆的に述べる発話に「よ」を伴っ

ている。「よ」そのものには驚きの含意はないが、fíjate と「よ」がどちらも発話内容が驚きに値することを表明する場合に用いられることから、これらは対応すると言えるだろう。また、「よ」には様々な音調がある。(224)は、聞き手が気づいていないこと、知らないことを話し手が知らせる価値があると判断して伝えているので、上昇音調の「よ↑」に対応すると考えられるが（「あんたのことは好きでさえあるのよ↑」）、(226)の場合は感嘆文であり、文末の oye と同様に、話し手の心的態度の存在を顕著化させる「残念だよー」のような伸ばす下降音調の「よ」に対応すると考えられる。

(226)' ¡Qué pena de ver esto así, fíjate!

文末の fíjate がどの音調の「よ」に対応するかは今後も考察していく必要があるだろう。

7.8. verás

次に、ver の直説法未来 2 人称単数形 verás について見ていこう。

7.8.1. 先行研究

7.8.1.1. 談話標識としての機能

Fuentes（1990: 176）は、verás を mira と同様に tomarlo en cuenta の含意を持つものとして扱っており、verás も注視の促しとしての機能を持つと考えられる。一方 Beinhauer（1963: 51）は、mirar は dirigir la visión、ver は percibir con la vista であり、これらの表現には差があると述べている。RAE（2001: 1512、2284）でも同様の規定がされており、mirar は意識的に「見る」ことを意味するのに対して、ver は意識的ではなくても「見える」ことを表すとわかる。この違いから両者の談話標識としての機能を考えると、mira は聞き手に意識的に理解するよう求めるのに対して、verás は聞き手が話し手の発話を通して自然に理解することを期待していると考えられる。そう考えると、verás が 2 人称単数形の未来形であることも頷ける。また Beinhauer（1963: 50）は、verás が聞き手が知っている状況を描写する説明の導入する[103]と述べており、これも verás が聞き手自身が理解するであろうことを前提するものと考えることができる。さらに、未来形は発話を和らげるという Bauhr（1989: 114[104]）の記述をもとに、Chodorowska-Pilch（2008: 1358）は現在形 ves と比べる

[103] Beinhauer（1963: 50）は、verás は"eso de que tú ya estás enterado, se te hará totalmente claro con lo que ahora te voy a decir"という含意を持つと説明している。

[104] Utilizando la forma del futuro se logra cierto distanciamiento con respecto a lo que se dice, se

と未来形の verás はよりやわらかいニュアンスを持つと述べている。これは、現在形の場合は聞き手への働きかけがより直接的であることによると考えられるが、verás が話し手の発話によって「聞き手が自然に理解するであろう」とみなしていると表明するので、直接理解したかを問う¿ves?と比べてやわらかく聞こえるとも解釈できるのではないだろうか。

7.8.1.2. 語用論的機能

verás は、聞き手を（時に困難な）状況などの理解に導く（Chodorowska-Pilch 2008: 1358- 1359）。この指摘は先行発話に関わる発話を導入する mira の機能と同様であるが、Fuentes（1990: 178）は mira と比べるとその機能は弱く、呼びかけ（apelación）や発話の最初に用いられると述べている。また、話し手と聞き手のつながりを作るという記述も見られた（Chodorowska-Pilch 2008: 1369）。

7.8.1.3. 位置による機能

verás の位置に関する言及はあまり見られないが、Chodorowska-Pilch（2008: 1369）は FTA を和らげるには文間が最も効果的であると指摘している。しかし、この点に関して今回は有益なデータが得られなかった。

7.8.2. 実例

7.8.2.1. 文頭での用例

では文頭の例を見ていこう。まずは、産婦人科の両親学級での Ángela と助産婦の会話である。

(233) [Grupos de parejas llevando a cabo ejercicios. Ángela, casi de nueve meses, es la única a la que no acompaña su marido y hace pareja con una de las monitoras.]

Monitora jefe: Bien, respirando hondo, respirando. Muy bien. Relajaos un momento...

[La monitora jefe se aproxima, agachándose frente a Ángela.]

Monitora jefe: ¿Todo bien?

Ángela: Bien.

Monitora jefe: Ángela, ¿crees que el próximo día podrías traer a tu marido?

Ángela: Supongo que sí.

---

suaviza la expresión y se hace menos directa y categoría.（Bauhr 1989: 114）

Monitora jefe: Verás, uno de los motivos de hacer estos ejercicios es mentalizar a los padres de que la educación es cosa de dos.
Ángela: (*Sonríe forzada.*) Ya lo sé.

(*Solo mía*: 32)

「次の両親学級に夫も参加できるか」という問いにあいまいな返事をする Ángela に対して、助産婦は両親学級の意義を説明する。Ángela が両親学級に参加しているということは、両親学級の目的を当然理解していると考えられる。verás を用いて「聞き手が知っている状況に対する説明を導き（Beinhauer 1963: 50）」、聞き手が理解するであろうことを期待して後続発話を導いていると言えるだろう。この文頭の verás について、母語話者は「Ángela がここに来る理由を説明する発話を導く」と回答している。「verás がないと突然説明を始めるので直接的で厳しく感じられ、前の発話とのつながりがない」という。このことから、verás はやはり注視の促しの機能を持つと考えられる。この機能は mira と共通しているが、母語話者は「mira よりも verás の方がより丁寧な印象を受ける」と回答しており、これは前節で述べたように、verás の語彙的意味と未来形であることが理由だろう。また、ves との比較について言及する先行研究が見られたので、ves に置きかえることについて母語話者に訊ねたところ、「ves は実際に何かを見ていたり、今起こったことを確認するものであり、この状況では不自然」との回答であった。従って、ves と verás は同じ ver から派生したものではあるが、異なる機能を果たすことがわかる。さらに、verás を文末に置きかえることができるかについては全員が不可能と回答している。後続する発話を導くためには文頭に置く必要があるのだという。

また次の例は、Alfredo に映画の撮り方を教えている Erik が映像を見せ、その映像のどこが良くなかったを尋ねる場面での発話である。

(234) [Alfredo toma notas con avidez y levanta la mano.]
Erik: Sí, Alfredo.
Alfredo: Verás, a mí me ha parecido que usted, Erik, creaba una sombra sobre Frida y que el ángulo picado de la cámara no es el más adecuado para capturar la acción. Creo que un contrapicado, con telefoto y desde este lado hubiera sido más satisfactorio.

(*Torremolinos73*: 51)

Alfredo が映像を見て気づいたことを述べる発話の文頭に、後続発話の説明を導き、

mira よりも丁寧な印象を与える verás を用いている。この場合にも、撮影の仕方を知っている Erik があえて Alfredo に聞いているので、聞き手の知っている状況に対する説明を導いていると言うことができるだろう。母語話者によると、先ほどの例と同様にここで verás を伴わなければ直接的であり、ves との置きかえは不自然であるという。さらに、この例においても文末への置きかえはできないという結果であった。また、ある母語話者は「先生に対して丁寧に答えるために verás を用いているのだろうが、このような表現を用いるとむしろ失礼である」と回答している。これは、verás が話し手の発話を通して「聞き手が自然に理解するであろう」という情報の提示の仕方を表明することによるのではないだろうか。

一方、次の例は全員一致で文末への置きかえが可能と回答した。Pocholo と Borjamari が Paloma にコンサートへ連れて行ってもらおうと話している場面である。

(235) Pocholo: Te gusta Paloma, no disimules...
Borjamari: Para nada, estás muy equivocado. Lo único que quiero de ella es que nos lleve al concierto.
Pocholo: ¡Sí! *ossea...* Ya verás, va a ser supergenial.
(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 73)

この場面における verás は先の例と同様に文頭に位置しているが、ya を伴っており、母語話者はこの ya verás について「te aseguro que...や te juro que...のような断定的な含意を持ち、ya verás を verás に置きかえることはできない」と回答している。このことから同じ文頭でも、verás と ya verás は全く異なる機能を果たすことがわかる。また、verás は後続する発話が必要であるのに対して、「ya verás は時に独立した文としても成り立ち、文末に位置することができる」という。実際に、本論文のデータにおいても単独の例に Ya verás.が観察されている。

7.8.2.2. 文末での用例

では ya verás は文末に現れた場合、どのような機能を果たすのだろうか。次の例は、演劇の練習中に Alfredo の演技に笑ってしまった Lucía と Alfredo との会話である。

(236) [Estamos en la casa okupa. Alfredo y Lucía están sentados apoyando sobre una pared en una sala que utilizan para diferentes actividades. Los chavales no se encuentran a gusto, se nota que llevan tiempo ensayando.(...)]

Alfredo: Es demasiado doloroso.

[Alfredo imita un acento mexicano muy convincente. Lucía le oye y no puede evitarlo, se parte de risa. Alfredo la mira. Ella no puede evitar seguir riéndose.]

Alfredo: ¿Qué pasa, que lo hago mal?

Lucía: ¡No!, ¡no! Todo lo contrario, ¡lo haces que te cagas!

Alfredo: ¿Entonces?

Lucía: Que no voy a poder.

Alfredo: Que sí, ya verás. Ponte seria. Venga.

(*Noviembre*: 28)

Alfredo は、笑いを抑えられず、演技を続けられないと言う Lucía を落ち着かせようとする。母語話者によれば、この発話における ya verás は、「聞き手を落ち着かせ励まそうとする先行発話を強調し、anímate や tú puedes などで言いかえることができる」という。また、verás に続く発話内容は聞き手が知っている状況に関する説明であるのに対して、ya verás の先行発話内容は、未来に実現する事柄、ここでは演技を続けられるということを、聞き手がいずれ理解する推測していると示すことによって発話を断定していると考えられる。「ya verás が文末に位置しなければ先行する que sí を強調する機能はないが、文頭に置いて Ya verás que sí.のようにすることもできる」という。この場合にも te aseguro que...という断定的なニュアンスを持つと考えられる。

では、なぜ ya verás は文頭にも文末にも置くことができるのだろうか。これはおそらく完了性を強く表す ya によると思われる。ya を伴うと「見る」という行為を完了したとみなさせるので、それ以上言う必要がなくなり、見る対象を ya verás の直後に置かなくても単独で使用できるのだろう。これは ya を伴う他の ya sabes、ya ves、ya entiendes も同様であり、それぞれ単独の使用も可能だろう[105]。一方、verás は未来形であり、ya も伴わないので完了性を問題にしない。「見る」という行為を完了させるためには「見る」対象を説明しなくてはいけないのだろう。このような理由によって、文頭で後続発話を伴う場合にしか用いられないと考えられる。

このように、verás は文頭で説明を導く。語彙的意味と未来形であることから、mira と比べるとより丁寧な印象を与える。ves と同様に動詞 ver から派生した表現だが、発話状況と発話内容との一致の確認を求める ves とは全く異なるものである。また、

[105] 本論文のデータでは、文末の ya ves の例は得られなかった。しかし、母語話者からは(193)の例の文頭の ya lo ves を文末に置いて発話内容を強調することもできるという回答が得られており、文末での使用も可能と考えられる。

ya を伴った ya verás は、verás と異なる機能を果たし、文頭や文末に現れて発話を断定したり強調する機能を持つ。

7.9. verás と「ね」、ya verás と「よ」

7.9.1. verás と「ね」

verás は文頭でのみ用いられ後続発話を導く。先行発話に関わる発話を導入するが、開始部で現れることはなく、話題転換として注意喚起をする機能は持たないので、注視の促しを求める「あのね」に対応する。

(233)' Monitora jefe: Verás, uno de los motivos de hacer estos ejercicios es mentalizar a los padres de que la educación es cosa de dos.

(*Solo mía*: 32)

(234)' Alfredo: Verás, a mí me ha parecido que usted, Erik, creaba una sombra sobre Frida y que el ángulo picado de la cámara no es el más adecuado para capturar la acción.

(*Torremolinos73*: 51)

(237) なに猫拾って来てんの！戻してらっしゃい。(…) さあ猫さん、箱に戻りましょ、イテッ！ひっかくんじゃないよ。あのね、これは君のためにやってるんだよ。君だってね、こんな阿呆大学生達に面倒みられたところでいいことなんてなんもありませんよ。それよりはきちんとした家の人に可愛がってもらうべきです。

(http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=195095)

「あのね」そのものには、verás が示す話し手の発話を通して聞き手が自然に理解するだろうという含意はないが、(237)のように聞き手が当然理解するであろう後続発話を導くことができる。聞き手が知っている発話を導く（Beinhauer 1963: 50）と指摘されている verás と、話し手と聞き手の情報の一致を表す「ね」は対応すると言えるだろう。

しかし、ya verás は文頭に置かれても「ね」には対応しない。

(235)' Pocholo: ¡Sí! *ossea...* Ya verás, va a ser supergenial.

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 73)

ya verás は te aseguro que...や te juro que...のような断定的な含意を持つので、文頭に位置しても聞き手に注視の促しを求める機能を果たさず、独立した用法を持って

必ずしも後続発話を必要としない。「ね」はこのような文頭で断定的に情報を伝達する機能を持たないので、文頭の ya verás には対応しないと考えられる。

7.9.2. ya verás と「よ」

一方、文末の ya verás は、聞き手が先行発話をいずれ理解するだろうと話し手が推測していることを示して断定的な印象を与えるので、話し手の一方的伝達を表す「よ」に対応する。翻訳の場合にも、(236)は「できるよ」と「よ」を用いて自然に訳すことができる。

(236)' Alfredo: Que sí, ya verás. Ponte seria. Venga.

(*Noviembre*: 28)

また、「よ」にも次のような聞き手がいずれ理解するだろうという文脈において、発話内容を断定する例が見られた。

(238) ９月１５日。
美咲と貴俊さんの結婚式の日。
私は眞子さんにまたあの誕生日のドレスを借りて、美咲の横に立っていた。
美咲は花嫁姿のまま緊張して少し震えている。
「貴俊さん…来るかな。」歯ががちがちと音を立てている。
「絶対に来るよ。」私はその背中を優しくさする。真吾が来るって言ったから、絶対に来るのだ。

(http://ncode.syosetu.com/n1782bs/32/)

(238)の例では、聞き手がいずれ理解することができる内容を断定的に伝達する発話に「よ」を伴っており、ya verás との共通性が窺える。このような場合、下降音調「よ↓」をとることによって、より断定的な印象を与えると考えられるが、(235)の ya verás は聞き手が自分と異なる判断を下していることを示す発話ではないので、下降音調「よ↓」ではなく上昇音調の「よ↑」に対応するだろう(「きっとすごく楽しいよ↑」)。

(239) Va a ser supergenial, ya verás.

ya verás がどの音調の「よ」に対応するかは、発話状況によると考えられる。本論文では詳述しないが、今後考察する必要がある。だが、発話を断定する機能を持つ ya

verás は文頭では「ね」に対応しないが、文末は先行発話内容に関わる位置であるので、文末の場合には「よ」との共通性を持つということは明らかだろう。

このように、oye、mira、fíjate、verás は文頭でそれぞれ異なるプロセスを経て聞き手への発話を導く。oye は聞き手の注意を喚起し、mira、fíjate、verás は注視を促す。mira は脱意味化の度合いが高く、注視の促しとしては無標の表現である。これに対して fíjate はそれが持つ語彙的意味から、後続発話が驚きに値するものであることを示す。また verás は、聞き手が話し手の発話を通して自然に理解するだろうという含意を持つものである。スペイン語では、文頭でこれらの語彙を使い分けて、聞き手を発話にどう導こうとするかを表明する。文末とは明らかに異なる機能を果たしているので、本論文ではこれを、文末の「発話態度」と区別して、「聞き手管理機能」と呼ぶ。

また、文末で用いられるのは oye と fíjate、ya verás であり、発話内容に対して注意喚起して話し手の発話への態度を示したり、注視の促しや ya を伴って発話を断定する機能を果たす。

以上の機能は表 19 のようにまとめられる。

表 19　oye、mira、fíjate、verás と「ね（ぇ）」、「よ」のまとめ

				oye	mira	fíjate	verás	ね	よ
性質				聞くように要求	見るように要求	注視するよう要求	聞き手が視覚的に理解するだろうと推測	話し手と聞き手の認識（知識）の一致	話し手と聞き手の認識（知識）の不一致
機能	文頭	聞き手への注意喚起		○	×	×	×	○	○
		注視の促し	理解に導く	×	○	○	○	○	×
			驚きに値するという含意	×	×	○	×	×	×
			自然に理解するだろうという含意	×	×	×	○	×	×
	文中	注意喚起（受けの確認）		×	×	○	×	○	○
	文末	注意喚起	発話へ	○		×	×	×	×
			聞き手へ	×		×	×	×	○
		含意の表明	驚き、遺憾さ	○		○	×	×	○「よー」
			苛立ち	○		×	×	×	○
		注視の促し		×		○	×	×	○
		断定		×		×	○ ya verás	×	○

文頭で注意喚起の機能を持つのは、oye と「ね」、「よ」であり、注視の促しの機能を果たすのは mira、fíjate、verás と「ね」である。これらはそれぞれ、動詞の語彙的意味によって異なるプロセスから注視を促す。スペイン語では、文頭で語彙を使い分け、聞き手をどのように発話に導こうとしているかという聞き手管理機能を持つ。これに対して、日本語の場合は文頭では「ね」が中心である。

また、文中での使用がみられたのはスペイン語では fíjate のみであり、聞き手の受けを確認しながら発話を進める点において「ね」に対応する。

文末では oye、fíjate、ya verás の使用例が見られ、これらは発話に注意喚起あるいは注視を促したり、発話を断定する点において「よ」に対応する。

8. vamos

管見では、vamos の性質に関する記述は見当たらない。しかし、動詞 ir の語彙的意味から、vamos は抽象的な前進を表し、さらに直説法現在 1 人称複数形であることによって行動の勧誘を示していると考えられる。高垣 他（2007: 1128）は、vamos についてそれ自身で「さあ行こう、さあ始めよう」という意味を持つ他、発話に伴って励ましや促しなどの用法と、より適切な表現を探ったり、文末で「言ってみれば…である」という用法を挙げている。本論文では後者に焦点を当て、機能を考察していく。

8.1. 先行研究

8.1.1. 談話標識としての機能

Martín Zorraquino y Portolés（1999: 4178）は、vamos について聞き手を話し手と同じ領域に巻き込もうとすると述べている。vamos が聞き手との対話で用いられることを考えると、この記述は聞き手が話し手に組するよう求めていると解釈できる。しかし、それではこれまで考察した理解を求める sabe(s)や entiendes との差が明確ではない。vamos の談話標識としての特徴的な性質は、2 人称単数形である sabe(s)や entiendes、命令法である fíjate と異なって 1 人称が含まれることにあるのではないだろうか。Fuentes（1988: 178）は vamos について次のように指摘している。

(...) su valor clave podría formularse como: «es lo que yo quiero decir», (...) Por tanto, sirve para ajustar lo dicho a la intención del hablante, marcando la subjetividad.

(Fuentes 1988: 178)

vamos は「『私が言いたいこと』を表し、主観を表しながら発話したことを話し手の意図に合わせるもの」であるという。他の間投詞と異なって 1 人称を含む vamos は、この「私の意見」という含意を持つ。話し手の意図に合わせるという記述は、話し手が聞き手を巻き込もうとすることを意味していると考えられる。すなわち、1 人称複数形をとることによって、聞き手に理解を促し、強調的に自らの意見を表明すると考えられるだろう。これを捉えることによって、次節の語用論的機能がより明確になる。

8.1.2. 語用論的機能

vamos の語用論的機能は、同格（Cortés 1991: 76）、言いかえ（Fuentes 1988: 180）、修正（Fuentes 1988: 180, Cortés 1991: 76）などが挙げられる。これらの用法は「言いかえ」と要約でき、話し手が先の発話よりも良いと判断する表現を伝達する場合に用いられる。Beinhauer（1963: 332）は、このような場合 mejor dicho で置きかえることができると述べている。つまり、「私は先の表現よりもこの表現の方がいいと思っている」という話し手の意見を表明するものと考えられるだろう。

次に、発話強調（Cortés 1991: 80- 82）と発話緩和（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4179）の機能である。この 2 つは一見矛盾しているように感じられるが、「私の意見」を強調的に表明する機能を持つ vamos が、発話状況に応じて時に強調として、また時にあくまで私の意見であって、聞き手に押しつけるつもりはない（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4179）という態度を示し、発話緩和として機能すると考えられるだろう。話し手のポジティブフェイスを強める（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4177）という記述も同様の理由によるものであり、話し手の意見であることを主張することによって、聞き手への反論などの FTA 的威力を軽減していると考えられる。

さらに、フィラー（expletivo、muletilla）としての用法も指摘されている（Beinhauer 1963: 61, Fuentes 1988: 190, Cortés 1991: 82）。これを検証するためのデータは今回は得られなかったが、vamos は明らかに語彙的意味を持つので、本論文ではそのような用法をフィラーとは捉えない。

8.1.3. 位置による機能

vamos は文頭、文中、文間、文末で観察された。位置による機能に関する詳しい記述はあまり見られず、文末での機能は明らかではない（Fuentes 1988: 184- 185）という指摘のみであった。しかし、本論文の「文頭の位置は聞き手を後続発話にどのように導くかを示す聞き手管理機能を持ち、文末は話し手の発話内容への態度を表す」という主張を当てはめると、文頭の vamos は、聞き手に対して先行発話を言いかえる発話を導くものであると考えることができるだろう。しかし、この場合先行発話が必要なので、談話の開始部や用件の最初には現れないと推測される。また考察の結果、文末でも言いかえの機能を果たす場合と、主観的なニュアンスを示して発話を強調する場合が見られた。

8.2. 実例

8.2.1. 文頭の用例

では、文頭での機能を実例から考察してみよう。

(240) Benítez: Digamos que somos más bien un poco pioneras.
Cardona: (A Benítez.) Bueno, tú "un poco" no... tú eres muy pionera.
Vamos, la mujer más pionera que conozco.
(*Manolito gafotas*: 128)

話し手 Cardona は、聞き手 Benítez に関する先行発話を言いかえる発話の文頭に vamos を用いている。母語話者に対するアンケートでは、「この vamos は、先行発話を言いかえており、bueno で置きかえることができる」という回答が得られた。また、「vamos がなければ後続発話の強調は感じられない」という。これは、文頭の vamos の使用によって、話し手が「私は先の表現よりもこの表現の方がいいと思っている」という話し手の態度を示して後続発話を導いており、発話の言いかえを示すものとして機能していると考えることができるだろう。このように、vamos の場合も文頭では聞き手管理機能を果たすことがわかる。

8.2.2. 文末の用例

では、文末ではどうだろうか。次の例は、自らの DV に悩む 15 名ほどの男性たちがカウンセリングに参加する場面の発話である。カウンセラーが「何をしている時、または何が気分を落ち着かせるか」と問いかけ、参加者が次々に自分の意見を述べている。

(241) [El grupo de hombres está sentado formando un semicírculo. (...)]
Terapeuta: Bien, estamos fuera y buscamos algo que nos distraiga, pensamos en otras cosas, nunca en aquello que ha provocado nuestra ira y tratamos de calmarnos. Vamos a pensar en algo que nos calme.
Javier: A mí una cervecita y un pitillo me dejan *niquelao*...
Terapeuta: No valen ayudas, tenéis que hacerlo solos, recordando un paisaje, por ejemplo, una música, algo personal que os de (*sic*) paz... Intentad pensar en un momento de paz, de tranquilidad que hayáis disfrutado...
Hombre 1: En el pueblo... por la noche, en el patio se está muy bien...
[Alguno se ríe.]

Tomás: Pescando...
Hombre 3: El ruido del agua, de la lluvia, vamos.

(*Te doy mis ojos*: 63)

この場面では、Hombre 3 が文末に vamos を用いて発話している。この例について母語話者に訊ねたところ、「vamos は es decir や o sea、en otras palabras などの別の言葉で言いかえる表現に相当し、話し手が好きな水の音の具体例を挙げている」のだという。しかし、「vamos を伴わなくてもあまり意味は変わらない」という回答もあった。これは、「水の音」という意味的に上位のものから「雨の音」という具体的なものに言いかえているので、わざわざ発話を言いかえることを表明する vamos を用いる必要がないと推測される。実際に、文頭への置きかえについては、全員一致で「同じ話し手の先行発話がないので不自然」と回答しているのに対して、「de la lluvia の前に置いて、El ruido del agua, vamos, de la lluvia.とすることは可能」で、「agua の言いかえとして lluvia を導くことができる」という回答からも、この例における vamos が発話の言いかえを表明する機能を果たしていることが明らかである。

また次の例は、Fernando と Cecilia がデートをしたことを知っている Dieguito と Fernando との会話である。

(242) Dieguito: ¿La emborrachaste o no?
Fernando: ¿Cómo?
Dieguito: A Cecilia, que si al final la emborrachaste.
Fernando: Shhh, baja la voz... Mira, creo que no tienes que fiarte tanto de tu amigo Ortega.
Dieguito: No es mi amigo.
Fernando: Bueno, lo que sea... que eso de emborrachar a una chica para ligar con ella no es muy buena idea, a las mujeres hay que respetarlas...
Dieguito: Vale, tío, lo que tú digas, ¿pero al final te la ligaste o no?
Fernando: Mira, eso son cosas de mayores, y no es tan sencillo...
Dieguito: O sea que no te comiste un rosco, vamos... (*Se aleja a servir Freixenet a otros judagores.*) *Pringao*...
Fernando: *Jodío* niño... oye, que no me la ligué, pero, que he hecho muchos progresos...

(*El penalti más largo del mundo*: 177)

Dieguito は、Cecilia と恋愛関係になれなかった Fernando に「うまくいかなかったんだね」と述べる発話に vamos を用いている。これは、Dieguito の先行発話である「結局うまくいったの？それともうまくいかなかったの？」という質問の答えを言いかえる発話と考えることができるだろう。母語話者もこの例について、「Dieguito の Fernando への判断や結論を表すものであるが、vamos がなくてもあまり意味は変わらない」と回答している。これは、O sea という言いかえを表すものがすでに用いられていることも理由の１つと考えられる。

しかし、次の例では vamos を省略すると意味が変化するという。Robert と Daniel が結婚について話をする場面である。

(243) Robert:¿Cuánto llevas casado?
Daniel: Nueve años. Y no estoy de acuerdo.
Robert: ¿A ti te dura la pasión por tu mujer? ¿Nueve años seguidos?
Daniel: No estoy seguro de que la pasión sea tan importante, o lo más importante. Eso, perdona, es un topicazo. Viviendo..., o sea... Es más importante, no sé... el cariño, el afecto, la confianza, no sé, una forma buena de compañía.
Robert: Y Ana y tú, ¿tenéis todo eso en vez de pasión? ¡Coño! Qué completos.
Daniel: Es que yo, antes de conocer a Ana, no sabía lo que era nada de eso. Me siento un tío con mucha suerte. Por lo que veo que hay por ahí. Sí, es verdad, he tenido mucha suerte. Lo que pasa es que de eso no se habla así. Yo mismo hablaba así antes. A mí, Ana, me ha cambiado la idea que tenía de las mujeres.
Robert: ¿Y el deseo? Nada... ¿Tampoco cuenta para ti?
Daniel: ¿El deseo, qué? Pasión y deseo no son lo mismo.
Rober: ¿Ah, no? ¿Cómo es eso?
Daniel: Creo que no. Yo creo que no, vamos. Puedes sentir una cosa u otra. O las dos, o ninguna. Yo sí creo en el enamoramiento.

(*Nubes de verano*: 52- 54)

「長く結婚生活を送ると情熱がなくなる」という Robert に対して、Daniel は結婚に対する自分の意見を述べ、「情熱と欲求は別物だ」と主張する発話の文末に vamos

を用いている。この例に関しては、母語話者から「yo creo や soy yo el que lo cree で置きかえられ、vamos がないと発話の意味が少し変化する」という回答が得られた。「vamos は“yo”の強調」であり、先行する発話が「聞き手と共有している事実ではなく、話し手自身の個人的な意見であることを表明する機能を持つ」のだという。また、「話し手の視点を謙虚に表現しようとしている」という回答もあり、「vamos を伴わないとこのような含意は感じられない」という。同じく文末に現れて、発話への理解を聞き手に促す¿eh?に置きかえられるかを尋ねたところ、「この場面では vamos と同様の機能を果たさない」という。¿eh?は聞き手に理解や同意を求めるが、vamos は聞き手への働きかけが小さく、あくまで話し手の意見を主観的に表明するものであるということができるだろう。

では、なぜ vamos には(241)や(242)のように省略可能な場合と、(243)のように省略すると意味が変化する場合があるのだろうか。これは、前者の vamos は言いかえを表すものであり、後者は話し手の発話態度の表明を表すものであることによると考えられる。本節の冒頭で述べたように、vamos とは話し手の意見であることの強調的表明である。この機能によって、発話の言いかえを表明することができるのである。従って、言いかえとしての用法は副次的な機能であると言えるだろう。

8.3. vamos と「よ」

文末の vamos は、話し手の意見であることを強調的に表明するものである。

(243)' Daniel: Creo que no. Yo creo que no, <u>vamos</u>.

(*Nubes de verano*: 52- 54)

従って、話し手の情報を聞き手に伝達する「よ」との共通性を持っていると考えられる。

(244) 母さん…
ものは考え方一つで
どうとでも捕える事が出来るんだよ‥
だから、心の面持ちから変えて行こう！
今は無理かも知らないけど、ゆっくりと
変わって行けば、それいいんじゃないかな？
僕は、そう思う<u>よ</u>…。

(『ね。』：117)

(244)では、母親に対して意見を述べ、それが話し手の意見であることを強調的に伝える発話に「よ」を伴っている。「よ」は、話し手と聞き手の認識（知識）の不一致を表すものであり、このような場合には、その落差を示すことによって話し手の意見を聞き手に押しつけると考えられる。このことから、vamos と対応すると言えるだろう。このような場合、聞き手の反応を伺う上昇音調の「よ↑」になるが、(243)のように、明らかに聞き手と異なる判断をしていることを表明する場合、下降音調の「よ↓」に対応するだろう。この点に関しても、今後さらに考察する必要があるだろう。

しかし、次の例では vamos の先行発話は聞き手に関することなので、日本語では「よ」ではなく「うまくいかなかったんだね」のように「ね」に対応する。

(242)' Dieguito: O sea que no te comiste un rosco, vamos...

(*El penalti más largo del mundo*: 177)

日本語では聞き手の方が情報量が多い事柄について述べる場合、聞き手が情報を所有することを示す「ね」を用いるからである。ところが、スペイン語の場合は、話し手と聞き手の情報量の差に関わらずに表現を選択する。従って、話し手が自分の意見や主観を表明する際に用いられる vamos は、話し手の持っている情報を伝達する「よ」に対応すると言えるだろう。しかし、同様に「よ」に対応する¿eh?とは異なって、vamos は聞き手に発話内容の理解は求めない。¿eh?が上昇音調で聞き手の反応を伺うので、vamos よりも聞き手への働きかけが強いと考えられる。

また、文頭の vamos は先行発話の言いかえを表明する。

(240)' Cardona: (A Benítez.) Bueno, tú "un poco" no... tú eres muy pionera. Vamos, la mujer más pionera que conozco.

(*Manolito gafotas*: 128)

しかし、「ね」や「よ」は vamos のように言いかえを表明する機能を持たない。従って、文頭の vamos は終助詞には対応しないということができるだろう。

vamos と「よ」の対応は、次のようにまとめられる。

表 20　vamos と「よ」のまとめ

			vamos	よ
性質			話し手の領域に巻き込む	話し手と聞き手の認識（知識）の不一致
機能	文頭	言いかえ	○	×
	文中	注意喚起（受けの確認）	×	○
		言いかえ	○	×
	文末	押しつけ	○	○
		発話緩和	○	×
		言いかえ	○	×

vamos は、話し手が聞き手を自らの領域に巻き込もうとする性質を持つ。1 人称複数形に話し手が含まれており、それを聞き手に促そうとすることによって、話し手の意見であることを強調的に表明するものである。文頭では、言いかえの機能を果たし、先行発話よりも良い表現だと話し手が考える発話を導く。また、文中では文頭と同様に言いかえを表し、文末では話し手の意見であることを示すことによって、押しつけや発話緩和として機能する。一方、日本語の「よ」は話し手と聞き手の認識の落差を示して聞き手に情報を伝達するものであるが、話し手の意見であることを強調的に述べる発話に共起することができるので、この機能でのみ vamos に対応すると言えるだろう。

9. 文頭、文末表現の相互比較

これまで考察してきたように、文頭と文末では同じ表現でも全く異なる機能を果たす。文頭では、聞き手を情報へ向ける際に、話し手がどのように後続発話を導こうとするか（情報伝達を目的とするのか、あるいは理解に導こうとしているのか等）を示して情報伝達する。また文末では発話内容に関わって、話し手が発話内容についてどのように判断し、どのような意図を持って（聞き手に理解を求めようとするのか、あるいは和らげようとするか等）伝達しようとしているかを示す。

本章では、文頭と文末の表現を相互比較し、同じ機能を持っている表現がそれぞれどのように異なるのかを振り返り、スペイン語母語話者に対して実施したアンケートの結果を分析し、文頭、文末の表現の機能を改めて検討する[106]。

9.1.　文頭　注意喚起、注視の促しの機能を持つ表現

文頭に現れるのは、eh、呼びかけ語、¿sabes?、ya sabes、ya ves、oye、mira、fíjate、verás、ya verás である。eh、呼びかけ語、¿sabes?と oye は聞き手の注意を発話に喚起し、新規の情報を導入する話題転換の機能を持ち、談話の初めに用いることができる。一方、ya sabes、ya ves、mira、fíjate、verás、ya verás は用件部で用いられ、ya sabes、ya ves は話題維持、ya verás は発話を断定的に伝達しようとし、呼びかけ語、mira、fíjate、verás は注視の促しとして機能する。

なお、今回は ya を伴う ya sabes、ya ves、ya verás はアンケートの対象から除く。

9.1.1. 注意喚起

注意喚起の機能を果たすのは、eh、呼びかけ語、¿sabes?、oye である。これらの表現は、Eh, oye,...や Eh, Marco,...、Oye, Marco,...のように 2 つの表現を同時に使用されることもあり、それぞれの表現が注意喚起であっても本質が異なるものと推測される。そこで、これまでの考察してきた機能をもとに話し手と聞き手との対話を作成し、4 または 5 つの表現を選択肢として設定し、母語話者にそれぞれの場面で最も適切な順に１～３まで選んでもらうというアンケートを実施した。

まずは、最も中立的であると考えられる呼びかけ語の例である。呼びかけ語は、聞き手の名前に相当する形式を呼ぶことによって近さを表明するものであり、聞き手との協調関係を示したり、話し手が聞き手の領域に無断で踏みこめる立場であることを

106 アンケートの詳細は、付録を参照。

表す。名前という性質上、発話場面や話し手と聞き手の人間関係、音調によってのみどの機能を果たすか判断されるので、文頭では注意喚起だけでなく注視の促しとしても機能すると推測される。従って、どのような発話場面においても呼びかけ語が選択される可能性があると考えられるだろう。しかし、(90)のように聞き手となる人物が複数いる場合、呼びかけによって、聞き手となる個人を確実に特定できるので、次のような状況を設定して母語話者に意見を求めた。

(245) Estás hablando con 4 o 5 amigos y te diriges a uno (Antonio) de ellos.

a. Antonio　b. Oye　c. Mira　d. Eh　e. ¿Sabes?　f. otro (　　)

その結果、聞き手が複数いて、その中の 1 人に話しかける場合、a. Antonio が最も適切なものであるという回答が全員一致で得られた。次に b. Oye、d. Eh の順に適切であるとの結果がほとんどであった。呼びかけ語は名前に相当する形式なので、個人を特定する文脈にふさわしいものと言えるだろう。

次に eh は、語彙的意味を持たない音形であり、文頭で聞き手の注意を喚起するために用いると、ぞんざいさを感じさせる。従って、あえて eh を文頭に用いるのは聞き手に対して配慮を示そうとしない場合であると考えられるので、次のように話し手と聞き手が口論をしている場面を設定し、母語話者に意見を求めた。

(246) Tienes un altercado con Marco y le llamas la atención cuando va a irse.

a. Marco　b. Oye　c. Mira　d. Eh　e. ¿Sabes?　f. otro (　　)

しかし、この場面設定は eh の機能を証明するのに十分な結果とはならなかった。この例では母語話者の回答に個人差が見られ、d. Eh を最も適切とする母語話者が 2 名、b. Oye が 1 名、a. Marco が 1 名であった[107]。ここでは具体的な発話を設定していなかったので、このような結果になったと思われる。eh は他の表現とは異なって語彙的意味を持たず、さらにぞんざいさを感じさせる eh の使用は話し手の性格などに左右される可能性もあるので、選択されにくかったのだろう。また、この例では c. Mira が第 2 に適切であるとの回答が 3 人の母語話者から得られた。立ち去ろうとする聞き手に対して mira を用いるのは、聞き手を説得しようとするような発話内容に導く意

[107] 適切である表現の順序に関する回答がなかった母語話者が 1 名いた。

図を持つと考えられる。

次に、注意喚起の機能を持ち、新規の情報を導く oye、¿sabes?について見てみよう。まず、具体的な文脈を指定せず、「新しい話題を導く」と表記してどの表現を用いるかを訊ねた。

(247) Estás hablando con Inés e introduces un tema nuevo.

a. Inés　b. Oye　c. Mira　d. Eh　e. ¿Sabes?　f. otro (　　)

ここでは、e. ¿Sabes?が最も適切という回答が 4 名、b. Oye が 1 名であり、第 2 に選択されたのは b. Oye 4 名、e. ¿Sabes? 1 名という結果であった。このことから、¿sabes?と oye は新規の情報を導くことがわかる。ある母語話者は、「聞き手の興味を引こうと新しい話題を導入するなら¿sabes?、話題を転換する場合は oye を用いる」と回答しており、まさに¿sabes?の持つ語彙的意味によって、そしてそれが疑問形式であることによってこのようなニュアンスがが生まれると言えるだろう。

次に、具体的な文脈を提示したのが次の例である。話題転換であることを明らかにするため、por cierto を用いている。

(248) [Joaquín y Andrés acaban de salir del trabajo,
y se encuentran por la calle, así que se paran para conversar un poco.]

Joaquín: Uf, vaya día que he tenido, Andrés. El jefe me entregó a última hora unos borradores para que los pasara a limpio, así que he tenido que hacer un par de horas extra.

Andrés: Bueno, menuda jornada. (　　), por cierto, mi mujer y yo habíamos pensado invitaros a casa a ti y a tu mujer para cenar el fin de semana que viene, ¿qué te parece?

Joaquín: ¡Qué buena idea! Amigo mío, acabas de alegrarme el día.

a. Joaquín　b. Oye　c. Mira　d. Eh　e. ¿Sabes?　f. otro (　　)

先行発話と切り離された話題を導入するこの場面では、b. Oye が最も多く選択され、a. Joaquín や間投詞の¡ah!などを最も適切とする回答も見られた。すぐ後に por cierto を置いたので、この表現の共起として oye が適切だった可能性もあるが、この結果からも oye が新規の話題を導入する機能を持つことが明らかである。oye は¿sabes?のよ

うな興味を引こうとする含意を持たず、動詞の語彙的意味を残す無標の注意喚起である。だからこそ、同様の機能を持つ por cierto と共起が可能なのであろう。また、間投詞¡ah!が選択されたのは、por cierto がすでに文脈上に現れており、再び話題転換を示す必要がないと判断されたことによると考えられる。

このように、同じ注意喚起でも呼びかけ語は聞き手を明確に特定し、聞き手との関係を重視するのに対して、eh は具体的意味を持たない音形を聞き手に向けることになるので、ぞんざいさを感じさせるものである。また、¿sabes?は聞き手の興味を引こうと注意喚起して新しい話題を導入し、oye は情報伝達を目的として話題転換する、という異なる機能を持つ。これらの表現が共起する場合、eh は Eh, oye...のように前に置かれるが、Oye, eh...のように後に現れる例は見られなかった。その理由は eh の抽象度の高さゆえに、具体的な意味を持つ oye の後には用いられないためと考えられる。しかし呼びかけ語は名前に相当する形式なので、どの位置にも現れやすく、注意喚起を表す語に伴って聞き手への近さの表明として用いられるのだろう。

9.1.2. 注視の促し

注視の促しの機能は、談話の用件部に現れて先行する発話の話題を維持し、それに関する発話内容を導く際に、それが特に注目すべき発話であることを示す。mira、fíjate、verás がこの機能を担う。

mira は注視の促しとしては無標の機能を持つ。そこで、次の例では聞き手を話し手の領域に引き込む（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4180）という記述をもとに、話し手が聞き手を説得しようとする場面で、注視の促しを求める場面を設定した。

(249) [Alguien te cuenta un problema y quieres tranquilizarlo/la.]
Comprendo tus preocupaciones. (　　), ahora lo que tienes que hacer es calmarte e intentar ver el lado positivo del asunto.

a. Oye　b. Verás　c. Mira　d. Fíjate　e. ¿Sabes?　f. otro (　　)

この場面で適切な表現を母語話者に訊ねたところ、c. Mira を選ぶ者が多く、これが最も適切だと言う母語話者も 3 名いた。次に多かったのが b. Verás で、2 名が最も適切なものとして選択した。このことから mira と verás は聞き手に注視を促し、説得して理解に導こうとする機能を持つことがわかる。ある母語話者は、「聞き手との

関係（親族か友人か、年齢差等）によって異なる表現を選択する」と回答した[108]。また、a. Oye が第 2 または第 3 に適切であると回答した母語話者もいた。oye を用いた場合、聞き手を説得するというよりは話し手の意見を伝達するような印象を与えると考えられる。別の母語話者は「oye は人をなだめようとする場面では不適切」という回答をしたが、これも oye の情報伝達を中心とする機能によるものと考えられる。

次に、fíjate はその語彙的意味の強さによって、後続する発話内容が驚きに値することであると表明し、注視を促す機能を持つ。そこで(250)では、自分の子どもの絵の上手さに驚いた母親が、子供本人に褒める場面を設定した。

(250) [Ves a tu niño que está dibujando con mucho arte y quieres alabarle.]
¡ (　　) qué bien pinta mi niño! Estás hecho un Picasso.

a. Oye　b. Verás　c. Mira　d. Fíjate　e. otro (　　)

この発話では、d. Fíjate が第 1 あるいは第 2 に適切なものとして全員が選択しており、次に c. Mira も選ばれている。この結果から、fíjate が驚きの含意を持つことが明らかである。ある母語話者は「fíjate 以外には Pero や Pero mira と共起する」と回答している。pero を用いるのは、話し手の予想と事実が反していることを表すと考えられる。しかし、fíjate の場合には pero を伴わない。これは fíjate が話し手の予測と異なる結果であったことへの驚きを表す機能によると考えられる。また、この発話では選択される表現と後続発話との間に句点が見られない。fíjate が感嘆文と句点なしに融合するという統語的事実によっても、それを証明することができるだろう。

次に verás は、動詞の語彙的意味と未来形であることから、聞き手が話し手の発話を通して自然に理解するものとみなしていることを表す。従って、聞き手が当然納得するであろう場面を設定し、母語話者に意見を求めた。

(251) [Un gimnasta está entrenando para las Olimpiadas y su entrenador, al verle distraído, intenta orientarle sobre su objetivo.]
Entrenador: Manuel, ¡tómate el entrenamiento con más seriedad! (　　), tu objetivo consiste en conseguir una medalla de oro en las Olimpiadas, así que ponte las pilas ya.

108 この母語話者は、聞き手が思春期の甥と仮定して verás を選択している。

a. Oye　b. Verás　c. Mira　d. Fíjate　e. Manuel　f. otro (　　)

その結果、c. Mira が最も適切と答えた母語話者が 3 名、これを第 2 に適切なものとして選択したのが 2 名という結果となった。Mira を第 2 に選んだ母語話者は、a. Oye が最も適切と回答している。また b. Verás を選択したのは 2 名のみで、これを第 3 に適切な表現と回答している。以上の結果から、この例では verás と他の機能を明確に証明することはできなかった。mira は無標の注視の促しなので、verás よりも多く選ばれたのは当然だろう。だが、ここで注視の促しの機能を持たない oye が選択されたのは、どのような理由によるのだろうか。ある母語話者は、この例における語彙選択は「話し手がどのような人かによる」と述べており、「話し手に教養があり、説得力があって優しい人であると仮定すると、既に先行発話でもっと真剣に練習するようにと伝えているので、何度も同じことを繰り返さないために oye が適切である」と回答した。同じ情報を繰り返さないように oye を用いるという指摘は、oye が先行発話と切り離すと述べてきた本論文の主張と一致すると考えられる。oye は注意喚起の機能であり、mira や verás の注視の促しとは異なるが、話し手がどのように情報を伝達しようとするかによって、表現を選択すると言えるだろう。

また(249)と(251)では、呼びかけ語を選択した母語話者もいた。呼びかけ語は、いわば声で聞き手に触れる行為で、人間関係に関わるものなので、語彙的意味を持つ動詞の転用表現とは異なって中立的な機能を持ち、注意喚起だけでなく注視の促しとしても機能することができるのだろう。

このように、注視の促しは、無標の mira、強く注視を求めて発話が驚きに値することを表す fíjate、聞き手が理解するだろうとみなして伝達する verás に下位分類することができる。聞き手を発話内容へ導く場合にも、選択する語彙によって異なる方法で提示することができるのである。

文頭に現れる間投詞は、話し手が情報を伝達する前に、聞き手を発話にどのように向けようとするかを表明するものである。この位置では、先行発話と切り離して新規の発話を導入する聞き手の注意喚起、話題維持の表明、そして話題維持を表明した上で発話内容に注目するよう促し、聞き手を理解に導こうとする注視の促しの機能を果たす。

さらにその下位分類として、注意喚起は、聞き手を明確に特定し、聞き手との近さを示す呼びかけ語、聞き手に具体的意味を持たない音形を向ける eh、情報伝達を目的として話題転換のために注意を喚起する oye、聞き手の興味を引こうと注意喚起し、新しい話題を導入する¿sabes?とに分けられる。また注視の促しも、話し手の持っている情報を述べることによって、聞き手を理解に導こうとする mira、発話内容が驚き

に値することを表す fíjate、そして話し手の発話を通して聞き手が理解するだろうとみなして伝達する verás に分類される。これらの機能は、発話内容に対する話し手の態度を表すものではなく、これから発話しようとする情報に聞き手をどのように導こうとするかを表明する聞き手管理機能である。

9.2. 文末　話し手の発話態度に関わる表現

本論文では、文末で用いられる表現として、¿verdad?、¿no?、¿eh?、呼びかけ語、¿sabe(s)?、ya sabe(s)、¿entienes? 、ya (me) entiendes、¿ves?、oye、fíjate、ya verás、vamos、また単独で用いられて離れた先行発話の文末要素として機能する¿ves?ついて考察した。これらは、第 1 に聞き手に確認しようとする姿勢を見せるもの (¿verdad?、¿no?、¿eh?、単独の¿ves?) 、第 2 に話し手と聞き手の近さを表明するもの（呼びかけ語）、第 3 に聞き手に理解を求めるもの（¿sabe(s)?、ya sabes、¿entiendes?、ya (me) entiendes、¿ves?）、第 4 に発話内容に注意喚起あるいは注視を促すもの (oye、fíjate、verás）、そして第 5 に話し手の意見であることを強調的に表明するもの（vamos）に分類される。これらの表現についても、母語話者に対してアンケートを行った。その結果を見てみよう。

なお、ya を伴う ya sabes、ya (me) entiendes、ya verás は、今回アンケートの対象に含めていない。

9.2.1. 聞き手に確認する姿勢を表明

付加疑問をつくる¿verdad?、¿no?は、発話内容が真であることを全手に、または聞き手に否定される余地を残して問う性質によって、話し手の発話内容に対する確信度を示すものである。

次の例では、話し手が発話内容に対する確信度が高い文脈を作成し、母語話者に意見を求めた。

(252)　[Marina y Josefina se sientan en una terraza para tomar algo.
Marina saca una caja de cigarrillos.]

Marina: No te importa que fume, (　　)
Josefina: Claro que no. Además, ya sabes que mi marido también fuma...

a. ¿verdad?　b. ¿no?　c. ¿eh?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

その結果、全員が a. ¿verdad?を選択した。これは、聞き手の前で喫煙が可能である

と話し手が知っているという文脈によって、話し手の発話内容に対する確信度が高いと判断されたのだろう。第 2 に適切な表現として b. ¿no?や c. ¿eh?が選択されている。

また次の例では、聞き手に否定される余地を残す状況を設定した。

(253) [En el entrenamiento de un equipo de fútbol,
están el entrenador y el delantero casi recuperado de una lesión.]

Entrenador: Puedo contar contigo para el partido de mañana, (　　)

Delantero: Hombre, no estoy completamente recuperado de la lesión, pero lo intentaré.

Entrenador: No nos falles, anda.

a. ¿verdad?　b. ¿no?　c. ¿eh?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

この例では、わずかな差ではあったが、a. ¿verdad?よりも b. ¿no?が多く選択された。サッカーチームの監督が、怪我が完治しきっていない選手と試合の話をするということは、聞き手に否定される可能性があるので、確信度が低いと判断され¿no?が選択されたのであろう。また、ここでも c. ¿eh?を第 2、3 に適切とする回答が見られた。先の例でも母語話者が回答しているように、¿eh?は¿verdad?や¿no?が使用される場面でも用いられる。これは、具体的意味を持たない eh が上昇音調をとる疑問形式なので、聞き手の反応を窺おうとする場面でも使用可能なのだろう。

では、語彙的意味を持たない¿eh?が最も適切な表現として選択されるのはどのような場面なのだろうか。¿eh?は、先行発話の内容に関わる文末に置かれ、上昇音調をとることによって聞き手に発話内容の確認や理解を求める機能を持つ。そこで、次のような状況を設定し、母語話者に意見を求めた。

(254) [Dos niños están jugando y, al chocarse uno de ellos contra un jarrón, éste se cae al suelo y se rompe. La madre oye el ruido y viene corriendo hacia donde están ellos]

Madre: Pero, ¿qué estáis haciendo? ¿Quién ha roto este jarrón?

Luis: Que yo no lo he roto, (　　) Ha sido Miguel.

Miguel: ¡Eso no es verdad! Ha sido Luis.

Madre: Venga, no os peleéis, y dejad de moveros tanto, por favor.

a. ¿eh?　b. ¿sabes?　c. ¿entiendes?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

その結果、回答者 5 名中 4 名が a. ¿eh?を最も適切な表現として選択した。また第 2 に適切な表現として選択されたのは d. oye で、第 3 に b. ¿sabes?と回答する母語話者も若干見られた。¿eh?、¿sabes?、¿entiendes?はそれぞれ聞き手に理解を求めるものであるが、¿sabes?は聞き手が受け入れてくれることを期待して、¿entiendes?は受け入れ難くても理解するよう求めるので、このような身の潔白に対して理解を求める場面では語彙的意味を持たない無標の¿eh?が適切と判断されたのだろう。oye を用いる場合には、「花瓶を割ったのは自分ではない」という主張を強調的に伝達しようとする話し手の感情が含まれると考えられる。

次に、単独の¿ves?についてのアンケートの結果を見てみよう。単独の¿ves?は、発話内容と状況が一致したことを確認する機能を持ち、離れた先行発話の文末要素として機能する。

(255) [Inés está buscando las llaves y no las encuentra por ningún lado.
Entonces pregunta a Loli, su hermana, a ver si ella las ha visto.]

Inés: Oye, Loli, ¿tú has visto mis llaves? Es que no las veo por ninguna parte.
Loli: Pues no las he visto. Seguro que están en algún bolsillo de la chaqueta o lugares parecidos, como siempre. Búscalo bien.
[Al cabo de un rato, las encuentra, efectivamente, en una de sus chaquetas.]
Inés: ¡Por fin las he encontrado! Estaban en mi chaqueta roja.
Loli: (　　) Te lo dije. Siempre es la misma historia.

a. ¿Ves?　b. Mira.　c. Fíjate.　d. Ya sabes.　e. Ya ves.　f. otro (　　)

ここでは、a. ¿Ves?が最も多く選択され、¿Lo ves?という回答も見られた。この他に e. Ya ves.や d. Ya sabes.を選択した母語話者もいたが、ほとんどが「¿Ves?以外に適切な表現はない」と回答している。

9.2.2. 話し手と聞き手の近さを表明する表現

人に呼びかけるというのは、名前を呼ぶことを通して聞き手に触れる行為であり、聞き手との近さを表明するものである。呼びかけ語を付加することで、話し手が聞き手をどのような立場に置いて発話を伝達しようとしているかを表明することができる。さらに文末という位置に置くことによって、話し手の発話態度を効果的に表すことができる。しかし、聞き手を固有名詞で呼ぶのは時に厳しく聞こえる場合がある。そのような場合に、スペイン語では呼びかけ語の語彙を変えることによって、発話の

「人あたり」を適切に調節することができる。

次の例では、呼びかけ語が特に「人あたり」の調整手段として共起する行為指示の発話を提示し、どのような表現が適切かについて母語話者に意見を求めた。なお、この例では個人名ではなく、命令を和らげる度合いがより高いと考えられる情を表すhija を選択肢として採用した。

(256) [Ana está desayunando con sus padres. Mira el reloj y piensa que va a llegar tarde a la universidad. Le entran los nervios y se pone a recoger la mesa.]

Ana: ¡Que voy a llegar tarde, socorro!

Madre: Tranquila, no te preocupes, (　　). Ya la recogemos nosotros. Tú ve a la universidad.

Ana: Gracias.

a. ¿eh?　b. hija　c. oye　d. fíjate　e. otro (　　)

その結果、全員一致で b. hija を選択した。母語話者からは、他にも cariño、cielo、mujer といった語彙が挙げられた。話し手の個人名を文脈で特定しているにも関わらず、このような語彙が挙げられるのは、発話状況によって話し手が命令が持つ厳しさを和らげようとする意図が感じられことによるのではないだろうか。また回答者のうち 3 名が第 2、3 に適切な表現として a. ¿eh?を選択した。具体的意味を持たない¿eh?は、文脈によって強めにも和らげとしても機能するのだろう。

9.2.3. 聞き手に理解を求める表現

sabe(s)、entiendes、ves は、聞き手に理解を求めるものであるが、疑問形で理解を求める場合と、ya などを伴って肯定形で聞き手の理解を断定する場合がある。また、それぞれの動詞の語彙的意味を残し、異なるプロセスで聞き手に理解を求める。本節では、これらの表現の疑問形式のみを対象にしてアンケートを実施した。

sabe(s)は、聞き手が受け入れてくれるだろうという話し手の判断を示して、聞き手に理解を求めるので、次のような状況を設定し、母語話者に意見を求めた。

(257) [Nuria y Juanma son novios. Acaban de comprar unos cafés y se sientan en el banco de una plaza, que hace buen tiempo. De repente, Juanma estornuda.]

Juanma: ¡Achís!

Nuria: ¡Pero bueno, Juanma! Acabas de manchar mi vestido con tu café. Además,

es nuevo, (　　)
Juanma: Ay, cuánto lo siento, cariño. Ha sido sin querer.

a. ¿eh?　b. ¿sabes?　c. ¿entiendes?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

その結果、最も適切な表現として a. ¿eh?を 1 名が、b. ¿sabes?を 2 名、d. oye を 2 名が選択した。¿eh?は語彙的意味を持たないので、どんな文脈でも用いることができるのだが、この場合に¿sabes?を用いると、話し手が新しい服を汚されたことに対する遺憾さを聞き手が受け入れられるだろうという話し手の態度を表すと考えられる。また oye を用いても話し手の遺憾さを表すので、適切な表現として選択されたのだろう。

次に¿entiendes?は、聞き手が理解しがたくても理解するよう求めるので、時に威圧的に聞き手に働きかける。そこで、次のように聞き手の意見に関わらず自らの主張を通そうとする場面を設定し、意見を求めた。

(258)　[Una pareja no se pone de acuerdo en qué van a cenar esta noche.
El chico quiere ensalada, y la chica, tortilla.]
Pilar: Hoy quiero comer una tortilla, digas lo que digas, (　　)
Chema: Pues yo te digo que mejor cenemos una ensalada, porque la tortilla sube el colesterol.
Pilar: ¡Qué pesado! Vale, hoy comemos ensalada, por prométeme que mañana comeremos tortilla.

a. ¿eh?　b. ¿sabes?　c. ¿entiendes?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

しかし、この例で c. ¿entiendes?を選択した母語話者は 2 名のみで、他の 3 名は選択肢に挙げていなかった¿vale?が最も適切と回答した。¿vale?は聞き手が了解したかを直接尋ねるので、entiendes と同様に聞き手に強く理解を求めると考えられる。さらに a. ¿eh?や b. ¿sabes?も選択された。¿eh?は発話内容への確認や理解を要求するが、¿sabes?や¿entiendes?とは異なって具体的意味を持たないので、無標の理解の要求として機能すると考えられる。

また¿ves?は、発話状況と発話内容の一致の確認を求める。文末で用いられる場合には結果的に発話内容が聞き手も確認でき、理解できるものであることを示す機能を果たす。

(259) [Félix está muy nervioso porque hoy salen las notas de los examenes finales.
Cree que ha suspendido algunas asignaturas y no puede esperar más.
Su padre intenta tranquilizarle.]

Félix: ¡Que salgan ya!

[Al poco rato, salen las notas y ve que ha aprobado todas.]

Félix: Papá, ¡he aprobado!

Padre: ¡Enhorabuena, hijo! Pero si al final no era para tanto, (　　) Eres más trágico, hijo....

a. ¿eh?　b. ¿sabes?　c. ¿ves?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

この例について母語話者に意見を求めたところ、3 名が c. ¿ves?を最も適切と回答し、a. ¿eh?も第 2 または第 3 に適切な表現として選択された。この発話場面では、インターネットなどで試験の結果発表を待っていて、話し手と聞き手が視覚的に結果を確認できるという状況なので、¿ves?が多く選択されたと考えられる。

9.2.4. 発話内容に注意喚起あるいは注視を促す表現

次に、oye は先行発話に注意喚起することによって、話し手の苛立ちや遺憾さといった発話態度を示す。そこで、聞き手に対する苛立ちを含む発話を設定して母語話者に意見を求めた。

(260) [Laura está hablando por teléfono con su tía,
y al lado está su hermano pequeño viendo la tele con el volumen máximo.]

Laura: Hermanito, baja un poco el volumen de la tele, que estoy hablando con la tía y no la oigo. (Su hermano no le hace ni caso y sigue con el mismo volumen.)

Laura: ¿No me has oído? ¡Te he dicho que bajes el volumen, (　　)!

Hermano: Pues no me da la gana. Si te molesta tanto, llámala en otro momento.

a. ¿eh?　b. ¿sabes?　c. ¿entiendes?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

その結果、a. ¿eh?や c. ¿entiendes?を選択する母語話者が多く、d. oye は 2 名が第 2 に適切という回答した。この場面では、命令に内容を遂行しない聞き手に対して再度命令しているので、¿eh?や¿entiendes?などの聞き手に理解を求める表現が選択されたのだろう。しかし oye を用いると、より話し手の苛立ちが表明されるので、わずか 2

名ではあったが、作例の意図の通りに oye が選択されたと考えられる。

また、fíjate は発話内容が驚きに値することであると表明して、先行発話に注視を促すものである。そのため、次のような発話状況を設定した。

(261) [En la sala de espera de un hospital, dos señoras están hablando sobre sus hijos.]
Rocío: ¿Sabías que mi hijo está saliendo ahora con una belga?
Ángela: ¿Qué me dices? Pues cómo ha cambiado tu hijo.
Con lo tímido que era tu hijo, y ahora tiene una novia belga, (　　)

a. ¿eh?　b. ¿sabes?　c. ¿entiendes?　d. oye　e. fíjate　f. otro (　　)

この例について母語話者に意見を求めたところ、全員が最も適切な表現として e. fíjate を選択した。また、a. ¿eh?も多く選ばれており、具体的意味を持たない eh が文脈次第でその働きを変え、話し手の驚きを含む状況でも使用可能あることがわかる。そう考えると、¿eh?よりも fíjate が多く選択されているのは、先行発話の驚きに注視を促そうとする機能が、この発話状況において適切と判断されたと考えることができるだろう。

9.2.5. 話し手の意見であることの強調的表明

vamos は話し手の意見であることを強調的に表明するものであり、発話修正や発話緩和、押しつけとして機能する。ここでは話し手が聞き手に対して意見を述べる場面で、文末に用いられる表現としてどれが適切かについて意見を求めた。

(262) [Jorge y Lorena se van de compras a un centro comercial. En una tienda de ropa, llegan a la caja y Lorena se da cuenta de que no está su cartera en el bolso.]
Lorena: Jorge, ¿has visto mi cartera? Igual la he dejado en casa.
Jorge: Creo que no, (　　). Si no recuerdo mal, cuando salimos de casa, vi que la metías en tu bolso. Puede que se te haya caído por la calle.
Lorena: Puede ser. Pero, ¡qué mala suerte!

a. ¿eh?　b. vamos　c. oye　d. fíjate　e. otro (　　)

その結果、回答者全員が a. ¿eh?を最も適切と回答し、第 2 に適切な表現として 3

名が b. vamos を、1 名が e. fíjate を選択している[109]。また第 3 に適切な表現には全員が c. oye を選択した。¿eh?は疑問形式なので、意見の主張度が vamos よりも高い。また oye も先行発話への注意喚起を命令法の形式で表すので、vamos よりも主張度が高いと考えられる。さらに、oye が文末に置かれると話し手の何らかの感情が付加されるので、¿eh?や vamos と比べて容認度が低いのではないだろうか。

このように、スペイン語では文末に様々な表現を用いて話し手の発話態度を表明する。しかし、なぜ文末は文頭と異なって、発話に関わる話し手の態度が現れるのだろうか。

この理由として、まず文末は最も音調を反映しやすい位置であることが考えられる。sabe(s)や entiendes で考察したように、上昇音調をとれば聞き手の反応を窺い、下降音調であれば情報を断定的に示す。また¿eh?や個人名の呼びかけ語のような場合には、強く発音するか優しく発音するかによっても、発話の強めと和らげを区別することができる。つまり、同じ語彙を用いても音調を変化させることによって全く異なる態度を表すことができ、それを十分に反映できるのが、発話を終えた後の文末なのだろう。森山（1989b: 173）は、「普遍的に、発話の内容をともかくも述べきり、相手との受け渡しをするということから、特に言い終わりの部分に、発話の情報伝達的な意味が付加されやすい」と述べており、スペイン語の場合もそうであると言うことができるだろう。

また、藤原（1990: 16）によると、「ひとこと言ったひょうしに、相手の顔をチラと見る、目をはせる」という行為は、相手に訴えようしたり、言ったことが相手に届いたかどうか確かめようとする「訴えかけ、呼びかけ」であると述べ、「文末詞[110]はこれを具現化したもの」である。文末詞は訴えの作用を表示するものなので、おのずと主情的な色合いの濃いものになるという（藤原 1990: 45）。また西川（2009: 14）も、「具体的な訴えの内容となる『文』と『訴え』をまとめ上げる文構成要素が 『文末詞』である」と説明している。西川（2009）の記述は日本語の終助詞に関するものであるが、これはスペイン語の場合にも当てはめることができるだろう。スペイン語において、文頭表現は聞き手を発話にどのように向けるかを示す聞き手管理機能を持つものであり、聞き手は話し手がどのように情報に導こうとしているのかを意識して後続する発話内容に耳を傾ける。しかし、発話内容を提示した後の文末の位置に現れる表現は、先行する発話内容に向かうものである。そこで話し手が聞き手に何を求め（確認・理解の要求や注意喚起等）、どのように働きかけようとするかを表明して、聞き

109 この例について、1 名の母語話者が「何も付加しない」と回答している。

110 藤原（1990: 44）は、文末詞を「文構造の語順にあって〈表現の文末決定の〉文構造の末端に存立するもの」と規定している。

手は話し手がどのように発話をまとめようとしているかを考慮しながら発話全体を理解することができると考えられる。スペイン語では、この位置で話し手の態度を表明する様々な語彙を選択して、発話を伝達するのである。

10.　スペイン語間投詞と日本語終助詞

本章では、これまで考察してきたスペイン語間投詞と日本語終助詞の機能の対応を振り返り、総合的な分析を行う。

10.1. ¿verdad?、¿no?と「ね」

¿verdad?と¿no?は、発話内容が真であることを前提に、あるいは聞き手が否定する余地を残して問う姿勢を見せる性質を持ち、話し手の確信度の高低を表明する。「ね」は、話し手が、自分の認識よりも聞き手の認識の方が確かだと考えた場合に用いられる。そのため、どちらも「確認」の用法を持つ。

(49)'　Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿no?
[José asiente, desconcentrado.]
(*Los lunes al sol*: 51)

(12)'　粟津組の奥さんですね。はじめておめにかかります。
(陳 1987: 97)

しかし、(12)では聞き手の方が情報量が多い、あるいは聞き手の縄張りに属する情報とみなして「ね」を用いているのに対して、(49)では話し手が聞き手の妻が夜勤かどうかについての確信度が低いので、聞き手に否定される可能性を残す¿no?を用いている。日本語では聞き手を意識し、聞き手と情報との関係を配慮して「ね」を用いるのに対して、スペイン語の場合は話し手の確信度の表明が先行すると考えられる。

また、聞き手との共有を表す用法においても対応する。

(59)'　Hoy hace buen tiempo, ¿verdad?
(13)'　いい夜だね。
(陳 1987: 98)

(59)において¿verdad?を伴うと、話し手の発話内容への確信度の高さによって、聞き手にとっても発話内容が真であろうという判断を示すことになる。また、(13)は聞き手との共有を表す「ね」の性質によって、「聞き手も同じように認識しているだろう」と話し手が考えて発言することになり、聞き手の同意が得られることを期待する発話となる。当該の章で考察したように、¿verdad?は疑問形式ではあるが、必ずしも

聞き手の返答を求めず、話し手の判断を表すものである。

さらに、文中に置かれる¿no?も「ね」との共通性が窺える。

(58)' Borjamari: No sé, *ossea*, a lo mejor tengo esa época hiperidealizada, ¿sabes? Pero es que pienso, ¿no?, que a lo mejor el que se casó con Piedad podría haber sido yo.

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 38)

(20)' 回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね(はい) 洗剤を入れますとね (…)

(伊豆原 1993: 104)

¿no?は、聞き手に否定される余地を残す性質によって、聞き手とのつながりを示し、交感的言語使用としての用法を持つ。「ね」の場合は、聞き手との共有を表すという性質によって、発話の途中で用いて聞き手の受けを確認する用法を持つので、この場合にもこれらの表現は対応すると言える。

しかし、依頼に伴う場合の「ね」は¿verdad?や¿no?と対応せず、命令に伴う¿no?も「ね」とは対応しない。

(61)' 早くしてくださいね。

この場合の「ね」は、話し手が聞き手も自分が急ぐべきことを認識していると考え、その上で話し手の発話に同意を得られることを期待して発言しており(陳 1987: 100)、「早くしてくださいよ。」と「よ」を用いるよりもやわらかく感じられる。しかしスペイン語では、母語話者によると依頼表現の1つである疑問文に¿verdad?や¿no?を伴っても(61)の「ね」のようには機能しない。

(63)' ¿Puedes venir mañana, verdad / no?

(64)' ¿Quieres venir mañana, verdad / no?

¿verdad?と¿no?の性質は発話が真であることを前提に、あるいは否定される余地を残して問うものであるので、(63)'、(64)'は、話し手は聞き手が明日来れることを聞き、それを確認しているような印象を受け、¿verdad?の場合には来れることを前提にして、¿no?は来ることができない可能性も含めているという。このことから、¿verdad?や¿no?は(61)のような動機で依頼に伴うことはないと考えられる。

また、「ね」は話し手と聞き手の意向が一致するとの判断を表すので、話し手の一方的な情報伝達で、聞き手の意向に反して行為を要求する命令とは合わないという（益岡 1991: 100）。実際に、(61)を直接的な命令の形式にすると、「ね」は合わない。

(62)' *早くしろね。

同様に¿verdad?も命令文とは共起しない（Ortega 1985: 247）が、これは真であることを前提とする性質を持つことによる。しかし、¿no?は聞き手に発話を否定する余地を残して問うものであることから、命令と共起可能である。次のような場合には、「起きろ、そうじゃないのか？」と問うことになり、「起きろよ」というような強調の含意を持つ。

(56)' b. Levántate, ¿no?

このように、¿verdad?や¿no?は、「ね」の確認や共有といった機能には対応するが、行為指示に伴う場合には一致しない。これは、¿verdad?と¿no?の本質、すなわち発話が真であることを前提にして、あるいは発話を否定される余地を残して問う性質が、「ね」の話し手と聞き手の認識（知識）が一致しており、聞き手が情報を所有していることを示す機能とは大きく異なるからだと言えるだろう。

10.2. eh と「よ」、「ね」

eh は、文末では発話内容に具体的意味を持たない音形を向けることによって注意喚起し、さらに上昇音調をとって聞き手に発話内容に対する反応（確認や理解）を求める。例えば、行為指示や修辞疑問に伴う eh は、命令内容を確認するよう求めることによって、命令を実行するよう脅したり、聞き手に質問の再解釈を求める。

(69)' Carmen: ¡No me estreséis!, ¿eh?

(*El Calentito*: 40)

(73)' José: A ver, ¿qué pasa si ganan los juicios, eh? ¿Qué pasa? Que a tu tío le ponen una inyección y le matan, como a un perro.

(*Mar adentro*: 101)

また感謝や謝罪に伴う場合にも、¿eh?を伴うことによって、単なる感謝や謝罪ではなく、より聞き手に働きかけて感謝や謝罪を確認し、理解するよう求める。

(75)' Alicia: Bueno, ya hemos llegado. Gracias por la cartera, ¿eh?

(*Hable con ella*: 98)

(76)' Angela: Perdona, ¿eh? Lo siento.

(*Solo mía*: 58)

しかし、感謝や謝罪に伴うと、先の命令の場合とは異なって厳しいニュアンスは感じられない。これは、eh が語彙的意味を持たないので、発話状況や共起する発話の種類、また音調によって強調にも和らげにもなることによると考えられる。つまり、文末の¿eh?は発話内容に注意喚起することによって、聞き手に確認や理解を求めるものであるが、それが発話にどのように働きかけるかは発話状況次第であると言える。

さて、このように発話内容が聞き手に向けられていることを表明するものに、日本語の「よ」がある。白川（1992: 38）によると、「よ」は「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」ものなので、命令に伴う場合には「その発話が確実に聞き手の耳に入るよう聞き手の注意を喚起する（白川 1993: 8）」という。

(36)' A: おい、ちょっと、そこどけ。
[相手が、どかない]
A: どけよ。

（白川 1993: 8）

また次のように、単に発話内容へ注意を向けるだけでなく、発話を「字義通りの意味だけでなくある種の言外の意味を推論によって導き出し発話を解釈をしなければならない（中﨑 2005: 83）」場合もあり、この例では上昇音調を帯びる。

(37)' 房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ。

（中﨑 2005: 82）

¿eh? は、具体的意味を持たない音形を向けて発話内容に注意喚起し、「よ」は聞き手に対して直接的な注意喚起をするという方向性が異なるものだが、結果的に注意喚起の機能を持ち、聞き手に発話の確認や理解を求める点において一致していると言えるだろう。

文頭でも eh と「よ」は対応すると考えられる。

(67)' Manolo: Eh, oye, pero ¿qué te crees, que me voy de vacaciones?, ¿te crees que me gusta pasarme los días comiendo en bares de carretera, solo, como un perro, echando de menos a mis hijos?

(*Manolito Gafotas*: 80)

(30)' A: よ、元気。
B: うん、元気。

(伊豆原 1993: 108)

eh は注意喚起として文頭で用いられた場合、具体的な意味を持たない音形を聞き手に向けるので、呼びかけ語など他の表現と比べてぞんざいな印象を与える。また「よ」は、それが持つ聞き手めあて性が情報伝達前には呼びかけとして強く現れ、配慮なしに聞き手の心理的領域に踏み込むので、ぞんざいさが現れる。この点においても、文頭における eh と「よ」の機能は非常に類似していると言えるだろう。

しかし、eh が「よ」に対応しない場合もある。先の(75)、(76)の感謝や謝罪に伴う場合、日本語では普通「ね」が選択される。

(82)' ありがと（う）ね / よ。
(83)' すみませんね / *よ。
(84)' ごめんね / よ。

スペイン語の感謝表現 Gracias.（Te doy gracias.）と謝罪表現 Lo siento.は、動詞が 1 人称単数形であることから話し手の感情表出であると判断される。また Perdona. は命令法であり、これも「話し手が自己の意志を聞き手によって実現する形を述べる法（田中 1988: 290）」である。これに対して、日本語の場合は聞き手重視の「ね」を伴うことができる。語源と発話の形式を考えてみると、感謝表現「ありがとう」は「有り難い」、謝罪表現「すみません」は「済みませぬ」（谷 2009: 76, 79）であり、形式上は感情表出ではなく話し手の判断や解釈を述べる「述べ立て」である。つまり、スペイン語と日本語の感謝、謝罪表現はそもそも形式が異なるのである。

さらに日本語では、「話し手の意向と聞き手の意向が調和する（益岡 1991: 102）」という判断を表す「ね」を用いることによって、話し手の感謝あるいは謝罪に聞き手も同意してくれることを期待し、聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達するのである。また、「ごめん」は「ご免下され」という許しを請う命令である（谷 2009: 78）。命令には「よ」を伴うのが一般的であるが、この場合にはむしろ「ね」を用いる方が

「よ」よりも丁寧に感じられる。これは、「ごめん」が「ご免下され」を短縮したものであることと、「ね」によって聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達することに重点を置いていることによるのではないだろうか。日本語は感謝や謝意を表明する場合、あくまで聞き手の立場を重視して伝達するのである。

さらに、次のような場合にも eh は「よ」と対応しない。

(85)'（話し手と聞き手が一緒に歩いている時の発話）

Hoy hace buen tiempo, ¿eh?

話し手と聞き手の両方が晴天であることを確認できる場合、日本語では聞き手の認識（知識）への配慮によって「ね」が選択される（「今日はいい天気だね」）。eh そのものは、どのような状況でも先行発話の確認と理解を求めるのだが、日本語は森山（1989a: 63）の言うように「常に聞き手の反応をうかがい、それによって、自らの発話を調節したり、また話し手・聞き手の関係を調節」するのである。聞き手の存在を意識する「よ」と類似した機能を持つ eh が用いられる状況でも、「ね」に対応するということである。

このように、eh と「よ」は注意喚起の機能を持つ点において一致しており、どちらも発話内容に対する聞き手の確認や理解を求める。しかし、文末における¿eh?は発話内容に注意喚起するのに対して、「よ」は聞き手に注意喚起するものである。また、日本語では聞き手に関わる情報を伝達する場合には「ね」が選択されるので、このような場合 eh は「ね」に対応する。

10.3. 呼びかけ語と「ね」、「よ」

呼びかけ語は、話し手と聞き手の近さの表明であり、聞き手の名前を呼ぶことによって、名前を呼び合える近い関係にあることや、聞き手に接近して発話を伝達しようとする態度を表す。この機能が発話に与える強めや和らげといった効果が、「ね」や「よ」と共通する。

言明や返答に伴う場合、「よ」に対応すると考えられる。

(150)' Manuela: Ya pasaron las tres horas, Ramón.

(*Mar adentro*: 23)

(86)' Andrés: ¿Es por la guerra?

Rosa: Sí, hijo... Dicen que han ganado los militares.

(*La lengua de las mariposas*: 91)

日本語の場合、言明（述べたて）は、話し手の持つ情報を聞き手に伝達する行為である。白川（1992: 39）は、「一般的には、『聞き手の知らないこと』を言う『述べ立て』の文では、『よ』を付加するのが普通である」との述べており、このような倍に「よ」を伴わないと、どこかすわりの悪い文になるという。また、返答は聞き手が知らない情報を断定する行為なので、スペイン語における返答も「よ」を用いて「そうだよ」のように訳すことができるだろう。また、聞き手への近さを表明する呼びかけ語が持つニュアンスは、終助詞「よ」を用いて訳すことによって表すことができるだろう。

また、行為指示にも「よ」を伴う場合がある。

(152)' Ramón: Pero no llores, Rosa...

(*Mar adentro*: 109)

(153)' Raimunda: (*A Paula, le grita*). ¡Deja el teléfono, Paula!

(*Volver*: 45)

(152)のような聞き手を慰める場合は、呼びかけ語を伴うことで聞き手に寄り添おうとする話し手の態度が窺え、(153)は、夫に腹を立てている話し手 Raimunda が長電話をしている娘 Paula に電話を切るよう命令する場面である。話し手と聞き手との近さを表明する呼びかけ語は二面性を持ち、(152)のように聞き手との親密さを表す場合と、(153)のように聞き手に配慮せず領域に触れる厳しさを表明する場合とがある。呼びかけ語の付加によって、命令を和らげようとしているのか、あるいは強めようとしているのかは発話状況や音調によると考えられる。

同様に、命令に「よ」が伴うと(34)のように「命令の調子が弱くなる（上野 1972: 72）という指摘と、(36)のように「逆に調子を強くしている（白川 1993: 8）」という指摘がある。

(34)' 行けよ。（下線部筆者）

（上野 1972: 72）

(36)' A: おい、ちょっと、そこどけ。
[相手が、どかない]
A: どけよ。

（白川 1993: 8）

白川（1993: 8）は、命令に伴う「よ」の本来的な機能は中立であり、「その発話が確実に聞き手の耳に入るように聞き手の注意を喚起する」ものと説明している。これは発話状況によって判断されるものであり、日本語においては和らげと強めを区別する助詞はなく、どちらも「よ」が用いられるのである。もし命令を和らげていることを明確に表すなら、「行け」という命令を「行って」と依頼の形式にしたり、「来い」を「おいで」のように語彙自体を変えて表現する必要がある。

一方、スペイン語では固有名詞によって命令が厳しく聞こえるのを避けたければ、呼びかけ語の語彙を変えて調節することができる。

(154)' a. Ven, Rosa.
b. Ven, cariño.

(154)a の固有名詞 Rosa を(154)b のように cariño に変えることによって、発話内容を変えることなく聞き手への愛情をより明確に示して命令を和らげることができる。また Ven, mujer.のように、話し手と聞き手の間に距離を置くような語彙を用いると、さらに発話の聞こえ方が変わるだろう。このように、呼びかけ語の語彙によって「人あたり」を調節するので、スペイン語では呼びかけ語の語彙が発達したのではないかと考えられる。

また、呼びかけ語の有無によって言外の情報を含むことを示す点においても「よ」と一致する。

(101)' Raimunda: ¿¡A mi madre!? Mi madre está muerta, Agustina.
（*Volver*: 123）

(37)' 房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ。
（中﨑 2005: 82）

(101)は、聞き手に接近して伝達することによって、威圧的に働きかけるのと同時に、聞き手に対して「何を言ってるのか？私の母親が死んでいることを知っているだろう。」と再確認させており、呼びかけ語を伴わない場合、単なる新情報の提示になってしまう可能性がある。また(37)でも、「よ」を付加しなければ聞き手にとって既知の情報（聞き手が大学の先生であること）をことさら述べるので不自然であり、発話を表面的な意味だけでなく、ある種の言外の意味、すなわちここでは「大学の先生である者が、市長選挙などに立候補するべきではない」といった解釈をしなければならないという。これらの例ではどちらも、呼びかけ語や「よ」の存在によって発話に言外

の意味を含んでいることを示すという点で一致している。

しかし、「よ」を伴うことが多い言明でも「ね」の方が自然な場合もある。

(129)' Ramón: Me voy a la playa, a... cambiar de aires.
Conductor: A cambiar de aires... Eso está bien, hombre...
(Mar adentro: 159)

この例では「それはいいですよ」とするよりも「それはいいですね」と「ね」を用いるほうが自然だろう。これも、日本語では聞き手の方が強く関わる情報を述べる場合に「ね」を付加する必要があるためである（神尾 1990: 62）。つまり、スペイン語では呼びかけ語は、言明だけでなくどのような発話に伴っても聞き手への近さを表明するのだが、日本語では、それが「よ」に対応する場合と「ね」に対応する場合があるということである。

しかし、感情表現に分類される感謝や謝罪が呼びかけ語を伴うと「ね」にのみ対応すると考えられる。

(156)' Gracias por la cartera, Benigno.
(157)' Perdona, canguro. Lo siento.

これらの例を、¿eh?を伴う場合（(75)、(76)）と合わせてスペイン語母語話者に提示したところ、呼びかけ語を伴う表現の方が、「¿eh?と比べて聞き手への親近感や誠実さが感じられる」という回答が得られた。これは呼びかけ語が持つ話し手と聞き手の近さを明示する機能によって、聞き手に本当に感謝している、あるいは申し訳なく思っている態度が現れることによると考えられる。また、日本語では感情表現の行為には「ありがとうね」、「ごめんね」のように、聞き手が判断し得る余地を残して伝達するために「ね」を伴うのが普通である。この聞き手を意識して伝達する機能と、スペイン語における呼びかけ語が話し手が聞き手との近さを明示するという機能は一致すると考えられる。

しかし、呼びかけ語を伴っても終助詞に対応しない場合もある。次のような挨拶の例では「ね」を付加するのが自然な場合と、ゼロ形式の方が自然な場合があった。

(158)' Monitora Jefe: Hasta mañana, Ángela.
(*Solo mía*: 33)

(98)' Ana: Hola, Santa.

(*Los lunes al sol*: 131)

(99)' Ramón: Adiós, Gené.

(*Mar adentro*: 157)

(158)は「また明日ね」のように「ね」を用いるのが自然だが、(98)、(99)では「よ」も「ね」も用いず、ゼロ形式になる。日本語の「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」、「さようなら」などの挨拶には終助詞を伴わない。「また明日ね」や「じゃあね」などには終助詞を伴うが、これは「また明日会おうね」や「じゃあまた会おうね」といった発話の省略した形であり、「おはよう」や「さようなら」といった典型的な挨拶とは異なるものと考えられる。従って、本来の挨拶表現に伴う呼びかけ語には終助詞は対応しないと言えるだろう。

また、質問に伴う例も終助詞と対応しない。

(96)' Ramón: ¿Y ahora qué hacemos, Manuela?

(*Mar adentro*: 115)

(97)' Catalina: ¿Dónde está el cristal, Manolito?

(*Manolito Gafotas*: 26)

益岡（1991: 97）によると、日本語において話し手が聞き手に情報を要求する質問では、「聞き手の知識が話し手の知識を上回っていると想定される」ので、「聞き手の知識との異同をことさら問題にする必要は、原則としてな」く、終助詞が付加されないからである。

さらに、「よ」や「ね」を伴う発話でも呼びかけ語が敬称である場合、終助詞は現れない。

(135)' Don Gregorio: Llámelo por favor.
Rosa: Sí, señor.

(*La lengua de las mariposas*: 18)

(159)' García: Perdóneme, capitán.

(*El laberinto del fauno*: 15)

日本語では、聞き手に対して敬意を表す言語表現である敬語が発達している。(135)の場合は「かしこまりました」、また(159)では「申し訳ありませんでした」と終助詞を用いなくても、表現そのものを変化させて聞き手との社会的関係を示すことができ

る。そのため、日本語ではスペイン語のように呼びかけ語を使用する必要がないのだろう。つまり、スペイン語の呼びかけ語と日本語の終助詞が対応しないのは、聞き手への配慮を示したり、終助詞を付加しない発話が存在する日本語の性質によると言えるだろう。

また、スペイン語の文頭の呼びかけ語は日本語の「ねぇ」に対応する。両者は、どちらも聞き手に呼びかけて注意を喚起し、後続発話に引き込む機能を持つ。

(92)' Agustina: Raimunda, quiero pedirte un favor.

(*Volver*: 123)

(19)' ねえ、ちょっとこのスープ、味、見てくれない？

(仁田 他 2009: 158)

文頭の呼びかけ語を翻訳する際、そのまま固有名詞を用いることも可能であるが、(92)のように話し手と聞き手がすでに発話をしていて、聞き手が明確である場合、日本語では固有名詞ではなく「ねぇ」を用いるのが自然だろう。しかし、固有名詞の呼びかけ語は聞き手が複数いる場合にも個人を用いることができるのに対して、「ねぇ」には個人を特定できる要素がないので、聞き手が特定されている場合にしか用いられないと考えられる。呼びかけ語は聞き手との近さを表すことによって、「ね」の場合は聞き手との共有を表すことによって、聞き手の注意を喚起し、後続発話に耳を傾けるよう促すのである。

呼びかけ語が 1 つの文を主節や従属節などの区切りで置かれ、後続発話に注意喚起する用法は、文の途中に現れて話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進める場合に用いられる間投詞の「ね」に対応する。

(103)' Ramón: La persona que de verdad me ame, Rosa..., será precisamente la que me ayude a morir.

(*Mar adentro*: 126)

(20)' 回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね（はい）洗剤を入れますとね（…）

(伊豆原 1993: 104)

「よ」にも同じ用法があるが、「聞き手の気持ちに関わりなく一方的に話を進めていくときの持ちかけであり、ぞんざいさ、押しの強さが感じられ（伊豆原 1993: 108）」、呼びかけ語が表すような聞き手への近さを表す機能とは異なる。

(31)’ それでミヤザワさんよ、あんたがもうちょいとアメ車を買ってくれたらよ、誰もショーウィンドーにレンガ(保護主義)なんか投げ込まれないように、オレが面倒みてやるからよ。

(伊豆原 1993: 108)

これらは、tío や colega など一部の若者が仲間内で用いるようなぞんざいさ（あるいはぞんざいであるからこその仲間意識や親密さ）を表す呼びかけ語には対応する可能性があるだろう。

このように、スペイン語の呼びかけ語と日本語の終助詞は、どちらも発話に付加することによって聞き手への発話の聞こえ方を調節し、どのような態度で話し手が伝達しようとするかを表すものである。しかし必ずしも一対一の対応をするのではなく、同じ言明に伴う呼びかけ語でも「よ」になる場合と「ね」に相当する場合があり、また時に終助詞には対応しないこともある。これは、呼びかけ語が話し手と聞き手がこれを介して触れ合えるような近い関係であることを表明する行為であるのに対して、終助詞は話し手と聞き手との認識の一致、相対的な情報量や、発話と聞き手との関係を明示する（滝浦 2008: 132）という、本質の差によるものと言えるだろう。

10.4. sabe(s)、entiendes、ves と「ね」、「よ」

sabe(s)は、話し手が聞き手に知ってほしい、また聞き手が受け入れてくれるという話し手の態度を示して情報を伝達し、聞き手の理解を求めるので、話し手の気持ちを理解してもらおうとするニュアンスを持つ。これに対して、entiendes は聞き手が受け入れ難くても理解するよう求めるので、時に威圧的に働きかけることがある。また ves は、発話状況と発話内容の一致の理解を求めるものである。これらの表現と終助詞との対応を、位置ごとに見ていこう。

文頭の疑問形¿sabes?は、聞き手の注意を喚起すると同時に、知っているかどうか尋ねる対象となる後続発話に聞き手を引き込み、新規の情報を導いて先行発話の話題を転換することができる。また「ねぇ」も同様に聞き手の注意を喚起して後続発話に引き込み、(18)のように新規の情報を導くことができる。

(162)’ Miguelito: Dime que sí, Luli. No puedes dejar que esto acabe así, Luli. ¿Sabes?, eres mi bailarina.

(*El camino de los ingleses*: 123)

(18)’ ねぇ、T さんてウチの人と結婚するんですってネ、名古屋支社の人なんだって、

相手は。

（佐治 1967: 187）

どちらの例も¿sabes?、「ねぇ」がなければ情報を突然伝達することになり、不自然だろう。性質は異なるが、聞き手に対して新規情報の導入を示すことができる点において一致している。

一方 ya などを伴う肯定形の sabe(s)は、後続発話が聞き手の既知情報であることを示して理解を断定し、話題維持を表明するものであり、注意喚起の機能は持たない。

(164)' Fernando: Ya sabes, cuando un cuerpo en estado normal empieza a beber no puede dejarlo hasta que se coge un pedo de campeonato... sobre todo si ese cuerpo es mío...

（*El penalti más largo del mundo*: 126）

このような場合、聞き手との共有を表すことによって後続発話に引き込む「ねぇ」と対応し得る。しかし、ya sabe(s)は肯定形であることから、引き込みというよりもむしろ断定的な印象を与えると考えられる。また、注意喚起の機能を持たないので、談話の開始部には用いられず、用件部に現れる。

日本語の「あのね」はこれと同様の機能を持つ。

(181)' 「中島くん、行かないで。」私は言った。
「あのね、それはパリとかのことではなくて、パリは行ってもいいの。ただ、この世にい続けようとしてほしい。」

（『みずうみ』：111）

(182)' 「あのね、私、大学に入ったときフォークの関係のクラブに入ったの。唄を唄いたかったから。それがひどいインチキな奴らの揃ってるところでね、今思い出してもゾッとするわよ。そこに入るとね、まずマルクスを読ませられるの。（…）」

（『ノルウェイの森（下）』:65-66）

「あのね」は、指示詞の「あの」に「ね」が付いたもので、「ね」を除いて「あの」にすると不自然なので、「ねぇ」の一種と考えることができる。「あのね」は注意喚起の機能を持たず、用件部で用いられ、先行発話の話題維持を表明するので、文頭の ya sabe(s)に対応すると言えるだろう。

また、ves は文頭では肯定形のみで観察され、後続する発話が発話状況に一致することを聞き手に示すものである。話題維持として機能する点においては ya sabes と同様であり、「あのね」に対応する。

(192)' Santos: (*Haciéndose el simpático.*) Ya ves, tu hermana y yo vamos a fundar un club. A lo mejor a ti también te interesa, Fernando.

(*El penalti más largo del mundo*: 97)

(193)' Fernando: ¡Estoy a punto...! ¡Ya estoy...! (*Bajando la voz.*) Ya lo ves, o te metes aquí o nos parte la cabeza tu novio...

(*El penalti más largo del mundo*: 78)

しかし、ves は動詞の語彙的意味によって、視覚的にも後続発話の内容が確認できるというニュアンスを持つが、「あのね」にはそのような機能はないと考えられる。

また、ves が単独で用いられる場合も「ね」に対応する。

(188)' Gené: ¿Ves? Se alegra de verte.

(*Mar adentro*: 96)

(189)' Héctor: ¿Lo ves? No pasa nada.

(*Héctor*: 123)

(194)' 「ね、どこまでも歩けそうでしょ、今夜って。」

(『サンクチュアリ』: 170-172)

単独の例は、離れた先行発話とそれを証明する発話状況の一致を求めるものである。これは話し手と聞き手の認識（知識）が一致する場合に用いられる「ね」の確認の用法（大曽 1986、陳 1986）に対応する。伊豆原（1993）も述べているように、「ね」は文末だけでなく、他の位置においても聞き手との共有に関わる。(194)の「ね」は、(188)、(189)と同様に離れた先行発話の文末として機能していると考えられ、単独の¿ves?は一致の確認を求める点において「ね」と対応していると言えるだろう。

次に、文末の sabe(s)、entiendes、ves は「よ」に対応するが、それぞれの動詞の語彙的意味によって異なるプロセスで理解を求める。

sabe(s)は、聞き手が受け入れてくれるだろうという話し手の態度を示して理解を求めるものであり、話し手が聞き手の知らない情報を伝達する際に用いられ、発話内容に対して聞き手の理解を求める「よ」に対応する。また、出典の音声を確認したところ、sabe(s)には疑問形にも上昇音調のものと下降音調のものが見られた。

話し手が発話内容への理解を求める疑問形で上昇音調の¿sabe(s)?↑は、「聞き手が知らないこと、気がついていないこと、あるいは忘れているようなことを、状況から知らせる価値があると話し手が判断し伝える（大曽 1990: 45）」上昇音調の「よ↑」に対応する。

(166)' Gené: Y ahora soy yo la que va a ayudar a Ramón, ¿sabes?↑
[Gené resopla con rabia y esconde su cara entre las manos.]
(*Mar adentro*: 85)

(168)' Cardona: Sé algunas cosas de tí, ¿sabes?↑
(*El camino de los ingleses*: 80-81)

(185)' (授業の始まるのを待っている学生に)
今日は休講だそうよ↑。
（大曽 1990: 45）

(186)' （客を迎える準備をしている夫婦）
妻：山田さん、たくさんお飲みになるかしら。
夫：いや、あんまり飲まないと思うよ↑。
（大曽 1990: 45）

Ortega（1986: 274）も疑問形の¿sabe(s)?について、「話し手は発話内容について知らない聞き手に『その情報が聞き手にとって重要である』と判断して伝達する」と指摘しており、これらの例は全て話し手が聞き手の知らない、または忘れているようなことを伝達する必要があると判断していると考えられる。従って、¿sabe(s)?↑と「よ↑」は対応すると言える。

また、聞き手の理解が得られると話し手が断定して伝達する、疑問形の下降音調¿sabe(s)?↓と肯定形 sabe(s)は、「話し手が聞き手は明らかに自分と違う判断を下していると知って、それに反駁する形で自分の判断を主張する、または聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する（大曽 1990: 45）」下降音調「よ↓」に対応する。

(169)' Ramón: Me siento un poco abrumado, ¿sabes?↓
(*Mar adentro*: 124)

(170)' Modesto: Es un imprevisto, muy urgente, ¿sabe?↓
(*La caja 507*: 82)

(173)' Ángela: Es verdad, y lo sabes. Nunca eres cariñoso con ella, ni la compras

nada, ni hablas a nadie de ella...

(*Solo mía*: 56)

(22)' いや、よく働きます<u>よ</u>。

(大曽 1986: 93)

(169)、(170)の例は疑問形ではあるが、話し手がそれぞれ聞き手が発話内容を受け入れてくれる、あるいは受け入れるべきであるという態度を示して下降音調の¿sabe(s)?を用いて断定的に発話をしており、(173)も聞き手の理解を得られることを断定し、話し手の判断を一方的に主張している。話し手が聞き手に反応を求める余地を示していない点において、下降音調「よ↓」が持つ話し手の意見を一方的に主張する機能と共通していると言えるだろう。

一方、entiendes は発話内容が受け入れ難くても理解するよう求めるものであり、疑問形、肯定形に関わらず、先ほど挙げた¿sabe(s)?↑と肯定形 sabe(s)と同じく「話し手が聞き手は明らかに自分と違う判断を下していると知って、それに反駁する形で自分の判断を主張する、または聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する（大曽 1990: 45）」という下降音調の「よ↓」に対応する。

(176)' Rosa: ¡Es que justamente pensé mucho sobre eso!... Sobre lo que me dijiste en Coruña... Ramón..., es que me di cuenta. Me di cuenta, ¿<u>entiendes</u>? Yo estoy bien segura de lo que siento, Ramón. Yo te amo...

(*Mar adentro*: 147)

(179)' Fernando: ¡Un momento! Primero: mis manos son muy importantes para mí, y no hablo sólo del fútbol, hablo de todos los aspectos de mi vida, <u>ya me entiendes</u>...

(*El penalti más largo del mundo*: 81)

(22)' いや、よく働きます<u>よ</u>。

(大曽 1986: 93)

(176)は聞き手がそのように考えていなくても、話し手の発話内容を理解するよう求めており、一方的な印象を与える。また、(179)では「手の指が重要であることをわかるだろう」という気持ちと、「自分の立場を理解して指を折るのをやめてくれ」という気持ちを込めて肯定形を用い、聞き手を説得しようとしている。このことから、どちらも聞き手の判断、意見と関係なく自分の意見を一方的に主張する下降音調の「よ↓」に対応すると言えるだろう。

entiendes には sabe(s)の時のような音調の違いはあまり見られなかったが、次のような場合には降昇音調の「よ↗」に対応する可能性がある。

(178)' Ana: Me voy a casar con él, ¿lo entiendes? Tenemos planes...

(*El penalti más largo del mundo*: 145)

(29)' X: 総会、私も行っていい？

Y: 何するの？おもしろくないよ↗。

(小山 1997: 106)

この例における¿entiendes?は、聞き手に他の男性と結婚すると再度告げる場面であり、一旦上昇して下降し、再び上昇する音調をとって「本当にわかっているのか？」というような含意を示して理解しているかを確認し、聞き手への非難を表していた。小山（1997: 106）は降昇調の「よ↗」は、「聞き手が気づいていないような事柄に言及して話し手と聞き手の認識の差を表し、さらに問いかけ上昇調イントネーションによって聞き手がそのギャップを認めるかどうか、あるいはなぜそのギャップに気づかないのか、といったことを尋ねている」と述べており、これは非難を表すと解釈できる。まさに(178)の発話状況を表していると考えられるので、これらの機能は一致すると言えるだろう。

また、ves は発話状況と発話内容の一致の確認を求める機能を持つが、文末では一致を表すことによって、より話し手の発話が理解できるものであることを示すものである。

(190)' Andrea: Acuérdate... el año que viene contará los chistes y los demás le reirán las gracias, ¿ves?

(*Solo mía*: 30)

この発話は、1 年後の状況と現在の発話の一致を表すことによって、発話内容の信頼性を高めている。そのように考えると、たとえ一致を表す¿ves?であっても、「よ」に対応すると考えられる。

このように、sabe(s)、entiendes、ves はそれぞれの動詞の語彙的意味によって、異なるプロセスから聞き手に理解を求めるものである。文頭では、注意喚起や話題維持を示すため「ね（ぇ）」に、文末では発話への理解を求める機能を果たし、「よ」に対応すると結論づけられる。

10.5. oye、mira、fíjate、verás と「ね（ぇ）」、「よ」

これらの表現についても、まずは文頭における対応から順次見ていこう。

oye は、動詞の語彙的意味を残した無標の注意喚起表現であり、文頭では話題転換を示し、新規の情報を導くことができ、「ねぇ」に対応すると考えられる。

(195)' Marco: Oye, ¿quién es la mujer que acaba de salir?

(*Hable con ella*: 90)

(18)' ねぇ、T さんてウチの人と結婚するんですってネ、名古屋支社の人なんだって、相手は。

(佐治 1967: 187)

次に、mira は用件部で用いられ、聞き手の注視を発話内容に喚起しようとするものであり、「ねぇ」や「あのね」に対応する。

(212)' Raimunda: Mira, en el camino te explico. De momento, tenemos que meter el mueble-frigo en la furgoneta.

(*Volver*: 132- 133)

(213)' Terapeuta: Mira, Antonio, imagínatela y trata de describir algún detalle, algo en particular que te guste.

(*Te doy mis ojos*: 75- 76)

(217)' 「あのね (ねぇ)、俺はそれほど馬鹿じゃないよ」と長澤さんは言った。

(『ノルウェイの森（下）』:113)

(212)、(213)における mira は、先行発話の話題維持を表明した上で聞き手の注視を促して情報を伝達し、共に発話の理解へ導こうとする機能を果たす。(217)の「あのね」、「ねぇ」も同様に注視を促すものである。また、聞き手との共有を示す「ね」によって、聞き手を引き込む。mira の場合も、聞き手を話し手の発話内容に引き込む機能を持つので（Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4180）、文頭の mira と「ね（ぇ）」は一致すると言えるだろう。

また文頭の fíjate は、後続発話が驚きに値することを示して注視の促しとして機能し、これも「ねぇ」や「あのね」に対応すると考えられる。

(221)' Marta: Fíjate, lo que siempre ha querido ser es escritora...

(*El Calentito*: 71)

(230)’ あのね、ちょっと前まではね、£1＝200 円だったのよ。
非っっっ常に計算しやすかったのよ。
「お年玉一万円」って言われて「あー£50 かー」って思ってたのよ。
なんだよ 118 って・・・・・
(http://blogs.yahoo.co.jp/gotei_13_tai/8131608.html)

(230)は円高について驚く場面である。「ちょっと前まで 1 ポンド 200 円だった」という発話には、文脈から 1 ポンド 118 円である現状への驚きが含意されていると考えられる。「あのね」そのものは驚きの含意を持たないが、「1 ポンド 118 円だったのに（今は 200 円だなんて…）」という逆説的な発話を導くために、注視の促しの機能として選択されていると考えられる。このような場合、「あのねぇ」と伸ばすことによって、より感嘆的な含意を示すことができるだろう。従って、理解を導こうとする fíjate と、聞き手との共有を表す「あのね」は発話に驚きのニュアンス与える点において対応すると言えるだろう。

また、文中における fíjate も「ね」と一致する。

(223)’ Paloma: Porque el azul, fíjate, es un modelo de hace dos años...
(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 78)

(20)’ 回答者: …ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね（はい）洗剤を入れますとね（…）
(伊豆原 1993: 104)

文中の fíjate は、後続発話への注視を喚起する機能を果たすので、文中の「ね」が持つ、聞き手に注意喚起し、受けを確認する間投詞の「ね」と対応すると言えるだろう。

また、verás は文頭でのみ用いられ後続発話を導く。動詞の語彙的意味と、直説法未来形であることから、話し手の発話を通して聞き手が自然に理解するだろうという判断を示して、情報を伝達するものである。聞き手が先行発話に関わる発話を導入するが、開始部で現れることはなく、話題転換や注意喚起をする機能は持たないので、注視の促しを求める「ねぇ」、「あのね」に対応すると考えられる。

(233)’ Monitora jefe: Verás, uno de los motivos de hacer estos ejercicios es mentalizar a los padres de que la educación es cosa de dos.
(*Solo mía*: 32)

(234)' Alfredo: Verás, a mí me ha parecido que usted, Erik, creaba una sombra sobre Frida y que el ángulo picado de la cámara no es el más adecuado para capturar la acción.

(*Torremolinos73*: 51)

(237)' あのね、これは君のためにやってるんだよ。君だってね、こんな阿呆大学生達に面倒みられたところでいいことなんてなんもありませんよ。それよりはきちんとした家の人に可愛がってもらうべきです。

(http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=195095)

「あのね」そのものには、verás が示す話し手の発話を通して聞き手が自然に理解するだろうという含意はないが、(237)のように聞き手が当然理解するであろう後続発話を導くことができる。聞き手が知っている発話を導く（Beinhauer 1963: 50）と指摘されている verás と、話し手と聞き手の情報の一致を表す「ね」は対応すると言えるだろう。

しかし、ya verás は文頭に置かれても「ね」には対応しない。

(235)' Pocholo: ¡Sí! *ossea...* Ya verás, va a ser supergenial.

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*: 73)

ya verás は te aseguro que...や te juro que...のような断定的な含意を持ち、文頭に位置しても聞き手に注視の促しを求める機能を果たさない。また、独立した用法を持って必ずしも後続発話を必要としない。「ね」は、文頭で断定的に情報を伝達する機能を持たないので、文頭の ya verás には対応しないと考えられる。

さて、これらの表現のうち、文末で用いられるのは oye、fíjate、ya verás である。

文末の oye は、先行発話を確認するよう注意喚起することによって、話し手が注意喚起したいほどに驚いている、残念に思っているなどの発話態度が明示される。「よ」も注意喚起の機能を持ち（白川 1993: 8）、「『残念に思っている』『遺憾に思っている』『快く思っている』という当該事態に対する話し手の心的態度を表す（中﨑 2005: 80）」と指摘されている。

(202)' ¡Qué pena de ver esto así, oye!

(203)' Deja de molestar, oye.

(39)'（この間受けた模試試験の結果が返ってきてそのことについて話し合う生徒たち）

男子生徒 A: どうだった、統一模試。

男子生徒 B: だめだめ。ランキングにかすりもしないよー。
男子生徒 C: 俺もだよー。

（中﨑 2005: 80）

文末に oye と「よ」を用いることによって、話し手は発話内容に対する心的態度の存在が顕在化するという点で一致している。

また、どちらも言外の意味を含むことを示す用法を持つ。

(209)' ¿Me estás escuchando?, oye.
(38)' 重大な話って何なの｛φ/ よ｝？

（松岡 2003: 62）

(209)は、話を聞いていない聞き手に対する非難を含んで「話をちゃんと聞け」という修辞疑問としての用例であり、(38)の例も「その答えを教えなさい」という含みを持つ。oye は先行発話に注意喚起、「よ」は聞き手に注意喚起するもの、という方向性は異なるが、共通する機能を持つのでこのように一致する用法が生まれるのだろう。

しかし、「よ」は聞き手のいない独話でも用いられるのに対して、oye の場合は独話では現れないと考えられる。これは oye が tú に対する命令法の形をとっているためと推測される。

また、fíjate は発話内容が驚きに値することを表明し、先行発話に注視を促す機能を果たすので、聞き手に注意喚起する「よ」と対応する。

(224)' Chus: Esto no va contigo, Leo. A ti te tengo hasta cariño, fíjate...

（*El Calentito*: 28）

(232)' 鈴のような声でしゃべる子供だったのにびっくりだよ。

（http://yaplog.jp/roku-nao/monthly/201104/）

この例では、音楽グループへの不満を述べる場面において、聞き手のことは「好きでさえある」という逆説的な文脈で、fíjate は感嘆的に用いられて注視を促している。また、(232)は、音楽会に出席した感想を述べるものである。鈴のような声で話していた子供が、大勢の人の前で演奏する姿に驚いたことを感嘆的に述べる発話に「よ」を伴っている。「よ」そのものには驚きの含意はないが、fíjate と「よ」がどちらも発話内容が驚きに値することを表明する発話に共起することから、これらは対応すると言えるだろう。

文末の ya verás は先行発話がいずれ理解するだろうと推測していることを示して断定的な印象を与えるので、話し手の一方的伝達を表す「よ」に対応する。翻訳の場合にも、(236)は「できるよ」と「よ」を用いて自然に訳すことができる。

(236)' Alfredo: Que sí, ya verás. Ponte seria. Venga.

(*Noviembre*: 28)

また、「よ」にも次のような聞き手がいずれ理解するだろうという文脈において、発話内容を断定する例が見られた。

(238)'「貴俊さん…来るかな。」歯ががちがちと音を立てている。
「絶対に来るよ。」私はその背中を優しくさする。真吾が来るって言ったから、絶対に来るのだ。

(http://ncode.syosetu.com/n1782bs/32/)

(238)の例では、聞き手がいずれ理解することができる内容を断定的に伝達する発話に「よ」を伴っており、ya verás との共通性が窺える。このような場合、下降音調「よ↓」をとることによって、より断定的な印象を与えると考えられるが、(216)' の ya verás は聞き手が自分と異なる判断を下していることを示す発話ではないので、下降音調「よ↓」ではなく上昇音調の「よ↑」に対応するだろう（「きっとすごく楽しいよ↑」）。

(239)' Va a ser supergenial, ya verás.

これらの差は発話状況によると考えられる。どのような場合に文末の ya verás が上昇、あるいは下降音調の「よ」に対応するかについて本論文では詳述しないが、今後考察する必要があるだろう。

10.6. vamos と「よ」

最後に、vamos は話し手の判断を聞き手に伝達するものであり、話し手の情報を聞き手に伝達する「よ」との共通性を持っていると考えられる。

(243)' Daniel: Creo que no. Yo creo que no, vamos.

(*Nubes de verano*: 52- 54)

従って、話し手の情報を聞き手に伝達する「よ」との共通性を持っていると考えられる。

(244)' 今は無理かも知らないけど、ゆっくりと
変わって行けば、それいいんじゃないかな？
僕は、そう思うよ…。

(『ね。』：117)

(244)では、母親に対して意見を述べ、それが話し手の意見であることを強調的に伝える発話に「よ」を伴っている。「よ」は、話し手と聞き手の認識（知識）の不一致を表すものであり、このような場合には、その落差を示すことによって話し手の意見を聞き手に押しつけると考えられる。このことから、vamos と対応すると言えるだろう。このような場合、聞き手の反応を伺う上昇音調の「よ↑」になるが、(243)のように、明らかに聞き手と異なる判断をしていることを表明する場合、下降音調の「よ↓」に対応するだろう。この点に関しても、今後さらに考察する必要があるだろう。

しかし、次の例では vamos の先行発話は聞き手に関するものなので、日本語では「ね」に対応する。

(242)' Dieguito: O sea que no te comiste un rosco, vamos...

(*El penalti más largo del mundo*: 177)

日本語では聞き手の方が情報量が多い事柄について述べる場合、聞き手が情報を所有することを示す「ね」を用いるからである。ところが、スペイン語の場合は、話し手と聞き手の情報量の差に関わらずに表現を選択する。従って、話し手が自分の意見や主観を表明する際に用いられる vamos は、話し手の持っている情報を伝達する「よ」に対応すると言えるだろう。

10.7. スペイン語間投詞と日本語終助詞の機能と特徴

本章では、スペイン語間投詞と日本語終助詞の対応を再度確認した。スペイン語の間投詞は、それが持つ語彙的意味によって異なるプロセスから働きかけるが、文頭の呼びかけ語、sabe(s)、oye、mira、fíjate、verás と単独の ves は「ねぇ」（「あのね」）に、eh は「よ」に対応する。また、文末の¿verdad?、¿no?そして主に感謝や謝罪に伴う呼びかけ語は「ね」に、eh、主に言明や返答、命令に伴う呼びかけ語、sabe(s)、entiendes、ves、oye、fíjate、ya verás、vamos は「よ」に対応する。

表 21 スペイン語間投詞と日本語終助詞の対応

	文頭	文末
ね（ぇ）	呼びかけ語、sabe(s)、ves、oye、mira、fíjate、verás	¿verdad?、¿no?、呼びかけ語（主に感謝や挨拶に伴う場合）（単独の¿ves?）
よ	eh	eh、呼びかけ語（主に言明や返答、命令に伴う場合）、sabe(s)、entiendes、ves、oye、fíjate、ya verás、vamos

これらの表現を対照することによって、スペイン語と日本語の情報伝達時における2つの特徴が明らかとなった。

まず第1に、両言語の文頭、文末で用いられる表現の種類の差である。

文頭という位置は情報伝達前であり、益岡、田窪（1989: 54）は日本語の感動詞について、「文の他の要素と結びついて事態を表すというよりも、事態に対する感情や相手の発言に対する受け答えを一語で非分析的に表す形式である」と述べている。これはスペイン語の場合も当てはまると考えられ、文頭は、発話内容に対する話し手の態度を表すものではなく、聞き手をどのように発話に導こうとするかを示す聞き手管理機能を持つ形式が現れる。スペイン語ではこの位置に、注意喚起（eh, 呼びかけ語、¿sabe(s)?、oye）、注視の促し（呼びかけ語、mira、fíjate、verás）、話題維持の表明（ya sabe(s)、ya ves）の機能を持つもの、そして言いかえを表明するもの（vamos）が用いられる。さらにそれぞれの機能に下位分類が存在して、語彙的意味によって異なるプロセスから働きかけようする。スペイン語では、聞き手に対する発話の向け方（新規の情報を提示したり、理解に導こうとする等）を多彩に使い分けるのである。これに対して、本論文で考察した日本語の文頭表現は「ねぇ」（「あのね」）がほとんどであり、これ1つで注意喚起、注視の促し、話題維持といった機能を果たす。益岡（1991: 42）によると、日本語では、話し手の主観を言語表明するモダリティの核要素は命題の後に置かれる。また、藤原（1990: 46）も「文初決定」の英語に対して日本語は「文末決定」であると述べており[111]、日本語の語順を中心とした特徴として、

[111] 藤原（1990: 46）は、英語での I don't know why.に対応する日本語の表現が、「私はなぜであるのか知りません。」であり、両方を比較すると、前者は don't が前に来ているのに対して、後者は「ません」が最後に来ていると指摘し、「文表現の文初決定のさまと文末決定のさまとが明白」であると述べている。

相対的に文末に文を決定する要素が現れると考えられる。すなわち、日本語においては文頭で発話をどう表そうとするかは重要ではなく、文末でどのように発話を決定し、また伝達するかを重視する言語であると言えるだろう。

また、スペイン語の文末表現には、第1に聞き手に確認しようとする姿勢を見せるもの（¿verdad?、¿no?、¿eh?、単独の¿ves?）、第 2 に話し手と聞き手の近さを表明するもの（呼びかけ語）、第3に聞き手に理解を求めるもの（¿eh?、sabe(s)、entiendes、ves）、第4に発話内容に注意喚起あるいは注視を促すもの（¿eh?、oye、fíjate）、そして第5に話し手の意見であることを強調的に表明するもの（vamos）がある。しかし、日本語ではこれを「ね」と「よ」の2つの終助詞で表すことができる。スペイン語における文末表現は、発話内容に向かうものであり、これが聞き手への確認や理解の要求になるのは、¿eh?のように疑問形式で音調を上げたり、その形式が tú に対する命令法（oye 等）や 2 人称（entiendes 等）であることによる。そこに動詞の語彙的意味が加わって、先行発話に対する話し手の態度を表明する。一方、日本語の終助詞は聞き手と情報の関係を明示するものであり（滝浦 2008: 132、西川 2009: 52）、相対的に聞き手の方が情報量が多ければ「ね」を、話し手の方が多ければ「よ」を用いる。また、本論文では詳しく言及していないが、「よ」に上昇、下降、降昇調などの音調があるのと同様に、「ね」の降昇調、上昇調、昇降調などもあり（小山 1997: 103）、細分化された音調ごとの機能に関する記述が多くある（森山 1989b、小山 1997、片桐 1997、杉藤 2001、大島 2013 等）。日本語の「ね」や「よ」は、音調を変化させて話し手がどのような意図で発話しているかを表すことができる。森山（1989b: 173）は、「日本語の構造として、話し手の判断を表すような、いわゆる典型的な辞的な要素は文末にくる」ので、「日本語では、特に文末のイントネーションが有意味なものとして注目されるべきである」と指摘しており、「ね」や「よ」を用いて聞き手と情報との関係を示すと共に、音調によって話し手の発話態度を表明すると言えるだろう。

第2に、スペイン語と日本語では聞き手の存在を意識する度合いという点で大きく異なるようである。スペイン語の場合、聞き手をどのように情報へ導こうとするか、また先行発話を話し手がどのように判断し、どう伝達しようとするかによって表現を選択する。このことは、文末で¿verdad?や¿no?を話し手の確信度によって使い分けたり、話し手が聞き手は受け入れてくれるだろうと判断すれば sabe(s)を、聞き手が受け入れ難くても理解するよう求めるなら entiendes を用いるといったことからも明らかである。また文頭で様々な表現を使い分けるのも、話し手が発話内容をどのように伝達しようとしているかを正確に言語表現するためと言えるだろう。これに対して、日本語は常に聞き手を考慮し、その情報が聞き手に属するものであるか、聞き手の方が

情報量が多いかどうかによって「ね」か「よ」かを選択する。また、本論文では詳しく言及しなかったが、1 つの談話におけるスペイン語の文末表現の使用数と比べて、終助詞の使用数は圧倒的に多いと推測される[112]。これは、文末表現は、スペイン語、日本語共に「具体的な訴えの内容となる『文』と『訴え』をまとめ上げる（西川 2009: 14）」が、まとめる際に話し手がどう表現したいかという点を重視するか、あるいは聞き手と情報との関係を重視するかという差によると考えられる。聞き手と情報との関係を示す日本語では、必然的に「ね」、「よ」の使用数が多くなる。しかし、スペイン語の場合は話し手の発話態度を表すものなので、全ての発話に間投詞を付加する必要がないのではないだろうか。このような傾向は、まさにスペイン語を「話し手の視点をできるだけ保持しようとする『視点保持』型」とし、日本語を「聞き手との間に同化できる点があるかを探る『共通点模索』型」とする太田（1992: 97-98）の主張と一致すると言えるだろう。

[112] メイナード（1993: 120, 125）は、日本人 20 組計 60 分と、米人 20 組計 60 分の日常会話に現れる文末表現を比較している。その結果、日本語会話では他の要素を伴わない例が全体の約 12%だったのに対して、米会話の文末表現は「裸の」文末形式が約 9 割を占め、聞き手に向けて感情表現しているのは約 10%に過ぎないと報告している。

11.　結論

本論文では、日本語の終助詞がスペイン語ではどのような表現に対応するのかを考察した。実際のコミュニケーションでは、スペイン語においても、表現内容を変えるだけでなく、日本語の終助詞と同様に一定の言語形式を付加することによって話し手の発話態度を表明していることが確認できた。

スペイン語間投詞と、日本語終助詞の機能の対応は、次の通りである。

表 22 スペイン語間投詞と日本語終助詞における機能対応のまとめ

位置	機能	スペイン語	日本語
文頭	注意喚起	eh、呼びかけ語、¿sabe(s)?、oye	ね（ぇ）、よ
	注視の促し	呼びかけ語、mira、fíjate、verás	ね（ぇ）
	話題維持	ya sabe(s)、 ya ves	ね（ぇ）
	聞き手（個人）を特定	呼びかけ語	
文末	確認の要求	¿verdad?、¿no?、¿eh?、（単独の¿ves?）	ね
	聞き手との近さの表明	呼びかけ語	
	注意喚起、注視の促し	¿eh?、oye、fíjate	よ
	理解の要求	¿eh?、sabe(s)、entiendes、ves	よ
	断定	ya verás	よ
	話し手の意見であることの強調的表明	vamos	よ

文頭における機能の対応は、次の通りである。

第 1 に、聞き手の注意を喚起する機能を果たすのは、スペイン語では eh、呼びかけ語、¿sabe(s)?、oye であり、日本語では「ね（ぇ）」と「よ」である。eh は具体的意味を持たない音を聞き手に向けるので、ぞんざいさを感じさせる。呼びかけ語は、聞き手の名前を呼んで注意を喚起し、¿sabe(s)?は知っているかを問うことによって後続発話に聞き手を引き込もうとする。また、oye は語彙的意味を残した注意喚起表現である。¿sabe(s)?や oye は、話題転換を示したり新規の情報を導くことができる。注意喚起の「ね（ぇ）」は聞き手との共有を示して聞き手を引き込むが、「よ」はそれ自身が聞き手めあて性を持つので、注意喚起としてはぞんざいな印象を与える。

第 2 に、注視の促しは、先行発話に関わる発話内容に対して聞き手を理解に導くこ

うとするものであり、スペイン語では呼びかけ語、mira、fíjate、verás が、日本語では「ね（ぇ）」がこの機能を果たす。呼びかけ語は聞き手の名前に相当する形式なので、注意喚起としても注視の促しとしても機能する。mira は、注視の促しとしては無標の表現であり、fíjate は語彙的意味の強さによって、後続発話が驚きに値することを表明する機能を持つ。また、verás は未来形であることから、話し手の発話を通して聞き手が自然に理解するだろうという含意を持つ。

第 3 に、先行発話に関わる話題が続いていることを示す話題維持の機能を持つのは、スペイン語では ya sabe(s)や ya ves、日本語では「ね（ぇ）」である。ya sabe(s)は、聞き手が知っていることを、ya ves は発話内容と状況の一致を聞き手が確認できることを断定して、話題の維持を表明する。

第 4 に、聞き手になる可能性のある人物が複数いる場合、スペイン語では呼びかけ語を用いて聞き手となる個人を特定するが、日本語の終助詞はこれを表さない。

次に、文末における機能の対応は、以下の通りである。

第 1 に、聞き手に確認を求めるのは、スペイン語では¿verdad?、¿no?、¿eh?と単独の¿ves?（離れた先行発話の文末とみなすことができる）であり、日本語では「ね」である。日本語の「ね」は、話し手と聞き手の認識（知識）が一致している、あるいは話し手と比べて聞き手の方が情報量が多いと判断して用いられ、確認の機能を果たすが、¿verdad?や¿no?は、話し手の発話内容への確信度を示すことによって聞き手に確認しようとする態度を見せるものであり、¿eh?は発話内容に具体的意味を持たない音形を向け、上昇音調をとることによって確認を求める。さらに単独の¿ves?は、離れた先行発話と発話状況との一致の確認を要求するものである。

第 2 は聞き手との近さを表明するものである。スペイン語の呼びかけ語は文末に多く用いられ、話し手と聞き手との関係（名前を呼ぶことができる近い関係であることや、話し手が愛情をもっている等）を明示したり、聞き手に接近して伝達していると表明して発話の含意を示す。それによって、発話強調や発話緩和といった機能を果たす。呼びかけることによって和らげたり強めたりするということにおいては、終助詞「ね」や「よ」と一致する。

第 3 に、注意喚起や注視の促しの機能を持つのは、スペイン語の場合は¿eh?と oye、fíjate であり、日本語では「よ」である。¿eh?は語彙的意味を持たない音形を発話内容に向けることによって注意喚起し、oye は先行発話を「聞く」よう促して注意喚起し、発話に対する話し手の態度の存在を示す。また、fíjate は発話内容が驚きに値することを示し、先行発話に注視を促す。日本語でも、聞き手に向けられていると示して注意喚起し、聞き手の知らない情報を伝達する「よ」を付加して、発話が言語表出されていない情報を含むことを表明する。

第 4 に、聞き手に理解要求をする場合、スペイン語では¿eh?、sabe(s)、entiendes、ves が、日本語では「よ」が用いられる。スペイン語の場合、語彙的意味を持たない¿eh?は無標の理解要求であり、これに語彙的意味を加えることによって異なるプロセスから聞き手に理解を求めようとする。例えば、sabe(s)は聞き手が受け入れてくれるだろうという態度を示すが、entiendes は理解しがたくても理解するよう求め、ves は先行発話と発話状況との一致の理解を求める。これに対して、「よ」は話し手と聞き手の認識（知識）が一致していないと示すことによって、聞き手に理解を求めるものである。

第 5 は断定であるが、スペイン語では ya verás が、日本語では「よ」が挙げられる。ya verás は完了性を表す ya を伴い、聞き手が先行発話をいずれ理解するだろうと推測していることを示して断定的に情報を伝達する。「よ」は、話し手と聞き手の認識（知識）の不一致の表明と、音調によって発話を断定する。

そして第 6 に、話し手の意見であることを強調して表明するものには、スペイン語では vamos、日本語では「よ」が挙げられる。この機能によって、スペイン語の vamos は発話修正や、発話強調、また発話緩和を表明する。日本語では、話し手の持つ情報を聞き手に伝達する「よ」がこの機能を担う。

最後に、スペイン語と日本語の情報伝達時における特徴の差を、Shannon & Weaver（1984: 24）における 3 つの段階の問題という観点から考えてみる。

第 1 に、「どのようにして正確に伝達するか（技術的問題）」という点において、スペイン語では「話し手がどう伝えたいか」、日本語は「聞き手がどう受け取ってほしいか（滝浦 2008: 125）」が基準となり、両言語では聞き手を意識する度合いが明らかに異なると考えられる。スペイン語では、情報伝達前の文頭、または伝達後の文末で、表現を巧みに使い分けて話し手の発話内容に対する態度（確認または理解を要求したり、発話内容に注意喚起をしようとしている等）を表明し、その表現形式は豊富である。これに対して、日本語の場合は情報の受け取り手である聞き手を常に意識し、終助詞の「ね」、「よ」を用いて聞き手と情報との関係を示す。

第 2 に、「どのようにして伝達した記号が、話し手の伝えたい意味を正確に伝えるか（意味論的問題）」について、スペイン語では、選択する動詞の語彙的意味によって、話し手が聞き手をどのように情報に導こうとするか、また発話内容をどのように伝えようとしているかを示し、特に動詞の語彙的意味が積極的に現れる文末で、疑問形と肯定形を使い分けて、聞き手に何を求めようとしているのか（確認や理解、注意喚起の要求等）を表明する。一方、日本語では話し手と聞き手の認識（知識）の一致を表す「ね」、不一致を表す「よ」を用い、さらに文末では音調を変化させて発話に対する話し手の態度を決定する。すなわち、スペイン語は、発話内容への話し手の態

度を疑問または肯定形で伝達し、日本語では、聞き手と情報との関わりを、音調によって話し手の伝達態度を付加して伝達するのである。

そして第 3 は、「どのようにして、受け取られた意味が望む仕方で相手の行動に影響を与えるか（効果の問題）」であるが、スペイン語では間投詞、日本語では終助詞を付加して発話を強めたり和らげたりすることができる。それによって、聞き手のフェイスを傷つけることなく発話内容を理解、あるいは遂行させ、話し手と聞き手の人間関係を良好に保つことができると考えられる。スペイン語と日本語では、プロセスが大きく異なるが、それが発話で用いられた場合の効果は同様であると言えるだろう。

このことから、次のようなことが結論づけられる。第 1 に、スペイン語において、文頭では話し手がどのように聞き手を情報に導くかという聞き手管理機能を持つものが用いられ、文末では先行発話に対する話し手の発話態度を表し、これらの位置では同じ表現でも異なる機能を果たす。一方、日本語において、文頭では聞き手をどのように発話に導くかはあまり重要ではなく、積極的に「ね（ぇ）」や「よ」を使い分けることはないが、文末では聞き手と情報との関係を示す「ね」や「よ」に音調を変化させて話し手の伝達態度を示す。第 2 に、スペイン語では話し手がどう伝えたいかを基準にするのに対して、日本語では聞き手を中心に言語形式を選択する。すなわち、円滑なコミュニケーションを実現するために、聞き手への配慮を示し「人あたり」を調整する手段は、スペイン語においては、話し手の発話内容への判断を付加すること、日本語では、聞き手と情報との関係を配慮することなのである。このことは、言語運用に関して、スペイン語が持つ内容伝達中心の「視点保持」型と、日本語の特徴である聞き手中心の「共通点模索」型という太田（1992: 97-98）の説と相通ずるものがある。ただし、本論文で議論したとおり、両言語ではその原理が異なっているが、結果的に聞き手に及ぼす影響の一致があるということである。

なお、本論文ではスペイン語の間投詞が、具体的に「ね」や「よ」のどの音調に対応するかについては議論することができなかった。また、「ね」と「よ」だけでなく、複合形「よね」と対応する可能性のある間投詞もあり、これらについては今後の課題としたい。

本論文では、伝達手段に関して、日本語では聞き手を中心に言語形式を選択するが、スペイン語では話し手がどう伝えたいかを基準にするという類型論的な傾向が明らかになった。そして広くは、このささやかな研究の成果が、これからコミュニケーションのツールとしてスペイン語を学習する人たちに対するスペイン語教育に応用されることを願っている。

参考文献

Alonso Cortés, Ángel (1999) "El vocativo", *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque *et al.* coords.) vol.3, Espasa Calpe, Madrid, pp.4037-4047.

Bauhr, Gerhard (1989) *El futuro en* –ré *e* ir a *+ infinitivo en español peninsular moderno*, Acta Universita Atis Gothoburgensis, Kungälv.

Beinhauer, Werner (1929; 1963) *El español coloquial*, Gredos, Madrid.

Blas Arroyo, José Luis (1995) "La interjección como marcador discursivo: el caso de *eh*", *Anuario de Lingüística Hispánica* 11, Universidad de Valladolid, Valladolid, pp.81-117.

Briz Gómez, Antonio (1998) *El español coloquial en la conversación. Esbozo de pragmagramática*, Ariel, Barcelona.

Brown, Penelope & Stephen C. Levinson (1978; 1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
(和訳 田中典子 他 (2011) 『ポライトネス　言語使用における、ある普遍現象』, 研究社, 東京.)

Chodorowska-Pilch, Marianna (1997) "On the polite function of *¿me entiendes?* in Spanish", *Journal of Pragmatics* 28, Elsevier, Los Angeles, pp.355-371.

——— (2008) "*Verás* in Peninsular Spanish as a grammaticalized discourse marker invoking positive and negative politeness", *Journal of Pragmatics* 40, Elsevier, Los Angeles, pp.1357-1372.

Christl, Joachim (1996) "Muletillas en el español hablado", Thomas Kotschi *et al.*(eds.), *El español hablado y la cultura oral en España e Hispanoamérica*, Vervuert Iberoamericana, Frankfurt, Madrid, pp. 117-146.

Cortés Rodríguez, Luis (1991) *Sobre conectores, expletivos y muletillas en el español hablado*, Editorial Librería Ágora, Málaga.

Cortés Rodríguez, Luis y María Matilde Camacho Adarve (2005) *Unidades de segmentación y marcadores del discurso. Elementos esenciales en el procesamiento discursivo oral*, Arco Libros, Madrid.

Cuenca, María Josep y Marta Torres Vilatarsana (2008) "Usos de*hombre/home y mujer/dona* como marcadores del discurso en la conversación coloquial", *Verba* 35, Universidad de Santiago de Compostela, Santiago de Compostela, pp.235-256.

Edeso Natalías, Verónica (2005) "Usos discursivos del vocativo en español", *Español Actual* 84, Arco/Libros, Madrid, pp.123-142.

——— (2009) *Contribución al estudio de la interjección en español*, International Academic Publishers, Bern.

Ervin-tripp (1976) "Is Sybil there The structure of American English directives?", *Language in Society* 5, Cambridge University Press, New York, pp. 25-66.

Fuentes Rodríguez, Catalina (1988) "*Vamos*: un conector colloquial de gran complejidad", María Antonia Martín Zorraquino *et al.*(eds.), *Los marcadores del discurso, Teoría y análisis*, Arco Libros, Madrid, pp.177-192.

——— (1990) "Apéndices con valor apelativo", P. Carbonero y M. T. Paletm (eds.), *Sociolingüística andaluza* 5, Universidad de Sevilla, Sevilla, pp.171-196.

García, María José (2005) "El uso de los apéndices modalizadores *¿no?* y *¿eh?* en español peninsular", L. Sayahi y M. Westmoreland (eds.) , *Selected Proceedings of the First Workshop on Spanish Sociolinguistics,* Somerville, MA, Casdilla Proceedings Peoject, pp.89-101.

Gaviño Rodríguez, Victoriano (2011) "Operaciones metalingüísticas del marcador de discursivo *hombre*", *Marco ELE* 12, Red de Revistas Científicas de América Latina y el Caribe, España y Portugal, Ribarroja del Turia, pp.1-11.

Gili Gaya, Samuel (1943; 1951) *Curso superior de sintaxis española*, Biblograf, Barcelona.

Goffman, Erving (1967; 1982) *Interaction Ritual -Essays on Face-to-face Behavior,* Pantheon Books, New York.
(和訳 広瀬英彦, 安江孝司 (1986)『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』, 法政大学, 東京.)

Haverkate, Henk (1979) *Impositive Sentence in Spanish*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam.

——— (1984) *Speech Acts, Speakers, and Hearers. Reference and Referential Strategies in Spanish*, John Benjamins, Amsterdam.

——— (1993) "Acerca de los actos de habla expresivos y comisivos en español", *Aproximaciones pragmalingüísticas al español. Diálogos Hispánicos 12*, Universiteit van Amsterdam, Amsterdam, pp.149-180.

Hasbún Hasbún, Leyla (2003) "¿Qué le vendemos, reina? El uso de los vocativos en la feria del agricultor", *Revista de Filología, Lingüistica y Literatura* 29 (1), Universidad de Costa Rica, San José, pp.201-212.

Jørgensen, Annette Myre (2008) "*Tío* y *Tía* como marcadores en el lenguaje juvenil de Madrid", *Actas del XXXVII Simposio Internacional de la Sociedad Española de Lingüística hispánica y Lenguas modernas*, Universidad de Navarra, Pamplona,

pp.387-396.

Kerbrat-Orecchioni, Cathrine (2004) "¿Es universal la cortesía?", Diana Bravo y Antonio Briz (eds.), *Pragmática sociocultural. Estudios sobre el discurso de cortesía en español*, Ariel, Barcelona, pp.39-51.

Leech, Geoffrey (1999) "The distribution and function of vocatives in American and British English conversation", Hilde Hasselgård and Signe Oksefjell (eds.), *Out of Corpora: studies in Honour of Stig Johansson*, Rodopi, Amsterdam, pp.107-118.

Luna, Carmen de (1996) "Cualidades gramaticales y funcionales de las interjecciones españolas", Thomas Kotschi *et al.*(eds.), *El español hablado y la cultura oral en España e Hispanoamérica*, Vervuert Iberoamericana, Frankfurt, Madrid, pp. 95-116.

Malinowski, Bronislaw (1949) "The problem of meaning in primitive languages", C. K. Ogden and I. A. Richards (eds.), *The Meaning of Meaning*, Routledge & Legan Paul, London, pp. 296-336.

Martín Zorraquino, María Antonia y José Portolés Lázaro (1999) "Los marcadores del discurso", *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque *et al.* coords.) vol.3, Espasa Calpe, Madrid, pp.4051-4213.

(和文要約 長谷川哲子 (2003) 「第 63 章 談話標識」, 『「スペイン語記述文法」章別和文要約』2, 関西スペイン語学研究会, 箕面, pp.101-119.)

Martín Zorraquino, María Antonia y Estrella Montolío Durán (1988) *Los marcadores del discurso. Teoría y Análisis*, Arco Libros, Madrid.

Maynard, Senko (1993) *Discourse Modality Subjectivity Emotion and Voice in the Japanese Language*, John Benjamins, Amsterdam.

Montañez Mesas, Marta Pilar (2007) "Marcadores del discurso y posición final: la forma *¿eh?* En la conversación coloquial española", *Estudios de Lingüística* 21, Universidad de Alicante, Alicante, pp.1-20.

Montes, Rosa Graciela (1999) "The development of discourse marker in Spanish: Interjections", *Journal of Pragmatics* 31, Elsevier, Los Angeles, pp. 1289-1319.

Nomura, Mei (2012) Las posiciones y funciones de los vocativos en español, *Revista de Postgrado de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kobe* 15, 神戸市外国語大学, 神戸, pp.67-90.

Ortega Olivares, Jenaro (1985) "Apéndices modalizadores en español: Los 'comprobativos'", *Estudios Románicos dedicados al profesor Andrés Soria Ortega* Ⅰ, Universidad de Granada, Granada, pp.239-255.

——— (1986) "Aproximación al mecanismo de la conversación: Apéndices justificativos",

Verba 13, Universidad de Santiago de Compostela, Santiago de Compostela, pp.269-290.

Pons Bordería, Salvador (1998a) "*Oye* y *mira* o los límites de la conexión", *Los marcadores del discurso* (María Antonia, Martín Zorraquino *et al.* coords.), Arco Libros, Madrid, pp.213-228.

——— (1998b) *Conexión y conectores. Estudios de su relación en el registro informal de la lengua*, Universitat de Valéncia, Valencia.

Quirk, Randolph, Sidney Greebaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik (eds.) (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Ramírez Gelbes, Silvia (2003) "La partícula 'eh' y la Teoría de la Relevancia. Un ejemplo de contenido procedimental", *Estudios Filológicos* 38, Universidad Austral de Chile, Valdivia, pp.157-177.

Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española,* Espasa-Calpe, Madrid.

——— (2001) *Diccionario de la Lengua Española*, vigésima segunda edición, Espasa-Calpe, Madrid.

——— (2009) "La interjección. Sus grupos sintácticos", *Nueva gramática de la lengua española* 2, Espasa Libros, Madrid, pp. 2479-2523.

Rodríguez Muñoz, Francisco J. (2009) "Estudios sobre las funciones pragmadiscursivas de *¿no?* y *¿eh?* en el español hablado", *Revista de Lingüística Teórica y Aplicada* 47(1), Universidad de Concepción, Concepción, pp.83-101.

Searle, John R. (1969) *Speech Acts. An Essay In the Philosophy of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Shannon, Claude Elwood & Warren Weaver (1949) *The Mathematical Theory of Communication*, The University of Illinois Press, Urbana.

Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Marker*, Cambridge University Press, Cambridge.

Shiina, Michi (2007) "Positioning and functioning of vocatives: a case study in historical pragmatics (1)", *Bulletin of Faculty of Letters* 55, 法政大学, 東京, pp.17-32.

——— (2008) "Positioning and functioning of vocatives: a case study in historical pragmatics (2)", *Bulletin of Faculty of Letters* 56, 法政大学, 東京, pp.29-48.

陳常好（1987）「終助詞ー話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」，『日本語学』6. 10., 明治書院, 東京, pp.93-109.

藤原与一（1990）『文末詞の言語学』，三弥井書店, 東京.

井上優（1997）「もしもし、切符を落とされましたよ - 終助詞『よ』を使うことの意味」，『月

刊言語』26. 2., 大修館書店, 東京, pp.62-67.
伊東昌子、永田良太 (2007)「談話上における相互行為の構築に関わる文末詞の修辞的機能」, 『認知科学』14. 3., 日本認知科学会編, 共立出版, 東京, pp.282-291.
伊豆原英子 (1993)「『ね』と『よ』再考ー「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察からー」,『日本語教育』80, 日本語教育学会, 東京, pp.103-115.
――― (1994) 「『よ』の使用と使用制約ー情報と待遇上の関わりから『よ』の使用条件を探るー」,『名古屋大学日本語・日本文化論集』2, 名古屋大学留学センター, 名古屋, pp.43-63.
――― (2001) 「『ね』と『よ』再再考」, 『愛知学院大学教養部紀要』49. 1., 愛知学院大学, 日進, pp. 35-49.
――― (2003) 「終助詞『よ』、『よね』、『ね』再考」, 『愛知学院大学教養部紀要』51. 2, 愛知学院大学, 日進, pp. 1-15.
長谷川信弥 (2011) 『日本語から考える！スペイン語の表現』, 白水社, 東京.
林朝子 (2000) 「終助詞『よ』が持つ『失礼さ』の度合い」、『三重大学留学センター紀要』2, 三重大学, 津, pp. 39-51.
林四郎 (1983; 1992) 「日本語の文の形と姿勢」,『談話の研究と教育Ⅰ』, 国立国語研究所, 東京, pp.43-62.
亀井孝 他 (1996) 『言語学大辞典』, 三省堂, 東京.
神尾昭雄 (1990) 『情報の縄張り理論』, 大修館書店, 東京.
片桐恭弘 (1997) 「終助詞とイントネーション」, 『文法と音声』, 音声文法研究会編,くろしお出版, 東京, pp.235-256.
金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」, 『月刊言語』22. 4., 大修館書店, 東京, pp.118-121.
小池生夫 他 (2003) 『応用言語学辞典』, 研究社, 東京.
古浦敏生 (1993) 「イタリア語の付加疑問とそれに対応する日本語の文末部」, 『言語類型論と文末詞』, 三弥井書店, 東京, pp.21-31.
小山哲春 (1997) 「文末詞と文末イントネーション」, 『文法と音声』, 音声文法研究会編,くろしお出版, 東京, pp.97-119.
久保進 他 (1997) 『意味と発話行為』, ひつじ書房, 東京.
益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版, 東京.
益岡隆志、田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』, くろしお出版, 東京.
松岡みゆき (2003) 「談話上における終助詞ヨの機能」,『言葉と文化』4, 名古屋大学大学, 名古屋, pp.53-70.
――― (2008) 「疑問文における終助詞『よ』『ね』と複合終助詞『よね』の働きについて」,『名古屋大学日本語・日本文化論集』15, 名古屋大学留学生センター, 名古屋, pp.1-23.
メイナード, 泉子・K (1993) 『会話分析』, くろしお出版, 東京.

三好準之助 (2012) 「スペイン語の『和らげ表現』について」, 『京都産業大学論集　人文科学系列』45, 京都産業大学, 京都, pp.35-58.
水谷信子 (1980) 「話しことばの文法の総合的考察 - ディスコース分析試論」, 『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』3, アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター, 横浜, pp.1-12.
森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』, ひつじ書房, 東京.
森山卓郎 (1989a) 「応答と談話管理システム」, 『阪大日本語研究』1, 大阪大学, 吹田, pp.63-88.
――― (1989b) 「文の意味とイントネーション」, 『講座日本語と日本語教育 第1巻日本語学要説』, 明治書院, 東京, pp.172-196.
中﨑崇 (2005) 「終助詞『ヨ』の機能に関する一考察」, 『語用論研究』7, 日本語用論学会, 東京, pp. 75-92.
西川寛之 (2009) 『日本語の文末詞の研究ー文構成要素としての機能を中心にー』, 凡人社, 東京.
仁田義雄 他 (2009) 『現代日本語文法 7』, 日本記述文法研究会編, くろしお出版, 東京.
仁田義雄 (1989) 「述べ立てのモダリティと人称現象」,『阪大日本語研究』1, 大阪大学, 吹田, pp.31-62.
――― (1991) 『日本語のモダリティと人称』, 東京, ひつじ書房.
野村明衣 (2012) 「スペイン語における呼びかけ語の位置と機能について」,『HISPÁNICA』56, 日本イスパニヤ学会, 東京, pp.47-72.
――― (2013) 「スペイン語における呼びかけ語の語彙と位置による機能の関係について」, 『神戸外大論叢』63. 3., 神戸市外国語大学, 神戸, pp.101-128.
小田希望 (2010) 『英語の呼びかけ語』, 大阪教育図書, 大阪.
大倉美和子 (1992) 「'Mire'のコミュニケーション機能」, 『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』, 国立国語研究センター日本語教育センター第二研究室, 東京, pp.1-18.
――― (1994) 「談話標識と会話の構造」, 『日本とスペイン語』(1), 国立国語研究所, くろしお出版, 東京, pp.121-141.
大島デイヴィッド義和 (2013) 「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」,『国際開発研究フォーラム』43, 名古屋大学大学院国際開発研究科, 名古屋, pp.47-63.
大曽美恵子 (1986) 「誤用分析 『今日はいい天気ですね。』ー『はい、そうです。』」, 『日本語学』5. 9., 明治書院, 東京, pp.91-94.
――― (1990) 「『でしょう』『よ』とイントネーション」, 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』1, 関西外国語大学, 枚方, pp.40-50.
太田亨 (1992) 「日本語とスペイン語の『談話場』の特徴」, 『日本語教育』77, 日本語教育

学会, 東京, pp.89-102.
定延利之、田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構ー心的操作標識『ええと』と『あの（一）』ー」, 『言語研究』108, 日本言語学会, 京都, pp.74-93.
西郷英樹（2012）「終助詞『ね』『よ』『よね』の発話連鎖効力に関する一考察ー談話完成タスクの結果を基にー」, 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22, 関西外国語大学留学生別科, 枚方, pp.97-117.
佐治圭三（1957）「終助詞の機能」, 『國語國文』26.7., 東京, pp.23-31.
――――（1967）「感動助詞と感動詞」, 『講座 日本語の文法 3 品詞各論』, 松村明他編, 明治書院, 東京, pp.178-199.
白川博之（1992）「終助詞『よ』の機能」, 『日本語教育』77, 日本教育学会, 東京, pp.36-48.
――――（1993）「『働きかけ』と『問いかけ』の文と終助詞『よ』」, 『広島大学日本語科紀要』3、広島大学, 東広島, pp. 7-14.
杉藤美代子（2001）「助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」, 『文法と音声Ⅲ』, 音声文法研究会編, くろしお出版, 東京, pp.3-16.
高垣敏博 他（2007）『西和中辞典 第2版』, 小学館, 東京.
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』, 研究社, 東京.
田窪行則（1992）「談話管理の標識について」, 『高度な日本語記述文法作成のための基礎的研究』（平成3年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書）, pp.16-26.
田中春美（1988）『現代言語学辞典』, 成美堂, 東京.
田中秀央、落合太郎（1937; 1991）『ギリシア・ラテン引用語辞典』, 岩波書店, 東京.
谷裕子（2009）『身近な言葉の語源辞典』, 米川明彦監修, 小学館, 東京.
時枝誠記（1941; 2008）『国語学原論 続編』, 岩波書店, 東京.
――――（1951）「対人関係を構成する助詞・助動詞」, 『國語國文』20.9., 東京, pp.1-10.
上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」, 『日本語教育』17, 日本語教育学会, 東京, pp.62-77.
宇佐美まゆみ（1999）「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」, 『國文學 日本語 日本文学 日本文化 解釈と教材の研究』44.6., 學燈社, 東京, pp.83-89.
和佐敦子（2005）『スペイン語と日本語のモダリティ』, くろしお出版, 東京.
山田善郎 他（1995）『中級スペイン文法』, 白水社, 東京.
ザトラウスキー, ポリー（1991）「会話分析における『単位』についてー『話段』の提案」, 『日本語学』10, 明治書院, 東京, pp.79-96.

資料

書籍

Almodóvar, Pedro (2002) *Hable con ella*, Ocho y Medio, Madrid.
――――（2006）*Volver,* Ocho y Medio, Madrid.

Amenábar, Alejandro y Mateo Gil (2004) *Mar adentro*, Ocho y Medio, Madrid.
Azcona, Rafael (1999) *La lengua de las mariposas*, Ocho y Medio, Madrid.
Azcona, Rafael y José Luis Cuerda (2008) *Los girasoles ciegos*, Ocho y Medio, Madrid.
Balaguer, Javier y Alvaro García Mohedano (2001) *Solo Mía*, Ocho y Medio, Madrid.
Berger, Pablo (2002) *Torremolinos 73*, Ocho y Medio, Madrid.
Bollain, Iciar y Alicia Luna (2003) *Te doy mis ojos*, Ocho y Medio, Madrid.
Cavestany, Juan y Enrique López Lavigne (2004) *El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*, Ocho y Medio, Madrid.
Chavarrías, Antonio (2007) *Las vidas de Celia*, Ocho y Medio.
Gutiérrez, Chus y Juan Carlos Rubio (2005) *El Calentito*, Ocho y Medio, Madrid.
Hidalgo, Manuel y Felipe Vega (2004) *Nubes de verano*, Ocho y Medio, Madrid.
León de Aranoa, Fernando y Ignacio del Moral (2002) *Los lunes al sol*, Ocho y Medio, Madrid.
Lindo, Elvira y Miguel Albaladejo (2003) *Manolito Gafotas*, Ocho y Medio, Madrid.
Mañas, Achero (2003) *Noviembre*, Ocho y Medio, Madrid.
Miguel Mihura (1979) *Tres sombreros de copa*, Ediciones Cátedra, S.A. Madrid.
Querejeta, Gracia y David Planell (2004) *Héctor*, Ocho y Medio, Madrid.
Santiago, Roberto (2005) *El penalti más largo del mundo*, Ocho y Medio, Madrid.
Soler, Antonio (2006) *El camino de los ingleses*, Ocho y Medio, Madrid.
Toro, Guillermo del (2006) *El laberinto del fauno*, Ocho y Medio, Madrid.
Urbizu, Enrique y Michel Gaztambide (2007) *La caja 507*, Ocho y Medio, Madrid.
橋本冬也 (2001) 『ね。』, 文芸社, 東京.
村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森（下)』, 講談社, 東京.
吉本ばなな (1988) 『うたかた / サンクチュアリ』, 新潮社, 東京.
――― (2005) 『みずうみ』, 新潮社, 東京.

ウェブサイト

"名無しの実", http://blogs.yahoo.co.jp/gotei_13_tai/8131608.html (2013.10.16 参照)
"のらねこ", http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=195095 (2013.10.16 参照)
"naokomallet", http://yaplog.jp/roku-nao/monthly/201104/ (2013.11.27 参照)
"オレ様って、嫌いなんだよね。", http://ncode.syosetu.com/n1782bs/32/ (2013.11.27 参照)

付録

9.1.1. 注意喚起表現　アンケートの結果

A、B、C、D、E は回答者を示し、容認度の高い順に 1～3 で回答してもらった。選択肢にはない表現を回答者が挙げた場合、otros の欄にその表現を示す。

(245)　Estás hablando con 4 o 5 amigos y te diriges a uno (Antonio) de ellos.

	Antonio	Oye	Mira	Eh	¿Sabes?	otro(s)
A	1	2		3		
B	1	2		3		
C	1	2		3		
D	1	2		3		
E	1	2	3			

(246)　Tienes un altercado con Marco y le llamas la atención cuando va a irse.

	Marco	Oye	Mira	Eh	¿Sabes?	otro(s)
A	3	2		1		
B	1	3	2			
C	3		2	1		
D		1	2		3	escúchame bien
E[113]	○	○		○		

[113] 順序に関する回答はなかった。

(247) Estás hablando con Inés e introduces un tema nuevo.

	Inés	Oye	Mira	Eh	¿Sabes?	otro(s)
A		2	3		1	
B	3	2			1	
C		2			1	3 sabías
D		1		3	2	cambiando de tema
E		2			1	

(248) [Joaquín y Andrés acaban de salir del trabajo,
y se encuentran por la calle, así que se paran para conversar un poco.]

Joaquín: Uf, vaya día que he tenido, Andrés. El jefe me entregó a última hora unos borradores para que los pasara a limpio, así que he tenido que hacer un par de horas extra.

Andrés: Bueno, menuda jornada. ( ), por cierto, mi mujer y yo habíamos pensado invitaros a casa a ti y a tu mujer para cenar el fin de semana que viene, ¿qué te parece?

Joaquín: ¡Qué buena idea! Amigo mío, acabas de alegrarme el día.

	Joaquín	Oye	Mira	Eh	¿Sabes?	otro(s)
A		1	2			3 ¡ah!
B	3	1	2			
C		1				
D	1	2	3	3		
E						1 ¡ah!

9.1.2. 注視の促し　アンケートの結果

(249) [Alguien te cuenta un problema y quieres tranquilizarlo/la.]

Comprendo tus preocupaciones. ( ), ahora lo que tienes que hacer es calmarte e intentar ver el lado positivo del asunto.

	Oye	Verás	Mira	Fíjate	¿Sabes?	otro(s)
A	3	2	1			
B	2	1	3			
C		3	1			2 chico
D	3	1	2			
E			1			

(250) [Ves a un niño que está dibujando con mucho arte y quieres alabarle.]

¡ ( ) qué bien pinta mi niño! Estás hecho un Picasso.

	Oye	Verás	Mira	Fíjate	otro(s)
A	3		2	1	
B	3		1	2	
C			1	2	3 jo
D			2	1	3 ¡caray! !caramba!
E				1	2 pero, pero mira

(251) [Un gimnasta está entrenando para las Olimpiadas y su entrenador, al verle distraído, intenta orientarle sobre su objetivo.]

Entrenador: Manuel, ¡tómate el entrenamiento con más seriedad! ( ), tu objetivo consiste en conseguir una medalla de oro en las Opimpiadas, así que ponte las pilas ya.

	Oye	Verás	Mira	Fíjate	Manuel	otro(s)
A	1	3	2			
B		3	1			2 a ver
C			1		3	2 chico
D	1		2			3 Sé consciente
E			1			

9.2.1. 聞き手に確認を求める表現　アンケートの結果

(252)　[Marina y Josefina se sientan en una terraza para tomar algo.
Marina saca una caja de cigarrillos.]

Marina: No te importa que fume, (　　)

Josefina: Claro que no. Además, ya sabes que mi marido también fuma...

	¿verdad?	¿no?	¿eh?	oye	fíjate	otro(s)
A	1	2	3			
B	1	2				3 Josefina
C	1					
D	1	1	2			
E	1	2				

(253)　[En el entrenamiento de un equipo de fútbol,
están el entrenador y el delantero casi recuperado de una lesión.]

Entrenador: Puedo contar contigo para el partido de mañana, (　　)

Delantero: Hombre, no estoy completamente recuperado de la lesión, pero lo intentaré.

Entrenador: No nos falles, anda.

	¿verdad?	¿no?	¿eh?	oye	fíjate	otro(s)
A	1	2	3			
B	2	1				3 ¿vale?
C		1				
D	1	1	2			
E	1	2				

(254)　[Dos niños están jugando y, al chocarse uno de ellos contra un jarrón, éste se cae al suelo y se rompe. La madre oye el ruido y viene corriendo hacia donde están ellos]

Madre: Pero, ¿qué estáis haciendo? ¿Quién ha roto este jarrón?

Luis: Que yo no lo he roto, (　　) Ha sido Miguel.

Miguel: ¡Eso no es verdad! Ha sido Luis.

Madre: Venga, no os peleéis, y dejad de moveros tanto, por favor.

	¿eh?	¿sabes?	¿entiendes?	oye	fíjate	otro(s)
A	1	3		2		
B	1	3		2		
C	2			3		1 mamá
D	1			2		3 que quede claro
E	1			1		2 ¿vale?

(255) [Inés está buscando las llaves y no las encuentra por ningún lado. Entonces pregunta a Loli, su hermana, a ver si ella las ha visto.]

Inés: Oye, Loli, ¿tú has visto mis llaves? Es que no las veo por ninguna parte.

Loli: Pues no las he visto. Seguro que están en algún bolsillo de la chaqueta o lugares parecidos, como siempre. Búscalo bien.

[Al cabo de un rato, las encuentra, efectivamente, en una de sus chaquetas.]

Inés: ¡Por fin las he encontrado! Estaban en mi chaqueta roja.

Loli: ( ) Te lo dije. Siempre es la misma historia.

	¿Ves?	Mira.	Fíjate.	Ya sabes.	Ya ves.	otro(s)
A	2					1 ¿Lo ves?
B	1	3	2			
C	1					
D	1			3	2	
E	1					

9.2.2. 聞き手に理解を求める表現　アンケートの結果

(257) [Nuria y Juanma son novios. Acaban de comprar unos cafés y se sientan en el banco de una plaza, que hace buen tiempo. De repente, Juanma estornuda.]

Juanma: ¡Achís!

Nuria: ¡Pero bueno, Juanma! Acabas de manchar mi vestido con tu café. Además, es nuevo, ( )

Juanma: Ay, cuánto lo siento, cariño. Ha sido sin querer.

	¿eh?	¿sabes?	¿entiendes?	oye	fíjate	otro(s)
A	3	1		2		
B	1	2		3		
C		2		1		
D	2	3		1		
E		1				joder, la hostia

(258) [Una pareja no se pone de acuerdo en qué van a cenar esta noche.
El chico quiere ensalada, y la chica, tortilla.]

Pilar: Hoy quiero comer una tortilla, digas lo que digas, ( )

Chema: Pues yo te diga que mejor cenemos una ensalada, porque la tortilla sube el colesterol.

Pilar: ¡Qué pesado! Vale, hoy comemos ensalada, por prométeme que mañana comeremos tortilla.

	¿eh?	¿sabes?	¿entiendes?	oye	fíjate	otro(s)
A	2	3	1			
B	1	3	2			
C				2		1 ¿vale? 3 cariño
D	3					1 ¿vale? 2 ¿de auerdo?
E	3					1 ¿vale? 2 ¿de auerdo?

(259) [Félix está muy nervioso porque hoy salen las notas de los exámenes finales.
Cree que ha suspendido algunas asignaturas y no puede esperar más.
Su padre intenta tranquilizarle.]

Félix: ¡Que salgan ya!

[Al poco rato, salen las notas y ve que ha aprobado todas.]

Félix: Papá, ¡he aprobado!

Padre: ¡Enhorabuena, hijo! Pero si al final no era para tanto, ( ) Eres más trágico, hijo....

	¿eh?	¿sabes?	¿ves?	oye	fíjate	otro(s)
A	2		1			3 ¡anda!
B	2		3			1 ¿no?
C				1		
D	3		1	2		¿te das cuenta?
E	1		1	2		3 ¿te das cuenta?

9.2.3. 発話内容に注意喚起または注視を促す表現　アンケートの結果

(260) [Laura está hablando por teléfono con su tía,
y al lado está su hermano pequeño viendo la tele con el volumen máximo.]

Laura: Hermanito, baja un poco el volumen de la tele, que estoy hablando con la tía y no la oigo. (Su hermano no le hace ni caso y sigue con el mismo volumen.)

Laura: ¿No me has oído? ¡Te he dicho que bajes el volumen, (　　)!

Hermano: Pues no me da la gana. Si te molesta tanto, llámala en otro momento.

	¿eh?	¿sabes?	¿entiendes?	oye	fíjate	otro(s)
A	3	2	1			
B	1		3	2		
C			1			
D	1		3	2		
E						anda, por favor

(261) [En la sala de espera de un hospital, dos señoras están hablando sobre sus hijos.]

Rocío: ¿Sabías que mi hijo está saliendo ahora con una belga?

Ángela: ¿Qué me dices? Pues cómo ha cambiado tu hijo.

Con lo tímido que era tu hijo, y ahora tiene una novia belga, ( )

	¿eh?	¿sabes?	¿entiendes?	oye	fíjate	otro(s)
A	3			2	1	
B	1			3	2	
C					1	
D	2				1	
E	1				1	mira por donde, vaya vaya

9.2.4. 話し手の意見の表明　アンケートの結果

(262) [Jorge y Lorena se van de compras a un centro comercial. En una tienda de ropa, llegan a la caja y Lorena se da cuenta de que no está su cartera en el bolso.]

Lorena: Jorge, ¿has visto mi cartera? Igual la he dejado en casa.

Jorge: Creo que no, ( ). Si no recuerdo mal, cuando salimos de casa, vi que la metías en tu bolso. Puede que se te haya caído por la calle.

Lorena: Puede ser. Pero, ¡qué mala suerte!

	¿eh?	vamos	oye	fíjate	otro(s)
A	1	2	3		
B	1	2	3		
C	1		3	2	2 cariño
D	1	2	3		
E					何もつけない